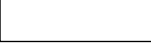





これは私が伯母糸井清子から贈られた『戊辰白河口戦争記（復刻）』（戊辰白河口戦争記復刻刊行会）を、私が読み下す便利のため作成した「訳」です。

	・・・本文
	・・・挿話
	・・・引用
	・・・脚注

このように部分を区別しました。

## 《本文》

私が読み下したように、字体・おくりがな・かなづかい等は現代表記に改めています。

原書で漢字表記の助詞・副詞は、適宜ひらがな表記としています。

日付・数値は算用数字を用いました。

（本書に出る日付はほとんどが旧暦です。旧暦の年月日もあえて算用数字で表記しました。）

読点「、」は適宜追加しました。

（原書の趣を損じる恐れはありますが、現代人が読み下し、読解する便をあえて優先しました。）

また復刻版の誤記・誤植と思われる箇所は訂正しました。そのことは脚注に記しておきます。

難読箇所やとくに地名には努めてふりがなを付しました。

人名は復刻版の字体を尊重しますが、やむをえず使用可能な字体で代替した場合があります。

有名人については、一般的な書籍での字体表記としました。

地名は現在における表記を優先しました。

復刻版における「割り書き注」は、括弧書き（ ）に改めました。

## 《挿話》

本文の表記に準じました。

## 《引用》

字体を現代表記としました。

カタカナ文はひらがな記述に改めました。

必要と思われる読点「、」は追加しました。

本文・挿話中の引用については「 」で括り、表記は引用に準じました。

## 《脚注》

脚注 脚注

(文字・黒) 復刻版の井上幸雄・金子誠三両氏の脚注

脚注 脚注

(文字・青) 私の付した注・メモ

【清子書込】

(文字・茶) 私の伯母による書き込みは【清子書込】と表示します。

この訳の表記方法および脚注はすべて私の解釈によるところなので、正確を期すには原書・原資料にあたる必要があります。

また当然ですが、原書および復刻版は発行当時の歴史的知見に基づいて書かれたものです。その後の研究によって判明・訂正された事実もあることに注意しなければなりません。

『戊辰白河口戦争記』を読んでみようという方に、私の勉強のためのメモ書きがいくらか役立てばと思っています。

2018年7月28日(戊辰戦争150周年) 富田悦哉

※理解を深めるために、復刻版付録に加え、地図等の画像イメージや地名・人名一覧を新たな付録としました。それら「訳」を作成する過程でできた成果物は、「[戊辰白河口戦争記 学習ノート](#)」に集めました。

※登場する地名・地形を、「[戊辰白河地図インデックス](#)」 および 「[白河口戦争の地名地図](#)」で確かめながら読み進めると、理解を援けると思います。

※復刻版付録の「[目でみる戊辰白河口戦争の記録](#)」にも、注釈を付しました。ただし図版は画質が低下していますので、項目を対照する程度とお考えください。(詳細は、博物館や資料館などで原本を参照してください。)

※注などのリンクは「新しいタブで開く」ことをお勧めします。

⇒ [戊辰白河口戦争記 学習ノート](#)

<https://tomifa.sakura.ne.jp/bosin-sirakawa/>

(復刻版表紙)

\*\*\*\*\*

佐久間律堂著 訳注 井上幸雄 金子誠三

## 戊辰白河口戦争記 復刻

戊辰白河口戦争記復刻刊行会

\*\*\*\*\*

復刻版 発刊に寄せて

白河市長 小野 亀八郎

(文は後掲)

復刻版 目次

戊辰白河口戦争記

付録 幕末・維新人物100人

藩一覧

奥羽列藩同盟図

目でみる戊辰白河口戦争の記録

あとがき

復刻版 凡例

原本の理解を助けるために、次のことを施した。

- 1 碑文をのぞき、読みにくい部分に現代仮名づかいでルビをふり、難解語その他に脚注を付した。
- 2 巻末に、関係人物・藩を注記した。
- 3 関係の写真を、巻末に収録した。

原書は昭和16年(1941年)9月発行。

復刻版は昭和63年(1988年)7月発行。(戊辰戦争120周年)

原書の発行は戊辰白河口戦争から73年。

現代2018年はアジア太平洋戦争終戦から73年であり、戦争体験の証言者が次々と亡くなっていくという事情が共通する。

「白河」「白川」の表記について古くから地名として「白河」と「白川」は併用・混用されてきたようである。本訳中では、現代地名が「白河」であることを優先して、本文中の市町名表記は「白河」とする。ただし引用文中では「白川」のままとした箇所がある。

東白川郡の旧称としては「白川郡」とする。(西白河郡の旧称は「白河郡」)

「白河口」「白川口」は結局町名を目当てにしているので、「白河」で統一する。西軍総督名称は「白河口」と表記する。(『復古記』では「河」「川」混在)

「西軍」「東軍」について

本訳は、原書に従って「西軍」「東軍」と表記する。

西軍： いわゆる新政府軍、官軍。薩摩藩・長州藩・土佐藩などの主に西国雄藩による連合軍。

東軍： 奥羽越列藩同盟と会津藩、庄内藩、旧幕府脱走兵などの連合軍。西軍に抗した。

人物の年齢(とくに死亡年齢)について

文献や碑文から判明している場合は「～歳」と記載している。ただし数え年か満年齢かは判別しきれない。

引用文献や供養碑文などで「享年」とあるものを引用する場合は、そのまま「享年～」と表示する。

享年は「天から享けた年数」とされるが、戊辰戦争の当時では「数え年」と同じと推定するのが妥当と思われる。

また「享年～歳」とあるものは年数と年齢を混同していることになるが、「数え」で考えれば結局同じである。

\*\*\*\*\*

佐久間律堂著

# 戊辰白河口戦争記

堀川古楓堂刊行

\*\*\*\*\*

## 自序

戊辰の役は、明治維新の新建設に伴って起つた極めて複雑した免れ難い戦乱であつたが、武家時代最終の戦だけに、東西両軍何れも武士道精神を發揮して戦つた。

白河口の戦は頗る激戦であり、且つ長期に亘つた戦争であつたので、白河地方にはその戦跡も多く、史話や記録も亦多く遺されてゐる。余、大正九年白河に居を移し爾来二十有余年此等戦跡を遍く訪ね、古老に実話を質し、或は旧家に記録を求めた。適々今秋戊辰戦争を距る七十四年に方り、此等地方特殊なる郷土資料を一般史に織込み「戊辰白河口戦争記」と題して上梓に付することとした。

本書収むる所、雑録と見るべきものあり、また炉辺物語に類する所も少くない。これ當時の実況を語るに足るものは片言隻句と雖も之を収録せるに因る。本書戦争史と言はずして戦争記と称したるもこれがためである。ただ著者の浅学寡聞、よく史実を尽さず、推敲意に満たざる所多し、後日訂正修補の機あらん。されどこの小著世に裨益するあらば幸である。偏に江湖の批正を仰ぐ。

口絵の五月朔日戦図は、大山元帥伝の付図なるを、特に大山家の御許を得て本書に転載したるもの、戦図の縮写、白河城大手門の複写及び砲弾等の実写は何れも熊田猛夫氏の勞を煩はしたるもの、**題簽**は大谷五平氏の揮毫を岩越次郎氏の彫刻されたものである。ここに付記してその好意を深謝す。

昭和十六年九月

著者識す

戊辰の役： 戊辰戦争。慶応4年/明治元年～明治2年（1868年～1869年）。戊辰（つちのえたつ）の年に発端であることから。

「極めて複雑した免れ難い戦乱」：意味深長である。しかし決定論にくみするものではない。

爾来： それより後。

適々（てきてき）： たまたま。

上梓： 出版すること。

炉辺物語： 炉端でつれづれにするような、よもやま話。

浅学寡聞： 自身の知識や経験が少ないことを謙遜している言葉

推敲： 字句・表現をよく考え練ること。

小著： 自分の著作を謙遜している。

裨益： 役に立つこと。

江湖： 世の中。

批正： 批評して誤りを正すこと。

大山元帥： 1842～1916。大山弥助巖。薩摩藩。元帥陸軍大将。

朔日： その月の第一日。

題簽（だいせん）： 原書は「題簽」となっているが「簽」が正しい。ここでは書物の題字の意味。

揮毫： 文字や絵をかくこと。

復刻版の折り込み口絵は、付録「目でみる戊辰白河口戦争の記録」に付した。

官軍白河攻撃要図 ⇒ 『戊辰白河口戦争記地図インデックス』(5月1日)

\*\*\*\*\*

口絵

白河城 大手門とひろこうじ広小路  
官軍白河攻撃要図ようず 慶応戊辰五月朔日  
戊辰戦争の砲弾と小銃丸

\*\*\*\*\*

目次

第1章	幕軍烏羽伏見に敗る	3
第2章	西軍江戸城に進撃	7
第3章	奥羽鎮定の方針	10
第4章	奥羽列藩の白石会議	15
第5章	世良参謀福島に殺さる	19
第6章	会兵白河城を奪取	25
第7章	戦争当時の白河城	31
第8章	白河口の戦争	33
第9章	五月朔日の大激戦	38
第10章	西軍白河に滞在	59
第11章	輪王寺宮奥羽に下り給う	64
第12章	東西相峙す二旬	67
第13章	西軍棚倉城に迫る	93
第14章	白河地方に砲声の絶ゆるまで	101
第15章	板垣参謀三春に向かう	109
第16章	若松城ついに陥る	114
第17章	奥羽諸藩降る	119
第18章	西軍帰還の途白河に宿泊	124
第19章	東西両軍の墓碑および供養塔	127
第20章	戊辰戦争と地方民	176
付録	戊辰戦争年表	211

(ページ数字は復刻版のもの)

第1章 幕軍鳥羽伏見に敗る

(戊辰戦争は鳥羽伏見の戦争から始まる。)

將軍徳川慶喜は、慶応3年10月時勢を察し、「当今外国の交際、日に盛なるにより、愈々朝権一途に出不<sub>レ</sub>申候ては、綱紀難<sub>レ</sub>立。」との大英断をもって大政を奉還した。

朝廷はこれを許し、慶応3年12月9日には小御所の会議が開かれた。これが新政府としての最初の会議である。この会議に土佐の前藩主山内容堂は徳川慶喜を召して会議に列せしむべしと主張したが、大原重徳・岩倉具視等はこれに反対し、かつ慶喜の誠意を疑い、かつ官位を辞せしめ、土地人民の返還を求めたのである。

幕府側は、この会議の結果慶喜の退官となり、納地のこととなった事をもって、薩藩およびその一派の公卿等の陰謀であるとして憤慨するところあり、君側の姦を清むべしとした。賢明なる慶喜は幕臣の不平が輦轂の下に発してはと恐懼して、京都二条城から大阪に退いた。

一方江戸では三田の薩藩邸に潜む浪士等の市中奪掠があり、西の丸の炎上等の事があって、ここに幕府側と薩藩とは反目した。三田の薩邸を焼いたのは12月24日であった。この報が大阪に達すると、幕府側の諸隊は令を待たずに戎装した。すなわち頃日の朝廷の措置は決して朝廷の真意でなく、薩藩等の奸謀となし、君側を清めねばならぬと、上洛掃攘の議が一決され、慶喜もこの説に傾いた。

慶応4年正月3日、慶喜入朝の事となり、幕臣は討薩の表を携えて上京した。(薩藩は、武力によって徳川300年の勢力を破壊するのではなくては王政復古の大業は為し得ざるものとして、故意に徳川主従を憤らしめたのである。そこで徳川主従は討薩の表を携えて入京となる。これが鳥羽伏見の戦いの原因であり、戊辰戦争の原因である。)

幕軍： 徳川幕府側の軍。

鳥羽・伏見： 京都市南部。

時勢： 時代の情勢。

交際： 外国とのつきあい、交渉。

朝権一途に： 天皇中心に国権をまとめて対応する。

綱紀： 国の統治

大政奉還： 家康が慶長8年に補された征夷大將軍の職を、徳川最後の將軍慶喜が辞し、政権を朝廷に返上。

小御所の会議： 京都御所内の殿舎の一つ。明治天皇出御のもと、徳川氏の処分を決めた会議。土佐藩：高知県高知市。山内家。24万2000石。

岩倉具視： 1825~1883。幼少から容姿や言動に公家らしさがなく異彩を放っていたという。八十八卿列参事件。一時失脚したが、大政奉還に際して復権。新政府の海陸軍事務と会計事務を担当し、実質的に首班となる。

納地： 徳川幕府の領していた700万石の土地を天皇に返す。800万石ともいう。

薩藩： 薩摩藩。鹿児島県鹿児島市。島津家。77万石。

君側の姦を清む： 天皇の周囲にいる悪人を排除するという意味

輦轂： 天子の乗り物。転じて天皇のひざもと。ここでは京都のこと。

大阪： 明治政府になってから「大阪」という表記を正式とした。それまでは「大坂・大阪」併用。原書では「大坂・大阪」混用。

戎装： 出陣の身支度。武装。

頃日： ちかごろ

掃攘： 悪人を打ち破り排除する。

入朝： 朝廷に参内する

表： 臣下から天皇への文書

王政復古： 武家政治から天皇親政の政体に復する。

とうきつ  
討薩の表に云う

しん つつしみできよげつ ごじたいきょうさつ たてまつり そうらえは  
 臣慶喜謹而去月九日以來御事体奉<sub>二</sub>恐察<sub>一</sub>候得者、一々朝廷の  
 ごしんい これなく 無し、全く松平修理大夫奸臣共の陰謀より出候は  
 天下<sub>二</sub>所<sub>一</sub>共知<sub>二</sub>。殊に江戸・長崎・野相州所々乱暴劫盜に及  
 そうろう 候も、同家家来の唱導により東西響応皇国を乱し候所業天人  
 とも にくむ ところ ごさそうろうあいだ おひきわた ごさそうろうよう  
 共に所<sub>レ</sub>憎に御座候間、前文の奸臣共を御引渡し御座候様  
 おん さたくだ されたく まんいちごさいようあいなら ず そうら やむを え ず ちゅうりく  
 御沙汰被<sub>レ</sub>下度、万<sub>一</sub>御採用不<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候はば不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止 誅戮を  
 もうす べく このだんつしみてそうぶん たてまつり  
 加へ可<sub>レ</sub>申候。此段謹而奉<sub>二</sub>奏聞<sub>一</sub>候。

正月 慶喜

かく討薩の表を上り、幕軍は正月3日に会津・桑名2藩の兵を前駆として、譜代諸藩の兵3万をもって鳥羽・伏見の両道から進んだのである。

幕臣の上洛は薩長の待ち構えていたところであったので、薩兵から砲撃は開始された。もとより薩長は連合されている。翌4日、朝廷は仁和寺宮嘉彰親王を征夷大將軍となし錦旗節刀を賜うて出征せしめたから、幕軍は朝敵となった。連戦4日幕軍は敗れて大阪に遁れ帰った。慶喜は錦旗と聞いて、大坂城を尾張・越前に託し、会津・桑名等の藩主とともに6日夜に軍艦で江戸に帰った。

てんじんまち ぼう じょう  
 白河町天神町藤田某の記録に会津兵の白河通過の状を述べて(藤  
 田某は、白河天神町の大庄屋藤田孫十郎の弟である。孫十郎は現  
 おおしやうや  
 在の藤田新次郎氏の祖である。)、  
 鳥羽伏見の戦いに徳川の脱兵および会津兵の手負者および途中死  
 ておいしゃ  
 亡者は、駕籠により継ぎ来り、または引戸駕籠に乗りたるも、  
 ひきどか ごと  
 しぶがみ うんぬん  
 渋紙に包みたる死人もあった。云々。

慶喜が江戸に帰ると、当時フランスは東洋に野心満々たるの時であったから、公使ロッシュを江戸城に登城せしめ、慶喜に面会のうえしきりに薩長と戦わしめんとした。軍艦も兵器もすべてフランスにおいて用立てするからと誘った。このとき慶喜は断然これを却け「我が国はたとい公卿大名から申し出たことであっても、朝命となつては違背の出来ぬ国柄である」と諭したという。このとき慶喜が凡庸の主であつたら、我が国体を傷つけたことであつたらう。当時英仏の関係から推して見ると、フランスが幕府に加勢したとすれば、必ず英は薩長に結んだに相違ない。慶喜の賢明によって我が国は外国の干渉を受けることなく、外国勢力が扶植する

【p4】  
 「臣下である慶喜が謹んで、昨日9日以來の事態を推察さしあげれば、一つとして朝廷(天皇)のご真意ではなく、まったく薩摩藩の奸臣どもの陰謀から出ていることは世の人々皆知るところです。ことに江戸・長崎・下野・相模のあちこちで乱暴・強盗が起こっているのも、薩藩家来の唱導によつて東西呼応して皇国を乱そうという所業であつて、神も人もともに憎むところのございますから、前記の奸臣どもをお引き渡しいただけるよう、ご命令を下されたいのですが、万<sub>一</sub>(この意見が)ご採用されないのであれば、やむを得ず武力で悪人を討ち殺すことにいたします。このことを謹んで奏聞たてまつります。」

修理大夫： 薩摩藩主の官職名  
 野・相州： 下野国(栃木県)と相模国(神奈川県)の大部分)  
 天人ともに： 神も人も、天皇から平民まで  
 沙汰： 裁断して取り扱いを命じる  
 誅戮： 武力で悪人を討ち殺す  
 譜代： 関ヶ原の戦い以前からの徳川氏の臣。  
 長州藩： 山口県山口市。毛利家。36万9千石。  
 原書「仁和寺宮嘉彰親王」→訳「仁和寺宮嘉彰親王」(のちに小松宮嘉仁親王と改める)

錦旗節刀： 朝敵征伐の時に天皇から官軍の標章として、征夷大將軍に賜った錦の旗と刀。  
 尾張藩と越前藩の者の意味。ごく限られた者のみを従えての脱出であつたという。  
 通過の状： 通過していくありさま。  
 大庄屋： 藩から任命され、苗字帯刀を許される格式。一村の長として村の戸籍・地方・訴訟・貢租などを受け持つ庄屋を、数人から数十人支配した。

⇒【脚注】本書に登場する大庄屋  
 脱兵： 戦場を離脱した敗兵。  
 継ぎ来り： 駕籠を乗り継いで引戸駕籠： 乗り口に引き戸を取り付けた駕籠。身分の高い者が用いた。  
 渋紙： 張り合わせて柿渋を塗った和紙。雨具・包み紙・敷物などにした。  
 朝命： 朝廷の命令

凡庸の主： 凡庸な君主  
 国体： 特に「天皇を中心とした秩序(政体)」を意味する語

ことなく済んだ。

本書に登場する大庄屋

復刻版 6 ページ 天神町 藤田孫十郎

31, 176, 188, 195, 198, 199, 204 ページ 栃本 根本家

52 ページ 米 兼子家

64 ページ 白坂村 白坂市之助

92 ページ 搦目 内山家

【p7】

扶植： 勢力を拡大すること。  
ひいては植民地化されることが恐  
れられた。



## 第2章 西軍江戸城に進撃

慶応4年正月10日に、朝廷は徳川慶喜および松平容保・松平定敬等の官爵を削り、ついに東征の師を起して諸藩の兵を徴した。2月9日有栖川宮熾仁親王が東征大総督となられ、同15日錦旗節刀を授けられた。かくして西軍は東海・東山・北陸の3道から江戸城に迫った。総督・参謀は左の通りである。

東征大総督	熾仁親王
参謀	正親町中将
同	西四辻太夫
同	西郷隆盛
同	林玖十郎
東海道先鋒総督兼鎮撫使	橋本美栄
同 副使	柳原前光
参謀	木梨精一郎
同	海江田信義
東山道先鋒総督兼鎮撫使	岩倉具定
同 副使	岩倉具経
参謀	板垣退助
同	伊地知正治
北陸道先鋒総督兼鎮撫使	高倉永祐
同 副使	四條隆平
参謀	黒田清隆
同	品川弥二郎

東海道は進撃を主とし、外2道は防止を主として2月11日・12日・13日宮闕を拝辞し、3道齊しく進んだ。この中の東山道先鋒の軍が白河口に迫るに至ったのである。

東山道先鋒は2軍に分れ、一軍は板垣参謀これを率いて信州から甲府に入り、幕府新選組の隊長近藤勇を勝沼付近で破って新宿に着いた。一軍は伊地知参謀これを率いて上武の間に幕軍と戦い、進んで板橋に着いた。東海道軍は進んで池上に着き本門寺に陣した。北陸軍は千住に着いた。

大総督府は2月15日京を発し、海路を駿河に至り駿府に府を置き、いよいよ3月15日江戸城総攻撃に決した。

ここに徳川譜代の臣はみな兵器を取って立とうとする形勢なので、

[p7]

大政奉還により慶喜の征夷大將軍は辞され（鳥羽伏見の戦いでは仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍に任命）、王政復古の号令により辞官納地を命じてはいたが、慶喜の官爵返納は行なわれていなかった。ここまでで慶喜、正二位内大臣右近衛大将。容保、正四位下参議肥後守。定敬、従四位上左近衛権中将越中守。

東征の師： 東征軍

東山道： 中山道のこと。江戸時代より上野（群馬）信濃（長野）等を経て近江（滋賀）の草津宿で東海道に合流し、京に至る。五街道の一つ。

左の通り： 原書・復刻版は縦書き、訳は横書きなので「下」とすべきところ。他箇所も同様。

原書「西田辻」→訳「西四辻」  
原書「さねやね」→訳「さねやな」

先鋒総督兼鎮撫使： 先頭に立つ軍司令官。地方の乱兵を鎮めるために、朝廷から派遣された使者。

西軍の組織については、別表「西軍の総督参謀」に整理した。

原書「永祐」→訳「永祐」

原書「彌次郎」→訳「弥二郎」

防止： ここでは防衛線を上げ進めるような概念か。

宮闕を拝辞： 皇居にて天皇に出征の挨拶をすること。

後に出てくるように、東山道軍は元々白河口は担当ではなかった。

白河口： 陸奥国白河（現福島県白河市）は奥州街道の要地であった。古代は白河の関が置かれ、奥州の入り口にあたる。

新選組： 「新撰組」という表記もあるが、訳では「選」とする

勝沼： 山梨県東山梨郡勝沼町

新宿： 江戸の西方、甲州街道新宿。

上武の間に： 上野（群馬）および武蔵（東京・埼玉・神奈川の一部）の地域において。

板橋： 江戸の北西方、中山道（東山道）板橋宿。

池上： 江戸の南方、東海道品川宿の南。

千住： 江戸の北方、奥州街道千住宿。このように各軍が各街道の初宿に到着し、江戸を包囲した形勢である。

駿河の駿府： 静岡県静岡市。

府： 大総督府。司令部。

譜代の臣： 「代々主人に仕える者」を意味するが、ここでは徳川家直属の家臣団（幕臣）のこと

慶喜は勝安房をしてこれを諭さしめ、身は江戸城を出でて上野寛永寺に屏居して恭順し朝命を俟った。諸道の兵が江戸に迫るにおよび、山岡鉄太郎は駿府に至り西郷隆盛に面会して慶喜恭順の意を述べ、ついで勝安房は高輪の薩邸に西郷隆盛と会見して慶喜恭順の状を陳じて、討伐の師を止められたしと請うに至り、隆盛はこれを総督宮に稟して諸軍の進伐を停めた。

4月4日柳原前光は勅使として江戸城に入り、慶喜に死一等を減じて水戸に幽し、江戸城および軍艦・銃器を収む。

4月15日大総督宮熾仁親王は江戸城に入らせ給うた。

【p9】

勝安房： 勝安房守。このころ陸軍総裁から軍事取扱に異動。号は海舟。維新後に諱を安芳（やすよし）と変えた。

屏居： 一室にこもっている。

諸道の兵： 各街道を進撃する東征軍。

山岡鉄太郎： 剣客。この当時は徳川家精鋭隊歩兵頭格。江戸城開城後、若年寄格幹事となる。号は鉄舟。

高輪： 東海道の江戸の町外れ（現在東京都港区）。高輪大木戸があった。

陳ず： 弁明する。

稟す： 事を上官に申しのべる。

水戸に幽し： 水戸藩校弘道館の一室に幽閉。

収む： 「接收した」という意味。それが西郷と勝の停戦合意条件であった。しかし実際には旧幕府軍艦は一部が引き渡されただけで、主要艦は榎本武揚らが占拠して江戸湾上に居続け、ついには8月19日に脱走することになる。銃器も、大鳥圭介等をはじめとする旧幕府脱走兵による持ち出しがあり、完全な接收は行なわれなかった。

### 第3章 奥羽鎮定の方針

奥羽の鎮定は大兵を動かすことなく、奥羽諸藩の兵をもって鎮定することに朝議が定まって、その令は奥羽諸藩に下ったのである。令に云う

就<sub>レ</sub>徳川慶喜 叛逆<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>追討<sub>一</sub>、近日官軍自<sub>レ</sub>東海・東山・北陸三道<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進発<sub>一</sub>旨被<sub>レ</sub>仰出<sub>一</sub>候。附ては奥羽の諸藩宜<sub>下</sub>知<sub>二</sub>尊王大義<sub>一</sub>相共に援<sub>中</sub>六師征討之勢<sub>上</sub>旨、御沙汰候事。

正月 17 日には朝廷は仙台藩に令を下した。その令に云う

仙台中将  
会津容保今度徳川慶喜の叛謀に与し、錦旗に発砲し大逆無道。可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>發<sub>二</sub>征伐軍<sub>一</sub>候間、其藩一手を以て本城を襲撃速に可<sub>レ</sub>奏<sub>二</sub>追討之功<sub>一</sub>旨、御沙汰候事。

ここに仙台藩主伊達慶邦はこの旨を藩中に達した。

会津藩主松平容保は江戸藩邸に謹慎中であつたが、慶喜の旨を受けて、2月16日江戸を出で帰国した。この時局に当たって江戸市内取締の重任を担っていた庄内藩もまた帰国した。桑名藩主松平定敬も江戸藩邸に謹慎中であつたが、藩邸を出でその菩提寺の霊岸寺に退き、大久保一翁の勧めにより更に僻遠の地に謹慎することになり、その領地の越後柏崎に退いた。

2月26日、左大臣九条道孝が奥羽鎮撫総督となり、澤為量は副総督（為量は宣嘉の父）、醍醐忠敬・大山綱良（格之助）・世良砥徳（修蔵）が参謀となりて、慶応4年3月2日、薩藩103人・長藩1中隊・筑前藩158人・仙台藩100人の守衛兵を率いて京都を発し、海路奥羽に向かった。

これより先、奥羽鎮撫使として澤為量・醍醐忠敬が命ぜられ、その参謀には薩の黒田清隆・長の品川弥二郎が命ぜられた。しかるにその鎮撫の方針を定むるに当たり鎮撫を主とするか、討伐を主とするかに関して議協わず、鎮撫を主とする黒田・品川は参謀を辞するに至った。そこで前記の任命となる。これが会津討伐ともなり、奥羽

大兵：大軍の意だが、ここでは新政府の東征軍のこと。  
奥羽諸藩の兵をもって鎮定：奥羽諸藩が恭順して、新政府の軍として働くという前提である。奥羽の事情を理解せず、見通しが甘かった。しかし、新政府に派兵の余力が無かったという事情もあった。

六師征討：朝廷が、6方面への諸藩を鎮撫するため任命した征討軍。○山陰道鎮撫総督西園寺公望 ○東海道（同）橋本実梁 ○東山道（同）岩倉具定 ○北陸道（同）高倉永祐 ○中国四国（同）四条隆謨 ○九州（同）沢宣嘉。  
このときは各方面へ独立した鎮撫総督を派遣したのであって、指揮統括する大総督は未設置。このうち東海道・東山道・北陸道鎮撫総督はさしあたり江戸を目指した。会津征討については、西軍直接ではなく、仙台藩一藩にやらせるとするのが新政府の当初方針だった。（仙台藩は恭順して新政府の一軍として働くと思なされていた。）  
その藩一手をもって：仙台藩一藩だけで

会津藩：福島県会津若松市。松平（保科）家。20万石。  
庄内藩：原書では「荘内」という表記であったが、一般的な表記「庄内」に従う。山形県鶴岡市。酒井家。17万石。  
桑名藩：三重県桑名市。松平（久松）家。11万石。  
桑名藩主松平定敬：久松松平家（定勝系）。寛政年間の老中松平定信（当時白河藩）は、田安德川家からの養子。定敬は、尾張徳川家連枝の四谷松平家（高須藩）からの養子。  
霊岸寺：東京都江東区白河一丁目。浄土宗。国史跡松平定信公の墓有り。  
越後柏崎：新潟県柏崎市。桑名藩の領地（飛び地）があった。

まず澤総督、醍醐副総督、黒田・品川参謀が任命されたのは2月9日付け。後から位階の高い九条を総督に据えたため、澤・醍醐は役職を順に下げられた。この初動人選のごたつきが、後の奥羽鎮撫多難のはじまりであった。守衛兵のみで有効な兵力を持たせなかったことも、見通しが甘かった。

列藩の同盟ともなったものである。

奥羽鎮撫総督が京を発するにあたり、天童藩の老臣吉田守隆が前導に任じた。3月10日浪華を出帆、19日松島に上陸、一時観瀾亭を営所とした。3月23日には仙台藩主松平慶邦が松島に到り、九条総督に謁して会津討伐先鋒の命を拝した。慶邦はこれにおいて兵を御霊櫃・土湯・中山・石筵・湯原等の諸口に出し進んで会津に迫った。

しかるに奥羽諸藩の意向は、概ね弭兵論で会津討伐を不可とし、寛大の処置を講ずべしとなし、仙台・米沢2藩がその首唱者であった。

鎮撫総督は会津を討たしめようとする、奥羽諸藩は会津を救うとする、この両意見の相違は互いに誤解を生ぜしめたのである。

このころ米沢藩の大瀧新蔵等が仙台に来たって、世良参謀に面談して曰く「容保謹慎中である、干戈を動かすことなく鎮撫し得べし」と建言した。ところが世良参謀はおおいに立腹して「米藩異議あらば会藩と同罪なり」と言った。初めから世良参謀と奥羽諸藩とは氷炭相容れぬ関係に立った。

世良参謀は奥羽諸藩をもって奥羽を鎮撫することの困難であることを察知して、長藩に左の書を送って援兵を請うている。(世良参謀は長藩出身である。)

じらいますすたししょう ごじんりよくござ なさ れ だんたいけいに たてまつり  
 爾来益々多様に御尽力被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>の段 奉<sub>二</sub>大慶<sub>一</sub>候。鎮撫使  
 いっとう ぶいのぎ ちよじんあいなりもうし さて  
 一統、海上無異之儀、当月二十三日仙台城下へ著陣相成申候。偕  
 会藩にても大きに憤発、上下一和、自分将軍と称号し、水兵・徳  
 そのた しゅうとん しきょう せい すで  
 川兵・桑名兵・其他農町兵・新選組等集屯、四境へ勢を張り既に  
 おしだ せい あいみ もうし しだい つき ふれん  
 押出すの勢と相見え申候。右の次第に付、仙台不練の兵にては奏  
 こうむ ぐんぼうきよく もうしつかわしそうろうあいだ くだ さる べく  
 功無<sub>二</sub>覚束<sub>一</sub>、巨細軍防局へ申遣候間、御承知可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下  
 候。  
 いず さしだ され もうさ ず なかなかむつかしきようぞんじ すなわ  
 何れ薩兵と我が兵と被<sub>二</sub>差出<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>申ては、中々六ヶ敷様存、乃  
 さしのぼらせ つき うえ ぼんしよおはなしもうす べく  
 ち薩藩大野五左衛門差登候に付、御面会の上、万緒御咄可<sub>レ</sub>申  
 ようたのみおき あいだ これまた くだ さる べく しょうない てあてこれ あり  
 様頼置候間、是亦御承知可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。庄内も少々手当有<sub>レ</sub>之  
 そうろうや あいきこ もうし なり たのむに たら ず ぞんじ たてまつり  
 候哉に相聞え申候。米沢も半信半疑也。不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>頼と奉<sub>レ</sub>存  
 ようじのみ  
 候。右は用事而已。

みそか  
 三月晦日

そうそうとんしゅ  
 早々頓首。

世良修蔵

【p12】

天童藩： 山形県天童市。織田（信雄流）家。2万石。

吉田大八守隆： のちに天童藩が庄内藩の攻撃を受けるに至り失脚、切腹した。天童将棋駒の製造を推奨した。

観瀾亭： 伊達政宗が豊臣秀吉から貰った茶室で伏見城にあったもの。歴代仙台藩主の納涼観光に用いられた。

松平（伊達）慶邦： 1825～1874。仙台藩第13代藩主。蝦夷地の警衛を幕府から命じられた。戊辰戦争では米沢藩主とともに列藩同盟の総督となったが、敗戦で江戸に連行され謹慎閉門。

御霊櫃～石筵： 奥州街道筋から会津盆地へ入る諸ルート上の峠。

湯原（ゆのはら）： 宮城県刈田郡七ヶ宿町湯原。白石から米沢盆地への七ヶ宿街道の宿場。

弭兵： 出兵しない。弭は、弓の両端の弦を掛ける部分であるが、転じて「やめる」の意味。

干戈（かんか）： 武器。さらには兵、軍のこと。

氷炭相容れぬ： 氷と炭火が共に共存できない様子から、性質が反対で合わないことのとえ。

鎮撫： ここは「鎮撫」と記されているが、世良の持論は会津「討伐」なので、奥羽全般に対する意識は鎮撫というよりは「制圧」にちかいか？

「会津藩はおおいに反抗の様相で、上下の者が一致して、みずから「将軍」を僭称し、旧幕兵ほかを集めたむろさせ、四方の藩境へ武力を見せつけ、今にも攻め出す勢いである。仙台藩のような戦い慣れない兵では役に立たないと思われる。詳細は軍防局へ報告してある。

結局は薩藩・長藩の兵を動員しなければ事態打開しないと考え、薩藩士大野を遣ったので、面会してよく話を聞いて欲しい。庄内方面も問題があり対策が必要と聞いている。

米沢藩の真意も不明で、信頼することはできない。」

巨細： 大きなものから小さなものまで。すべて。一部始終。

軍防局： 軍防事務局。新政府が慶応元年2月3日に設けた中央の組織。

万緒： いろいろの糸ぐち。

大戸準一郎様

広沢兵助様

尚々<sup>なおなお</sup>弥次郎<sup>あいましもうしやりおき</sup>へも荒増申遣置候間、御承知被<sup>あいだ</sup>下度候。已上。<sup>くだされたく</sup> <sup>いじょう</sup>

この文をもってすれば、世良参謀は奥羽兵をもっては会津討伐には不足とし、かつ米藩を信じておらぬことは明白で、奥羽は薩長兵をして追討すべしと覚悟したものである。

【p14】

大戸準一郎： 木戸準一郎（桂小五郎）と思われる。

広沢兵助： 広沢真臣

弥次郎： 品川弥二郎と思われる。

米藩： 米沢藩。

### 第4章 奥羽列藩の白石会議

4月26日会津藩主松平容保は使を仙台・米沢に遣わして降を請うたので、2藩は書を総督府に上って容保の使者を軍門に引見せんことを申し出ている。

閏4月4日には仙台・米沢2藩は書を督府に上って、会藩降伏の状があるによって追撃の中止を請うている。

これより先閏4月朔日ころ、醍醐・世良の両参謀は本宮にあり、仙台藩を督して会津に進撃せしめ、中山・石筵に戦いがあった。このころ鎮撫総督は東山道先鋒軍の宇都宮にあるものに移牒して、速やかに白河口に来援することを求めている。

閏4月4日、いよいよ仙台・米沢の両藩は奥羽の列藩に回文してその重臣を白石に会合するようにした。これ会藩救解の趣旨からである。

その文に

陸奥守並弾正大弼儀、会津容保御追討之先鋒被仰付、陸奥守出陣被致候処、今般容保家来共陣門へ相越、降伏謝罪之嘆願申出候に付、衆評致度候間、御重役方之内、白石陣所へ早々御出張相成候様致度候。以上。

閏四月四日

(陸奥守は仙藩主であり、弾正大弼とは米藩主である。)

この回章によって重役の会同したものは盛岡・二本松・守山・棚倉・三春・山形・福島・上山・亀田・一関・矢島等で、棚倉からは平田弾右衛門が出席した。

閏4月12日、仙・米両侯は会侯の嘆願書に両藩の嘆願書および白石に会合した14藩重臣の嘆願書を添えて、岩沼における九条総督に謁してこれを呈し親しく事情を述べ、会藩のために哀を請い、兵を止めんことを請うた。九条総督は快然たる態度で嘆願書を落手せられ、「速やかに奏聞に及ばし」との旨があった。

ここにおいて本意達し、仙藩主伊達慶邦・米藩主上杉齊憲は各々その藩に帰る。ところが九条総督から仙・米両藩に左の令達が出された。

降を請う： 恭順する意志があることを伝えた。

上って： 文書を提出して  
軍門に引見： 総督府の陣営において対面して申し出を聞くこと

閏4月： 陰暦で12か月の外に加えた月。慶応4年は4月の次に、閏4月を加えた13か月。日数は383日。

降伏の状： 降伏する様子。

中山・石筵の戦い： 仙台・会津の間の戦いであるが、内通して戦うふりをした。

移牒： 管轄を異にする部隊への文書による命令。

宇都宮にあるもの： 東山道軍の派遣隊が関東各地で旧幕兵を掃討していた。それらの部隊は、奥羽鎮撫総督ではなく東山道鎮撫総督の指揮下にある。

回文して： 通知文を行きわたらせて。実際に文書を持ち回ったのだろうか。

救解(きゅうかい)： 罪を弁済して人を救うこと。

「仙台藩主と米沢藩主は、会津追討を申し付けられ出陣したところだが、このたび会津藩から降伏謝罪の嘆願申し出があったので、奥羽列藩で評議するため、各藩は重役を白石へ出張させてもらいたい。」

衆評： 多人数の批評。評議。

回章： 回覧文書のこと。

平田弾右衛門： 1836~1900。のち文右衛門(文左衛門とも?)。棚倉藩(阿部家)家老。1600石。「白河代表」ということになるだろう。

⇒ [脚注] 平田文右衛門

会侯： 会津藩主のこと。侯は封建領主の意味。

白石： 宮城県白石市。白河城から北東へ約103km。

岩沼： 宮城県岩沼市。当時奥羽鎮撫総督が前進していた。この当時、世良参謀は他所にいたので、九条総督単独での対面であった。

落手： 手の内に落ちる。つまり「受け取る」という意味。「すみやかに新政府中央に伝えよう」と約束した。

本意達し： 意を伝える目的をはたして

こんばん 今般、<sup>たんがんしよならびに</sup>会津謝罪降伏嘆願書 並 <sup>さしだ</sup>奥羽各藩嘆願書 <sup>され</sup>被差出 <sup>じゅくらんの</sup>熟覽之  
ところ <sup>てんちに</sup>処、<sup>いる</sup>朝敵 <sup>べから</sup>不 <sup>ざる</sup>可 <sup>ざいじん</sup>入 <sup>つき</sup>天地 <sup>ごさた</sup>罪人に付、<sup>およば</sup>難 <sup>され</sup>被 <sup>がたし</sup>及 <sup>がたし</sup>御沙汰、  
<sup>そうそうちりせいこうを</sup>早々討入 <sup>そうす</sup>可 <sup>べき</sup>奏 <sup>ものなり</sup>成功者也。

閏四月

奥羽鎮撫総督

この令達に接した奥羽列藩はおおいに憤慨し、「我々の嘆願する所は九条総督これを諒とせられその態度意向公正であった。然るに令達の此に及んだのは、全く薩長の専横にあり」となし、とくに世良参謀を憎んだ。世良参謀は列藩の差し出した嘆願書を出張先の本宮にて見、筆を執って左の付札をなしたという。(九条総督は嘆願書を飛脚によって世良参謀に送り意見を徹したものである。)時は閏4月13日。

会津容保儀、<sup>ぎ</sup>不 <sup>てんちに</sup>可 <sup>いる</sup>容 <sup>べから</sup>天地 <sup>ざる</sup>罪人に付、<sup>ざいじん</sup>速 <sup>つき</sup>に討入 <sup>すみやか</sup>可 <sup>うちりこうを</sup>奏 <sup>そうす</sup>功候事。

ここにおいて列藩は閏4月23日再び白石城に会した。この時は前の14藩の外に秋田・弘前・新庄・八戸・平・福山・泉・本荘・湯長谷・下手渡・天童等が加わって25藩となった。あい議して曰く、「宜しく公義正道に依り、奸賊を清掃し忠を朝廷に尽さざるべからず」と衆議一決し、列藩の重臣が盟約調印して太政官に建白書を上った。この会議に棚倉藩からは梅村角兵衛が出席している。

奥羽同盟25藩とは

仙台・米沢・盛岡・秋田・弘前・二本松・守山・新庄・八戸・棚倉・相馬・三春・平・福山・福島・本荘・泉・亀田・湯長谷・下手渡・矢島・一関・上山・天童・山形をいう。

翌5月には米藩の遊説によって越後の新発田・村山・村松・長岡・三根山・黒川の6藩も加わって奥羽越同盟が成立した。かくて連盟事務所を白石城に設け奥羽越公議所と称した。

同盟の成立せるとき、仙・米の両藩は、「同盟の拳は聖明を壅塞する君側の奸を攘い海内擾乱を鎮定するにありて、徳川政府を回復し貴藩を援助する趣旨に非ず、誤認する勿れ」と会藩に告げた。そのとき会藩の梶原平馬等は「寡君固より王師に抗するの意なし。君側を清めんとするにあるのみ」と答えたという。これが戊辰奥羽戦争

[p17]

「会津藩の謝罪降伏嘆願書をよく読んでみたが、朝敵はこの世に存在を許されない罪人であるから、配慮の必要は認めない。さっさと攻め込んで、征討命令を執行せよ」

「九条総督はきちんとした態度で我々の嘆願に理解を示し、公正に扱った。にもかかわらず、このような結果通知になったのは、まちがいなく薩長の勝手強引な考えのためだ」

本宮： 福島県本宮市。白河城から北東へ約45km。

総督令達はこの付札をなぞったものであることが分かる。武士参謀に操られた公家総督の在り様がかがわれる。

原書は「本庄」だが、一般に使用される「本荘」とする。

奥羽同盟25藩： 巻末の註に記す。→付録「奥羽越列藩同盟図・一覧表」

公義正道： おおやけに果たすべき義務と、正しい道理。正しい行為。

太政官： 古代八省以下を統括して政務を処理した行政の最高機関で、明治政府の最高官庁。

原書は「新庄」「新荘」が混在するが、訳は「新庄」とする。

遊説(ゆうぜい)： 意見や主張を説いて歩くこと。

「このたびの同盟の企ては、天皇の徳ある政治が世に広まるのをふさぐような君側の奸を追い払い、天下の乱れを治めることが目的であって、徳川政府を回復し会津藩を援助する趣旨ではない(尊王であって佐幕ではない)のだ、そこを誤解しないでくれ」

壅塞(ようそく)： ふさぐ。

寡君： 他国に対して自国の主君を称する語。寡徳(徳望少ない)の意。

王師： 天皇の軍隊。

「わが会津藩主は、もとより朝廷の軍に反抗する意図はない。天皇の周りを清めることだけが願いだ(もともと尊王の志だ)」

の起こった骨子<sup>こっし</sup>である。

【p19】

会津藩は京都守護職という損な役を担わされた。職務上、長州藩・薩摩藩と対抗する立場となった。また長州藩・薩摩藩の過激派が凶暴な活動にはしたため、それを弾圧して京の治安維持を図るのは当然であった。

この京都守護職のため藩兵が在京駐留する費用は膨大なもので、国元は疲弊し、藩財政は破綻状態だった。

結局、慶喜が長州・薩摩との最終決戦を避けたため、会津藩もまた決戦の機会を与えられないまま、領国まで退去することになった。しかも長州・薩摩の政略にはまり「朝敵」とされた形である。

しかし会津藩は長州・薩摩と敵対こそすれ、天皇を害するようなことは少しも行なっていない。まさに長州・薩摩に敵対したこと、および幕府の先鋒として行動したことをもって「朝敵」とされたのである。そして「朝敵」であることが征討をうける理由なのだった。

天皇を擁し皇威をもって事を為す政略は、明治政府が味を占めた手法であるが、このように当初から理不尽な傾向を濃く持っていた。

奥羽越列藩が同盟をして会津救援の嘆願書を出したのは、必ずしも会津への友情のためばかりではない。情報取得が遅れがちで、社会変革必要の認識が低かったこと、つまり新政府という「変化」を好まず、まだまだ抵抗が可能な情勢と考えたことが根底にある。当時は各藩が「国」であり藩相互の競争心が強かったから、他藩の支配（新政府といっても実態は薩・長）に従うことを良しとしない気持ちがあった。また、会津への敵罰が東北全体ひいては自藩に及ぶことを懸念する気持ちもあっただろう。仙台・米沢などの有力藩には封建領主的な野心が無いともいえず、中小藩にとっては隣接藩との軋轢を避けたいがため同盟に加入するという判断もあった。



## 第5章 世良参謀福島に殺さる

慶応4年2月16日、朝廷は二本松藩管理の白河城を仙台藩に交付した。奥羽同盟の成立前、慶応4年4月3日、仙台藩主伊達陸奥守の家来伊達筑前等が官軍の先鋒となって白河城に入り、市中の取締りをなした。郡司代森孫三郎（旧小名浜代官）も白河城にあった。（当時旧幕領の代官は朝廷の郡司代に任ぜられて、その民政に当たっていたものである。）

奥羽諸藩中、鎮撫総督の命を受けて白河城に守備したものは仙台（3小隊）・二本松（兵員不詳）・棚倉・三春（2小隊）・湯長谷・泉・平等の諸藩である。（督府は閏4月7日に平・泉の両藩に本月10日を期して討会応援として白河に出兵すべしと令している。）二本松藩は城中に、三春藩は会津町の学館に、湯長谷藩は妙閑寺に、平藩は常宣寺に屯営した。

閏4月上旬、世良参謀は白河城本丸に入り、奥羽鎮撫使の標札を掲げて号令し、奥羽諸藩はその指揮を仰いだ。

しかるに奥羽同盟が結ばれ四囲の形勢すこぶる険悪となるや、世良参謀は「『奥羽皆敵』容易に鎮撫すべからず」と考え、一方東山道先鋒の伊地知参謀に書を寄せ、急を告げて白河に援軍を求め、自らは仙台の総督府に往いて軍事を議せんと、閏4月18日、駕を飛ばして福島に向かい、19日、福島北町金澤屋に投宿した。福島に着したのは午後3時。

この日、仙台藩瀬上主膳・姉齒武之進等は土湯口の荒井・鳥渡の陣を引き揚げて福島に在った。これが世良参謀としては不運であったのである。

前記のごとく奥羽列藩は会津救解嘆願書の斥けられたのをもって世良参謀の所為となし、奥羽は彼一人のために書を受くとなし、列藩はみな彼を憎んだのである。もとより大山・世良等の意図は追討にあったのだから、会藩救解の哀願の容れられないのは当然であった。

世良参謀が福島金澤屋に入るや、福島藩鈴木六太郎を招いて、羽州出張の大山参謀（格之助）に送る密書を託し、明弘暁2人の飛脚をもって出発せしむべきをもってし、かつこれを仙台藩に洩らすなか

交付： 仙台藩に命じて、管理権限を委任した。

森孫三郎： 旧小名浜代官。の小名浜陣屋が西軍の攻撃を受けた際、陣屋に火を放って自刃したという。

旧小名浜代官： 幕領小名浜を支配した地方官。勘定奉行の支配下で年貢徴収、司法検察などの政務を行なった。陣屋を小名浜に置き、いわき市内の68か所4万1323石を支配。

督府： 奥羽鎮撫総督府。

討会： 会津を征討すること。  
学館： 阿部藩の藩校「修道館」（会津町）

妙閑寺： 白河市金屋町。伊達政宗ゆかりの乙姫桜あり。

常宣寺： 白河市向新蔵。

屯営： 兵が宿舎とすること。

四囲の形勢： 奥羽鎮撫総督府の置かれた状況。

「『奥羽諸藩は皆敵』と見るべきだ。鎮撫することは容易ではない。」

原書「伊知地」→訳「伊地知」  
原書中に「伊知地」は数箇所あり、それぞれ「伊地知」と直した。

急を告げて： 事態が切迫していることを告げて。

駕： この場合は駕籠か。

金澤屋： 妓楼。現在の東北電力福島支店付近一帯。太平洋戦争中、強制疎開で取り壊された。跡地は現在国道4号線敷地内。当時通常に見られた「飯盛り女」（私娼）を置いた宿屋である。

瀬上主膳： 1832～1911。仙台藩五番大隊長。2000石。戦後、但木等とともに捕われるが、明治3年赦免となる。

姉齒武之進： 1844～1868。仙台藩五番大隊小隊長兼軍監。5月1日の戦いで戦死。25歳。

原書「しば」→訳「あねは」

大山： これは大山格之助綱良のこと。

羽州出張： この時すでに奥羽鎮撫総督は2手に分かれ、澤副総督と大山下参謀は出羽国新庄にあった。

れと言った。これが姉齒の知るところとなり、その密書は瀬上主膳に提出されたのである。

密書中に

奥羽皆敵と見て進撃の大策に致候に付、乍<sup>おぼ</sup>及<sup>ず</sup>小子急<sup>ながらし</sup>に江戸へ罷越<sup>まかりこし</sup>、大総督につき西郷様へも御示談致候上、登京<sup>と</sup>仕<sup>はな</sup>、尚大阪までも罷越<sup>まかりこし</sup>、大挙奥羽へ皇威赫然致様仕度奉<sup>たてまつり</sup>存候。

姉齒等はこの機を失わば後患来るべしとなし、急に計画を進めた。金澤屋に投宿せるを幸いに酒宴を設け、珍肴を進めて遇した。瀬上・姉齒等は福島藩の目明し浅草宇一郎を通じ、即刻召し捕るべき策を講じ、福島藩遠藤条之助、仙台藩赤坂幸太夫等をして、19日夜三更に金澤屋の寝所に踏み込ましめた。修蔵は短銃を執って放たんとしたが発しない。立ち上がって襖を背にすると、不運にもその襖が倒れてついに縛に就いた。参謀付属の勝見善太郎は刀を振るって対ったが、仙台藩の田辺覧吉にその場に斬られた。(勝見は長藩で、白河から伴い来た従者である。)かくて修蔵は瀬上の宿である目明し浅草宇一郎宅に引致されてしまった。

姉齒は押収の密書を示して詰める。さすがの傑人世良も捕らわれては弱くなる。

明けて20日、宇一郎は世良を屋敷河原に斬った。屍は阿武隈川に投じ、首級は仙台藩大越文五郎が見届けのうえ、桶に入れ筵包みとなして奥羽越公議所の白石城に送った。白石城に着いたのは夜の四つ半、仙台藩但木土佐がこれを城外の月心院に葬る。世良参謀は時に34歳。

この参謀の暗殺は薩長の敵愾心を強めたものであったろう。

記録に残る参謀の遺品調べは

- 一、刀一振
- 一、短刀一振
- 一、本込ニイール一挺
- 一、ピストル一挺
- 一、セコンド一
- 一、褁口一
- 一、金五六拾円
- 一、紺縞木綿単衣一

【p21】

残っている「密書」というのは4通もあり、偽作の疑いもあるという。しかし原本にも「奥羽皆敵」や仙台藩主を軽視する表現は含まれていたものであろう。

『奥羽皆敵』を今後の進攻の基本認識としたい。自分は急いで江戸へ行き大総督府の西郷参謀に相談のうえ、京・大阪までも行って、奥羽方面へ有力な政府軍を大挙派遣するよう要請するつもりだ。」

「この機会を逃したら、状況はさらに悪くなり、後悔することになる」世良は白河など他所においても命を狙われていた、十数人の仙台藩士が脱藩して世良を狙っていたという話もある。

原書「浅野」→訳「浅草」

浅草宇一郎：金澤屋のちかくで旅館「浅草屋」も営む。世良の死後、永代供養料を寄付している。

三更：子(ね)の刻。午後11時から午前1時。

逮捕時に重傷を負ったため、やむなく斬首したという話もある。それにしても世良暗殺は憎悪が先に立っての凶行であって、事後への深謀遠慮があつてのこととは思われない。

屋敷河原：福島市の阿武隈川渡利大橋の下流左岸に広い河川敷がある。(現福島市腰浜町)

原書「但木」→訳「但木」

世良暗殺の報を受けた奥羽列藩の者たちは歓声をあげたという。それほど世良修蔵の傲慢な態度は憎まれていたのである。ただし新政府の厳しい対応を世良個人の恣意だと誤解していたふしもある。

(戸田主水の内部告発あり)

首級：中国(戦国時代)では、敵の首一つとれば階級が一つ上がったことから、一首を一級といい、首を首級という。

夜の四つ半：午後11時。

月心院：宮城県白石市大平字森合。臨濟宗(廃寺)。真田幸村の遺児於梅(おうめ)(片倉重長の後妻)の墓がある。幸村の法号月心院を寺号とした。

ニイール：ミニエ一銃。長州藩が英国商人から購入。前装式施条銃。射程距離250~500m。新政府軍の主力銃。椎実形鉛弾。

ピストル：当時補助的な兵器で将校が携行。

紺縞木綿単衣：紺染め糸で縞模様を織り出した木綿布による裏地の無い着物。普段着一枚。

## 一、蒲色風呂敷一

奥羽人の世良参謀に対する余憤は70年を経た今日なお熄まぬものがあるが、世良参謀の傑士であったということは誰でも称讃している。

世良参謀が白河城に來たり市中・市外を輕装で巡羅し、その画策を練るのとき、誰も彼も参謀の胆力に服したものだと言われている。

西白河郡小田川村佐藤眞太郎氏の談によれば、世良参謀は、豪胆な人で、白河城にあるとき、小田川や踏瀬に往來して自ら用を弁じたものだという。参謀が福島に出発するとき、白河を出ると狙撃に遭った。参謀はただちに自らこれを殺してその首を十文字清之丞という者に託し白河城に送り、福島に向かった。そのとき、小田川を駕籠で過ぎたという。

(東巡録によれば、明治9年6月、白石を御通輦に際し、世良参謀に金幣を下賜せられ磐前県をして祭祀を行なわしめられた。世良参謀は地下に感泣したことであろう。)

世良参謀暗殺の直後、奥羽鎮撫総督府の要員が殺害されている。(同盟の軍事局においては、薩長2藩の兵は見つけ次第に殺すことになっていた。)

わかる範囲で彼らの氏名を記しておく。

勝見善太郎：長州藩士。世良参謀の従士として同行、福島金澤屋宿泊中を襲撃され負傷逮捕される。翌20日早朝、世良参謀とともに阿武隈川河原で斬首された。19歳。

中村小次郎：長州藩兵(膳所藩浪人)。白河城を守備していたところ、閏4月20日の会津軍の襲撃を受け負傷。二本松藩士に救出されたが、仙台藩士栗村五郎七郎らにより護送され、22日金谷川村(福島市清水町)にて殺害された。25歳。

松野儀助：世良の従者。13歳のとき第二奇兵隊に入隊した。20日朝、白河から福島に入り、金澤屋に世良を訪ねたところ、仙台藩士に斬殺された。16歳。

繁蔵：世良の馬丁。20日夕、軍務局があった長楽寺に世良を訪ねたところ、仙台藩の玉沢喜之助に斬殺された。年齢不明。

(以上4名は世良修蔵とともに白石の陣場山墓地に葬られている。)

野村十郎敏行：長州藩・中村半左衛門組。奥羽鎮撫総督参謀付となった。醍醐参謀に従って郡山まで至ったところ、会津軍の白河城奪取の報を受けた。21日、須川関門にさしかかって別行動中、福島藩の杉沢市三郎に斬殺された。25歳。のち宝林寺に埋葬された。

(以上5名と世良修蔵、および浅草宇一郎の位牌を金澤屋齋藤浅之助が保っていた。)

鮫島金兵衛：薩摩藩士。奥羽鎮撫総督府軍監として盛岡藩兵を率いて庄内へ向かう途中、21日、七北田念仏坂(仙台市泉区)で仙台・盛岡藩士に斬殺された。44歳。屍は道のそばに埋められたという。

内山伊右衛門：薩摩藩士。弾薬を出羽へ運搬するところだったという。22日(24日とも)鳴子村(大崎市鳴子温泉)で仙台藩士に襲われ殺害された。34歳。

西田十太郎：薩摩藩士。内山と同所で殺害された。28歳。

田辺蘭吉：長州藩？ 21日、本宮において殺害された。年齢不明。

遊女志げ女：明治2年、かつて世良を暗殺しようと狙っていた浪人によって殺害された。⇒目で見ると、[目で見ると、戊辰白河口戦争の記録【d39「遊女志げ女の碑」\(女石\)】](#)

世良修蔵の妻 千恵：阿月領主浦鞠負の家臣木谷良蔵の娘。修蔵は木谷家の婿養子だった。女子が生まれたが夭逝した。維新後、木谷家は没落して、千恵は尼僧姿で米などを貰って歩いたという。1922年3月、貧窮のうちに病死。78歳。

[p24]

蒲色：蒲(がま)の穂のような赤みを帯びた黄色。

セコンド：時計。懐中時計と思われる。これは指揮官の軍装なのである。一斉攻撃の同期をとるためなど、必需品であった。一方奥羽越列藩同盟軍はそのような用意が無く、各部隊の拳動は散発・個別となり有効性に欠けたことは、後の白河包圍戦で多く見られた。

世良の所持品の質素なことである。見知らぬ土地に身一つで乗り込んで、使命を果たそうという参謀の潔さを垣間見る。

傑士：際立ってすぐれた人物  
巡邏：見回って歩くこと。

用を弁じた：用事を済ませる  
『東巡録』：明治天皇の明治9年(1876年)6月2日~7月21日の東北地方巡幸の様子を記録した書。

御通輦：乗り物が通過すること。天皇のご通過。巡幸の陸路は馬車を使用したという。

この当時、世良修蔵の墓は白石町(現宮城県白石市)郊外の陣場山に改葬されていた。

金幣(きんぺい)：神前に供える幣帛(へいはく)で金色のもの。この場合は祭祀のための費用の意味と思われるが。

磐前県：明治4年11月(旧暦)設置の磐前県に、明治9年4月(新暦)亶理郡(白石町を含む)などが編入された。県庁は磐城平(現いわき市)。明治9年8月廃止。

感泣：感激して泣くこと。

世良修蔵は、天保6年(1835)大島郡椋野村の庄屋中司八郎右衛門の三男として生まれた。僧月性の時習館(清狂草堂)に学び、江戸では儒者安井息軒の三計塾塾長をつとめる。高杉晋作と交わり奇兵隊書記となり、のち第二奇兵隊軍監を経て、戊辰戦争では奥羽鎮撫総督下参謀となった。これらの経歴は「勉学努力」の人である。

不運だったのは、その生真面目で妥協しない性格による気負いと、敵罰方針にもかかわらず少数兵力をもって仙台に乗り込んだ困難状況であったろう。弱味を見せないために、ことさらに横柄尊大な態度となったのではないかと。奥羽諸藩の政情と心情に配慮する余裕が無かったのである。

奥羽列藩側が、新政府の強硬な方針を世良個人の恣意であると誤解し、「世良さえ除けば」と暗殺という短絡策に出たことも不幸であった。

## 第6章 会兵白河城を奪取

閏4月16日、会藩は始めて大平方面に兵を出し真名子村に陣した。このころの奥羽列藩の形勢は白石会議すでに成り、会藩討伐の意なく、ただ鎮撫総督の命をもって白河城に兵を置くに止まり、18日には世良参謀は去っている。この機を逸すべからずとして、閏4月20日暁天、湯本口・羽鳥口に陣した会兵（丹羽長裕家記に会兵および幕兵・彰義隊の兵とある。）その将小池周吉は搦手より、野田進は追手より白河城に攻め入った。三坂喜代助は脇曲輪の女牆を攀じ登って城内に入り城門を開いて会兵を導いたという。会兵はまず会津町に火を放って一挙に城を抜いた。城中の兵は驚愕狼狽、城に火して根田方面に退却した。二本松藩和田右文は、城中に貯えて置いた弾薬が会藩の有となることを憂いて火に投げ、また千両箱は井中に投げ込んだと伝えている。（戦争後この井戸を浚って千両箱を探した者があったが何もなかったという。この本丸の井戸は久しく埋まっていたが、昭和12年に旧に復した。）

大平： 岩瀬郡天栄村。ここより、馬入峠を経て会津街道福良（郡山市）へ至る道と、鶴沼川に沿って、湯本を経て下郷（南会津郡下郷町）へ至る道が分かれる。会津藩軍が拠点とした。白河城から北西へ約21km。

湯本・羽鳥： 岩瀬郡天栄村。白河より西北方へ羽太・虫笠・真名子・羽鳥・大平・湯本を経て、会津にいたるルート。

小池周吉： 会津藩江戸詰。旧幕歩兵からなる純義隊の隊長。

搦手： 城の裏手口。裏門。

野田進： 1843~?。会津藩京都勤番。旧幕兵と同行転戦、会津に戻った後、各地偵察。のち徴募兵の会義隊隊長。

追手： 大手。城の正面口。大手門。

脇曲輪： 城の周囲に築いた土居や石垣。

女牆： 低い垣。「女牆・城上小牆也」

城を抜いた： 城を落とした。戦闘で敵陣地などを突破すること

根田： 白河市萱根根田。白河市街から東北方へ、奥州街道を向寺・女石を経て矢吹方面へ向かう途中。

寒晒粉： 白玉粉。白河藩が毎年將軍家への献上品の一つ。

太平： 世の中がよく治まって平和なこと。泰平。

安田翁【清子書込】松井薬屋

「四月」とあるが閏4月である。慶応4年閏4月20日は新暦で1868年6月10日。この時期の明け六つは3時49分。六つ半は5時7分。五つは6時26分。

朝六つ時： 明け六つ。「明け」といっても日の出時刻ではないことに注意。

御人数： 軍勢。

御旗本： 旧幕臣。

固め居り： 陣地を設けて守備  
米村： 西白河郡西郷村米（大字）米村（字）。白河城から西北へ約2.4km。

丸の内： 白河城の本丸・二の丸・三の丸の範囲を指すか。

家中： 大名の家臣（の屋敷）

引く： 退却。

落城のとき、千両箱を担いだ話。後に白河の名町長になった大竹貞幹氏と川崎弥八郎氏が担いだ。大竹氏は代々城主に寒晒粉を納めた家で城中に出入りしてあり、川崎氏は白河の名家川崎弥助のちで、城中に出入りして居った者である。その千両箱を担ぐとき実に周章したもので、前の者が立てば後の者が腰が立たぬ、後の者が立てば前の者が腰が立たぬというような有様であった。300年も太平であった当時の事で、大砲の音を聞こえては全く腰がぬけて歩まれなかったものだと、大竹氏が天神町の安田平助翁に後日話したという。

### 鹿島の富山氏の記録に

四月二十日朝六つ時、会津様御人数並に御旗本方、都合百三十人程と申す事、湯本・羽鳥村に固め居候処、二十日朝、米村より鉄砲を御城に打ちかけ候。白河城落城致し、丸の内残らず焼ける。家中は道場小路・会津町が残らず焼け、御城に固められた御人数千五百人根田に引くもあり、二本松藩は二百人許鹿島に引き、俵籠の支度する様被し申候処、その中に本沼まで引取。その中に白河城も静に相成候へば、町方の者は申すに及ばず、近在の者まで

丸の内の火消に参り候。この者共に御蔵米より米を下され候。町方の者は老若男女に至るまで皆貰ひ候。酒屋ではハンギリに酒を入れて表にて吞ませ候。質屋より品物を取り出し、皆呉れ候。二十一日、会津**智慧様分**にて番兵致し候。鹿島村はづれ文吉前街道にて篝火を焚き、村方の者一軒一人づつ出で焚き候。町方にて人も人足引出され、まことに末々どうなるものかと生きた空もなく仕事を致すいくじもなし、毎日唯日を暮らし居り候。(富山氏の記録は**大沼村鹿島の富山幸吉氏所蔵**。)

## 天神町藤田氏の記録に

本城付の在米数百俵大庭御米蔵に貯蔵あり、兵火の為に米蔵焼け落ちたるに、其の米は町民に与へるといふを聞き、二十日午後すぎには焼米の中より丸俵を掘り出し背負ひ来るもの蟻の卵を運ぶが如し、中には途中まで持ち出し、再び掘り出したるものを運び来る内に、他の者来たりて持ち行くあり、多きは三俵・四俵と運びたるものあり、それ故に戦争中貧民は飯米に差支たることなく、実に戦争の手始とて筆紙に尽し難し。

二十日**払暁**、大砲の音するや戦争始まりたるを知り、家族一同家財を片付け、酒蔵の目塗の折、空飛ぶキュウキュウと砲丸の飛び行く音を聞き、慄然言語を発する事能はず、何れもウロウロと立騒ぐのみ、空腹になりたれども飯食は更に通らず、水を飲むにも手足振ひて茶碗の水は飛出づる有様なり。宅には孫十郎と母と拙者のみ、奉公人は金之助・初蔵・宗兵衛・新三郎・孫三郎・下女イソ等都合十人なり。漸く昼過に至りて食事す。兄孫十郎は町役人なる為め会津の軍目付役と同行せり。

二十一日、二十二日、市中一般表裏の戸明放しにて店飾は勿論、畳建具も必要の外は夫々片付、今にも人家焼払の覚悟をなし居たり。

閏四月二十三日、夕刻より徳川脱兵及び会津兵続々繰込み来り、寺院又は旅籠屋等に宿泊せり。武器は旧式にて火縄付鉄砲或は弓矢・槍等を多く持参せり。

閏四月二十四日も同様繰込、徳川脱兵**新選組**人数五百人位一に旗本の士なり。洋服又は野袴着用しあり。洋式鉄砲・ヘベル銃を携帯し頗る軍気を挙げたり。

【p27】

鹿島： 白河市大(だい)鹿島。白河地方の総鎮守である鹿嶋神社がある。白河城から東南へ約2.4km。

俵籠： 兵糧(ひょうろう)の当て字か？

本沼： 白河市本沼。白河城から東へ約5.5km。

ハンギリ： 底の浅いタライ状の桶。(半切り)

人心を落ち着かせるため？ 酒を振舞ったり、質物を解放している？

会津智慧様分： 会津藩の(通称)智慧様の持ち場。

戊辰戦争当時、会津藩将の山川浩と佐川官兵衛は「知恵山川、鬼佐川」と呼ばれたという。ただし山川浩は日光・藤原方面で戦ったとのことなので、白河方面の記事に名が出るのは不可解。

文吉前： 鹿島村の小字か？

生きた空もなく： 生きた心地もなく

大沼村： 明治22年、大・久田野・大和田・本沼が合併して大沼村となった。白河町東隣。

藤田氏【清子書込】白河町初代町長

酒造業藤屋。

在米： 在庫の米。

大庭御米蔵： 二の丸にあり。年貢として収納した御城米を入れた蔵。

戦争の手始： 戦乱における様々な出来事の端緒。

払暁： 夜の明けがた。

目塗： 戦火による類焼を避けるため、蔵の戸窓を塗り土で封印した。

慄然： 恐ろしさに震えおののく。

軍目付： いくさ目付。戦場での将兵の監視、戦果の確認をする。幕末では「軍監」ともいう。

一に旗本の士： そろって士分である。(農兵・町民兵は混ざっていないという意味か？)

野袴： 裾にピロートの広い縁をつけた袴。

ヘベル銃： (ゲバール銃)天保3年から最も多く輸入された前装式滑腔銃。当初燧石式点火銃、のちに雷管打式となった。丸玉を使用。

軍気： 兵士の戦意。士気。

閏四月二十日早暁、敵軍会兵・幕兵彰義隊等白河城外平藩・  
三春藩の警衛場なる会津町口・道場門を破り火を放ちて城中に  
侵入し頻に発砲す。其の形況斥候の急報あり、城兵能くこれを  
防ぐ、然れども衆寡敵し難く、防御の術已に尽く。特に野村十郎  
城兵を指揮して本丸を自焼し、遂に横町口を破つて出づ。総軍  
根だに退く。敵兵白河を取る。城郭悉く焼失す。戦死一人  
(下士大友佐左衛門)。

この日、醍醐参謀は郡山駅に抵たり、まさに白河に入らんとした  
が、城の陥るを聞き二本松に引き帰った。

道場小路に火を放って会兵が白河城に迫るとき、小峰寺の住職が  
梵鐘を撞いてこれを報じたために、会兵に狙撃されて死んだ、と今  
に白河町に伝えられている。白河城はその日の午の刻には全く落城  
した。この戦いに丹羽氏の家記に戦死者1人とあるのを見ても攻城  
の容易であり、城兵に戦意のないことが窺い知られる。この日の会  
津方の兵力は130余人であったという。『復古記』には会藩の総兵  
300人と註している。

翌21日には、下野・陸奥の両国の境に「従是北会津領」と大書し  
た標を建てた。

白坂村の石井勝弥翁曰く、  
この標はちょうど境明神の前に建てられた。西軍が入って来る  
と、この標を倒して進んだ。

【p29】

丹羽長裕：米沢藩主・上杉齊  
憲の九男。二本松藩主・丹羽長國  
の婿養子となる。戊辰敗戦で長國  
隠居処分の後、二本松藩の最後の  
藩主となった。

早暁：夜明けころ。日の出前  
警衛場：守備の持ち場。

道場門：白河城の城門。三の  
丸の西辺にあった。現在遺構が現  
地展示されている。

衆寡敵し難く：敵は多数、味  
方は少数であることで、敵わない  
という意味。

野村十郎：長州藩士。翌21日  
に福島藩士に斬殺される。

⇒【世良参謀、暗殺される】

大友佐左衛門：二本松藩下  
士。徒士（足軽とは区別される）。  
『白河口の戦い殉難者名簿』には  
もう一人、三沢波門が白河城で戦  
死とある。

【醍醐参謀の脱出と福島藩士高  
橋純蔵】20日早朝、世良修蔵が斬  
首された。醍醐参謀は白河敗報に  
より二本松に戻ったが、21日福島  
須川関門に至って同様に暗殺処分  
される危機となった。（同行の野村  
十郎は斬殺。）そのとき福島藩勤王  
派の高橋純蔵が割って入り福島城  
の方へ導いたことで、仙台藩士は  
手が出せず、醍醐参謀は危機を脱  
した。

⇒【福島藩戦死碑 向寺聯芳寺】

小峰寺の住職：名前は伝えら  
れていない？ようである。

午の刻：午前11時より午後1  
時の間。正午は12時。

『復古記』：明治政府太政官が  
編纂した、戊辰戦争を中心とした  
記録をまとめた編年体の史料集。  
1889年（明治22年）完成。

石井勝弥【清子書込】石井浩然父  
境明神前にあった南部屋（茶  
屋）の子孫。

境明神：かつての奥州街道  
（現在国道294号線）の下野・陸  
奥国境に祀られている。女神（衣  
通姫）＝玉津島明神と男神（中筒  
男命）＝住吉明神の2社が並んで  
いる。

奥州街道の道順（芦野－境明神  
－白坂－皮籠－一里段－小丸山－  
松並－稻荷山－九番町）と地形に  
ついては、付録『白河戦争の地  
名地図』で確認のこと。

### 第7章 戦争当時の白河城

戦争当時の白河城は空き城であった。すなわち城主のお留守の城郭であった。

慶応3年に白河城主阿部氏は棚倉に移封され、慶応4年に至って再び阿部氏は白河に転封されたが、中止となって白河は空き城を続けた。空き城ではあったが、形からいえば今日のごとき廃城ではない。本丸・二の丸・三の丸があり、濠は深く水を湛え、石垣の上には白い壁塀がまわり、数個の櫓が見えた堂々たる城郭であった。天守閣は白河城にはなかったが、白壁塗りの櫓や塀が遠くから白く望まれて実に立派な城郭であったと伝えられている。

白河郡栃本村の大庄屋根本家の慶応4年の御用書留帳に、阿部氏の慶応4年における白河転封の事実が左のごとく記録されている。

このたびは棚倉より白河へ御所替につき、凡五十日の間、人馬遣高二拾五人・二十五疋宛釜子・金山両道■■■■日々遣 払之儀、道中御奉行領係、来る二十一日より諸荷物差立に相成候旨、棚倉表より御掛合並に頼談等相立候間、右両道継立人馬、御領中一統之助人馬被 仰付候間、先格之振合を以て 令 割賦、  
 つぎたてのむきさしつかえ  
 無之様取計可申候。以上。

辰二月十九日  
 領奉行  
 としばんふれもと  
 年番触元  
 大庄屋  
 とおりおせだ さ れ あいだ このだんおたつしもうしあげ  
 右之通被 仰出候間、此段御達申上候。以上。  
 三月二十日  
 ふれもと  
 触元役所

移封の命によって阿部藩士は白河に移った者もあり、棚倉に居残った者もあった。中止となって白河に引き移った者は再び棚倉に引き戻った。もし阿部氏が慶応3年に棚倉移封とならずに白河城主であったとせば、戊辰戦争はどう展開したものであったろう。

(慶応3年の阿部氏の棚倉移封は、薩長の謀略に出づるものなりとも伝えられている。阿部藩は当時、新兵器元込め銃200挺を有し

空き城： 原書では「明城」と表記。

転封(移封)： 封土(大名の領地)を他の土地に移しかえる。国替え。

今日のごとき廃城： 原書発行の昭和16年当時の白河城は、石垣が残るのみで城址公園としての整備も十分ではなかった。白壁の三重櫓が木造復元建築されたのは1991年である。

栃本村： 白河市東栃本。

「このたび棚倉から白河へ領地替えとのことである。およそ50日間、人馬の動員数として25人・25匹ずつ、釜子・金山の両村に割り当てるものである。

日当のことであるが、道中奉行領の係としては、きたる21日から諸荷物を送る手配になる旨、棚倉側(阿部家)から申し入れと相談等があつて、両村の継立人馬と(白河)領中の村々の助人馬を仰せつけられたのだから、あらかじめ決めてある振合によって分割払いするから、継立の用向きは差し支えないように取り計らいするよう。以上。

辰の年、2月19日  
 白河領奉行から  
 今年連絡当番の大庄屋あて

右のとおり命じられたので、このことを通達申し上げます。以上。

3月20日  
 連絡当番役所から  
 (各村あて)

振合： 分割のしかた、利息計算のことかと思われる。

助人馬： 幕府や大名などの物資が通行する場合、それらを輸送するために人馬を宿場近くの村々に割り当てた。(課役)

元込銃： 後装式施条銃でスナイドル・シャスポー・スパンサーなどの銃。阿部藩は慶応元年にはゲバール銃387挺・ポート銃5挺・破裂玉500を保有していた。

ちょうれん つと  
調練に努む。)

慶応3年に阿部氏が棚倉移封となるや、白河領城付6万石は幕府の直轄となり、民政は小名浜代官森孫三郎が掌り、城郭は二本松藩の管理に属したのである。

【p33】

白河城付6万石：白河領10万石のうち、飛び領4万石を除く。

⇒ [\[脚注\] 小名浜代官 森孫三郎](#)

小名浜（太平洋沿岸）の代官所が白河民政を担当するのは遠隔の感があるが、陸奥国の幕府領の支配はどうなっていたのだろうか？

白河町の戯れ句に「とどのつまりは棚倉藩」というのがある。これは当時、白河から棚倉へという大名の移封コースがあり、棚倉への移封は「左遷」とみなされ揶揄されたものである。阿部家は名誉挽回のためにも、白河への再封を願ったのだろう。



## 第8章 白河口の戦争

閏4月23日、奥羽同盟成り、福島に軍事局を置いて仙将坂英力さかえりきこれを督し、いよいよ奥羽軍は西軍と戦うことに決し、会藩もまたこれに加盟した。

白河城が会藩の奪うところとなったと聞こえた西軍は、閏4月21日大田原おおたわらを発し塩崎しおのさき・油井ゆい・関谷せきやの東軍を撃破して、24日芦野あしのに宿した。東軍の間諜かんちようがこれを知り、鈴木作右衛門・木村熊之進むらむねのしん・小池周吾こいしゅうご・野田進等の会将等は戦略を定め、白坂口しらさかへは新選組隊頭山口次郎やまぐちじらうを先手とし、遊撃隊遠山伊右衛門ゆうげきえんざんいゑもんがこれに次ぎ、棚倉口たなぐらへは純義隊長小池周吾じゆんぎしゅうご、原方街道はらかたへは青龍隊長鈴木作右衛門せいりゆうしゅうごがこれに当たって西軍の来るを待った。

25日暁天ぎやうてん、西軍来たって白坂口を攻めたので山口次郎・遠山伊右衛門等は隊兵を指揮して戦った。

大平口おおだいらの会藩部将日向茂太郎むしやうひなたは進んで米村よねむらに在り、砲声を聞き急に進んで白坂口の横合よこあいから西軍に当たった。砲兵隊長樋口久吉ひぐちひさよしは白河九番町くばんちようより進んで戦った。棚倉口より小池周吾、原方より鈴木作右衛門が進撃、義集隊今泉伝之助いみづみづのすけ・井口源吾等が歩兵を率いて戦った。西軍は皮籠原かわごはらに散開さんかいして猛烈に東軍を衝いたがついに三面より包囲され、西軍参謀伊地知正治いぢちせいぢ（薩藩）はその不利なるを知り、兵を収めて芦野に退いた。

東軍は勝ちに乗じて、追うて境明神さかいみょうじんに至る。この日の戦い、払暁ふつぎようより日中にわたり激戦数刻、ほとんど間断なかった。

今に有名に語り伝えられているのは、この日の戦いに薩長大垣13人の首級しゅきゅうを大手門おおももんに梟きようしたことである。会藩はこの日士気おおいに振るった。

本道ほんどうからの西軍は、小丸山こまるやま・老久保おいのくぼ・与惣小屋よそうごや方面より寄り来た。13人は本隊よりはるか先に出で、白坂街道脇の用水堀ようすいに沿え九番町口東軍の本壘ほんらいに迫って、石橋下いそに潜み、稲荷山いなりやまなる東軍を狙撃し多くの死傷者を出した。ついに東軍に捕らえられて斬首ざんしゅされた。

[p33]

同盟の軍事局： 福島ふくしまの長楽寺ちやうらくじ（現福島市舟場町）に設置された。いわば大本営であるが、作戦・指揮が統合されたわけではなく、各藩軍の寄り合いが実態だった。

閏4月15日、東山道総督府は白河口進討願を提出したが、大総督府は却下した。西軍の芦野・白河進出は伊地知参謀の独断。

大田原： 栃木県大田原市。  
芦野： 栃木県那須郡那須町芦野。奥州街道芦野宿。

間諜： 秘かに敵情をさぐる者。スパイ。

鈴木作右衛門： ~1890。会津藩青龍士中一番隊隊長。

木村熊之進： 1820~1868。会津藩軍事奉行添役。恭順を主張したが容れられず。5月1日白河の戦いで負傷し自害した。49歳。

⇒ [脚注] 小池周吾

⇒ [脚注] 野田進

山口次郎： 新選組斎藤一の変名。

遊撃隊： ここでは会津藩の部隊の名称。

遠山伊右衛門： 会津藩。遊撃隊隊長。6月12日和田山で戦死。58歳。

原方街道： 原街道ともいう。奥州街道の西を貫通併行してる脇街道。国道4号とほぼ重なる。白河西方の那須山地裾野が「原方」

青龍隊： 会津藩の主力隊。36歳~49歳までの武士で編成。隊員約900名。

日向茂太郎： 会津藩朱雀足軽一番隊隊長。5月1日戦死。31歳原書「樋口久吾」→訳「久吉」『会津戊辰戦史』などで「久吉」。義集隊： 会津藩。隊長は辰野源左衛門。

今泉伝之助： 七番小隊頭とも。『白河口の戦い殉難者名簿』には名前なし。

井口源吾： 小隊頭。6月12日「警城棚倉阿武隈川百間土手戦死」。41歳。『白河口の戦い殉難者名簿』に「猪口源吾（別撰隊）鹿島口で戦死。41歳」とあるが？

皮籠原： 白坂宿の北（現白河市白坂皮籠あたり）の平地。

大垣： 大垣藩兵のこと。

大手門： 白河城の正門。中町にあった。付録『目で見える戊辰白河口戦争の記録』参照。

本道： 奥州街道のこと。

小丸山・老久保・与惣小屋： 皮籠からさらに北の丘陵北麓の字⇒付録『白河口戦争の地名地図』で確認のこと。

梟首： 昔の極刑獄門。首をさらしものにする。

白河なかもち中町棚瀬利助翁曰く

13人の梟首きようしゅは、大手門で、四寸割の板よんすんわりに五寸釘ごすんくぎを打ちつけてそ

れに梟<sup>きょう</sup>した。町々から「それ西軍の首を取った」といって、見に行く者が多く、大手門は黒山を築いた。戦慄<sup>せんりつ</sup>しながらよく見た。首級<sup>しゅきゅう</sup>に各藩の木札が付けてあったように記憶している。

『維新戦役実歴談』という書がある。これは長藩士の戊辰戦争の実歴談<sup>へん</sup>を編<sup>へん</sup>したもので、大正6年の出版である。同書中の男爵梨羽時起<sup>なしはときおき</sup>の談に

25日には僅<sup>わず</sup>かの人数であった。薩州の四番隊と、吾輩<sup>わがはい</sup>の二番中隊の小隊と、原田良八<sup>はらだりょうはち</sup>の小隊それだけで行って、その他の兵は<sup>おおたわら</sup>大田原に残っていたように覚えている。白河のおよそ10町ほど手前に出ると、いつでも魁<sup>さきがけ</sup>をするものが10人ばかりで先手<sup>さきて</sup>の方でやっている小銃の音が聞こえる。敵は木や畳で白河の入り口に台場<sup>だいば</sup>を築いて小銃の筒を揃えて出ている。それでなかなか進まなかった。その入り口というのは、双方<sup>そうほう</sup>が水田<sup>すいでん</sup>で細い暇手道<sup>なわてみち</sup>で並木がある。敵は向こうの低い山<sup>たたまだいば</sup>に畳台場<sup>たたみだいば</sup>を立派に拵<sup>こしら</sup>えて暇手道<sup>なわてみち</sup>へドンドン打ち出すから進めなかった。そのうちに左の方の後の方へ回られて打ち出された。どうしても行かれぬので手前の山のところに戻った。ところで先に行った14、5人のものはズット台場の下まで行って戦った。その中の半分は殺された。

このとき殺されたのは鹿児島<sup>くろばね</sup>の者と長州の者と半々と覚えている。河村さんは右裏の方へ四番隊のうち幾人かを連れて、黒羽藩を案内として行ったが道<sup>みち</sup>が分からぬので戻って来た。この日は怪我<sup>けが</sup>が多かった。戦いの終わったのは昼ごろであった。芦野<sup>あしの</sup>まで戻った。河村さんも一緒であった。

ぜんたい25日には、伊地知<sup>いぢち</sup>さんは今日は僅<sup>わず</sup>かの人数であるから無理だというたが、河村さんがヤレヤレと言い出してやったものだ。

それから5月朔日<sup>さくじつ</sup>に白河城<sup>ま</sup>を取ったのは人数を増して行ったからだ云々<sup>うんぬん</sup>。

【p35】

白坂街道： 白河町南端の九番町関門から見て、南方の白坂宿から来る奥州街道を指すと思われる。小丸山から稲荷山・九番町関門までは大沼田の中の一木道で、脇道は無かったと思われる。

本塁： 本格的に構築した防塁

稲荷山： 南方から来た奥州街道は稲荷山という小丘の裾を回り込んで九番町関門に入っていた。稲荷山にも東軍陣地が設営されていた。

四寸割の板： 4寸は約12cm。幅4寸に製材した板材。

五寸釘： 5寸は約15cm。長さ5寸の大きめの釘。

梨羽時起： 1850～1928。長州藩士。戊辰戦争で小隊長。日清戦争で赤城艦長。日露戦争で第1戦隊司令官。海軍中将。

薩摩四番隊： 薩摩藩小銃隊四番隊。隊長は川村与十郎純義。総員約120名の編成（戦兵80名、中隊規模）。

二番中隊の小隊： 長州藩の1個小隊。小隊長は梨羽。30～40名か？

原田良八： 長州藩小隊長。不詳。

この実歴談によると、大田原・芦野に進出した西軍（約250名）が全動員されたのではなく、限られた兵数（小隊×4程度および案内役の黒羽藩士）のみの攻撃だったことになる。戦闘員としては150名未満？

10町： 1kmあまり。

魁： 先駆け。攻撃の先頭に立つこと。

先手： 軍勢の先鋒、前衛。

台場： ここでは防塁・胸壁の意味。

暇手道： なわて道。田の間の道。あぜ道。ここでは大沼田の中の一木道である奥州街道のこと。

向こうの低い山： 稲荷山を指す。

左の方の後の方へ回られて： 会津藩日向隊の横撃と思われる。

手前の山： 小丸山の丘列。

河村さん： 薩摩藩川村与十郎  
黒羽藩： 藩庁は黒羽陣屋（現在の栃木県大田原市前田）。藩主：大関家。那須七党の一つ。1万8000石。外様の小藩ながら幕末には15代大関増裕が海軍奉行や若年寄など幕府要職を歴任し、藩政では作新館を開校してスペンサー銃の標準装備など兵装の洋式化を行ない軍改革を進めた。

伊地知さん： 大田原・芦野に進出した西軍の指揮官である伊地知正治参謀。

5月朔日： 陰暦の5月1日。太陽暦では6月20日。

## 第9章 5月朔日の大激戦

5月朔日の白河口の激戦は、我が国の戦史上での激戦の一つである。

東軍は25日の勝報を得て白河城に兵数を増した。仙台藩の大番頭坂本大炊・佐藤宮内・瀬上主膳が到り、一柳四郎左衛門もまた到る。棚倉藩平田弾右衛門も兵を率いてこれに会したので東軍の勢は頓に振るった。

『復古記』によれば

閏四月十八日、奥羽鎮撫総督府参謀世良修蔵、参謀伊地知正治に移牒して白河城の急を報じ援を乞ふ。正治乃ち薩・長・大垣・忍四藩の兵を率ゐて来援す。

また25日の記に、

参謀伊地知正治、薩・長・大垣・忍四藩の兵を督して白河城に迫る。賊嶮に拠って抗拒す、官軍克たず、芦野に退守す。

また27日の記に、

参謀伊地知正治、薩・長・大垣・忍四藩の兵を督して芦野に次し、将に薩・長・大垣三藩の兵の宇都宮に在るものを合し大挙して白河城を攻めんとす、因つて土佐・彦根二藩の今市駅及び日光山にある者を分ちて宇都宮を守らしむ。

西軍の25日の敗報が江戸に達して因州・備前・大村・柳川・佐土原の兵が来援することになり、芦野の西軍は宇都宮よりの増援を得てその数、700余人、砲7門をもって白河に迫ることとなる。

閏4月29日、西軍来襲の報あり、これに対して東軍は遠山伊右衛門・鈴木作右衛門・小池周吾・小森一貫斎の会将、瀬上主膳の仙将、棚倉の平田弾右衛門等が兵をもって桜町方面を守った。

白河口方面には井口源吾・杉田兵庫・新選組山口次郎等が向かった。

原方方面は日向茂太郎が長坂山の麓に壘を築き、井深右近がこれに

【p38】

閏4月20日の白河城奪取から25日の勝利まで、白河の東軍は会津藩2隊ほどと純義隊、新選組だった。その後、会津藩東正面総司令官たる家老西郷頼母、副司令官横山主税等が兵3中隊と1小隊を率いて入城した。また奥羽越列藩同盟の成立をうけて、仙台藩の主将参謀坂本大炊以下2大隊(8小隊)と砲6門、棚倉藩重臣阿部内膳以下1大隊(砲を有す)が加わった。

坂本大炊：1823~1868。仙台藩参政兼参謀。京都で新政府から錦旗を下賜され、仙台へ運んだ。5月1日古天神山前で戦死。45歳  
佐藤宮内：仙台藩大番頭。1000石。明治8年6月死去。55歳  
一柳四郎左衛門：会津藩400石。朱雀寄合一番中隊頭。5月1日の戦いで戦死。46歳。

原書「伊知地」→訳「伊地知」

大垣藩：岐阜県大垣市。戸田家。10万石。

忍藩：埼玉県行田市。松平(奥平)家。10万石。

来援す：世良参謀の求めに応じて、伊地知軍(西軍)が芦野まで進出したことを指す。

前記の25日の戦闘のこと。賊軍(東軍)が要害を根拠地にして防戦したため、官軍(西軍)が撃退されたとしている。

原書「督くおして」と読ませている。押して(強行)の意味で、「おして」と読ませた？

伊地知軍(西軍)は宇都宮に居た部隊も合わせて、芦野に再集結した。宇都宮の守備は今市・日光に居た部隊を移動させて当てた。宇都宮に移動した土佐藩兵は板垣退助の指揮である。

彦根藩：滋賀県彦根市。井伊家。25万石。

今市駅：栃木県今市市。

因州藩：鳥取藩。鳥取県鳥取市。池田家。32万5千石。

備前藩：岡山藩。岡山県岡山市。池田家。31万5千石。

大村藩：長崎県大村市。大村家。2万7千900石。

柳川藩：福岡県柳川市。立花家。10万9千600石。

佐土原藩：宮崎県佐土原町。島津家。3万石。(現在の宮崎県宮崎市佐土原町)

原書「作左衛門」だが、「左」は「右」の誤記と思われる。

鈴木【清子書込】平作(関ヤ)

桜町：白河市桜町。白河市街の東のはずれ。

小森一貫斎：1815~1871。会津藩江戸詰、公用人。朱雀土中一番隊隊長。戦後拘禁中病死。

加わって、その兵数は合わせて2千余人、砲8門であった。(日向茂太郎は5月朔日、<sup>よねむら</sup>米村に戦死。)

いよいよ5月朔日午前4時、西軍は3道より白河城に迫る。その1は薩・長・大垣の兵、砲2門をもって黒川村より原方街道に迫った。

<sup>はらかた</sup>原方方面のこの西軍の案内役を勤めたのは上黒川村の問屋内山<sup>かみくろかわ</sup>忠之右衛門<sup>といやうちやま</sup>であった。5月18日に至って会津藩は忠之右衛門宅に押し入り、これを捕らえて会津に連れ行き入牢せしめ、8月22日に斬首せりと伝う。忠之右衛門は時に年42歳。墓所は西郷村大字<sup>にしごう</sup>小田倉<sup>おだくら</sup>字<sup>びぜん</sup>備前<sup>さいし</sup>にある。のち、官より祭祀料<sup>かし</sup>150両下賜。

その2は本道を進んだ薩・長・大垣・忍4藩の兵である。その3は白坂村より大平八郎を案内として南湖<sup>なんこ</sup>の南<sup>い</sup>に出で桜町<sup>さくらまち</sup>方面<sup>たなぐら</sup>、棚倉街道に出た。かくして東西両軍の大激戦となったものである。(5月朔日の東西両軍の砲数について大山元帥伝に、東軍は会2門、仙6門、棚倉2門。西軍は本道4門、黒川方面3門、桜町1門とある。)

## 維新史料に云う

<sup>うるう</sup>閏四月二十八日、白河城を攻むるの議<sup>ぎ</sup>ありしかど、果<sup>はた</sup>さず。五月朔日午前四時を進発の期とし、兵を三道に分ち、薩の二番隊・四番隊は、白河の南湖<sup>なんこ</sup>をめぐる棚倉街道に進み、三番隊・大垣一小隊は本道より進み、五番隊並に大垣・長州・各一小隊は白坂<sup>しらさか</sup>より左の方黒川村に進み、それより原方へ出づ。此の時本道已に戦<sup>たたかい</sup>を始む。是れ即ち最初の約束にして、敵をして本街道に力を用ゐしめ、左右の翼各々敵の背後<sup>おのおの</sup>に至らば、火を揚げて以て一時に攻撃を始むるものとし、其の距離棚倉街道第一なるを以て同所に火を揚ぐるを期とす。已にして煙炎天を蔽ふ、仍て進んで大に奮激す。敵兵三面に敵を受け、防戦二時間余、猶砲台によりて守禦す、官軍進んで砲台に迫る。賊遂に潰走す。先<sup>ついで</sup>は我が三番隊は迂回して長坂山の賊を追撃し、四番隊と合し、町口の台場を横撃す。於<sup>これに</sup>は賊兵大に潰乱す。仍て又一小队を二分し、本街道の後山に登り背後を断ち四方一時に攻撃す。賊兵狼狽し進退途<sup>みち</sup>を失す。此の日、首級六百八十二なり。四斤半の旋条砲を鹵獲

[p40]

杉田兵庫： 会津藩 1000石。青龍足軽一番隊隊長。

日向茂太郎： 会津藩 300石。朱雀足軽一番隊隊長。5月1日戦死。31歳。

長坂山： 西郷村長坂の北の山罌： 土罌による陣地。

井深右近： 会津藩軍目付。

黒川： 西郷村小田倉黒川西あたり。白河城から西南へ約7km。

訳者は内山忠之右衛門の孫の孫の子と聞いている。

忠之右衛門一・一サダ(和知菊之助妻)一キク(富田仁助妻)一富田喜一郎(糸井清子弟)一悦哉(訳者)

→ [【内山忠之右衛門のこと】](#)

→ 付録『目で見る戊辰白河口戦争の記録』【d55 農民内山忠之右衛門の墓(西郷村黒川)】

西軍の迂回包囲攻撃

その1： (白坂から西方へ迂回) → 黒川村 → 原方街道 → 立石山(白河市街の西)

その2： (白坂から奥州街道本道を進む) → 小丸山 → 稲荷山 → 九番町(白河市街の南)

その3： (白坂から東方へ迂回) → 夏梨 → 合戦坂 → 雷神山・桜町(白河市街の東)

→ 『戊辰白河口戦争記地図インデックス』

→ [【5月1日西軍の白河包囲攻撃図】](#)

両軍の配置は『戊辰役戦史』の推定によると

東軍：

(1)白河市街の西、立石山陣地に、会津2隊と砲2門。

(2)奥州街道正面、稲荷山陣地に、仙台3小队と砲6門。会津3隊。棚倉半大隊。旧幕新選組ほか。

(3)白河市街の東、桜町関門、雷神山などに、会津2隊。仙台5隊。棚倉半大隊。旧幕純義隊。

(推定総数 2500~2600名)

西軍：

(1)原方へ迂回して白河市街の西から、薩摩五番隊(2小队)と砲2門。長州3小队。大垣2小队と火箭砲1門。

(2)奥州街道正面、小丸山陣地に、砲兵团(薩摩2門、長州1門、忍1門、20ドイム白砲1門、砲護兵1分隊)。長州1小队。大垣2小队。

(3)夏梨・合戦坂へ迂回して白河市街の東から、薩摩二番・四番隊(2小队×2)と携帯白砲1門。(総数約700名)

「三番隊」： 薩摩三番隊は上野戦争に参加した後に白河口に派遣されたはず。この箇所、『復古外記』では「二番砲隊・御兵具隊」。

す。これ嘗て米国の贈る所、当時、我が国僅に二門を有す。これその一なり。

## 元帥公爵大山巖伝には

五月一日

敵軍は其兵力優勢にして、仙台・会津・棚倉・旧幕兵等約三千に達するに拘らず、白河南側に陣地を構築して官軍を待てり。

第一次戦闘後、官軍は増加隊を得て、其数七百余に達し、三方面より白河を包圍攻撃せんとす。

右翼隊は棚倉街道方面を迂回し、敵の左翼及び其側面に出づ、その兵力薩二・四番隊・臼砲一。

中央隊は正面に於て陽攻し敵を牽制す。兵力薩砲二門・臼砲

打手・兵具隊。大垣二隊、長原田小隊砲一門、忍藩砲一門。

左翼は黒川方面より原街道に出で、敵の右翼を包圍攻撃す。兵力薩五番隊・二番隊・砲隊二門、長一中隊と一小隊。大垣二隊・

火箭砲一門。忍一小隊。

払暁、予定の如く諸隊前進し、午前六時頃中央隊先づ砲火を開きしに、敵全く正面に牽制せられ、しばしば出撃せんとす。此間、両翼隊の包圍全く成り、三方より敵を攻撃し、午後二時に至り之を潰滅す。

諸隊は白河を占領し、隊伍を整頓し其地に宿営す。官軍の死傷約七十。敵は死屍六百余を残し、本街道並に諸間道より散乱退却し、会兵は遠く勢至堂付近に、仙兵は二本松に退却す。爾後、官軍は同地に滞在して前進せず。

これが西軍の記事である。

## 南湖公園鏡山にある阿部藩の碑に

五月朔日、官軍圍攻、城兵禦之、奮激戦闘自晨至午。雷轟電撃殺傷相当、而衆寡不敵、守兵弾尽刀折、城遂陥。乃退守金山。

## 白河町九番町口にある会藩の碑に

白河城当奥羽之咽喉、為主客必争之地。我兵先扼之。閏四月二十五日、薩摩・長門・忍・大垣之兵來攻、相戰半日、我兵大勝。四藩の兵退保芦野。五月

【p42】

火を揚げて：烽火（のろし）を上げて。

已にして：計画のとおりいよいよ。

「我が三番隊は」「四番隊と合し」：この箇所『復古外記』では「三番分隊」「四番分隊」とあり、五番隊の分隊を指すと思われる。

町口の台場：白河市街西側の守備である立石山陣地。

四斤半施条砲：火薬の薬量が四斤半（1斤は160匁）の前装式施条山砲。信管のついた榴弾等を使用。人の殺傷を主眼とする。射程約千メートル。棚倉藩が保有していたもの。

大山巖：1842～1916。大山弥助巖。薩摩藩二番砲兵隊長。のち元帥陸軍大将。妻は会津藩の山川捨松。栃木県那須に別荘・農場を持った。

東軍は圧倒的兵数で地形に拠った守備をしたのであるから、難攻不落のほずであった。西軍は少数であるから「包圍」というよりは奇襲である。その装備と戦意戦術が東軍を上回ったのである。

第一次戦闘：閏4月25日の戦いを指す。

陽攻：敵に真の目的を見抜かれないために仕掛ける、目くらましの、はでな攻撃。

臼砲：砲身は文字どおり臼のような形で、丸く太い。前装式丸玉砲。玉はあらかじめ、赤熱に焼いた丸玉を使用。破壊と火災による攻撃を主眼とする。

原田小隊：長州藩。前出の原田良八指揮か。

火箭砲：大垣藩が使用。軍艦等の信号に用いた火箭や弾丸を発射する。口径2～3センチの小さな前装砲。

『戊辰役戦史』によれば西軍の白坂出發は右翼隊が午前4時、左翼隊が6時、中央隊が8時（あるいは予定より早く6時）である。最初の衝突は、奥州街道途中の皮籠において、西軍中央隊と東軍斥候の間のこと。

隊伍：兵士の組織された集団。また、そのきちんと並んだ組・列。隊列。戦闘の後、部隊人員を確認したという意味。

勢至堂：会津領境の一つ勢至堂峠の南東側の村。会津軍が拠点とした。福島県須賀川市勢至堂。

薩摩四番隊のみは、阿武隈川対岸の白河北方、大谷地まで東軍を追撃して戻ったという。

圍攻：包圍攻撃。

晨（しん）：夜明け。早朝。

午（ご）：午（うま）の刻。昼正前後。

さくじつ また しらさか はらかた はたのしょどう さんりんのかんどうより ぜんはいを  
朔日、復自白坂・原方・畑諸道及山林間道来攻、欲三  
もってそそがんと ほっし そのほうはなはだえい  
以雪前敗、其鋒甚鋭。我将西郷頼母・横山主税各率二  
すうひやくをひきい せんだい たなぐらへいによし ともにこれに あたる う よりごに いたる  
兵数百、与仙台・棚倉兵、共当之。自卯至午、  
奮戦数十百合、火飛電激、山崩地裂、而我兵弾尽刀折、三百  
よにんこれ しす またおおくししょう しろうつにおつ  
余人死之。仙台・棚倉兵亦多死傷、城遂陥。

## 白河戦争報告記に

(この記は白河本町庄屋川瀬才一が明治3年8月27日に白河県へ  
戌辰の戦況を報告した記録である。川瀬庄屋は弾丸雨注の中を侵し  
て見聞したと言われているから実記と見るべきものであろう。)

五月朔日卯の上刻、官軍勢五百人、九番町木戸外まで宵の間に潜  
み、彼所に潜みかくれ、夜の明を待ちて打出でたる砲声の烈しさ  
人目を驚かす。此度は東京口・米村口・原方口・棚倉口を官兵方  
は四方より討入候故、会藩の手配案に相違し大に周章し、棚倉  
口の固、第一に破れ候故、挟撃ならんと心付候哉、桜町・  
向寺町に放火して引退く有様、東西に廢れ南北に走る、其の混乱  
蜘蛛の子を散らすが如し。東京口・米村口・原方口一度に破ら  
れ、人数引上げの時登町に放火す。如此四方共に破れ惣崩と  
なり候故、其の日の死亡六百八十三人。

この日の戦いに会藩の副総督横山主税は稲荷山に奮戦中弾丸に当た  
って殞れた。戦い猛烈にして遺骸を収めて退くに違なく、従者の  
板倉和泉わずかに首を誅して退いたという。

(会津史談会誌に柴大将の談として「白河で戦死された、家老横山  
主税殿の葬式行列は殿様の行列にも見ない奴振りなどが出て、立派  
なものであった」と、記してある。)

軍事奉行の海老名衛門などは龍興寺の後山で血戦し、為すべからざ  
るを知って自ら腹を屠って死んだ。

寄合組中隊頭一柳四郎左衛門等も死し、混戦状態となるや、総督  
西郷頼母が馬を馳せて叱咤、衆を激励するも潰乱制すべからず。頼  
母は決死に進んで敵を衝かんとす。朱雀一番士中隊小隊頭飯沼時衛  
が轡を把って諫めて曰く、総督の死する時にあらず、退いて後図を  
計れと。頼母聞かず、時衛すなわち馬首を北にして鞭って向寺の  
方面に走らす。頼母はついに勢至堂に退く。

棚倉藩の将阿部内膳は桜町口を守ったいわゆる十六人組の勇将であ

【p44】

金山(かねやま)：白河市表郷  
金山。白河市街から南東への棚倉  
街道の途中。

奥羽之咽喉：奥羽地方への入  
口であり、要所である。

主客必争之地：攻める側も守  
る側も必ず手に入れなければなら  
ない地。

雪ぐく(そそぐ)：不名誉や汚名  
を、名誉・功績によって消し去る  
鋒(ほう)：刃物の先端。軍隊  
の勢い。攻撃の激しさ。

西郷頼母：1830~1903。会津  
藩松平家の家老を代々務める家  
柄。会津城から脱出して箱館まで  
戦う。晩年は神社神職など。

横山主税：1847~1868。会津  
藩江戸家老横山常德の子。1866年  
パリ万国博開催時に徳川昭武に随  
行し渡欧。5月1日戦死22歳。

与すくよす)：仲間となる。力  
を合わせる。

卯(う)：卯の刻。夜明け頃。

川瀬才一『白河戦争見聞略記』

白河県：1869年(明治2年)8  
月に設置。1871年(明治4年)11  
月、二本松県に編入。のち福島県  
に編入。

弾丸雨注：弾丸が雨が注ぐよ  
うに飛び交う。

卯の上刻：午前5時より5時  
40分の間。

この「九番町木戸外まで夜のう  
ちに潜行していた」というのは西  
軍の記録には無いようで、奇襲攻  
撃を受けた東軍の混乱ぶりを反映  
しているものか？

棚倉口の固：棚倉の方向(南  
東方)にあたる雷神山・合戦坂方  
面の防衛線。

挟撃ならんと心付け候や：は  
さみ撃ちになってしまうと思った  
のだろう、守備陣が一気に崩壊し  
た。

向寺：白河市街から奥州街道  
により北へ阿武隈川を渡った対岸  
にある集落。

人数：兵員。軍勢。

登町：白河市街の西端。立石  
山陣地のある側。

首を誅す：首を切断する。主  
税の首だけを収容して退却した。

柴大将：柴五郎陸軍大将。  
1860~1945。会津戦争の籠城戦前に祖  
母・母・兄嫁・姉妹は自刃した。

奴振り：武家の供揃えに由来  
する民俗芸能の一種で、大名行列  
に従う奴(やつこ)が行なう独特  
の所作を指す。

海老名衛門：海老名季久。会  
津藩軍事奉行250石。海老名季昌  
の父。5月1日戦死52歳。

龍興寺：白河市向新蔵。俗称  
「山の寺」

ったが、奮戦負傷し金勝寺方面に避難しついに殞れた。(金勝寺に避難する時、白河中町の商人 58 歳の小崎直助が力を添えて阿武隈川を越したという美談が今に伝わっている。小崎直助は白河町の旧家であり、阿部様出入りの商人である関係上、この拳に出でたものであろう。)

【p46】

後山： うしろやま。背後の山。裏山。龍興寺の後山は白河市白井掛下にあたると思われる。  
腹を屠る： 腹を切り裂く。切腹する。

朱雀隊： 会津藩主力隊で、18歳～35歳の武士で編成。隊員約1200名。最も勇敢に戦い会津開城までに大方が戦死。

会津藩の部隊編成は、朱雀・青龍・白虎・玄武という年齢分けに加えて、士中・寄合・足軽という身分分けもあった。たとえば、朱雀士中一番隊と朱雀寄合一番隊は別の隊である。

飯沼時衛： 白虎隊生存者の飯沼貞吉(貞雄)の父。

後図： 後々のためのはかりごと。再起の計画。

阿部内膳： 生年不明。阿部正熙(まさひろ)。棚倉藩御者頭400石。阿部右近正修の子。阿部姓なので藩主の一族か？ 刀槍甲冑で武装した「十六人組(十六ささげ)」を率いて戦う。5月1日桜町口で戦死。

御者頭： 物頭。弓・鉄砲などを備えた足軽組の頭(指揮者)。

金勝寺： 白河市金勝寺。白河市街会津町の阿武隈川対岸。

俚謡： 民間で歌い伝えた歌。俗謡。民謡。

細谷十太夫： 1845～1907。細谷十太夫直英(なおひで)。仙台藩の偵察方(隠密)として諸藩の情報収集に当たった。のち日清戦争従軍等を経て、僧となり仙台龍雲院の住職。

博徒： 賭博を業とする者を意味するが、より広義に無宿・無法者を指す。

衝撃隊： 慶応4年5月15日編成。博徒・農民等57名で5小隊からなる民兵義勇軍。黒い服装で、ゲリラ戦を展開。あまり工夫が無い東軍の中にあって、西軍正規兵に対しては最も効果的な戦術であったか？

小田川： 白河市小田川。白河城から奥州街道を北東へ約6km。

宝積寺： 宝積院。白河市小田川行屋久保。

本営： 指揮官がいる陣営。

地方の人： 地元の人。

鶴生： 西白河郡西郷村鶴生。白河城から西北へ約8.5km。

戎衣： 戦争に出る時の衣服。甲冑。

左のごとし： 原書・復刻版は縦書き、訳は横書きなので「下」とすべきところ。他箇所も同様。

十六人組で戦死したのは阿部内膳のみ？ 他の15人は『白河口の戦い殉難者名簿』に名前無し。

「仙台からすに十六ささげ、なけりや官軍高枕」

という俚謡が当時歌われた。

「仙台からす」とは仙台藩の細谷十太夫の率いた一隊で、須賀川地方の博徒100余人を募り衝撃隊と称し、神出鬼没、夜襲が巧みでしばしば西軍を苦しめたもので、黒い布で覆面し黒装束をして戦いに参加したもので烏組の名がある。小田川村の宝積寺などが本営になっていたものだと地方の人は話している。西郷村の鶴生にも烏組が居って出沒し、西軍を苦しめたとの話が残っている。十太夫はつねに部下に言う。「敵は銃隊であり、遠きに利あり、吾は銃を執らず、刀を抜いて進むゆえに近きに利あり。一二人斃るも意とするなかれ、先ず敵を衝け」と。西軍は烏組に苦しめらる、これは5月朔日のみでなく、その後にも西軍を辟易せしめたのであった。

「十六ささげ」とは、白河地方で栽培する大角豆の一種である。

棚倉藩十六人組を指す。棚倉十六人組は洋式の軍装によらず、我が国古来の戎衣兵器を用い、甲冑に身を固め槍・弓矢での装束であったという。

(棚倉藩決死十六人組の氏名左のごとし。)

阿部内膳

有田大助

大輪準之助

北部史

志村四郎

川上直記

梅原弥五郎

須子国太郎

宮崎伊助

鶴見瀧蔵

宮田熊太郎

湯川賢次郎

岡部鏡蔵

村社勘蔵

野村絢

山岡金次郎

(有田大助は幕末の風雲に際し緩急に備うるため、文久2年白河田町の刀鍛冶固山宗俊に託して刃渡り2尺6寸5分の名刀を用意した。この名刀は現に西郷村の鈴木市太郎氏が所有している。この種の用意は当時の武士には多かつたことであろう。)

5月朔日天いまだ明けぬに、西軍が鼓譟して路を分かつて迫り来る。仙台藩の参謀坂本大炊は天神山に上ってこれを望む。時に西軍は山に抛り、水に沿うて要路を扼していた。大炊は先頭に立って命を下して突進し、敵を横合いから衝いて西軍を辟易せしめたが、大炊が紫旗を林端に立つと飛弾雨注した。従者が避くことを勧めたが肯んじない。決死の士15、6人と阿武隈川を徒渉して進んだが銃丸に頭を貫かれその場に斃れた。僕の庄太夫これを背負うて逃れしも途に絶命し、今村鷲之助が代わって屍を担うて陣中に至ったので、遺骸をようやく仙台に送るを得たりという。これが坂本参謀の白河口奮戦談である。

さきに世良参謀を福島に暗殺するの計をなした仙台藩姉齒武之進の勇戦談もある。武之進は仙台藩五番大隊の軍監として瀬上主膳に属し白河に出陣し、奮戦するも仙軍利あらず退却の時、独り頑として動かず、敗残の兵を指揮し自ら大砲を放ち、抜刀躍進したが、弾丸しきりに至り流丸に当たって斃れた。これも5月朔日のことである。

今に地方に伝わる5月朔日の戦いについての翁媪の談を記してみる。

白河鍛冶町小黑萬吉翁の談

西軍で強いのは薩長、東軍で強いのは会津であった。戊辰の戦いは会兵と薩長兵の戦いであると言ってもよい。西軍は戦争は上手であったようだ。兵器も西軍の方が新兵器を多く使った。また薩藩は1人でも2人でも、銃の声を聞くと吾先に進んだ。5月朔日の戦いの日、八竜神に水車屋を業とし居た亀屋栴吉の妻が分娩後5日なので、八竜神の土橋下に避難していた。通りかかった西軍の士が、赤児に勝軍太郎と名つけて、曰く「官

【p48】

文久： 元号。万延の後、元治の前。1861年から1864年まで。

田町： 白河市田町。奥州街道が白河市街を出て阿武隈川を北へ渡る手前。

刃渡り2尺6寸5分： 刀の刃がついた部分の長さ約80cm。江戸時代(平時)の帯刀は2尺3寸(約70cm)が標準だったから、実戦を意識して長めの作りということになる。

鼓譟(こそう)： 太鼓を打ち、ときの声をあげる。

天神山： 古天神山のこと。

【清子書込】現中央公民館あり  
「天神山」と「古天神山」がある。

天神山： 白河市天神町の西の突き当りにある高台で、天神社が祀られている。白河中央公民館あり。

古天神山(ふるてんじんやま)： 白河北真舟にあった丘。堀川に面す。現在は用地造成のため消滅している。立石山と並んで東軍の白河西側の防衛線。

要路を扼す： 交通の要点を占拠する。

辟易： 勢いや困難におされて、しりごみすること。

紫旗： 仙台藩の勝色(濃紺)に金丸の旗。

肯んじない： 聞き入れない。

坂本大炊の戦死： 5月1日は仙台藩は桜町関門(白河市街東端)の守備についた。復刻版付録『幕末・維新人物100人』によると大炊は「桜町関門で奮闘」とある。しかし原書や『白河口の戦い殉難者名簿』では「古天神山前(白河市街西側)で戦死」とする。すると桜町から古天神山まで転戦して、あげく阿武隈川岸で弾丸が頭部貫通して死んだということか？

途に絶命： 絶命は大炊か？庄太夫か？『白河口の戦い殉難者名簿』に庄太夫の名は無し。

今村鷲之助： 仙台藩物頭。世良修蔵の首級を白石本營の家老但木土佐に届けた。今村均陸軍大将の祖父。

姉齒武之進の戦死： 仙台藩の将として桜町関門を守った。ついで白河城内へ転戦したところで戦死。

八竜神： 白河市八竜神。白河南東方の棚倉口から合戦坂を越えたところ。桜町関門の手前。



軍は町人や婦人には手は掛けぬ安心せよ」と。今に伝えて美談としている。

### 白河年貢町石倉サダ媼の談

(媼は当時 16 歳。)

5 月朔日、官軍は九番町、桜町方面から攻めて来た。会津様は敗れて血まみれになって町に逃げ込む。町の人達は老を扶け幼を負うて皆横町から向寺道を逃げたものだ。そのさまは大川の水が流れるようであった。うしろを振り向く暇などあったものでない。躓くものなら倒れる。その狼狽さは何というてよいかと譬えようがない。今でも思い出すとゾットする。私達は向寺から根田・本沼を通過して船田村の芳賀の親戚に身を託した。

### 白河二番町の後藤みよ媼の談

私が 24 歳の年だった。閏 4 月 20 日に二本松様が白河城を守っていたところに、会津様が道場小路から攻め入った。小峰寺の住職が鐘を撞いたので会津様に狙いうちされた。二本松様は根田の方に退いて、会津様が白河城に入った。

5 月朔日には子供 2 人を連れて内松村の叔母の所に避難した。5 月朔日の戦争の跡を見ようとして白河に来た時、九番町の所で大男の屍が路傍に横たわっているのを見たが惨酷なものであった。内松を引きあげて白河に帰って来たのは 7 月末ごろと覚えている。5 月朔日の日はジクジクと雨の降る日であった。

### 白河町熊本藤三郎翁の談

私が 21 歳の年が戦争の年だ。白河城は空き城で、仙台様は町固め、平様は市中回り、三春様は木戸見張りの役であった。

4 月 20 日に会津様が道場町から入って城を取った。

4 月 25 日、西軍と東軍との最初の戦いで西軍が敗れた。4 月 27 日には戦いはない。5 月朔日には大戦争があった。私は 4 月 29 日に棚倉に買物に行き留守をなし、その帰りは 5 月朔日、金屋町法雲寺の住職と上野出島で出会った。住職曰く、「大戦争である、白河に帰ってはならぬ」と。そこで私は桜岡の英助の家に行き、翌 5 月 2 日、家に帰った。2 日には勝負が決して、いたって穏やかであった。

(翁の談によって 4 月 27 日には戦争がなかったことがはっきりする。27 日に戦いがあったようにも伝えられるのは誤りである。)

[p50]

水車屋： 水車を動力として製粉などの作業をするのか？ または水車を製造・修理するのか？ 白河の谷津田川に沿って水車が設けられ諸作業に利用されていたようである。

石倉【清子書込】薬屋

媼： 老女

向寺道を逃げた： 桜町→年貢町→(北へ折れて)横町→田町→阿武隈川の橋→向寺。

奥州街道は向寺からさらに北へ→女石→根田→小田川→矢吹→須賀川→郡山→本宮へと至る。

または根田から東へ高橋川に沿って→久田野→本沼→関和久→石川へと至る。

船田村： 白河市舟田。白河城から東へ約 6 km。

芳賀： 船田村の字か？ 親戚の名字か？

後藤【清子書込】薬屋

内松村： 白河市表郷内松。白河城から南へ約 7.5 km。

7 月末ごろ： 『戊辰役戦史』でも白河地方最後の戦闘は 7 月 28 日と記録されている。

慶応 4 年 5 月 1 日は、太陽暦では 6 月 20 日にあたる。梅雨期である。

このくだり、「4 月」というのはみな「閏 4 月」の意味である。

道場町： 白河市道場町。白河市街の西側端にあたる。

金屋町： 白河市金屋町。白河市街のうち。

法雲寺： 金谷町にあったが明治初年廃寺となり、年貢町龍蔵寺併合。跡地には大正 2 年建立の虚空蔵堂がある。

上野出島： 白河市東上野出島。白河城から東へ約 13 km。

桜岡： 白河市大桜岡。白河城から東へ約 2.8 km。

「閏 4 月 27 日の戦闘」を伝える記録は知らず。『戊辰役戦史』によると 27 日に西軍部隊が白坂まで前進しているが、戦闘は記録されていない。

【p51】

小針【清子書込】大正5年菊之助庄屋宅（キク生家）売買実行（360円）

小針ヨネ一成子

屯所： 兵士などが詰めている所。陣所。

下新田： 西郷村豊作東あたり。白河城から西南へ約2.5km。

観音様： 豊作東の南西角に子安観音堂あり。

立石： 立石山（比高40mほど）および麓の集落。白河城から西南へ約1.6km。東軍が防備陣地を設けた。

日向大将： 会津藩朱雀足軽一番隊長の日向茂太郎のことと思われる。

中山： 白河市中山。立石山からさらに西方約1kmにある小丘。米村から南へ約1km。

原書「激撃」→訳「邀撃」

中山あたりの戦いについて、『広報にしごう1978年4月号』の記事「戌辰こぼれ話」には、こんな話が載っている。

「下新田観音社に陣していた官軍は中山を占領し、米村にある会津軍を攻撃するために、今しも出陣せんとするところであった。その時、そこを黒川の庄屋内山忠之右衛門が通りかかった。急を察した忠之右衛門は米村から会津軍に知らせたのだが、その時、兵たちは遊妓を相手の遊宴中で、出兵容易にできず、数刻を要したので官軍はずでに中山に陣した後であった。そうとは知らぬ会津軍大将日向対馬はとりあえず陣笠、陣羽織をまとい、鞍馬をかつて間の原にやってきた。その時、山上より一斉の発砲、不意をつかれた大将は兵を指揮するどころか真先に馬にムチ打ち逃れたので兵もまた終始狼ばい、なすことを知らず米村本陣にむかって先を競い敗走す、という。さらに官軍の追撃に米村を退却するのだが、その時羽鳥村大平にて忠之右衛門を斬首すと伝えられる（後日にらちすともいう）」この話は戦史と整合しないようなのだが、内山忠之右衛門が東軍にも西軍にも通じていた消息を伝えるものかもしれない。

天保銭：江戸幕府为天保年間に作った楕円形の銅銭。明治24年まで流通。貨幣価値は100文とされたが、実際には80文で通用した。

堀川： 那須連峰赤面山東側から東流し、下流で原方街道に沿って北流し、西郷村米の東端で阿武隈川に合流する。

谷津田川の土橋で斬首⇒目でみる戌辰白河口戦争の記録【谷津田川に架かる円明寺橋、新橋】

## 西白河郡西郷村大字米の小針利七翁の談

戦争の年は15歳であったが、よく戦争は判っている。

5月朔日、米村に戦いがあった。当時米村は40戸であった。皆会津様の宿をした。

400人からの屯所であった。私の家には10人も泊まっていた。米村は会津最前であって何とかして会津様を勝たせたいと祈ったものだ。官軍は下新田の観音様付近に大砲2門を据えてドーン、ドーンとうった。会津様は立石に陣を取った。

いよいよ米村の会津様が出発する。日向大将（日向大将は米村の兼子大庄屋に居られた。）は陣羽織を着て、中山に官軍を邀撃せんと指揮したが、官軍に狙撃されて死し、ために会兵の士気衰え、米の南の田や堀を越えて米部落に引き揚げた。

この戦いに会兵の一人が米の南で弾丸で腹を貫かれて斃れた。

天保銭13枚所持していた。

仙台様は堀川の西南、古天神を守ったが破られて金勝寺に退いた。立石稲荷の前では会兵が13人も討死した。

この日に生捕りになった東軍は、翌日に白河の新蔵の土橋や円明寺の土橋の所で斬られ、胴も頭も谷津田川に捨てられた。

今円明寺の橋の袖にある南無阿弥陀仏の碑は、この供養のために後人の建てたものである。

## 白河七番町青木やす媼の談

私は13歳。

戦争となると馬に乗せられて、小田川村の芳賀須知の親の里に避難した。毎日親が迎えに来るのを待っていた。15日も経って白河に戻ると、また戦争となり此度は黒川の親戚に行った。芳賀須知では他所からも避難者が集まって、各戸人がいっぱいであった。戦争というものは本当にオッカネアものであった。白河に帰って見ると家は官軍様に占領されていて、私達は板小屋に寝起きしていた。官軍様は服を着ていた。七番町の錠屋では炊き出しをした。

## 白河町七番町の柳沼巳之吉翁の談

私は12歳。

親は家に居たが、婦人や子供は在の方へ移った。武士は農夫には構わなかった。

おおひら  
大平八郎が案内しなければ白河は破れなかった、大平の案内で  
さくらまち  
桜町が破れ、それで九番町口も破れた。会津様が大平八郎を怨  
むのもわけがあることである。

さくらまち  
白河町 桜町 渡部泰次郎翁の談

5月朔日の戦いに東軍の士で十六、七歳の者6人生捕りとなって  
さくらまち がいじょう  
桜町の街上市に至ると、「首を取るから首を差しのべよ」となっ  
た。6人の者はいずれも覚悟して西に向かって手を合わせ立派に  
ざんしゆ たらこうじ えのき  
斬首されたという。その遺骸は町の人が寺小路の榎の下に葬っ  
た。

みかみむら ひだかそうのじょう  
著者が三神村酒井寅三郎氏に聞くに、海軍大将日高壯之丞閣下は  
白河口では白河町菖蒲沢で奮闘されたという。閣下は明治の晩年  
に数回にわたって矢吹の宮内省御猟場に来たり、酒井氏に泊まら  
れたのである。

5月朔日の東西両軍の兵数について、『復古記』所載の5月7日白河  
口諸軍への達書に

のつとり おおい ちょうい ぞくち ふる てきほう くじ さくいさん  
白河城乗取、大に朝威を賊地に振ひ、敵鋒を摧き、策違算なく、  
すこぶ と きんぜんようやく たえ ず てんい  
頗る愉快の勇戦を遂げ、実に欣然踊躍の至りに不堪、天威之  
しよい いえども ひとえ えんきゅうりきせんこう あ いかん  
所為と雖、偏に将士捐躬力戦功に非らずんば如何ぞ数倍の  
ぞくへい いちどき はいめつ うんぬん  
賊兵をして一時に敗滅せしめんや。云々。

また『復古記』白河口戦記に左の文がある。

是より先、会津兵・旧幕府逋竄の徒等、白河城を陥る。既にして  
東山道総督参謀伊地知正治薩・長・大垣・忍四藩の兵を督して之  
こくふく (五月朔日)。賊退いて仙台・会津・棚倉等諸路に分拠し  
もつ しょうろ やく また わか そなえ あいじ  
以て官軍の衝路を扼す。官軍亦兵を分ちて之に備へ、相峙して戦  
はざること殆ど二旬、此時に当り、仙台・二本松・棚倉・中村・  
三春・福島・守山等の兵前後賊軍に来り加はり、其の兵数凡そ四  
千五百人許に至る。而して官軍僅かに六百五十余人に過ぎず、  
しゅうかてき よ えん こう これ  
衆寡敵せず、因りて援を大総督に乞ふ。是に至り大総督府東山道  
あたら つい はっけん  
総督を更めて白河口総督となし、尋で応援兵を發遣す。

(会津藩の白河出兵数は約1500人か。)

【p53】

芳賀須知：小田川村の字。現代地図の表記は「芳賀須内」。白河城から北東へ約4.5km。

黒川：西郷村小田倉黒川西など。白河城から西北へ約7km。

オッカネア：「おっかねえ」。怖い。恐ろしい。

板小屋：母屋とは別の、板張り板葺きの物置小屋であろう。

服：ここでは「洋服」の意味  
錠屋：屋号か？七番町に「錠屋」あるが？

在：「在郷」の略。市街中心から離れた「いなか」。

渡部【清子書込】弥勒魚

→【戊辰役戦死之碑\_寺小路】

→目でみる戊辰白河口戦争の記録【d20\_「戊辰役戦死之碑」(寺小路)】

寺小路：白河市寺小路。白河城から南東へ約1.2km。

三神村：西白河郡矢吹町三城目など。白河城から東北へ約17km。

日高壯之丞：1848～1932。薩摩藩士宮内清之進の次男。日清戦争で「橋立」艦長として戦功。日露開戦前の常備艦隊司令長官。海軍大将。

菖蒲沢：白河市向新蔵の南に菖蒲沢という字あり。また、白坂と黒川の間に勝負沢という地名あり。

「白河城攻略のことは、朝敵の地であっておおいに朝威を知らしめることになった。敵の軍勢を破るにおいては、作戦計画のとおりとなり、痛快な勇戦が実行され、じつに喜びの極みである。天皇の威光による結果であることはもちろんであるが、ひとえに将兵の我が身をかえりみず力戦した功がなければ、どうして数倍の敵兵をいちどきに破ることができたであろうか」

朝威：朝廷(天皇の政府)の権威・威光。

欣然踊躍：跳ね踊るほど喜ぶ  
捐躬(えんきゅう)：身を捨てる。

「これより先に会津兵・旧幕府脱走兵等が白河城を占拠していた。しかしついに伊地知参謀が4藩の兵を指揮して、白河城を奪還した。敵は後退して仙台・会津・棚倉等諸方面に割拠して、官軍の進路を塞いだ。官軍は(白河の各所に)兵を配分して敵に備え、戦うことなく対峙して約20日にもなったが、そうするうち敵は奥羽同盟の兵を増加して、その数4500人ばかりにもなった。しかし官軍はわずかに650人余に過ぎない。」

5月19日、岩倉具定が東山道総督を免ぜられて奥羽征討白河口総督となり、同時に東山道副総督岩倉具経も奥羽征討白河口副総督となった。

5月朔日の激戦地帯は、九番町口・稲荷山を第一とし、白井掛・薬師山・龍興寺の裏山・蛇石・藤沢等白河市街の南方丘陵地で、市街戦はなかったらしい。(桜町方面に小戦があったという。今龍蔵寺境内にある仏像に弾痕あるを見る。この仏像はもと西蓮寺のものである。)

勝ち戦であった西軍の死骸は白河本町の長寿院に運ばれて回向をした。長寿院の住職は豪胆で寺を守っていたので、この寺に運ばれたものだと伝えられている。東軍は惜しむべし、その死骸はそのままに遺棄せられて田圃に山中にあるを里人達に葬られて香華を手向けられた。同情はもちろん東軍に注がれた。のちに至りそれぞれ寺小路や花見坂や八竜神等に合葬されて里人に供養塔をも建てられた。

九番町辺の民家には1軒に5人6人、白井文蔵氏の宅などには9人、その隣には13人も自尽されてあったと言う。これは東軍の壮烈を物語るものである。

### おおひら 大平八郎の間道案内

『鎮台日誌』第三に大平八郎の感状が載せられてある。文に云う

大平八郎  
白川復城之節、棚倉海道間道筋案内、且白坂宿人馬継立無滞  
致三周旋、前後骨折奇特之至に候。依而手銃一挺下賜候事。  
六月

官版の『鎮台日誌』に一農民が所載せられたことは荣誉とするところであった。彼も戦後、ときどき「鎮台日誌第三を見よ」と豪語したという。

しかし会藩から見れば「大平の案内がなかったら敗戦とはならぬ」と怨んだ。

明治3年8月11日、会津藩士田辺軍次のために白坂村鶴屋旅館に大平は殺されるに至った。大平を殺した田辺はその場で切腹した。田辺の墓は白坂村観音寺にあったが、のち白河九番町の会津藩碑の側に移された。観音寺にあった田辺の墓は、高さ1尺8寸、7寸角、「操刃容儀居士」とある碑で、大平八郎の子息にあたる者が供養の

【p55】

「この兵力差では対抗できないので、応援を大総督府に求めた。その結果大総督府は、東山道総督を白河口総督と改め、ついで応援の兵を派遣した。」

逋竄(ほざん)： 逃れかくれる

本訳では、奥羽征討「白河口」総督と表記する。

5月15日の上野彰義隊潰滅を受けて、19日西軍の改編があり、江戸に鎮台が置かれ、これまで東海道・東山道・北陸道それぞれへ独立的に派遣されていた総督を改め、白河口・越後口総督を大総督麾下とした。東山道先鋒総督兼鎮撫使を廃し、奥羽征討白河口総督とした。

→別表「西軍の総督参謀」

これは役割名称や指揮系統の改変であって、実際の白河への増兵は、23日黒羽藩兵旗宿到着。27日土佐藩兵白河到着。東海軍から転進の薩摩藩兵29日江戸発。

激戦地帯【清子書込】白井掛下(を追記)

薬師山： 白河市白井掛下。現在は造成されてしまっている？

→【脚注】龍興寺

龍蔵寺： 白河市年貢町。

西蓮寺： 白河市桜町にあった。明治初年に廃寺となった。

長寿院： 白河市本町北裏。

回向： 仏教用語。自分が行なった善をめぐらし翻して、他人をも悟りの方向にさしむけること。転じて仏事法要を営んで死者を追善すること。

香華を手向ける： 仏前に香と花を供えること。

→第19章 東西両軍の墓碑および供養塔

→目でみる戊辰白河口戦争の記録【d00 ■供養碑・墓】

花見坂： 白河市花見坂。松並稲荷山の西。

自尽： 自分の命を尽きさせること、つまり自殺。

「壮烈」とは言うが、つまりは戦闘で西軍に圧倒され、降伏もできず進退窮まって自尽したのである。東軍壊乱の悲惨を伝える。

間道： ちかみち。わきみち。ぬけみち。

『鎮台日誌』： 戊辰戦争期の官版日誌の一つで、東征軍関係のもの。『江城日誌』の後、『鎮将府日誌』の前。全12号。

鎮台： 明治の臨時軍政機関、鎮台府のこと。江戸鎮台府の設置は慶応4年5月19日。

感状： 戦功を称える賞状。

復城： 西軍が白河城を奪還したことを指す。

海道： 街道に同じ。

ために建てたもので、墓とともに松並の会津藩の側に移された。

閏4月29日の夜、大平八郎は薩摩四番隊長川村与十郎（純義）に面接し、白河城討入りの案内を託された。そこで白坂から五器洗を経て、夏梨・十文字に出で、搦目山の裏手にあたる金山街道の臺目橋にかかり、搦目山の石切山で白河討入りの合図の烽火をあげ、桜町方面から入って東軍を破った。地理不案内の西軍にとっては、この案内が大成功の基をなした。その功によって大平は二人扶持となり、ついで白坂町人馬継立取締役を仰せつかり非常な勢力を持つに至った。

白河町本町の遅澤信三郎氏所蔵記録に

大平八郎  
白坂順之助  
遅澤新左衛門  
当分白坂宿取締人馬継立云々  
辰九月  
白河口  
会計官

この記録によれば大平八郎のみが取締役ではなかったものであろう。

この方面の西軍の道筋は、夜のうちに石阿弥陀を通過して土武塚、八竜神に出でたとも伝えられていて、いく筋にも通ったものであろう。西郷村の和知菊之助翁の談によると石阿弥陀から池下に出たという。

白河金屋町の斎藤千代吉翁の談  
田辺軍次が白河から白坂さして行く、皮籠原の一里段の所にさしかかったとき、白坂から来た白河天神町の古物商大木某に出会った。軍次は何とかして大平を誘い出す工夫はないかと苦心していたときである。その日は雨が少し降っていた日なので、その商人に近づいて白坂方面の天気模様を尋ねた。  
大木は田辺のボロ袴を付け、莫産を着ている醜き姿であるのを侮り、会藩士とは心得ずに

【p57】

人馬継立滞りなく周旋： 西軍の物資運搬の人足・駄馬の手配を滞りなく行なったこと。

骨折り： 苦勞して、精を出して働くこと。

奇特の至り： たいへん感心である。よくやった。

手銃： 拳銃（ピストル）の意味か？ または「手持ち」という意味なら小銃か？

観音寺： 白河市白坂。

松並： 白河市松並。稻荷山の裾で、九番町への入口にあたる。

川村与十郎（純義）： 1836～1904。薩摩藩。長崎海軍伝習所一期生。明治政府の海軍整備に尽力も、政治の世界とは一線を画した。死後海軍大将昇進。

五器洗： 白河市白坂五器洗。近くに「御器洗」という字もある  
夏梨： 白河市夏梨。白河城から南東へ約4.1km。

原書「搦山」→訳「搦目山」

搦目山： 白河市大搦目山。阿武隈川南岸の感忠銘から藤野川北岸までの丘陵一帯の字名。

搦目山の石切山： どこか？

原書「烽火」→訳「烽火」

金山街道： 白河から表郷金山を経て棚倉へ至る。

白坂-五器洗-夏梨-十文字-臺目橋-搦目山-石切山-桜町  
⇒『戊辰白河口戦争記地図インデックス』[白河口戦争の地名地図](#)

二人扶持： 武士等の給与方法で、1人1日5合の食糧を標準（一人扶持と呼ぶ）として、1年間分を米や金で与える方法。

人馬継立取締役： 江戸時代には街道宿場の問屋場（といやば）において人馬継立・助郷賦課業務を行っていたが、明治政府は問屋場を「伝馬所」と改め、責任者を「取締役」（複数制）とした。

白坂-皮籠-石阿弥陀-池下-土武塚-八竜神

⇒『戊辰白河口戦争記地図インデックス』[白河口戦争の地名地図](#)

和知菊之助： 天神町・富田仁助の妻キクの父。訳者の曾祖父にあたる。

⇒ [脚注] 皮籠原

原書「一里壇」→訳「一里段」

一里段： 白河市白坂一里段。

白河-松並-小丸山-一里段-皮籠-白坂

⇒『戊辰白河口戦争記地図インデックス』[白河口戦争の地名地図](#)

原書「胡座」→訳「莫産」

莫産： イグサなど草茎を織って作られた敷物。ござむしろ。構造は畳表とほぼ同じ。

心得ず： 納得できない。理解できない。ここは「会津藩士とは気が付かずに、士分とも思わずに」

「何だかわからぬ」

と答えた。

「武士に向かって<sup>むたい</sup>無体をいうな、容赦はならぬ」

となる。

大木は恐れて白坂に引きかえし、大平を頼んで一命を請うことになって、当時会津藩の常宿であった鶴屋に詫びを入れる。

(この話はいろいろに伝わっている。千代吉翁は12歳、<sup>たたましよく</sup>豊職で父とともに鶴屋の<sup>たたまが</sup>豊替えをした年だという。)

【p58】

無体： 道理をわきまえず、強引に物事を行うこと。無法。ここでは「無礼」の意味。

大平を頼んで： 白坂宿の有力者である大平を仲裁者に頼んで一命を請う： 大木は、田辺の勢いに命の危険を感じた。この事件は明治3年8月。廃刀令は明治9年3月布告。

鶴屋に： 白坂宿の旅館「鶴屋」において。

この後の、田辺軍次による大平八郎殺害の顛末については、

⇒ [【田辺軍次の墓碑 稲荷山】](#)

⇒ [目でみる戊辰白河口戦争の記録【d03 「田辺軍次君之墓」旧会津藩土建立（稲荷山）】](#)

⇒ [目でみる戊辰白河口戦争の記録【d47 大平八郎の墓（白坂観音寺）】](#)

西軍の右翼隊を夏梨～合戦坂へ案内した大平八郎。左翼隊を原方街道～立石山へ案内した内山忠之右衛門。

大平八郎は明治3年に田辺軍次により殺害されたが、内山忠之右衛門は白河口戦争中に会津藩に捕らえられ斬首された。

⇒ [【内山忠之右衛門の道案内】](#)

⇒ [目でみる戊辰白河口戦争の記録【d55 農民内山忠之右衛門の墓（西郷村黒川）】](#)

### 内山忠之右衛門〈うちやま ちゅうえもん〉のこと

内山家は、会津産米を江戸へ回送する道筋（原方街道）で問屋〈といや〉を営み、小田倉村〈おだくらむら〉黒川（現在は西郷村の一部）の庄屋を務めた。

小田倉村は高冷地で実入も少ない貧しい村であり、かつ、白坂宿の助郷村として重い負担を強いられていた。

忠之右衛門は村内では比較的富裕であったかもしれないが、庄屋というのは支配者と村民の間に立つ苦労役であって、ときに困窮者の支援も自腹で行なったり、年貢を取りまとめ完納に苦心する役割であった。

西軍が忠之右衛門に接触したのは、閏4月25日の攻撃失敗の後と思われる。道案内せよとの命令を拒否すれば命の危険があり、忠之右衛門に否応の選択はなかっただろう。しかも「年貢半減」と言われれば、貧しい村の庄屋としては、期待せざるをえなかった。小田倉村は慶応3年から幕領であったから、その支配は新政府が引き継ぐものとも思われた。

そして忠之右衛門等が間道を案内したことにより、西軍は5月1日の戦いに大勝を得たのだが、忠之右衛門にとって不運だったのは、西軍が勝ち取ったのは白河城下と奥州街道沿いの限られた地域だったことである。小田倉村をはじめ、白河周囲の村々はなお東軍の勢力下に残された。

言い伝えによると、忠之右衛門は会津軍に対して西軍の動向を報告もしたという。忠之右衛門としては西軍とも東軍とも上手く距離をおいて、戦乱から村を守りたいという気持ちだったのだろう。しかしそれは考えが甘かった。会津藩は自軍の勢力下の農民が利敵行為を働いたことを見逃さなかった。忠之右衛門とは会津産米を回送する問屋業という関係もあったから、なおさら「裏切られた」という憤慨も生じたであろう。5月18日、忠之右衛門は会津軍によって拉致・拘禁される。

その後の戦局に伴い会津軍は西方へ駆逐され、忠之右衛門も会津軍の根拠地である大平〈おおだいら〉（羽鳥の西）へ連行されていた。

そして8月21日、西軍によって母成峠の守備が突破され、翌々日には会津若松城下に西軍が殺到した。

この敗報を三代・勢至堂口の会津軍が受けて、会津若松へ向け後退したのは23日と考えられる。23日には三斗小屋（那須岳西方）でも西軍（黒羽藩）の進攻があった。それらの近傍である大平の会津軍の退却については経過不詳だが、24日には東山温泉において勢至堂退却隊と合流している。

忠之右衛門が斬首されたのは8月22日と伝えられるが、だとすると母成峠の敗報がもたらされる直前のタイミングであり、たまたま虜囚を「一斉処分」したのか。会津軍は直後に会津若松へ向けて退却することになるので、「会津軍に妻が呼び出される」時間的余裕はない。あるいは処刑はもっと早い時期に行なわれたのかもしれないし、または妻は会津軍に呼び出されたのではなく、会津軍の撤退後に忠之右衛門の消息を求めて首級を発見したのかもしれない。どうであれ「並んでいる首級の中から夫の首を持ち帰った」という体験は凄惨である。

記者は忠之右衛門の子孫ということもあり、このような忠之右衛門の運命には特別の感慨がある。とにかく戊辰戦争白河口の戦いが、東軍対西軍とか勝者敗者という単純なものではなく、多くの人々のかけがえのない生きざまが刻印され、現代まで脈々と繋がる出来事であった、ということは強調しておきたい。

## 第10章 西軍白河に滞在

5月朔日の大戦に西軍は全く白河城を回復し、白河市中に入る。

(白河城は前述のごとく、奥羽鎮撫使世良修蔵在城、二本松藩および三春藩これを守る。しかるに閏4月18日世良参謀が去るにおよんで、会津藩は白河城を取り、5月朔日には西軍が白河城を回復したのである。)

西軍は5月の初めから7月ころにかけて白河に滞在したものである。

本町の芳賀本陣は病院に当てられた。皇徳寺も病院であった。銃丸の傷は竹製の水鉄砲で焼酎消毒をして荒縄で治療したという。当時の小銃丸は今日のものとは違って、直径1センチ4ミリないし1センチ5ミリ、長さ2センチ7ミリないし3センチもある鉛玉いわゆる椎の実玉であるから、荒縄で治療したことも首肯される。(当時、尖頭弾丸を椎の実玉といった。)

白河登町の大島久六氏宅には後の大山元帥(当時、弥助)、天神町の菱屋には後の野津元帥が宿泊した。野津元帥は時に病に罹り菱屋飯田すいに世話になりたるを徳とし、元帥になられてからも同家に音信がしばしばあった。先年元帥の女婿上原勇作閣下が来白、須釜嘉平太氏に一泊の時、専念寺の菱屋の墓に詣で、義父の旧恩を謝された。

(今、南湖神社に奉納されてある上原閣下揮毫の「里仁為美」の額はすいの妹にあたる大谷せいの奉納である。大山元帥は砲兵隊長として九番町口を攻め、5月朔日後は白河二番町酒屋大島久六方に滞在と同元帥伝にも見えている。)

本町の佐久間平三郎氏宅は当時油製造を業としてあった関係上、イゴ煎釜が長州藩の兵糧部に利用されたという。(イゴとは荏胡麻のことで、油を搾る原料である。)大工町の吉成房次郎氏宅には薩藩の軍楽隊が滞在した。同氏の母堂かね媼はわずかに6歳であったが、今に太鼓の形や、笛の音を記憶していると語る。同氏には、「薩州四番隊金穀方」と書いた大箱が保存されている。大きさは幅1尺4寸、深さ2尺、長さ3尺で、松材の五分板作りで左右に紐通しがある。

本陣：大名など身分の高い者の宿泊所。大名行列も本来は行軍ゆえに、宿泊所を本陣と称する。宿駅の名望家が経営。白河宿の本陣である芳賀家は、町年寄・検断を勤めていた。

皇徳寺：白河市大工町。

荒縄：太いわらの縄。腕などの大きく裂けた傷口を荒縄で括って固定したものが。

⇒【脚注】大山巖

野津道貫：1841～1908。薩摩藩士。六番隊長。日清戦争の第一軍司令官。日露戦争の第四軍司令官。元帥陸軍大将、教育総監など。

上原勇作：1856～1933。渡仏後、工兵の近代化に貢献。元帥陸軍大将。陸軍大臣、教育総監、参謀総長など。長州閥元老凋落の後に陸軍に君臨し、強力な軍閥(上原閥)を築き上げた。

専念寺：白河市横町。

「里仁為美」：論語の一節。さらに古語であるとも。里は仁なるを美(よし)と為す(土地柄の良さは親切思いやりのある人々が住んでいることによる)。白河の気風を愛でて言葉を選んだのであろう。

二番町【清子書込】現富田・安田一带

佐久間宅【清子書込】現亀平吉成【清子書込】今井伊八娘

金穀方：金品を調達して戦闘部隊を支援した、軍の事務方。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【b40 薩州四番隊附金穀方の軍用箱】

五分板：厚さ5分の板材。5分は1寸の半分の長さ。約1.5センチ。

ねんぐまち  
年貢町の大槻佐兵衛氏宅は大垣藩の本陣であったので、戦後も長く大垣藩士との間に音信があった。

松井幸太郎氏の父の宅は当時松並の権兵衛稻荷の前にあり、薩藩の宿舎であった。薩藩が白河を立てて会津に向かう時、永らくお世話になった形見にと陣羽織の裏地を置いて行かれた。今に同家に保存されて戊辰戦争の記念物となっている。その裏地は呉紹地で猩<sup>ごろうじ</sup>猩<sup>しやうじやう</sup>が画かれてある。

てんじんまち  
天神町の今井清吉氏には、官軍御用の木札がある。表に「官軍御用」と記し、裏に官軍の2字が烙印されてある。材は杉、形は長方形で幅3寸、長さ9寸、厚さ4分、これは西軍が貨物に刺してその所有を明らかにしたのであろう。



なかまち  
中町の荒井治右衛門氏には弾薬を入れた器物の蓋<sup>ふた</sup>が残されてある。1尺1寸くらいの矩形である。黒地に朱漆で「丸に十の字」がある。薩藩の遺品である。

てんじんまち  
天神町の藤田氏の記録に西軍の身支度を記して

官軍の身支度は賊軍とは大に異り、隊長及び卒・人夫に至るまで身軽にして、単衣着に白木綿のヒコキ帯を締め、刀一本落差にして羽織・袴等を着用せるものなく、小具足等は尚更無<sup>な</sup>之<sup>の</sup>。  
うんぬん  
云々

西軍の服装については長寿院の什物として保存されている当時の薩・長・大垣・土・佐土原・館林の諸藩の忠死者100余人を描いた総髪姿の絵が最もよく説明している。

白河地方に今も残されている服装談は、西軍は膝きりの単衣、中にはツツポダンブクロ、坊主頭、銃は元込め。阿部様は陣笠で袴を着けた、概して和洋折衷の服装であったという。

町内の商売は、子供や婦女子は方に避難したが、各戸相当に商いをしていたものである。年貢町の大谷鶴吉氏では味噌が売れたといい、二番町の八田部萬平氏などでは酒屋であったが、戦争が始まると酒は売れぬが、戦争が止むと売れたものだという。

[p60]

大垣藩： 美濃国大垣。10万石。藩庁は大垣城（現在の岐阜県大垣市郭町）。藩主：戸田家。鳥羽伏見の戦いでいったんは朝敵とされたが、謝罪して東山道軍の先鋒となった。

権兵衛稻荷： 白河市松並。稻荷山にある。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【b39 薩藩が宿舎とした家に贈った陣羽織の裏地】

呉紹地： ゴロフクリン (grofgrein)。舶来の羊毛織物の一種。江戸中期から、明治初年にかけて、イギリス、オランダなどから輸入、カッパ地、帯地などに用いた。

幅3寸： 約9cm。  
長さ9寸： 約27cm。  
厚さ4分： 約1.2cm。

1尺1寸： 約33cm。  
丸に十の字： 薩摩藩島津家の家紋。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【b23 板垣退助】 土佐藩迅衝隊〈じんしょうたい〉の服装が見て取れる。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【b31 錦旗を先頭に進む西軍図】

東軍の将は戦闘時に派手な陣羽織を着用していたため、狙撃的になったという。

小具足： 甲冑のうち、おもな鎧・兜・袖以外の部分。籠手や脛当など。

館林藩： 群馬県館林市。秋元家。6万石。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【b38 慶応戊辰官軍戦死肖像掛軸】

膝きり： 「膝丈」の意味かと思うが、これはコートの方か？

ツツポ： 筒袖の上着。

ダンブクロ： ズボン。

坊主頭： 断髪ていごで、丸刈りではなかったと思われるが？

阿部様： 棚倉藩の将兵。

在方： 白河町の郊外。

【清書書込】 八田部才助西郷初代村長（産馬）



5月6日に、白河町問屋常盤彦之助が薩藩に殺された。白河町の常盤は、「阿部の常盤か、常盤の阿部か」と呼ばれるほどの勢力を有したもので、徳川時代において住山・大塚・芳賀の旧家とともに白河町年寄を勤めかつ問屋で、地方道中取締の要職にあった。

### 白河年貢町の石倉サダ媪の談

常盤の旦那が殺されたのは5月6日であった。

中町の常盤の旦那の家には、大森町年寄や、夫の林蔵や、新宅常盤が居合わせていた。真夜中に薩摩藩士2人が来て、旦那を「用事あるによって」と連れ出し、松坂屋横町、今の中町から手代町に通る横町にかかると、旦那を2人の間に挟んで、後から斬殺した。すなわち暗殺であった。旦那の首は大手前広小路に梟された。

かねてから常盤家に別懇であった大工町の井筒屋の主人が、旦那の首をその場から関川寺に持ち行き、胴とともに火葬にして埋めた。井筒屋の主人の罪は問われなかった。旦那の伴をした長吉はすぐにこの暗殺の由を常盤家に知らせると大騒ぎとなった。夫の林蔵はこれを久田野に避難していた奥様に知らせた。これから常盤家は勢至堂に避難した。戦争も止んだ10月になって常盤家では空棺で葬儀を行なった。

ついでに白坂村の大庄屋・本陣で問屋を兼ねた白坂市之助暗殺の事を記そう。市之助は江戸の御家人であるが、白河町年寄大森家の養子となり、白坂宿の白坂家を嗣いだものである。閏4月25日、西軍のために呼び出され白坂宿の町はずれで殺された。

【p63】

常盤【清子書込】孫和子、由太郎→娘（尾崎タケノ）

問屋〈といや〉：藩から問屋役を任命され、宿駅で助郷の人馬の差配や年貢・商品などの輸送業務を司る。問屋場には人足と馬を常備して人馬の継ぎ立てにあたる。

町年寄：町村の住民の長として命ぜられた宿役人で、藩の法令等の下達や宿駅業務全般を支配する。

新宅常盤：常盤の分家か？

松坂屋横町：白河市中町の国道294号線から手代町・市役所の方へ抜ける横道。現在も横町入口近くに「KK松坂屋ビル」あり。

大手前広小路：白河城大手門の前は広小路（広場）になっていた。⇒[目でみる戊辰白河口戦争の記録【a01 白河城大手門と広小路図】](#)

別懇：特に懇意なこと。

関川寺：白河市愛宕町。

久田野：白河市久田野。白河城から東へ約4.3km。

勢至堂：福島県須賀川市勢至堂。白河城から北へ約22km。勢至堂峠への手前。

大庄屋：藩から任命され、苗字帯刀を許される格式。一村の長として村の戸籍・地方・訴訟・貢租などを受け持つ庄屋を、数人から数十人支配した。

⇒【脚注】本書に登場する大庄屋

御家人：徳川將軍家の御目見〈おめみえ〉以下の直參家臣を「御家人」と称した。御目見以上は「旗本」。

閏4月25日は、西軍が白坂から白河へ向けて攻撃を仕掛けて、東軍に撃退された日である。白坂市之助暗殺は、この西軍侵攻と関連がある事件なのだろうか。

常盤彦之助も白坂市之助も、町村の要職を勤め、阿部家による白河支配体制下にある人間であるように見える。西軍の探索によって「敵側に内通する恐れあり」と判断されたうえでの暗殺だったろうが、「見せしめ」の意味合いも大きかったと思われる。

## 第11章 輪王寺宮奥羽に下り給う

りんのおうじのみやこうげんほうしんのう のち きたしらかわのみやよしひさ  
輪王寺宮公現法親王、後の北白川宮能久親王は、5月15日に彰義隊  
が上野の戦いで敗れると、宮は寛永寺を御出立になられ、幕府の軍  
艦長鯨丸にお乗り遊ばされて奥州に落ち延びになられた。

5月28日、常陸の平潟に御上陸。奥羽同盟の磐城の各藩重臣は色を  
正して宮を迎え奉った。宮の平潟御上陸の御扮装は浅黄色の法衣  
を召された。平潟甘露寺村の慈眼院で緋の衣に替えられ、網笠にて  
御顔を隠し給う。従僧としては彼の豪傑、寛永寺の別当覚王院義観  
である。つねに宮の御側を離れなかった。

5月28日、本多能登守の泉館に御一泊、御供30人、本多家より  
御見送の士100人、正午泉藩を御発駕。平飯野八幡神社領、高月台  
の社司飯野盛容邸に入らせ給う。

翌6月1日には平藩主安藤家から700両、飯野氏より100両の献金  
があつてこれを御用途に充てられた。

かく磐城三藩の御警護によって宮は上市萱村庄屋阿部宅に御泊のう  
え、小野新町に御着。神保・大越を御通過、熊耳街道から三春に  
御着。時に6月2日。三春藩主秋田萬之助後見秋田主税出でて  
奉迎、龍穩院に御泊。

3日、土棚を経て本宮に御着。4日、中山峠を越えさせ給いて、5日  
猪苗代御着。6日若松御着。御滞在。6月18日、若松御発。松原の  
陰を越えさせられて20日米沢御着。27日米沢御発。29日白石城  
御着。7月2日仙台に入らせ給う。時に御年22歳。

宮は令旨を奥羽の諸藩に下して薩長の罪を算えられ、君側の姦を払  
うべしとの事となった。諸藩は相謀って親王を推して軍事総督と仰  
いだ。7月12日白石城に御出陣せられ、仙台藩が警護の任に当た  
る。ここにおいて朝廷は断然伊達・上杉の官位を奪った。宮の令旨  
は奥羽軍の士気を振寄せた。

仙台藩記に云う

七月二日、輪王宮、会津若松より仙台に転輿。城北仙岳院へ  
入輿。慶邦父子及び重臣其他奥羽列藩の家老共に至るまで面謁  
す。

【p64】

法親王： 男子皇族が出家して僧籍に入った後に親王宣下を受けた場合の身位・称号。

公現法親王（能久親王）： 1847～1895。伏見宮邦家親王の第9王子。仁孝天皇の猶子となる。慶応3年（1867年）5月、江戸に下つて輪王寺宮を継承。慶応4年3月、東征大総督を駿府に訪ね、東征中止を嘆願するもかなわず。彰義隊は徳川將軍家靈廟守護を名目に、寛永寺を拠点として輪王寺宮を擁立した。法親王自身の考えはどのようなものであったのか？

江戸上野の寛永寺は、京都の鬼門（北東）を守る比叡山に對して、「東の比叡山」という意味で山号を「東叡山（とうえいざん）」とした。また寛永寺は増上寺とともに徳川家の菩提寺となった。3世以降は代々皇子が貫主「輪王寺宮」となり、日光山主・天台座主を兼ね、絶大な宗教的權威をもっていた。

このような形で東国に皇族を常駐させることで、西国で皇室を戴いて倒幕勢力が決起した際には、関東では輪王寺宮を擁立することで徳川家が「朝敵」となることを避ける企図であるという説もある。とすれば、それが幕末に至って起動したということになるが？

幕府の軍艦長鯨丸： 輪王寺宮の江戸脱出を榎本武揚が援助したものである。しかし榎本は輪王寺宮に對して、天皇として擁立されないようにと忠告している。

常陸の平潟： 茨城県北茨木市平潟。

磐城： のちに国名となったが、この時点では浜通り一帯の地域名と考えるべきか。

浅黄色： 薄い黄色。浅葱（あさぎ）色（薄い藍色）とは別。

覚王院義観： 1823～1869。寛永寺別当。对新政府の強硬派であった。戊辰戦後、罪状確定前に病死した。47歳。

泉館： 泉藩の藩庁である泉陣屋。いわき市泉町。

正午泉藩を： 何日のことか？

飯野八幡神社： いわき市平八幡小路。飯野八幡宮。

高月台： いわき市平高月。

平潟－甘露寺村－泉館－高月台－上市萱村－小野新町－神保－大越－熊耳街道－三春－龍穩院－土棚－本宮－中山峠－猪苗代－会津若松－松原－米沢－白石－仙台  
⇒白河口戦争の地名地図

令旨： 皇后・皇太后・皇太子その他皇族方の命令を記した文書  
原書「褌ったくうばった」→訳「奪った」と表記。

## また仙台藩記云う

七月十二日奥羽列藩家老共会議のうえ、日光宮を促し<sup>うなが</sup>軍事総督と称し、守衛の兵隊を付属し、刈田郡白石城<sup>かった しろいし</sup>まで出陣、各藩軍議す。

このころ白石城には各藩の重臣が出席していた。棚倉藩からは西村吉太夫等が出席している。

7月15日には棚倉藩老侯<sup>ほうしん</sup>葆真公が白石城に到って法親王<sup>えつ</sup>に謁している。

【p66】

輪王宮： 「寺」が脱字？引用部分のため、このままとした。

転輿、入輿： 輿は貴人の乗り物。転じて、貴人の移動を意味する。

仙岳院： 宮城県仙台市青葉区東照宮。

慶邦父子： 仙台藩主父子。

面謁： 貴人に会うこと。お目にかかること。拝謁。

日光宮： 輪王寺宮のこと。日光山主を兼ねていた。江戸時代には日光寺社群を総称して日光山と呼んだが、明治時代の神仏分離令により輪王寺の山号となった。

刈田郡： 当時、白石は刈田郡に属す。現在は宮城県白石市。

軍事総督： 輪王寺宮は、奥羽越列藩同盟の「盟主」に就任した。輪王寺宮自身も「会稽の恥辱を雪ぎ、速に仏敵朝敵退治せんと欲す」と述べるなど、新政府軍に対して反感を持っていたという。しかし出家の身であるために軍事面では指導できないと固辞したため、仙台藩主・伊達慶邦、米沢藩主・上杉齊憲が「総督」となった。奥羽越公議府は輪王寺宮のいる白石に置かれ、軍事局（大本営）は福島に置かれた。

輪王寺宮を「東武皇帝」あるいは「東武天皇」として推戴したという説があるが、還俗・即位などの痕跡は見られないため、皇族の権威をもって「賊軍」になることを回避したいという期待に止まるものと思われる。

葆真公： 棚倉藩主。阿部正外の隠居名。

## 第12章 東西相峙す二句

東軍は、5月4日に須賀川で奥羽列藩の会議を開いて各藩の部署を定めた。

上小屋方面へは会藩の総督西郷頼母・高橋権太夫・木本内蔵之丞・野田進・杉田兵庫・坂平三郎等の諸隊が陣し、上田八郎右衛門・小池帯刀等は大平方面を固めて羽太村を本営とした。

本道には仙藩の将増田歴治、二本松藩の丹羽丹波、会藩の辰野源左衛門等が矢吹に陣した。

会將の小森一貫齋・木村兵庫および相馬・棚倉の兵は金山方面の守備に当たった。

愛宕山・八幡台に守兵を出し、勿石・二枚橋の要地に衛兵を置き、金山・七曲には壘を築き、夜は山々に篝火を焚き、西軍の隙もあらばたちまち襲わんとする勢いであった。

西軍もまた白河に在りて防御の策を施し、四方に番兵を出し、持ち場を定めて東軍に備えた。

本道・黒川口は薩兵。旗宿口・石川口は長兵・忍兵。湯本口・大谷地口・根田口および白坂口は大垣兵。おのおの昼夜を厭わず番兵を出し、いっぽう大総督府に加兵を乞うた。

閏4月より5月にかけての西軍の指揮は東山道先鋒であったが、東山道先鋒総督岩倉具定は奥羽征討白河口総督となり、同副総督岩倉具経は奥羽征討白河口副総督となって西軍を指揮することになった。(具定は具視の二男、具経は八千代丸と書いて具視の三男である。)

西軍のその局に当たったものは公卿と武士で、九条・澤・醍醐・岩倉・鷲尾等は公卿で、西郷・伊地知・板垣・世良・大山・渡邊等は武士であった。

5月21日に七曲の戦いがあった。(七曲とは小田川村の泉田から小田川に越す所の地名である。)この頃の戦いに仙藩のいわゆる烏組が細谷十太夫指揮の下に67人ことごとく抜刀して西軍を潰走せしめた勇壮な話は今に伝わっている。

5月25日、東軍白河に迫り、大田川・小田川・本沼等に小戦があった。東軍の小田川に集まるもの100余人、薩・長・大垣の兵がこれ

[p67]

須賀川： 福島県須賀川市。白河城から北東へ約22km。

上小屋： 白河市大信隈戸上小屋。白河城から北へ約4.6km。

高橋権太夫： 会津藩、猪苗代城代、砲兵二番隊頭。

木本内蔵之丞： 会津藩、青龍一番士中隊中隊頭。鶴ヶ城攻防戦で、慶応4年8月28日死亡38歳

⇒ [脚注] 野田進

⇒ [脚注] 杉田兵庫

坂平三郎： 会津藩、誠志隊頭  
上田八郎右衛門： 会津藩、朱雀士中三番隊長。上田の家族は9月17日に泰雲寺で自刃した。

小池帯刀： 会津藩士130石。京都守護役ののち、江戸に残留して武器弾薬を会津へ送る。戊辰戦争では工兵隊長。戦後しばらく逃亡していたが、捕縛斬首された。

⇒ [脚注] 大平

羽太村： 西白河郡西郷村羽太。阿武隈川の上流部一帯。白河城から北西へ、上羽太まで約7.5km。上真名子まで約14.8km。

本道には： 奥州街道筋については、矢吹に陣した。西白河郡矢吹町。白河城から東北へ約13.4km

増田歴治繁幸： 仙台藩400石、参政。のち若年寄として戦後処理にあたる。明治29年71歳歿  
丹羽丹波： 二本松藩。家老座上、3600石。

辰野源左衛門： 会津藩義集隊・歩兵隊長。

⇒ [脚注] 小森一貫齋

木村兵庫： 会津藩、青龍寄合一番隊長。慶応4年6月24日、棚倉・郷戸の戦いで負傷。8月23日、治療中の自宅にて家族8人と自刃。39歳。

金山： 白河市表郷金山。金山街道筋。白河城から南東約11km

愛宕山： 白河近郊には、白坂・小田川・久田野・表郷金山・大信増見に愛宕山あり。ここでは小田川または久田野の愛宕山か？

八幡台： 夏梨八幡山〈はちまんやま〉。または表郷八幡〈やわた〉あたりの丘陵地か？

勿石： 白河市豊地羽根石。白河城から北へ約3km。会津街道の刳石峠。

二枚橋： 白河市小田川二枚橋。勿石からさらに北へ約1km。

七曲： 白河城から北東へ約4.2km。七曲坂(峠の意)。

本道： 奥州街道筋の守備は向寺・女石関門において。

黒川口： 原方街道筋の守備は立石山において。

旗宿口： 白河から下野国黒羽への道筋だが、ここでは棚倉口(金山街道)をも含めた意味か？守備は合戦坂周辺の丘陵において

を破り、大田川を焚いた。大田川の焼かれたのは麦刈り時であったと伝わっている。西軍の手負い2人、長藩四番隊は鹿島口より本沼に向かって東軍五、六十人を破り民家を焼いた。東軍死者15人、長兵死者1人、傷兵1人。この日、大和田に東軍と大垣藩との小戦があった。

5月26日、また東軍白河城に迫る。棚倉口・矢吹口および長坂・大谷地の諸方面みな進み来る。ときに柏野・折口より会兵も進みて戦う。東軍不利。また金勝寺・富士見山・仙台街道の左右の山等に戦いあり、西軍の死者1人、手負い3人、東軍の死者30余。(西軍の記録による。)この日、白坂の天王山にある東軍は黒羽・大垣の兵と戦う。東軍は棚倉・中村両藩で死者11人、西軍は死者1人、手負い6人。(西軍の記録による。)

5月27日、小戦あり、金勝寺の東軍は大谷地に退いた。双石の焼かれたのもこの日である。

5月28日、金山の東軍白河合戦坂に進撃して小戦あり、釜子の東軍もまた進んで搦目山に至るも戦わずして退く。この日死者東軍2人。

5月29日、東軍相議して払暁白河城総攻撃に移る。仙藩の砲兵隊長釜石栄治は白河関門に、芝多賀三郎は山手に、田中惣左衛門は羅漢山および富士見山に、会の高橋権太夫・木本内蔵之丞等は金勝寺から向かった。会藩の蜷川友次郎・小池帯刀等は雷神山に、上田八郎右衛門・相馬直登・土屋鐵之助等は折口に、仙藩の中島兵衛之介は愛宕山方面より、会藩の小森一貫斎・木村兵庫等は棚倉口におのおの備えをなして、山々に篝火を焚いて西軍の隙を窺った。

西軍これに応じて本道・黒川口は薩、旗宿口・石川口は長・忍。湯本口・大谷地口・根田口および白坂口は大垣兵これを守った。金勝寺方面まず薩軍に向かって攻撃を開く、仙藩の細谷・大松澤等が苦戦したが根田および長坂に退いた。会藩の小原宇右衛門の率いた砲兵は六段山および金勝寺山を攻撃したが敗れ、坂本兵衛・遠山寅次郎等戦死。仙藩・二本松藩兵は棚倉口より進んで土・長・忍3藩の兵と血戦し、棚倉兵またこれを援戦したが東軍は不利に終わり、東軍は会藩の小原宇右衛門・杉浦小膳以下将卒10余人。仙藩は戦死8、負傷20。西軍は長藩死1、負傷7。大垣藩死1、負傷6。薩藩死2、負傷13。忍藩負傷5。黒羽藩死2、負傷6。

[p69]

石川口：阿武隈川の南岸の御齋所街道を東へ、搦目・双石を経て石川町へ至る。守備は桜町関門・搦目などにおいて。

湯本口：米、羽太、真名子、羽鳥、大平、湯本を経て会津へ通じる。守備は立石山・古天神山・金勝寺山において。

大谷地口：大谷地、刎石、二枚橋を経て会津街道筋。守備は六反山・女石関門など。

根田口：向寺、女石、根田を経て北へ向かう奥州街道筋。守備は女石関門・富士見山など。

白坂口：白河の南の宿場白坂の守備。

⇒戦闘要図【第72図 同盟軍の第1次白河奪還攻撃計画】

⇒戦闘要図【bm0528 東軍の白河攻撃(第3次)】

加兵：増援の兵。

原書「奥羽追討白川口総督」→訳「奥羽征討白河川口総督」

⇒[脚注]奥羽征討白河川口総督

⇒西軍の総督・参謀

5月21日七曲の戦い：⇒戦闘要図【第71図 白河周辺の小闘(5/21, 5/24, 5/25)】

大田川：西白河郡泉崎村太田川。

焚いた：ここだけ「焚」であるが、〈やいた〉と読んでおく。

鹿島口：搦目の阿武隈川対岸(北岸)。久田野、大和田、本沼、関和久へ通じる。

棚倉口：白河から金山を経て棚倉へ至る、金山街道筋。

矢吹口：白河から向寺、根田、小田川、矢吹を経て北へ向かう奥州街道筋。

長坂：西白河郡西郷村長坂。白河城から北西へ約2.2km。

大谷地：白河市豊地大谷地。白河城から北へ約2km。

柏野：西白河郡西郷村柏野。米(よね)の北。湯本口の道筋。

折口：西白河郡西郷村真船折口。白河から那須・甲子温泉へ向かう道筋。

⇒[脚注]金勝寺

富士見山：白河城の阿武隈川対岸(北岸)に並ぶ山列。西から金勝寺山・六反山・富士見山。

仙台街道：白河から北へ向かう奥州街道筋。

白坂の天王山：白坂東側の山の名と思われるが、どこか？

相馬中村藩：現在の福島県浜通り北部。6万石。藩主：相馬家  
西軍の記録による：戦闘の死傷者数は諸書により差異あり。

双石：白河市双石。阿武隈川南岸から藤野川北岸までの丘陵一帯の字名。街道沿い集落は双石滝ノ尻、高田あたり。

「5月29日～」の記事について

**5月29日**：日付の錯誤か？『戊辰役戦史』は5月29日～30日は東軍の攻撃がなかったという見解である。『殉難者名簿』には5月29日の戦死者無し。内容を他書と比較すると、「東軍相議して」～「大垣兵これを守った。」までは**5月26日**の戦いの記述である。

原書「木村内蔵之丞」→訳「木本内蔵之丞」  
⇒ [\[脚注\] 木本内蔵之丞](#)

原書「白河口」→訳「白坂口」68ページに同じ言い回しがあり、誤植と思われる。

六段山：六反山のこと。引用元の表記のままと思われる。

坂本兵衛：『殉難者名簿』の**5月26日**の項に「坂本右兵衛、砲兵高橋権太夫隊組頭、米村負傷7月9日自邸で死亡、27歳」とある。

遠山寅次郎：『殉難者名簿』の**6月25日**の項に「戦死場所六反山。砲兵田中右衛門隊組頭。30歳」とある。

小原宇右衛門：会津藩若年寄格。大砲一番隊長。**8月23日**若松の神保原で戦死。40歳。

杉浦小膳：会津藩大砲二番高橋権太夫隊。**5月26日**白河で負傷、7月29日若松で死去。18歳。

以上のように、原書「**5月29日**」の項は内容に混乱が見られ、誤記があると思われる。

死傷者数も、何時のものであるか、誤認を含む計数かどうか、判然としない。

【p71】

合戦坂：白河市合戦坂。南の十文字・夏梨から北の八竜神へ藤沢山を越える道。

釜子：白河市東釜子。白河城から東へ約12km。

白河関門：白河から奥州街道が阿武隈川北岸へ渡った、向寺集落の北はずれに設けられていた関門。

山手：関門がある奥州街道筋の脇の丘陵を指すか。

蜷川友次郎：会津藩、青龍足軽三番隊長。

⇒ [\[脚注\] 小池帯刀](#)

雷神山：白河市菅生館くすごうだて。南湖の北東側の丘陵。

⇒ [\[脚注\] 上田八郎右衛門](#)

相馬直登：1817～1911。会津藩、軍事奉行、正奇隊長。戦後、謹慎から脱走し上京、藩主の助命を直訴。のち雲井龍雄事件に連座。後年は喜多方で子弟教育にあたる。

土屋鐵之助：会津藩、新練隊長。また建言が容れられ、農町民を募って敢死隊を編成（隊長は小原信之助）。

中島兵衛之介：「兵衛之助」とも。仙台藩隊長。不詳。

⇒ [\[脚注\] 小森一貫斎](#)

⇒ [\[脚注\] 木村兵庫](#)

阿部正功：1860～1925。忠秋系阿部家17代。棚倉藩第2代藩主。白河藩主阿部正耆の次男。

⇒ [\[棚倉藩主阿部氏のこと\]](#)

⇒ [\[脚注\] 金山](#)

十文字：白河市十文字。白河城から南東へ約3.8km。

「金山から出撃した東軍は合戦坂・十文字で戦った。一隊は白坂へも進攻した。また釜子から出撃した東軍は搦目村で戦った。しかし諸隊の弾薬が尽きたので、合戦坂・白坂あたりの民家を焼いて撤収した。」

⇒ [戦闘要図【第72図 同盟軍の第1次白河奪還攻撃計画】](#)

白河口：「白坂口」の誤植か。会津口（金勝寺山・長坂山・米村）、仙台口（富士見山・向寺）、棚倉口（搦目山・合戦坂）、白坂口（白坂）

⇒ [\[脚注\] 長坂山](#)

坂ノ上：向寺北方の丘陵地か

金勝寺山と白河城下会津町は、阿武隈川を挟んで北南に対面する位置関係にある。西軍は兵数が少ないため渡河反撃することができず応射するのみで、東軍を撃退できなかったが、

## あべまさことい 阿部正功家記に云う

五月二十六日、東軍白河に進撃す。此の日<sup>こ</sup> 払<sup>ふつぎょう</sup> 暁<sup>かね</sup> 金山<sup>やま</sup>の兵進んで合戦坂及び十文字村に戦ふ。其の兵を分ちて白坂の屯營を撃つ、釜子にある各藩合併の兵進んで搦村に戦ふ。諸隊弾薬つがず合戦坂・白坂に火を放つて兵を収む。此の日吾が藩の死者四人（副軍目付太田友治・銃士林仲作・鈴木熊之丞・銃卒奥貫貞次郎）。傷者五人。

## 藤田氏の記録に云う

五月二十三日（26日の誤記か）、白河にある官軍総責めと称し、奥羽軍は会津口・仙台口・棚倉口・白河口の諸方より責め来り。それは金勝寺山及び長坂山より一手。米村口より一手。富士見山・向寺・坂ノ上より一手。搦山・合戦坂より一手。白坂口より一手。其の景況は金勝寺山・長坂山より来りたるは米沢・会津の兵にて、山上より続々鉄砲を打ちかけたれども、官軍の人少のため進むこと能はず。唯会津町土手の杉に隠れて応戦せ

【p72】

西軍は東の向寺から飯沢へ一隊を送り、林間を抜けて背後から攻撃することで、金勝寺山の東軍を長坂方面へ駆逐することに成功した。

飯沢： 白河市飯沢。金勝寺山の北東裏にある集落。

不動様の坂下を通り： どこか？ 向寺から六反山の南側を回って飯沢へ至る道筋か？

脱兵： 徳川家の正規の指揮を離れ、独自行動をとる部隊。

⇒ [【脚注】堀川](#)

米村口では堀川を挟んで銃撃戦となったが、西軍が阿武隈川沿いに米村に出て、東軍の背後を攻撃したので、東軍は西方の羽太へ退却した。

仙台口（奥羽州街道筋）での戦闘は、東軍が向寺北の高地（坂上）を占めたが、西軍は聯芳寺の後山から迂回して背後攻撃、東軍は小田川へ退却した。

五箇村： 双石・借宿・田島・舟田・板橋の村々を「五箇村」と総称。五箇村道は御齋所街道、金山道は棚倉街道にあたるか。

権田東左衛門： 棚倉藩銃士小隊長。『殉難者名簿』によると **6月12日**に合戦坂味方不動にて戦死。

権田戦死は6月12日なので、藤田氏記録の「**5月23日（26日の誤記か）**」の項はいったい何月何日の事なのか？ 前半は5月26日の戦いのようなのであるが。

全般に西軍の迂回・背後攻撃が奏功しており、西軍が少数にもかかわらず機動力で東軍を圧倒している。東軍の攻撃は多方面から行なわれたが非連携・散発的で、各個撃破されている。

⇒ [【脚注】セコンド（時計）](#)

味方不動： どこか？合戦坂路傍に祀られたという。「天正年間、常陸佐竹氏に侵攻された白河結城氏はこの坂（峠）で迎えたところ、不動明王の眷属の二童子が現れ味方したため、佐竹の軍勢を撃退することができた」という伝説がある。

此の一戦後： 上述のとおり、この項は日付が混乱しているので、何月何日の戦いを指すのか不明。

根田方面から： 根田から高橋川沿いに大谷地まで進攻してきたと思われる。東軍の「勢揃い」に対して、西軍の散兵行動を彷彿とさせる証言である。

るを見るのみ、奥羽兵多人数なれば容易に引上げざる有様なり。  
官軍は向寺より不動様の坂下を通り、飯沢に出で林中より裏切したため、死傷を残して長坂村を指して逃去れり。  
米村口より来りたるは会津及び徳川の脱兵にて堀川端にて砲戦す。官軍阿武隈川より米村に至りて敵の後に回りたり。敵は死傷を出し、米村民家を火し、羽太村に引上げたり。  
仙台口より来りたるは仙台・二本松・三春の兵にて向寺坂上にて官軍と合戦中、官軍聯芳寺山より裏切、是れも敗軍小田川村に逃去れり。  
白坂口よりは会兵小丸山辺まで来たれるも引上げたり。  
棚倉口は金山道・五箇村道より責来り、棚倉藩士**権田東左衛門**隊長となり、真先に進み来りたれば**味方不動**前に戦死。それがため進み入ること能はず引揚げたり。斯の如く白河総攻撃とて来れるも時間に相違あり、払暁より開戦せるあり、十時頃より始むるありて敗る。  
**此の一戦**後、町民は多く帰宅せり。

## また藤田氏記録に云う

官軍の出陣する時は、賊の砲声を聞くや否や直に銃を持ち、着のみ着のままに寝所を出で、飯も食はずに我先にと出かけたり、「御飯を食して御出掛」といへば、「砲丸を食ふから腹はへらぬ、飯は後から握飯にして持ち来れ」といふ。それ故官軍の戦は何時もありき。  
奥羽勢の支度は夫々身を纏め、宿舎主人に飯を炊かせ、十分腹を拵へ握飯を持ちて出かけたれば、官軍よりも遅れたり。

西軍の出陣のさまは1人でも2人でも砲声を聞くと出掛けたが、東軍は勢揃いをして出掛けたものだという。

大谷地に伝わっている話に、「東軍の陣地が大谷地にあった。それを西軍は根田方面から攻めて来たが、あの根田と大谷地の耕地をつなぐ細流に沿って上って来た有様というものは、何と云ってよいかわからぬ機敏さであった」と。

こたがわ しょうや とんえいしよ にんぶ  
 小田川村の佐藤庄屋は奥羽軍の屯営所であった。村の人夫が集まってよく握り飯を作ったという。(当時、多くザル飯を炊いた。ザル飯とは、沸騰している湯釜にとぎ米をザルに入れて煮たものであるという。)

5月29日、東山道先鋒総督参謀板垣退助が宇都宮より土軍を率いて白河に入る。

(白河金屋町斎藤千代吉翁の談によれば、大工町の常端寺が板垣参謀の陣営であったという。千代吉翁は袋町で生まれ育ったので、よくこの事は知っていると言ふ。)

藤田氏の記録に、「板垣退助が白河に入ると、『名札を出し、白河近在を探偵するものを人選せよ』といふ。(藤田氏の家は町役人なる故に。)[探偵とは何をするものなりや]と聞きたるに、笑ふて『実況を内々に聞取るものなり』といふ。依て目明役(ヲカツヒキ)七、八人書出したり云々」とある。

同記録に、「断金隊長の美正貫一郎もこの時来る。美正は二本松打入りの時、本宮の川を糠沢方面から進んで渡る時に、大内屋の土蔵から狙はれて戦死。屍は川に流れたり。後に死体を求むれども見えざりき。」とある。

川瀬才一の白河県への報告書に云う

二十六日、当所を真中にして会藩の徒等惣攻に寄来る。人数凡そ一万人有之候か。  
 東の方は桜岡村・新小萱村・根田村・向寺町坂ノ上関門まで寄来る。良の方は葉ノ木平・六反山。乾の方は飯沢村・金勝寺村、阿武隈河を隔てて戦ふ。  
 西の方は折口原・水神原の辺より立石山・原方道・高山村。  
 東京街道は皮籠村・小丸山・天王山・龍興寺・三本松。  
 南の方は鬼越村・南湖池下・**焰硝・義五郎窪**・蛇石・月待山。  
 巽の方は**関山窪**・兜山・豆柄不動・土腐塚・十文字原・合戦坂・味方不動・八竜神・山の神・結城の墟・搦目村・大村・鹿島村に至る。  
 如斯困邊無透間押寄来り、卯の中刻より午の下刻までの大合戦なり。会藩方の大軍へ小勢を以て防戦する官軍方の苦戦は

東山道先鋒総督参謀： 2月6日の任命時点ではこの名称だったが、5月29日時点では既に「奥羽征討白河口総督参謀」だったはず。

土軍： 土佐藩兵。第一梯団(4個小隊、1砲隊)は5月27日に白河に達し、戦闘に参加している。29日に板垣が第2梯団とともに到着したということ。

原書「袋町生まれで育ったので」→訳「袋町で生まれ育ったので」  
 ヲカツヒキ： 「岡っ引くおかつびき」は江戸時代の警察機能(捜査・逮捕)の末端を担った非公認の協力者。「目明し」が正称で、「岡っ引」は蔑称。

断金隊： 慶応4年3月甲州で板垣退助提唱により結成された農民義勇軍。隊員150名。白河・棚倉・二本松・会津にて参戦。常に最前線に立ち37名が戦死。

美正貫一郎： 1844~1868。断金隊隊長。慶応4年7月27日、本宮の阿武隈川渡河時に戦死。  
 ⇒ [脚注] 本宮

糠沢： 本宮の東方4kmほど。  
 大内屋： 大内家は本宮で脇本陣、酒造「銘酒春駒」を営み、本宮南町名主を務めた。阿武隈川沿いに蔵が連なっていた。

当所を真中にして： 川瀬の住所は本町であるが、以下記述の方向からすると、白河城北の阿武隈川岸に居るようでもある。

惣攻に： 総攻撃という勢いで  
 良： 北東の方位をいう。  
 乾： 北西。  
 水神原： 堀川の水神神社一帯の原か。白河市和尚壇あたり。  
 高山村： 新白河駅の東方、谷津田川沿い。  
 東京街道： 白河の南の奥州街道。

⇒ [脚注] 白坂の天王山  
 焰硝・義五郎窪： 焰硝蔵(山)〈えんしょうくらやま〉・五郎窪の誤植と思われる。  
 月待山： 南湖畔東側の尾根。  
 巽： 東南。  
 関山窪： 「関川窪」の誤植と思われる。  
 兜山： どこか？  
 豆柄不動： 関川窪に「豆柄不動湯」あり。



きゅういっしょう せい あたか いだてん あ ごと  
九死一生のその勢、恰も韋駄天の荒れたるが如し。見る者、聞  
く者恐怖せざるなし。よろずかた うち ほうせい ひやくせん いかずち お  
つるかた 疑ふばかりなり。

かくの ごとく けっせん かた はっほう はいぐん ゆえ  
如し、斯官軍方の血戦に恐怖せし会藩方は八方とも敗軍しける故、  
その日の死亡数知れず、死骸山の如し。血は流水の如し。巳の  
こく いた ようや あいひき ひ  
刻に至り漸く砲声静まり相引に引く。

うま またまたせめよ きた  
翌二十七日は午の刻より又々攻寄せ来り、日の落つるまで烈しく  
うちあい ひなわづつゆえ かたろくれんぱつ ゆえ べつ  
打合し、会藩は多く火縄筒故、官軍方六連発こめ故砲声別なり。

## 鹿島富山氏の記録に云う

むつどき たなぐらみち いたしろうろ そ うちこうせんざか  
二十六日の朝六ツ時、棚倉道に大砲の音致候。其中合戦坂口  
たたかい あいなりそうろう そうこう あいなりそうら かしま たたかい  
の戦と相成候。其の日総攻と相成候へども、鹿島口も戦と  
あいなりそうろう つき むらじゅう わき ほり  
相成候に付、村中の者は吉太郎殿の脇のバンカリの堀の中に老  
人子供まで皆すくみ候。

いず からめぐち はなはだ そうら たま うえ  
何れにも擲口大砲甚しく候へば、大砲の玉あんまり上にてわ  
れ候につき、生きてる空もなく皆同様に驚き、今に命をはるも  
いたしろうろうち 白河より長州様の大砲二門下の川原より擲目  
はなはだ うち そうら  
の奥兵にめがけて甚しく打ちこみ候へば、奥兵大軍とは申しなが  
ら、官軍は戦上手にて遂に奥兵を追ひ散らし漸く少し安堵  
いたしろうろえども どう いた そ ゆう くらべいしも かがりび  
致候得共、何うも致せ、其の夕より双石下より篝火ひかり昼の  
ごと 如し。

たたかい そうら たいぐん そうろうあいだ あいな  
官軍も戦は勝ち候へども、奥兵大軍に候間油断に相成ら  
ず、村方の人足にて篝火一ヶ所へ五人づつ割当て、昼は木を切  
り、夜は篝火を焚き、長州様固めの場所鹿島口・八竜神口・南  
おし 口にて長州と忍との人数にて百五十人許、奥兵は何分にも大軍な  
あいな ら かしま ごしゅつちようあいなり むらじゅう おやど  
れば油断相成らず、長州様は鹿島村へ御出張相成、村中は御宿  
あいなりそうろう  
と相成候。

もつと たびたび おおあめ ふつごうゆえ  
尤も度々の大雨にて橋も流れ通行も不都合故、村中御宿と相成  
うち 候。その中薩州様少しくり込み、土州様も二十七日繰込候て長  
かわ あいなりそうろう  
州様代りに相成候。

6月朔日、西軍200人ばかりと会津・仙台の兵と合して七曲坂に戦  
う。この日は西軍が敗れて根田に退いた。西軍は根田に火を放たん  
とす。東軍これを見て一斉射撃をして防ぐ。西軍は屍を棄てて白河  
に退いた。東軍の傷つく者2人。

[p77]

土蔵塚： 白河市土武塚。語源としてはこちらか。

山の神： どこか？

結城の墟： 結城白川城の城跡

擲目： 白河市大擲目。阿武隈川南岸の集落。白河城から東南へ約3km。

⇒ [脚注] 鹿島

囲遶： 通行を塞ぐように周りを取り囲むこと。

卯の中刻より午の下刻： 午前5時40分より午後1時の間。

韋駄天： 仏教において天部に属する神。増長天の八将の一種で、四天王下の三十二将中の首位。足が速く、よく走り回るという俗信あり。

巳の刻： 午前10時を中心とする約2時間。

午の刻： 午前12時を中心とする約2時間。

火縄筒： 天文12年種子島に伝えられて以来、全国各地で製造された前装式和銃。火縄で、火薬に点火発射する旧式銃。

六連発(七連発)： 米国で発明されたスペンサー銃。当時最新式の連発式後装ライフル銃。慶応年間佐賀藩が輸入。元込七連発銃として名をはせた。

西軍が5月1日白河城を攻略し二の丸に入城した時、倉庫に生糸が積まれていた。この生糸を急ぎよ横浜に運び出し、スペンサー銃80挺と交換。5月28日帰着し、以後の戦いに威力を発揮したという。

朝六ツ： 時明六ツ。午前6時  
バンカリ： 流水を利用する素朴な精米機の一つ。

総攻： (東軍の) 総攻撃。

下の川原： 阿武隈川の河川敷の意味か？

奥兵： 東軍(奥羽列藩)の兵  
双石下より： 「双石集落より阿武隈川下流の方面で」の意味？

固めの場所： 守備の持ち場。

東軍・西軍とも、夜は篝火を焚いて、相手への示威と警戒を欠かさなかった。白河の町民にも、夜の篝火によって、東軍が大軍で白河を包圍している状況が強く意識させられたであろう。

繰り込み： 増援部隊が白河に到着したことを指す。そのような薩摩・土佐薩の部隊が長州兵と守備を代わったということ。奥羽への長州藩兵派遣は比較的少数で、増派がなかったようである。しかし「主要藩」として前面で奮戦しなければならず、損耗率は高かった。

6月1日は、『殉難者名簿』によると大垣・長州兵に損害が出た。

⇒ [脚注] 七曲

6月8日、仙台の細谷十太夫が和田山に陣した。西軍は富士見山からこれを砲撃した。

6月9日未の刻、西軍数十人銃を發しつつ富士見山から進んだのを細谷組がこれに應戦。仙台藩の大松澤掃部之助の小田川村にあったが来援したので勝敗決せず互いに兵を収めた。

このころ、奥羽追討総督の任命あり。  
『鎮台日誌』に云う

六月十日御沙汰書

正親町中將  
奥羽追討 為 総督、出張 被 仰付 候 事。

鷲尾侍従  
大総督参謀 被 仰付、奥羽追討白河口出張可有之 被 仰付 候 事。

とあって、鷲尾侍従が大総督参謀として、白河口に出張となる。

6月11日には、東山道総督参謀板垣退助、同伊地知正治を参謀補助として鷲尾参謀に属しめたのである。而して両参謀補助は白河口の諸軍を督した。

6月12日の大戦  
この戦いが5月朔日の激戦に次ぐ大戦であって、したがって戦線も広がった。東軍はこの戦いをもって白河城を回収せんとしたのである。

棚倉口よりは会藩の純義隊・棚倉兵・相馬兵。根田の和田山よりは仙藩の細谷十太夫・大松澤掃部之助。愛宕山方面より会藩遊撃隊頭遠山伊右衛門。大谷地口よりは会藩の高橋権太夫の砲兵および仙台の中島兵衛之介、および福島兵。下羽太村より白坂口へ会藩の原田対馬・赤埴平八郎、仙台の大立目武蔵。この時には西軍の増援も来たり、その勢大いに振るった。

棚倉口は薩・長・忍の兵に破られ、根田の和田山からの攻撃が意のごとくならず、大谷地は薩・土の軍と戦い互いに勝敗があったが、根田方面が破れたので退いた。

本道口愛宕山方面は遠山伊右衛門奮戦したが、敵弾に斃れ、その子

【p79】

⇒【脚注】細谷十太夫

和田山：「根田の和田山」どこか？ 白河市萱根根田の奥州街道沿いの山と思われる。「和田」というのは、川が曲がったところや、やや広い平地の意味で、「和田山」はそのような地形になだらかな小丘が分布する様子であろう。イメージとしては平地と丘が入り組んだ「多島海」のような風景である。したがって「和田山」は特定の山を指すのではなく、根田あたりの丘陵の総称ではないか？

⇒【脚注】富士見山

未の刻：午後2時を中心とする約2時間。

大松澤掃部之助：1836～1920。仙台藩、黒川郡大松沢村600石。大番頭、白河口軍事総督。戦後は剃髪得度。

奥羽追討白河口総督：ここまで奥羽征討白河口総督であった称を奥羽追討総督と改めた。また、越後口などと区別して奥羽追討白河口総督と称す。

東山道総督参謀：この時点では既に「奥羽征討白河口総督参謀」だったと思われるのだが。改めて「奥羽追討白河口総督参謀」に任命。

純義隊：会津藩の徴募兵部隊の一つ。主として旧幕府の歩兵より成る。ただし士官は概ね会津藩士という。隊長小池周吾。約100名。

⇒【脚注】愛宕山

会津藩遊撃隊：会津藩の徴募兵部隊の一つ。

⇒【脚注】遠山伊右衛門

⇒【脚注】大谷地口

⇒【脚注】高橋権太夫

⇒【脚注】中島兵衛之介

下羽太村：西白河郡西郷村羽太狸屋敷（むじなやしき）あたり。白河城から北西へ約7.8km。

原田対馬：慶応4年8月に会津藩家老に就任。戦後、原田は町野主水・高津仲三郎とともに戦死者埋葬を交渉し、明治2年2月、埋葬を認めさせた。

赤埴平八郎：「平八」とも。会津藩260石扶持。力士隊組頭。8月14日越後赤谷で戦死。34歳

大立目武蔵：不詳。原書「大音」→訳「大立目」誤植か。

西軍の増援も～：一方の西軍の増援も順次白河に到着して（東軍西軍ともに）勢力が最大になったという意味か？

⇒戦闘要図【bm0612 東軍の白河攻撃（第4次）】

主殿が屍を背負って退くもまた斃れ（伊右衛門年 58、主殿年 31、会藩殉難名簿に和田山に戦死とある。）、小松族・山寺貢等相次いで死し、仙藩の大松澤等が和田山を砲撃して奪取したが、西軍の襲撃を受けて苦戦した。

下羽太の戦況は有利で夜襲を行なって西軍を破り、進んで白坂村に黒羽兵を破るも大垣兵の来援があつて退いた。

ときに会藩の辰野源左衛門は、仙藩の細谷・大立目等と約して米村口より西軍を襲わんとしたが、仙藩の増田・大松澤と議合わず、増田は矢吹に火を放って須賀川に退いた。

金勝寺山の会藩の砲兵盛んに白河城を猛撃し、一時西軍を混乱せしめたが、西軍が上羽太・下羽太・関谷（今羽太の字名）に火を放つたのでともに敗れた。

福島藩隊長池田邦知等六反山に奮闘し、14人討死した。これも6月12日である。

相馬誠胤家記に云う

六月十二日、白河総攻の報告あり、黎明関山の号砲六発を期とし、各藩道を分ちて進む。我が藩大沼口に向ふ。敵月見・月待の両山頂に胸壁を構へ僅に応戦するのみ、故に分隊の布列進んで山麓に迫り挑戦す。敵兵漸く加はり四斤砲を以て射撃す、我が兵大小砲を以て攻撃苦戦す。偶々会兵来り援く、時に仙・棚の兵合戦坂に進み戦ふといへども死傷多く遂に兵を引いて走る。敵尾して来り、我が帰路を断たんとす、止むなく退いて八幡山に至る。敵敢て迫らず。各藩の兵と共に兵を斂めて金山に屯す。戦死一人。

板倉勝達家記に云う

六月十二日、仙・会と共に外面村より大谷地へ繰出し、石切山辺にて砲戦、金勝寺の前山乗取り、討死手負者有之、午半頃外面村へ引揚。夫より矢吹駅へ引取宿陣。

土州藩届書に云う

本月十二日、平明、白河表諸藩持口賊軍襲来、弊藩持場金勝寺山・飯沢山・湯本道等にて戦闘、午時頃賊軍潰走。諸手追

【p81】

会藩殉難名簿：『白河口の戦い殉難者名簿』とは別。戊辰戦争の戦死者名簿は各藩で編纂され各種ある。

小松族：会津藩 100石。朱雀士中三番上田隊。6月12日長坂村で戦死。20歳。

山寺貢：会津藩 100石。6月12日古天神で戦死。31歳。正奇隊小隊頭とも。

⇒【脚注】辰野源左衛門

増田：⇒【脚注】増田歴治

米村口：⇒【脚注】米村

矢吹：西白河郡矢吹町。白河城から東北へ約 13.4km

⇒【脚注】須賀川

金勝寺山：⇒【脚注】富士見山

上羽太：西白河郡西郷村羽太漆畑（うるしばた）あたり。

関谷：西白河郡西郷村羽太関屋。

福島藩：福島藩は佐幕か恭順かで藩論が揺れていたが、仙台・会津の大藩に挟まれ、奥羽列藩に参加せざるを得なくなった。白河の戦いに池田邦知隊を派兵して六反山で戦ったが、軍目付淡川市十郎ほか 13名が戦死するという犠牲を出した。この後福島藩は降伏・恭順に動いていく。

相馬誠胤：1852～1892。相馬中村藩最後の藩主。

6月12日、東軍は明け方に関山上の大砲6発を合図として進攻を開始。これまでの戦いの教訓から、始動時は統制をとろうとしたのである。

大沼口：白河の郊外の南湖から西の谷津田川へかけての沼田地帯が大沼である。南湖畔から北の丘陵地に攻め上がる意図か？

月見山・月待山：南湖畔にある丘。西軍はここに陣地を構えていたが、銃を撃ち返す程度だったというのである。

そこで東軍（相馬兵）は分隊単位で横隊となり戦いを挑んだが、西軍は四斤砲を撃ってきた。会津兵が掩護したというが「たまたま」というあたり、あいかわず東軍連携に難がある。東隣の合戦坂で東軍（仙台・棚倉）が敗退したため、相馬兵は包囲されるのを恐れて退却した。

八幡山：夏梨の八幡山。白河市八幡山。白河城から南東へ約 4km。

⇒【脚注】金山

板倉勝達：1839～1913。陸奥福島藩の最後の藩主。

外面村：白河市大信増見外面。白河城から北へ約 6km。

⇒【脚注】大谷地

石切山：どこか？

の しゅくえいぞんらくしよしょ つかまつりそろうろ へいはん の じんいん さ の とおり  
撃、賊之宿營村落所々放火 仕 候。弊藩死傷之人員左之通

戦死 田中焯之助  
同 黒岩兼之助  
重傷帰營後死 楠瀬六衛  
手負 北川源五郎  
同 森本醇助  
同 岡本虎之助  
同 浅田悦七  
同 田中茂作

一、討取 二十四級  
一、生捕 二人  
一、旗 二本  
一、小銃 二十八挺  
一、大小刀 二十九口  
一、鎗 四本  
右之通に御座候。以上。

六月

土州 板垣退助

【p83】

金勝寺の前山： 六反山を指すのか？

外面－大谷地－六反山へと攻めだしたものの、結局は矢吹まで後退している。福島藩の戦意を反映している？

平明： 夜明け、明け方。

白河表： 白河方面。

弊藩： 自藩のことを、へりくだっている。

⇒ [脚注] 湯本・羽鳥

諸手： 各隊がそれぞれ。

『殉難者名簿』によると、田中焯之進25歳。黒岩兼之助29歳。楠瀬六衛27歳。

「今朝5時頃、大垣藩兵の持ち場である仙台街道の方（白河の北方）に砲声が聞こえていた。6時頃『応援の兵を差し向けてくれ』と大垣藩から言ってきたので、我が藩三番隊を繰り出した。おいおい賊徒は引き退がる様子なので、8時頃より進撃にうつった。会津街道上の、白河より1里ほどの大谷地村という所に賊徒が屯集しているので、左右より挟撃して攻め寄せ、ついに撃破し、陣屋や用具を焼き払った。本街道（＝仙台街道＝奥羽街道）方の賊営（東軍陣地）がまだ陥落せず、味方半隊くらい（小隊規模）が戦闘中とのことなので、さらにその場所に攻め寄せ、砲台を打ち破り、賊徒を残らず追い散らし、陣営に放火した。右両所で討ち取った者はおおよそ30～40くらい。石川街道口（白河の東方）は我が藩持ち場であるが、仙台・会津・二本松等の賊徒多数が接近して来た。こちらから半隊ずつ二手になって左右から回り込んで追い払い、それから進撃して2か所の屯賊を撃ち破り、会津隊長井口源吾以下討ち取った者は40余人、生捕り1人である。弾薬も分捕り、残さず持ち帰った。原街道口（白河の西方）も我が藩持ち場であるが、12時頃からはるか向こうに敵200ばかり出沒するのが見え、かつ湯本街道口守備の土佐藩兵もあるていど進撃している様子なので、こちらも進撃して賊徒を残らず追い散らし、討ち取りも少々あった。ただし我が藩の戦死・戦傷は左の通りである。」

生捕一人： 『殉難者名簿』に「棚倉藩銃士・宮田八十吉・合戦坂口にて捕らわれ白河にて討たる」とあるのがこの一人か？

### 薩州藩届書に

今朝五字頃、大垣藩兵の持ち場仙台街道之方に砲声相聞 候 処、  
六字頃応援之兵差出呉 候 様、右藩より申 来 候 に付、弊藩三番  
隊繰出候中、追々賊徒引 退 候 様子につき、八字頃より進撃、会津  
街道之内白川より一里程にて大谷地村といふ所に賊徒屯集に付、  
左右より挟撃に攻寄せ、終に撃破、陣屋用具焼 払 候 処、本街道  
方之賊営未 墜、味方半隊位 にて合戦最 中之由聞えし故、又々右  
場所に攻寄せ砲台打破、賊徒残らず追散し、陣営に放火、右  
両所にて討取候者凡 三・四十位。石川街道口は弊藩持場所、  
仙台・会津・二本松等之賊徒多人数間近く寄来り、此方より半隊  
づつ二陣左右より廻りて追払ひ、夫より進撃二ヶ所の屯賊を討破  
り、会津隊長井口源吾以下討取候者四十余人、生捕一人、弾薬  
分捕不 残凱陣。  
原街道口も弊藩持場之処、十二字頃より遙之向に敵二百許追々  
相見え、且湯本街道口堅め之土州勢も余程進撃の様子に付、此方  
よりも撃出て、賊徒不 残追散し討取少々御座候。尤も弊藩戦死  
手負左之通。

戦死 永野忠之丞

【p86】

『殉難者名簿』によると、六番隊戦兵・長野仲之丞 23 歳。六番隊小頭見習・長束市郎 20 歳。一番遊撃隊戦兵・池田次郎左衛門 20 歳。三番分隊戦兵・浜川彦兵衛 23 歳。一番遊撃隊戦兵・三原周助 20 歳。兵具隊伍長・黒田運二 22 歳。

島津式部： 島津式部久之。鳥羽伏見戦では本営付き。のち東山道先鋒の薩摩藩総督。つづいて宇都宮、陸奥国へ転戦。

相良次郎： 副総督？

仙台口＝仙台方面へ向かう奥州街道本道。会津口＝勢至堂峠を経て会津若松へ至る会津街道。ともに白河の北方にあたる。

卯之刻： 午前 5 時より 7 時の間。

- ⇒ [\[脚注\] 白坂口](#)
- ⇒ [\[脚注\] 黒川口](#)
- ⇒ [\[脚注\] 石川口](#)
- ⇒ [\[脚注\] 旗宿口](#)
- ⇒ [\[脚注\] 湯本口](#)
- ⇒ [\[脚注\] 棚倉口](#)

江戸脱兵： 徳川家の正規の指揮を離れ、江戸を脱出し独自行動をとる部隊。

6 月 12 日の戦い時点が、東軍西軍ともに勢力がピークだったと思われる。東軍は人数の有利を活かすことができなかった。

- ⇒ [\[脚注\] 大谷地](#)
- ⇒ [\[脚注\] 柏野](#)
- ⇒ [\[脚注\] 長坂](#)
- ⇒ [\[脚注\] 大沼村](#)

大和田： 白河市大和田。白河城から東へ約 4.3km。

屯所： 兵の駐留場所。  
会所： 軍の本部。

同 長束一郎  
 同 池田次郎左衛門  
 同 濱川彦兵衛  
 同 三原周助  
 同 黒田運次  
 手負 小出謙斎  
 同 川崎一介  
 同 野田郷左衛門  
 同 種子田左衛門

右御届申上候。以上。

六月十三日

薩州 島津式部  
 相良次郎

大垣藩の届書によれば、「白河城四方口々へ賊徒襲撃し来り云々」とある。また大垣藩の持ち場は仙台口・会津口であって、手負い者 8 人。

黒羽藩の届書によれば、「今朝卯之刻頃、西原黒川口より賊兵五十人程白坂駅固場え襲来、追々賊兵相加はり凡二百人程に相成、双方砲撃。賊一人討取。味方には手負死人一切無御座候」とある。

### 6 月 12 日の兵数

西軍、薩の兵数は白坂口・黒川口・石川口合わせて 600 人。長は棚倉口・旗宿口合わせて 150 人。土は金勝寺山・湯本口合わせて 400 人。大垣は仙台口・会津口・白坂口合わせて 200 余人。忍は旗宿口 100 余人。黒羽は白坂駅 130 人。計 1580 余人。

東軍、棚倉口、仙・会・中村・棚倉兵 300 余人。石川口、仙・会・二本松兵 200 余人。仙台口、仙・会・三春兵 1000 余人。会津口、仙・会・福島兵 800 余人。金勝寺山、仙・会・福島兵 500 余人。湯本口、仙・会・米・江戸脱兵 1200 余人。合計 4000 余人。

この日、大谷地・柏野・長坂等の民家焼かる。

西白河郡大沼村大字大和田の鈴木伊左衛門翁の談  
 辰の年の戦争に大和田は仙・二本松藩の屯所で、水野谷庄屋は会所であった。

官軍は桜岡の愛宕山から大砲を撃って、それは激しい戦いであつたものだ。桜岡は2軒の農家が二本松藩のために焼かれたが、大和田は幸いに一軒も焼かれなかった。白河口の戦争の終わったのは何でもお盆の頃であつたらう。

### 西白河郡大沼村桜岡の邊見フサ媼の談

戦争の年は私が16歳の時だ。桜岡の戦争は6月12日、桜岡では邊見林之丞という私の祖父の家と、その分家の私の家とが焼かれた。林之丞は桜岡一の金持ちであつたので焼かれた。林之丞は小判を甕に入れて前畑に埋めて逃げたが、会兵に連れ出され、金を出せと脅かされて遂に埋めた金を出した。出さぬと殺されるから出したのである。

官軍は散髪でスッポ、ダンブクロ。人夫は結髪、奥勢は結髪。奥勢が引くと、官軍はトコトンヤレ節で入つて来た。「どうしたひどい目にあつたな」とやさしい詞であつた。村では握り飯を出してご馳走した。村中の薪はみな奥勢に焚かれてしまった。

ついでにトコトンヤレ節を付記しよう。この歌は品川弥二郎が士気振作のために作つたのが始めであるといわれる。今に白河地方に残されてあるものは沢山ある。二三を記して見る。

宮さん宮さん、お馬の前にキラキラするのは何じやいな

トコトンヤレトコトンヤレナ

あれは朝敵征伐せよとの、錦の御旗じゃ知らないか

トコトンヤレトコトンヤレナ

これは全国的に有名なものだが、短いものに、  
国のみやげに生首さげて、白河立つときやお目出度い。  
長い刀はだてには差さぬ、朝敵征伐するためよ。  
軍する身と生まれてからは、どこのいずこで果てるやら。  
薩摩くつわでとまらぬ時は、長州鉄砲で攻めてやる。

### 小田川村大谷地の草野初吉翁の談

私は元治生まれで戦争の事をかすかに覚えている。  
伝え話によると、大谷地は会津口なのでたびたび戦争があつた。根田の方から官軍が川に沿うてやつて来た。会津兵は外面

【p88】

⇒【脚注】桜岡

桜岡の愛宕山：久田野の愛宕神社がある山を指すと思われる。白河周辺は愛宕神社が多数あり、「愛宕山」もいくつかある。

お盆の頃：旧盆は旧暦7月15日を中心とする。白河地方最後の戦闘は7月28日と記録されている

民衆に対する会津藩等の暴虐は多々記録されている。このようなことから、奥羽列藩の戦いは必ずしも「郷土防衛」ではなかつたと言えると思う。

前畑：住宅敷地に隣接した畑  
散髪：鬘を結わない、ばらばらに乱れた髪。

スッポ：ツツッポ=筒袖の上着。

結髪：鬘を結つた髪。

トコトンヤレ節：作詞は品川弥二郎、作曲は大村益次郎とされているが確証はない。歌詞の「宮さん」は、東征大総督熾仁親王を指す。農兵節（ノー工節）とともに日本の軍歌の初めといわれる。

士気振作：軍兵の気持ちを鼓舞する・励ますという意味。軍楽隊の任務は「士気振作」であるという。

元治：元号。文久の後、慶応の前。1864年から1865年まで。

元治生まれということは、当時4~5歳である。

川に沿うて：高橋川と思われる。

⇒【脚注】外面村

田中山： 白河市田中山。高橋川南流の左岸。

月の入山： 白河市萱根月ノ入。高橋川を挟んで田中山と対面する丘陵。現在は造成されている

(曲門)： 何のことか？ 引用元にこの文字で記されているのを、原著者も解説できずカッコ付きで引用したか？ 大砲は「～門」と数えるので、「曲門」は曲射砲(ここでは臼砲)の意味で、軍楽の「曲」と掛けているのだろうか。

草取山： どこか？ 白河市豊地草取？

信夫村： 増見、新城、飯土用、大谷地などを含む。のち大信村→白河市。

飯土用： 白河市大信豊地飯土用。白河城から北へ約6km。

首にして： 戊辰戦争当時でもなお、殺した敵兵の首を取るといふ風習が行なわれていた。負傷死亡して遺体を収容することができない場合には、死後敵兵に首を取られることを恥と考へ、味方が首だけを切り取って持ち帰ることも多く行なわれた。

槍の先にかけて： 槍先に突き刺すとは思えないので、首を何か布で包んで槍に掛けぶら下げたものと思われる。

義集隊小隊頭： 他書では「会義隊小隊長」とも。小隊長は「小隊長」で、徴募兵部隊でも長は藩士が当てられた。

⇒【脚注】柴大将

馬場口門： 会津鶴ヶ城外堀の門(郭門)のうち最北のもの。

鹿島の神： 白河市大鹿島の鹿嶋神社は白河の総鎮守であるが、大信豊地にも鹿嶋神は祀られている。白河市大信豊地鰻谷地(うなぎやじ)にある飯豊比売神社(いとよひめじんじゃ)は、式内社と推定される古社で鹿島宮とも呼ばれる。「イトヨ」「イデ」は同語源と考えられ、東北地方各地に山と結びついた信仰が見られる。当地の鹿島信仰との関係は不明。

飯豊坂： どこか？ 飯豊(飯土用)に至る坂(峠)と思われる。

⇒【脚注】刎石

刎石山： 白河市豊地。

滑川： 白河市大信隈戸滑里川

の方に引き退いた。大谷地の前の山を田中山というが、ここに官軍が陣し、月の入山には会兵が陣した。今に田中山に塹壕がある。

弥二郎の曲と(曲門)で会兵が非常にやられた。

金勝寺山と草取山で大激戦、このとき会將の望月新平様が殺された。大谷地はみな焼かれてしまった。私などは母親に負われて下小屋に避難した。

信夫村外面の国井清太郎翁の談によると、「会將の望月新平という偉い武士は外面村の国井栄七宅に宿っていたが、惜しい事に金勝寺山で斃れた」と言っている。

信夫村の飯土用の岩谷平吉翁はいう。

望月様が金勝寺山でやられると、とてもこの重傷では会津に帰られぬから、首にして国に送れと遺言した。首は飯土用を通るとき槍の先にかけて通った。

(望月新平は望月新兵衛の二男で義集隊小隊頭で、5月26日金勝寺山に戦死。時に31歳。)

『会津史談会誌』に柴大将の談として望月新平の葬式の事が記されてある。曰く

望月新平の葬式の時、馬場口門で、御門番が「仮門が間に合わぬ、しばらく行列を止めてもらひたい」といふと、或る老人が大声をあげて「目出度戦死された武士の葬式に仮門とは何事だ」と叱りつけて無理に通したといふ。

(仮門とは葬式行列が郭門を通るとき、長い葦を三方に立ててその下を通すことで、御城門の不浄を避けたのである。)

## 平吉翁の談

戦争では、羽太も、柏野も、米も、真名子も、根田も皆焼かれたが飯土用だけは焼かれぬ。

それは会兵が飯土用を焼くために下小屋からやって来ると、大勢の兵が白馬に跨ってこれを遮ったので焼失を免れた。その白馬の兵は飯土用の鎮守鹿島の神である。

飯豊坂にも刎石にも今に土塁が残っている。刎石山は大谷地も根田も一目に見える形勝地点である。会兵は滑川、飯土用を根

抛として白河に繰り出した。出発のときは勇ましいものであったが、敗れて帰ると悄然たるものであった。白河攻撃のとき、村の者はみな人夫に使われた。物の運搬、夜になると篝火焚き。

会藩がいよいよ飯土用を立ち退くとき、兵器などを形見に残して行ったものだが、明治政府の厳達によって差し出し、今は残っていない。

今地方で発見する小銃の弾丸に横線のあるのが西軍のもの、線のないのが東軍のものだ。

私は会兵が飯土用を引き払った後に、黒羽藩の人夫として三斗小屋に行った。その時に実際の太刀討ちを見た。

黒羽の将の18歳になる者が、会兵に発砲すると不発であった。その隙を見た会兵がその将を殲した。するとその部下が太刀を振りかざして向かって来た。会兵はこれを討ち殺した。次に迫って来た黒羽藩兵と一人一人太刀討ちをやって7人まで殲してしましたが、8人目に勢が尽きてやられた。汗を握って見て居たが、機をはずさずに白河に逃げた。大根の味噌漬1本を3人で嘗めながら辛くも帰宅した。

### 西白河郡大沼村 掬の内山 桑蔵翁談

私の家は戦争中は官軍の陣舎、何でも昔からの物は全部その時散乱してしまった。物を後の世に残しておくなどの考えはあったものでない、命だけの存続を考えたものなそうです。

6月12日の戦いがこの辺での大きいものであった。今の県道の所には谷津田川が流れていた。阿武隈川は今のよう<sup>からめ</sup>に掬部落に近く流れないので、もっと北を流れていた。私の家と谷津田川との間には長い土手があった。奥兵はそれに<sup>お</sup>拠って鹿島方面の官軍と戦った。すると後山から官軍がやって来て奥兵は挟み討ちとなったので、守りが破れて谷津田川に沿うて双石に逃げたが、奥兵は掬の谷津田川岸で7人やられた。

今ある供養塔はこの7人を<sup>とむら</sup>吊ったのだ。

(内山家は大庄屋で、感忠銘を建てた内山重濃の後である。当時の小銃丸の弾痕が今に座敷に残っている。)

【p91】

悄然： 元気がなく、うちしおれているさま。

弾丸に横線： 土中などから発見される弾丸。西軍は旋条銃で、発射により弾丸に旋条痕が残る。東軍は滑空銃も多く、弾丸に旋条痕が無いということ。

地元民は勢力地が入れ替わるままに、東軍にも西軍にも人夫として徴発された。

三斗小屋： 栃木県黒磯市三斗小屋。那須山中にある会津中街道の宿駅。現在は廃村。

太刀討ち： 真剣で人を斬ること。太刀打ち=真剣で打ち合う(闘う)こと。

大沼村： 大・久田野・大和田・本沼により発足。村域は阿武隈川を南北にまたぐ。のち白河市に合併。

掬： 白河市大掬目。

⇒【脚注】掬目

何でも： 「よくはわからないが」という意味の言い回し。

官軍の陣舎として接收されたことにより、家財の掠奪があったということだろうか？

谷津田川： 西郷村小田倉上野原に発し、大清水・原中・新幹線新白河駅の南を経て、登町から白河市街に入る。白井掛の北を東流し溪谷状をなし、遊歩道が整備されている。円明寺橋・八竜神を経て、掬目の感忠銘下で阿武隈川に合流する。

今の県道： 県道11号御斎所街道のこと。

桑蔵翁談によると、谷津田川と阿武隈川の合流点は現在よりも下流にあったようである。「土手」は掬目集落に沿った谷津田川の土手らしい。掬目の東軍と鹿島の西軍は、谷津田川と阿武隈川を挟んで600~700mを距て交戦。

後山： 掬目集落南の掬目山。

⇒戦闘要図【東軍の白河攻撃(第4次)】

内山【清子書込】黒川内山分家感忠銘： 高さ7.6m、幅2.7mの日本有数の磨崖碑。南朝の後醍醐天皇に生涯を捧げた結城宗広・親光父子の忠烈を不朽に伝えようとしたもの。題字「感忠銘」は松平定信書、撰文は藩校立教館教授広瀬典、書は賀孝啓。



おおぬま くぼ おう  
大沼村久保の邊見サト媼の談

戦争の年は21。

昼食を食べていると屋根に鉄砲玉がツトンとやって来た。ソレ大変と食を中止して逃げ出した。この日は6月12日である。戦争中、後の山麓に穴を掘って住まった。

私がおの穴にかくれていると。「男はおらんか」とやって来る。生きた様はない。久保の男みな郷夫に出て残るものは女ばかり。

そのうちに奥兵か官軍か判らぬが、傷を負うて血だらになってやって来て、休ませてくれという。私は飛び出した。後に見たら絶命していた。戦争というものは恐ろしいものだ。今でも当時の事を思うとザワザワする。

(久保地方の話によると、西軍は鹿島の裏の愛宕山に抛り、東軍は久保の愛宕山に抛りて対陣したという。6月12日の戦いは東軍不利で本沼に退いた。)

(今、畑の中、田の中に小銃丸が見付かる。久保方面の東軍の戦死者は六地藏の所に里人が合葬した。この六地藏の地は桜岡に面する久保の西で山王坂の入口である。)

6月6日大総督府の達によると、焼き討ちをして民を苦しめることは厳禁されているが、事実焼き討ちは行なわれた。

大総督府より諸軍への達書に云う

ぞくとついでう せつ たとえそうくつ かたくきんじ られ こと  
賊徒追討之節、縦令巢窟たりとも放火堅被禁候事

六月

かさんぼう  
大総督府下参謀

【p92】

久保： 白河市大くだい久保。白河城から東へ約3.7km。  
「男はおらんか」： 地元民を人夫に徴発しようと探している。  
生きた様はない： 生きた心地がない。恐怖のあまり自分の生死も実感できないという表現。  
郷夫： 地元農民等を徴発した人夫。

ザワザワする： 鳥肌が立つ、動悸、悪寒戦慄などの表現。

鹿島の裏の愛宕山： 戦闘要図から見ると、鹿嶋神社北方の荻ヶ山を指す？

久保の愛宕山： 白河市久田野向前山の愛宕神社がある山？

⇒【脚注】本沼

小銃丸： 小銃の弾丸。

六地藏： 白河市大観音前の路過か。

山王坂： 白河市大観音前から白河市久田野山王寺山へ向かう、観音山と三本松山の間の峠道。

達： たつし。通知。命令。

巢窟たりとも： 賊徒（東軍）の宿営になっていたとしても。

下参謀（かさんぼう）： 参謀に準じ補佐する軍職。戊辰戦争において、参謀に公卿などを名目上任命してしまうと、実務を行なう者を「下参謀」と称して事実上の参謀に任命した。

## 第13章 西軍棚倉城に迫る

6月14日、大総督参謀<sup>わしのおたかつむ あわはん</sup>鷲尾隆聚は阿波藩を率いて江戸を発し、6月23日白河に入り常宣寺<sup>じょうせんじ</sup>を本営とした。

(この頃奥羽追討総督は正親町公董<sup>おおぎまちぎんただ</sup>であることは前記のとおりであるが、7月5日に正親町総督が江戸を出発せざるうちに罷めて、7月9日に鷲尾大総督参謀が奥羽追討白河口総督<sup>おお</sup>に仰せ付かった。8月9日には鷲尾総督が罷めて、ふたたび正親町公董がこれに代わっている。

鷲尾総督の辞したのは所労<sup>しよらう</sup>の故であった。

御沙汰書<sup>ごさたしよ</sup>に

「依<sup>しよらう</sup>所<sup>により</sup>労<sup>めんぜ</sup>被<sup>られ</sup>免候事」とある。

また正親町陣中日誌に左の記が見える。

「鷲尾殿御不快につき御交代となる。」

正親町総督は8月7日参謀補助小代清八<sup>せきさん</sup>等を従えて江戸を出発している。

鷲尾大総督府参謀<sup>わしのお</sup>が白河に着<sup>ちやく</sup>して、棚倉攻めの軍議決し、翌6月24日、参謀補助板垣退助は薩・長・土・忍・大垣5藩の兵800余人を率い、大砲6門を以て棚倉に向かった。

追撃は関山前<sup>せきさん</sup>から二手に分れ、一手は薩藩150余人、土藩100余人旗宿通りとなし、一手はその余の兵をもって本街道すなわち郷戸<sup>ごうど</sup>通りをした。郷戸には東軍砲台を設けたが破られ、関山上からも大砲で西軍に対戦したが効がなかった。

(郷戸あたりの老人の話によると、関山<sup>せきさん</sup>から打ち出した大砲の玉は目に見えたものであって、着弾は遠くて南湖付近<sup>なんこ</sup>までであった、云々。

白河町の老人の話によると、八竜神<sup>はちりゅうじん</sup>まで達したのもあったと言っている。)

黒羽藩<sup>くろばねはん</sup>80人は、白坂村<sup>しらさか</sup>から中野村<sup>なかの</sup>に出で、白河よりの軍と合し中野の東軍を破り、また番沢<sup>ばんざわ</sup>で東軍と戦い金山村<sup>かみやま</sup>に至って本道よりの軍と合した。

金山村には仙台・相馬・二本松・棚倉の藩兵400余人備えていたが番沢の砲声に驚いて退却した。棚倉城の手前には砲台を築き、左右に伏兵<sup>ふくへい</sup>をおいて戦ったが敗北。棚倉藩は城を自ら<sup>みずか</sup>火<sup>か</sup>して退却した。

鷲尾隆聚： 1843～1912。公卿。勤皇志士を集めて高野山で挙兵。剣術を好み、山岡鉄舟とともに剣槍柔術永続社を設立。戦後中央官職・貴族院議員になることはなかった。

正親町公董： 正親町中将。1839～1879。中山忠能の二男として生まれ、正親町実徳の養子となる。のち議会開設に備え華族通款社を設立。

前記のとおり⇒【奥羽追討総督の任命 鎮台日誌から】

奥羽追討総督： 鷲尾隆聚は6月7日に「奥羽征討白河口総督」岩倉具定の後の「奥羽追討総督」に任命されたが、6月10日には鷲尾にかえて正親町公董が「奥羽追討総督」に任命され、鷲尾は「大総督府参謀」として奥羽追討総督に付くことになった。

鷲尾が参謀とされるのにもない、板垣退助・伊地知正治は「参謀補助」となった。

⇒別表「西軍の総督参謀」

阿波藩： 徳島藩（阿波・淡路2国を領国とする）。25.7万石。藩主：蜂須賀（はちすか）家。藩庁：徳島城。最後の藩主茂韶（もちあき）は襲封すると直ちに倒幕派を宣言、新式のイギリス式兵を奥州へ送ったが、藩論統一不十分で新政府主力にはなれなかった。

常宣寺： 白河市向新蔵。

所労： 疲れ。病氣。

このあたりの総督交代の真相はよくわからない。実質的に白河川の総督は、6・7月うちは鷲尾、8月からは正親町ということになるうか。

小代清八： 不詳。

関山の西で二手に分かれ、関山南側は脇道で旗宿経由、北側は本道で郷戸経由とした。

郷戸： 白河市関辺郷渡。白河城から南東へ約6.8km。

飛翔する砲弾が見えたという証言は生々しい。ただし、関山から南湖まで水平距離で4kmあまり。八竜神までは約4.6km。四斤山砲の最大射程は2600mであるから、着弾の話は疑問？

中野村： 越後高田藩領。のち古関村→白河市表郷中野。白河城から南東へ約8.2km。

番沢： 白河市表郷番沢。

⇒【脚注】金山

時に 24 日の正午。

### 西軍の記に

官軍の進撃頗る猛烈、朽ちたるを摧くが如く、云々

この日東軍の首級 15。長藩手負い 3 人、土藩即死 1 人、手負い 1 人。

これを見ても棚倉落城の易々たる事が察知できる。

### 阿部正功家記に云う

六月十五日、西軍の軍艦平瀧に上陸、金山口の兵、仙台藩二小隊、中村藩一小隊、純義隊二小隊を分かち、及 棚倉守衛の兵我が藩二小隊を以て中山嶺、御齋所嶺に遣りこの両道を防禦せしむ。是に於て使を三春・仙台等に馳せて援兵を乞ふ、来らず。云々。又二十四日 弘 暁、西軍大拳金山口に来る。我が藩各藩の兵を合併して、金山を本営とし白河道郷戸・中野両所に備ふ。この日西軍両道に分れ進撃、郷戸に迫ること最も急、我が兵防戦に勉むといへども、支ふる能はずして番沢に退く、於て是金山本営の兵を払って進む。西軍敗兵と混じ来る。故に我弁ずる能はず。西軍数歩に迫り防戦甚だ苦しむ。番沢は破られ、退いて松原の胸壁を保つ。砲撃死傷あり、会の隊長木村兵庫弾丸に殞る。此時純義隊小松村にありて戦を交へず。機を失す。中野の防戦また敗れ。両路の西軍一聚して番沢に火を放ち、我が右を遶りて松原を横撃す。衆寡敵し難く残兵を率ゐて且つ戦ひ且つ退く。逆川に至りて僅に備を設く。西軍も亦敢て進まず、暫時ありて又激戦す。此時弾薬殆んど尽き、二藩の援兵已に去つて寡兵支ふる能はず、一軍拳つて死を決す。然りといへどもも城兵寡にして苦戦祭すべし。遂に兵を収めて城下に退く。此日釜子の兵も南方に当りて砲声を聞き、本道に戦争あるを知る。直に間道を進んで横撃せんと南に向ひ疾馳す。而して社川暴漲進むを得ず。これにおいて棚倉の急を授けんと、川に沿いて、又東に馳す。此時西軍金山口を破りて能坂越の間道を経て棚倉城の西南に迫りて発砲頻なり。我が藩奮戦防禦すといへども、四方出兵の故を以て城中兵寡く城亦堅固ならず、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止自焼して逃る。此時金山の兵城下に及ぶ。城すでに破れて猛火蔓延し、却つて西軍の逆撃する所となる。因て山道を越え石川に退く。又釜子の兵疾駆堀之内村の境に到る。棚倉に方つて烟焰天に騰る

六月十五日～： 奥羽追討総督参謀の渡邊清が率いる西軍部隊が 6 月 16 日に太平洋岸平瀧に上陸したことを指す。

⇒【脚注】純義隊

中山嶺： 郡山市と猪苗代町を結ぶルート峠の峠。この当時は、現中山峠の北西にある楊枝峠を指していた。

上記のように、復刻版注は「中山嶺」を郡山・猪苗代間の「中山峠」としているが、西軍平瀧上陸に伴う棚倉防衛の配置としては不可解である。

磐城平から郡山への磐城街道

(国道 49 号線) が水石山の南の三和町合戸でトンネルになるところは古来難所であって、北側に「中山」という地名がある(いわき市三和町合戸中山)。阿部正功家記の「中山嶺」はこちらを指すのではないか。

⇒白河口戦争の地名地図

御齋所嶺： いわき市と石川町を結ぶ御齋所街道(県道 14 号線)の峠。

払って進む： 番沢に防衛線を敷くために、郷戸から退いた兵だけでなく、金山本営の兵を一段進めたのである。

弁ずる能わず： 退却する東軍と侵攻する西軍が混ざって来たので、区別して応戦することができなかった。

松原の胸壁： どこか？ 番沢と金山の間に「松上」という字があるが、黄金川の土手だろうか？

⇒【脚注】木村兵庫

小松村： 白河市表郷小松。番沢の北約 1.4km。

一聚： 一つにあつまる。

右を遶りて： 右へ迂回して。

横撃す： 側面攻撃した。

衆寡敵し難く： 相手は多数、こちらは少数なので敵わず。

且つ戦ひ且つ退く： 防戦しながら徐々に退却していく。

逆川： 東白川郡棚倉町逆川。金山から棚倉方向へ約 6.8km。

二藩の援兵すでに去つて： 会津藩・仙台藩の兵を指す。棚倉の防戦に参加せず独自に退却したのである。

寡兵： 少数の軍兵。

一軍ごぞつて死を決す： 棚倉藩兵は皆が死を覚悟した。

を見る。且つ落城の報を聞く。於此兵を収めて石川に退く。  
我が藩死者十一人。銃卒小隊長本多九左衛門、大砲士伍長奥原  
一、銃士三澤錦八郎、弾薬方内儀茂助、大砲士上田源八、銃卒村  
田磯吉、小林庄次郎、武川子之吉、農兵竹次郎、惣内、新吉。傷  
一人銃士田代金三郎。

勝敗は時の勢いである。棚倉藩の苦戦察すべきである。

また阿部正功家記に云う

五月三日、阿部養浩家族を携へて旧領銚衝村に避く。三日、  
美作守会津に往いて軍議す。  
六月二十四日、葆眞城を出で須賀川に至り、敗兵を聚め、二十六  
日同所を出発し、領分伊達郡保原村に宿陣す。二十五日、養浩  
銚衝村を發して会津に入る。二十六日、美作守会津を出で保原に  
宿陣す。家族藩中皆保原に移る。  
八月三日、葆眞僅に兩三人を従へ、領分出羽の山野辺に移住。同  
日美作守白石に入る。次で仙台に行く。十六日、養浩会津を出で  
て仙台に行く。

この記事によって、棚倉藩主一家の当時における動静が知られる。

ついでに白河藩主および棚倉藩主としての阿部氏について略記す  
る。  
阿部氏の祖は有名な忠秋公で隅田川を渡った功によって旗本から  
拔擢されて武州忍に封せられた。阿部氏の家老平田弾右衛門、隅  
田川渡りの時君公の馬に次いで渡る、代々家老となり弾右衛門を  
襲名した。

阿部正権

鐵丸と称し、文政6年松平氏に代わって武州忍より白河に  
入部。文政6年10月逝去。

阿部正篤

正権の養子となり、文政6年家督。天保2年退隱。同14年  
薨去。

阿部正瞭

正篤の養子。天保2年家督。同9年逝去。

[p98]

この日釜子の兵も～：釜子を守備していた兵は、南方に砲声を聞いて本道（棚倉街道）で戦闘が行なわれていることを知った。問道から進んで友軍を側面支援しようとなへ急行した。しかし社川が増水していたため渡れず、ならば棚倉城下を救援しようとして川に沿って東へ走った。

疾馳：急ぎ走る。

能坂越：小富士山の西南麓を通る道か？または棚倉町逆川原から棚倉町檜木へ至る道か？

四方出兵して～：平湯・平方面防備や白河包圍などへの出兵のため棚倉城の守備が手薄になっており、城の造りも堅固ではないので、やむをえず城を焼いて退避することにした。

このとき金山の兵～：金山から退いてきた味方兵が城下に到着した。しかし既に城は炎上しており、新たな態勢もかえって西軍に撃破される結果になった。

堀之内村：白河市表郷堀之内  
察すべき：事情を思いやって同情すべき。

銚衝村：福島県岩瀬郡かつて存在した村。合併で長沼町、のち須賀川市木之崎。

養浩：前々藩主阿部正備。

美作守：棚倉藩当主阿部正静のこと。会津若松へ赴き松平容保に面会した。

葆眞：前藩主阿部正外。

伊達郡保原村：寛保元年（1741）から伊達郡及び信夫郡の内15か村2万500石余が白河藩分領となる。保原に陣屋を置き支配。福島県伊達市保原町。

領分出羽の山野辺：山形県東村山郡山辺町。延宝9年（1681）から白河藩分領となる。

山野辺：山形県東村山郡山辺町。

阿部忠秋：1602～1675。6千石旗本から拔擢され忍藩5万石までになる。徳川家光・家綱の2代にわたって老中を務めた。松平信綱と長所短所を補い合って幕政に尽力したといわれる。捨て子を何人も拾って育て上げたなど、逸話が多い。講談「隅田川乗っ切り」は、忠秋と將軍家光の関係を示唆するもの。

文政6年：西暦1823年

文政：1818年～1831年。

天保：1831年～1845年。

薨去：皇族・三位以上の人が死亡すること。

嘉永：1848年～1855年。

阿部正備 まさかた

正瞭の養子。天保9年家督。嘉永元年退隠。明治7年逝去。養浩と号す。

阿部正定 まさきだ

正備の養子。嘉永元年家督。同年8月逝去。

阿部正耆 まさひさ

正定の養子となりて家督。元治元年逝去。

阿部正外 まさとう

阿部遠江守正蔵とおとうみのかみしょうぞうの長男。元治元年本家を嗣ぎ、老中加判かはんに列す。葆眞れつと号す。(阿部遠江守は旗本で、阿部氏の分家。)

阿部正静 まさきよ

阿部正外の長男。美作守と称す。慶応2年6月皇居警衛を命ぜらる。慶応3年棚倉たなぐらに移封いほう。

阿部正功 まさこと

正耆の実子にして正静の後を継ぐ。

元治： 1864年～1865年。

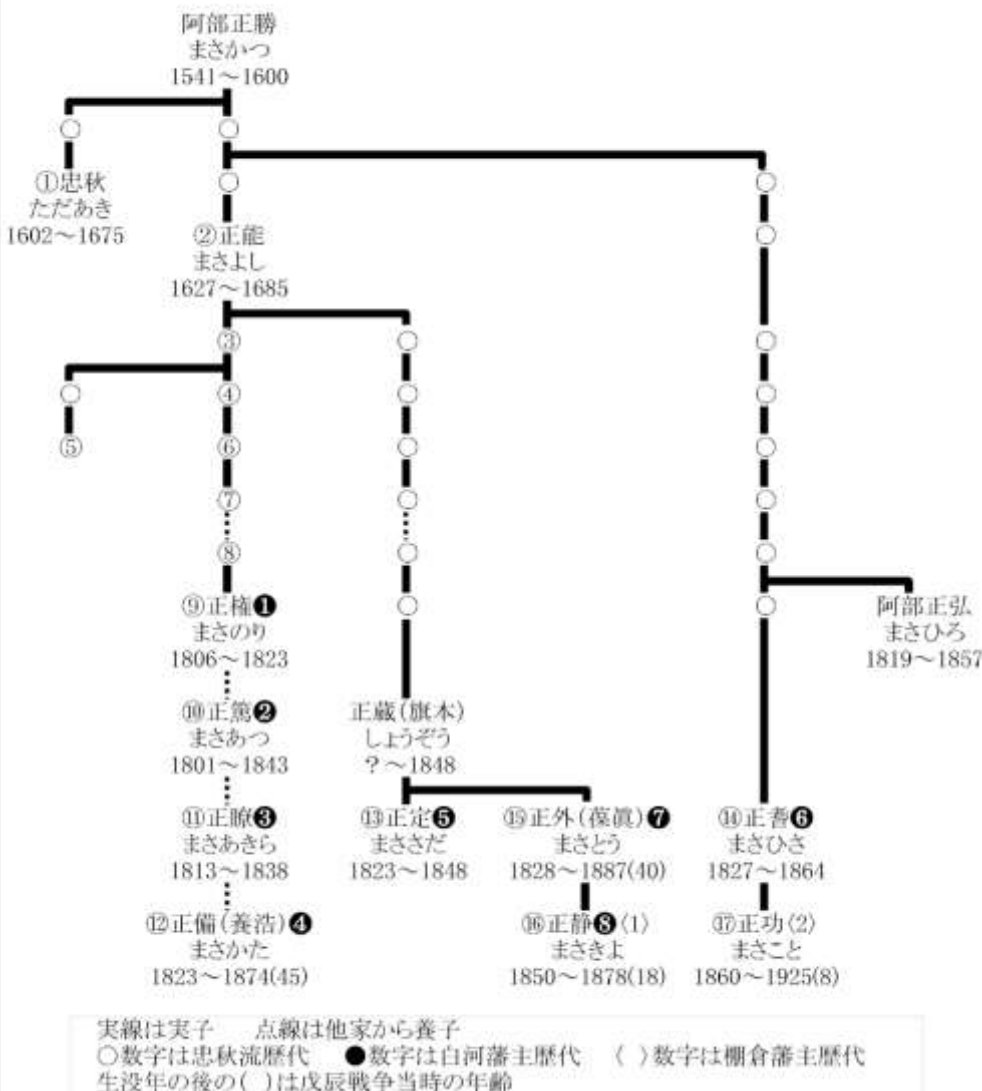
加判： 本来の意味は主君の上意を執行するにあたって、署名・押捺を行う職権を有する重臣をいう。江戸幕府では老中職のこと。

阿部正静： 1850～1878。父正外が兵庫開港問題で強制隠居となったため白河藩主を継ぐが、同時に棚倉へ移封される。戊辰戦争で棚倉が陥落すると会津へ逃避し、のち分領の保原陣屋で降伏した。東京で死去、28歳。

慶応： 1865年～1868年。

阿部氏歴代の関係がややこしいので、系譜略図を作成して貼っておく。

徳川譜代 阿部氏 系譜略図



【p100】

大統寺： 白河市馬町。

賢邦： 大統寺に賢邦の墓あり。明治22年5月14日没

阿部正篤（白河藩第2代）の妻聰姫〈さとひめ〉は薩摩藩島津斉宣の娘。白河口西軍の伊地知正治をはじめとする薩摩藩士は、棚倉攻略に先立ち、薩摩藩主と姻戚関係にある棚倉藩を恭順させようと図ったものであろう。

現地軍内からの告発があったのか、中央司令部から現地軍指揮官への通達である。

「さる24日、棚倉攻略の際、各藩のうちいずれの藩か不詳であるが、町家あるいは農家に立ち入って、金銀のほか衣類等を奪い取った者がいたという話が伝わっており、いったい（軍紀は）どうなっているのだという事態だ。かねて通達している禁止事項であるのだから、今後は必ず違反の無いよう取り締まるよう、（総督も）仰られている。」

これは6月の事件に対する通達であるが、その後7月、8月と掠奪・乱暴を禁止する通達は追加されており、無法行為は止むことがなかったものと見える。

正史に出ない掠奪・暴行は西軍東軍とわず多々あった。

そもそも、農繁期に労働力を軍夫などに徴発され、田畑を戦闘で荒らされ、（たとえ戦略的理由はあったにせよ）家屋を放火焼失されたのである。本来の生業である農事の基盤を破壊された。

そのうえ、東軍または西軍の兵士のために（たとえ有償であったとしても）なけなしの宿舎・食料を供出させられ、農村生活はさらに逼迫した。

この戦災と天候不順により、東北地方は明治2年に大凶作にみまわれる。戊辰戦争後10年あまり経ても、掘っ立て小屋暮らしの民が見られたという。

戊辰戦争の本質は武力集団どうしの「征伐」「権力闘争」であって、「郷土防衛」でも「解放戦争」でもなかったから、住民の保護などはこの次なのである。

この頃、白河大統寺の住職に賢邦というあり。薩人なるによりて、西軍と地方人との間に立って斡旋し、おおいに地方人に便宜を与えたと伝えられ、また西軍の参謀の使となって棚倉藩に恭順を勧めたとも伝えられている。

大総督府より、白河口出張の伊地知、板垣両参謀補助への達書に云う

戦争当時東軍も西軍も、白河地方のみならず至る所で鶏を取って食ったことは事実である。衣服金銀の掠奪も多少あったものであろう。

去る二十四日、棚倉落城の節、各藩之内孰れの藩に候哉、市中或は農家に立入、金銀其外衣服等奪取候徒も有之候趣相聞、如何之事に候。兼て被仰出候御箇条も有之候故、向後屹度取締可申旨、被仰出候事。

第14章 白河地方に砲声の絶ゆるまで

6月25日、長・土・大垣・黒羽の勢200余人棚倉城を出発して釜子の陣屋を襲ったが、陣屋の兵退散して一人も居らぬ。かくて陣屋は焼かれた。  
釜子村深澤利平氏編集『新古釜子』に、戊辰釜子の役を記して曰く。

釜子： 白河市東釜子。白河城から東へ約12km。  
現在地名の読みは「かまこ」。旧村名は「かまのこむら」。陣屋「かまのこじんや」。単に釜子は「かまこ」と読み、釜子村・陣屋は「かまのこ」と読むことにする。  
釜子陣屋（かまのこじんや）：釜子は越後高田藩領であり、陣屋が設けられて高田藩士が駐在していた。

⇒【脚注】高田藩  
戊辰戦争時、高田藩は新政府に恭順し、長岡・会津討伐の先鋒となって東北各地を転戦した。一方、釜子陣屋の駐在藩士は、周囲の状況から東軍に味方して戦うことになり、会津へも転戦することになった。これが「義侠」として伝えられている。

かくて陣屋は焼かれた： 陣屋奉行吉田茂衛門が、西軍攻撃の前に陣屋・藩士住宅を自焼したともいう。

⇒戦闘要図【第77図 官軍の棚倉北方地区掃蕩】

長州の田中隊： 指揮官誰か？  
栃本の大崎山： どこか？  
土手： 陣地の土塁。  
釜子の寺山： どこか？長伝寺の後山か？

刈敷山： 白河市東深仁井田刈敷坂。

成工： 完成。  
木之内山： 西白河郡泉崎村関和久木野内山。

瀬知房： 西白河郡泉崎村関和久瀬知房。

川原田： 西白河郡中島村川原田。

吉岡： 西白河郡中島村吉岡。  
天王山： どこか？

野出蕉雨： 1847~1942。はじめ会津藩士塩田牛渚について南宋画を学ぶ。京都勤番。戊辰戦争出役。明治10年ころから本格的に画作活動を開始する。会津能楽の中興の祖ともいわれる。

駄馬： 荷物運搬に供される馬

この日白河では～： 6月25日  
⇒戦闘要図【東軍の白河攻撃（第5次）】

⇒【脚注】丹羽長裕  
また棚倉北方の戦いの記述に戻る。二本松藩の記録である。

二十五日、長州の田中隊森永彌助、五十嵐庄太郎の率ゐる軍勢、釜子陣屋に入り込み、各所に於て砲火を放ち、陣屋並に民家を焼く。栃本の大崎山の西と東へ土手を築きたるは此の時である。又釜子の寺山、探仁井田の刈敷山に土手を築きたるは薩州で、人夫一日の賃金小二朱金一枚（今の六錢二厘五毛）の高給なれば、一日の中に成工せりといふ。湯長谷・二本松・仙台の兵に釜子陣屋の兵も加はり、阿武隈河の対岸木之内山・瀬知房・川原田・吉岡へ陣取、薩長軍は栃本の天王山、深仁井田の刈敷山より銃砲を放ち、互に戦ひしが、僅か三十分にして奥羽軍は退却せり云々。

昭和12年10月発行の会津史談会誌第16号に、釜子陣屋の義侠として野出蕉雨氏の談が掲げられてある。曰く  
余が白河方面の軍事方を勤めてゐた時に、釜子陣屋から軍用金として、一万両の提供を受けた。五回に亘り駄馬によりて、長沼の本陣に持参した。是がために白河方面の戦闘の軍資金は、殆んど藩の補給を受くることなくして賄ひ得た。又五月朔日の戦には、釜子陣屋は、立操隊長八木傳次郎が三十一人を率ゐて会津方に応援した云々。

この日、白河では金勝寺・根田・大谷地・米村方面に小戦があった。この日、会藩の総督西郷頼母、勿石に来たる。

丹羽長裕家記によれば、

六月二十九日、西軍弘暁霧に乗じて阿武隈河を渡り、川原田陣

當に迫つて砲撃す。急にして支ふる能はず。我が兵大に敗る。  
関和久の兵来りて応援す。彼既に退く。これより関和久・川原田  
の諸隊引いて須賀川に転戦す。この役本藩の死者銃士南部権之  
丞・渡邊新介・軍医桐生玄貫

とある。

西白河郡関平村の穂積誠氏の談によれば、

六月二十九日早朝、蕪内道より大垣兵発砲しつ押寄せ来り、  
関和久村の入口緑川久吉・鈴木馬之丞へ火を放ちて焼失せしめ  
た。また川原田・刈敷坂口より西軍押寄せたるため、村に駐屯し  
居たる奥羽諸藩の兵は驚き一方ならず、一戦も交へずに引揚げ  
た。引揚の時、下町の木戸元右衛門・木戸元兵衛方に放火し、た  
めに大混雑であった

という。

6月29日、仙台藩は七曲・小田川・矢吹を引き揚げて須賀川に  
屯集した。このとき仙台藩は矢吹駅が西軍の陣所となることを恐れ  
て焼き払う。

7月朔日、仙台藩の大立目武蔵・細谷十太夫等が会藩・二本松藩と兵  
を合わせて白河城の西に迫る。十太夫は天神町裏の胸壁を目あてに  
進んで発砲し、武蔵は白河城西の古天神の胸壁へ向かって発砲し、  
烈戦阿武隈川を渡って攻め入る。西軍敗れて立石山に退く。この  
日、二本松藩は夜半潜に堀川に宿陣して、白河の用水を絶って西  
軍を苦しめた。

7月朔日、羽太方面では、西軍は東軍の背後に出で、上羽太・  
下羽太・関屋の民家に火を放って東軍の根拠地を奪った。

この日の戦いに、有名な飯野藩森要蔵父子の義戦談が伝えられてい  
る。上総飯野藩は会津藩と同系の藩で、要蔵は飯野藩保科弾正の  
臣。かつて撃剣を千葉周作に学び、斯の道に達す。江戸に道場を開  
き、門弟千余人に及んでいた。会藩の急を救わんと72の老齢をもつ  
て、その子虎尾16歳とともに会津に入る。この日飯藩36人、土州  
八番隊と下羽太に戦う。要蔵老齢身を挺して進み、刀を揮って奮撃  
し、流血淋漓敵3人を屠って殛る。虎尾また奮戦したが、狙撃せら  
れ殛れた。武士の殉義称すべし。西軍の隊中に川久保南睦なる者  
があった。かつて江戸に在りて、しばしば要蔵と剣を試む。戊辰の

[p102]

関和久： 西白河郡泉崎村関和久。

南部権之丞： 二本松藩銃士。山奉行。6月29日川原田で戦死。40歳。

渡邊新介： 二本松藩銃士。儒者。梅窓。6月29日川原田で戦死。31歳。

桐生玄貫： 二本松藩軍医。忠道先生。6月29日川原田で戦死。56歳。

関平村： 関和久村・北平山村が合併し西白河郡関平村が発足。のち泉崎村。

蕪内： 白河市東蕪内。「蕪内道」は、御斎所街道の蕪内から北の関平村へ向かう道か。

下町： 関和久村の字か？

⇒ [\[脚注\] 七曲](#)

⇒ [\[脚注\] 小田川](#)

⇒ [\[脚注\] 矢吹](#)

⇒ [戦闘要図【東軍の白河攻撃\(第6次\)】](#)

大立目武蔵： 仙台藩。不詳。

⇒ [\[脚注\] 細谷十太夫](#)

天神町裏の胸壁： 白河市天神町の北西隣の仁井町・昭和町あたりに胸壁が設けられていたのか。

⇒ [\[脚注\] 古天神山](#)

⇒ [\[脚注\] 立石](#)

東軍は7月1日払暁、白河町西端に突入した。しかし西軍は態勢を立て直し、東軍を撃退するとともに、西方へ熊倉・真船・鶴生（白河城から西北へ約6.7km）まで追撃した。

堀川： 西白河郡西郷村米上堀川・下堀川・堀川向。県道37号線（白河羽鳥レイクライン）が堀川を渡るあたりの字。そこから約1.3km上流（白河市屋敷裏東・水神社あり）に白河町用水の取水口があった。

⇒ [\[脚注\] 羽太村](#)

飯野藩： 千葉県富津市。会津若松（保科）家の分流。2万石。

森要蔵： 1810年～1868年。森要蔵景鎮（かげちか）。一貫斎。熊本藩士森喜右衛門の六男で、江戸芝白金台の熊本藩江戸屋敷に生まれる。千葉周作に入門。のち江戸麻布永坂に道場を開く。上総飯野藩に剣術指南役として登用される。

虎尾： 次男。「虎雄」とも。

淋漓： したたり落ちるさま。



えき とほん 役、土藩司令官としてこの日の戦いに会す、その屍の要蔵父子であることを知った。また西軍の隊中に要蔵の門弟があったので、下羽太<sup>だいらゆうじ</sup>大龍寺に厚く葬った。

7月15日、東軍が白河城を襲う。泉田・小田川・金勝寺・大谷地の各村に小戦があった。

維新史に云う

七月十五日早天、賊兵来襲の状あり。白河駐守の官軍は、一隊を分ちて迂回せしめ、関和久の間道を経、小田川駅の山下に伏して賊の帰路を絶つ。既にして本道に戦あり。賊漸く退いて山下に至る。伏兵横撃して大に之を破る。賊兵狼狽、機械弾薬を捨てて潰走す。此日戦死傷算なし。官軍獲る所の首級五十余。大田川まで追撃す。

仙台藩記に云う

七月十五日、坂英力・真田喜平太等軍制を厳正し、白河を一挙に攻取らんと各藩へ布告、前夜より兵を諸道へ配り払暁より戦争。本道口、大松澤掃部之輔会兵合併二大隊余。新城口、中島兵衛之介。関和久と申処、並に棚倉口、塩森主税へ会藩辰野源左衛門等合併。総手一同進撃。先勢根田町入口にて討合。総軍苦戦、前日より大雨悪路に進撃難儀の処へ、官軍勢横手合の山手に潜伏と相見え、後より発砲。進路きわまり死傷者も多分に出し、鏡沼に引揚ぐ。死者十七人。傷二十人。

7月24日、東軍四、五百人、釜子駅に押し寄せた。この日の戦い、九ツ半から薄暮に至る。官軍の手負いわずかに2人。

7月28日、白河在陣の土藩の兵、湯本街道を巡羅。東軍は羽太・虫笠・真名子の各村の胸壁に拠って戦った。この日、高助方面まで戦場となる。各村の民家の焼かれるもの多し。これは西軍が東軍の根拠を奪うがためであった。この戦いを最後として白河地方に砲声<sup>ひびき</sup>が全く絶えた。

7月29日が二本松城の落ちた日である。されば二本松落城の頃まで白河地方に戦争があったのである。東軍は白河城を回復しようと努めたが、成功せずに終わったのである。

【p105】

川久保南端： 土佐藩。不詳。  
剣を試む： 試合をしたということ。

大龍寺： 西白河郡西郷村羽太屋敷（むじなやしき）。

⇒戦闘要図【東軍の白河攻撃（第7次）】

早天： 早朝。

来襲の状： 「状」は状態の意味。

西軍は本道（奥羽街道）の戦いで東軍を撃退することは予定のことであって、さらに東軍の撤退路で待ち伏せ攻撃したのである。

戦死傷算なし： 戦死傷者は数えきれない。

首級五十余は過大である。

⇒【脚注】大田川

仙台藩では7月1日に藩主の前で軍事会議を行ない、軍事総裁坂英力が藩主名代、真田喜平太が参謀として督戦することとし、総攻撃計画を立てたうえで7月15日の行動となったのだが、前日の雨で各隊は所定位置にも付けず、「攻撃中止」命令が錯綜するうちに正面攻撃隊も退却することになった。

新城： 上・中・下新城村。のち信夫村、のち大信村。白河市大信上・中・下新城。白河城から北東へ約9.8km。

⇒【脚注】中島兵衛之介

塩森主税： 仙台藩。不詳。

⇒【脚注】辰野源左衛門

総手： すべての部隊。

一同進撃： 一斉に進撃。ただしそれは予定であって、実際には諸隊の行動はバラバラであった。

鏡沼： 岩瀬郡鏡石町鏡沼。白河城から北東へ約19.3km。

釜子駅： 釜子の宿・集落。

九ツ半： 午後1時

7月24日から27日にかけては、棚倉・平潟の西軍部隊が阿武隈山地を抜けて三春（白河城から北東へ約42km）への進出を果たしている。白河を攻撃していた東軍はもはや取り残され、退路を断たれつつあった。

巡邏： 偵察・見回りのため歩くこと。パトロール。

⇒【脚注】湯本・羽鳥

湯本街道： 白河から羽鳥へ至る現在の県道37号線（白河羽鳥レイクライン）。さらに国道118号線が羽鳥から天栄村湯本を経て会津若松へ至る。

虫笠： 西白河郡西郷村羽太虫笠。白河城から北西へ約9.2km。

かい さしおきしなものあらため  
会藩士差置品物 改

なかまち にんずうとうりゆうちゅう  
白河中町熊田庄屋に、「慶応四年八月、会津人数逗留中宿々え  
さしおき しなものあらためちよう  
差置候品物改帳」というのがある。

4月20日に会藩は白河城を占領、それから5月朔日の激戦まで、  
会藩は前後40日間白河に滞在したものである。(慶応4年には閏  
4月があるので40日である。)

5月朔日の混雑に白河に差し置いた所持品が、白河地方に東軍の  
姿を消したその年の8月に品物改めが執行されたのである。その  
人数の多数なるに比して、その差置品の少きことは、いかに会津  
武士の用意の周到であったかを物語る資料とすべきである。

同記録によると

一 セイヨヲニツバント鉄砲 一挺

清三郎

これは八月二十五日一の堰と申所の杉林より見付申候。八月二  
十七日守山探索方日向梅次郎殿・熊田寅吉殿兩人え相渡申  
候。

一 半弓

矢 十一本

傳助

是は去る四月中、会津遊撃隊北原三郎様より預り申候。右兩人  
に相渡申候。

この記録によって、会津藩は火縄鉄砲を使用した外に西洋式の兵  
器も使ったことが判る。戦争前に会津には新兵器売り込みの西洋  
人が入っていた。また会津藩は慶応4年3月には、横浜のオラン  
ダ商人から780挺の洋銃を買い入れている。

守山藩は三春藩と相前後して恭順したので、その筋の命令で  
探索に任せられたものであろう。

一 脇差 一腰

林左衛門

是は出立之節、宿へ差置候。

【p107】

真名子： 西白河郡西郷村羽太  
の真名子地区。白河城から北西へ  
上前田まで約12km、上真名子まで  
約14.8km。

高助： 西郷村鶴生高助。班宗  
寺がある。白河城から西北へ約  
7.6km。

熊田【清子書込】猛夫（現旅館）

白河町の中町・本町は街道に面  
した表通りであったので、本陣を  
はじめとする旅籠があった。

会津藩兵・旧幕府兵による白河  
城占領は閏4月20日である（第6  
章に記述あり）。したがって、ここ  
に記された4月20日を基準にした  
「40日」という記述は錯誤であ  
る。正しくは「10日」となる。原  
著者は「閏月」も認識しているの  
に、どうしてこのような誤記をし  
たのだろうか？

セイヨヲニツバント鉄砲： 騎  
兵用エンフィールド銃か。エンフ  
ィールド銃は前装施条であるミニ  
エー銃の英国式派生型で、長銃身  
（3つバンド）と短銃身（2つバン  
ド）があり、日本人の体格に合っ  
た2つバンド型が幕末期大量に輸  
入された。「バンド」とは銃身と銃  
床を固定した金属帯のこと。

一の堰： 白河町の字と思われ  
るが、どこか？

守山探索方： 白河口の戦後、  
白河町民政は佐久山藩・守山藩が  
担当したため。

⇒【脚注】白河民政取締所

半弓： 7尺3寸（約221cm）の  
大弓（通常の和弓）より短い、6  
尺3寸（約191cm）を標準とする  
和弓。

⇒【脚注】守山藩

一 鉄砲 一挺

平蔵

是は去る四月中、会津遊撃隊出立之節、差置申候。

一 セイヨヲ剣 一振

脇差 一本

傳吉

是は石切山いしきりやまの川村文吉え、人数出立之節、差置申候。

一 しない 二本

與次兵衛

是は人数宿あいなりおりに相成居候ところ、出立之節座敷ざしきへ差置申候。

一 鳶口 一挺

本 三冊

政吉

右同断

(以上の記録は白河町全町にわたるものでなく、中町なかまちだけのもの  
であろう。当時戦乱おりの折、探索などとなれば、各家々では皆戦慄せんりつ  
して隠いしなく申し出でたものであろう。清三郎とか傳助とかは白  
河なかまち中町の町人の名前もうしでにんで、申し出人と見るべきである。)

セイヨヲ剣： 「西洋剣」小銃  
に付属の銃剣か。

石切山： どこか？ 白河市石  
切場？ 搦目山の石切山？ 西白  
河郡西郷村鶴生石切場？ それと  
も大谷地あたりの「石切山」？  
白河町は白河石（灰色の安山岩の  
一種）の産地であって、「石切山」  
「石切場」という地名はあちこち  
にあった。

しない： 「竹刀」と思われる

鳶口： 棒の先端に、鳶のくち  
ばし形の鉄の鉤を付けた道具。消  
火などで、材木をひっかけるのに  
使う。

原書「なれど」→訳「なれば」  
誤植と思われる。

白河口戦争にかかわる地名につ  
いては、できるだけ  
⇒[白河口戦争の地名地図](#) に採録  
したので、参照されたい。

# 第 15 章 板垣参謀三春に向かう

6月24日、板垣参謀は白河を出で、その日のうちに棚倉城を落し、滞在すること1か月、7月24日、彦根・長・土・忍・大垣・館林・黒羽等各藩の兵を率いて棚倉を出発した。かく棚倉滞在の長かったのは、棚倉地方鎮定のためではあるが、平潟口参謀渡邊清の軍が平地方を平定して北上するのと謀を合わせたためである。

大村藩渡邊参謀は、薩(876人)・備前(669人)・柳河(320人)・佐土原(3中隊)5藩の兵を率いて、東軍を小野新町に破って三春に進んだ。

## 鎮将日誌に云う

薩州藩届出(八月)

為三春城攻撃弊藩並大村・柳川・佐土原一同、去月二十四日、岩城平発軍。渡戸・上三坂へ宿陣。同二十六日 暁 二字に右総勢同所繰出進軍の処、仁井町手前に賊徒台場を築き致発砲候に付、弊藩十一番隊・三番大砲隊には頻に正面より発砲、十二番隊には右脇より散隊にて打掛、九番隊・私領一番隊は右山手より賊の後を取切。勿論諸藩総勢も前三口より致手配及攻撃候処、七字頃より八字頃までの間に台場乗取。賊徒致敗走候に付、同所より十五、六町先広瀬関門まで致進撃、十二字頃仁井町へ暫時人数相圓め、無程追軍候処、途中要地へ残賊屯集発砲候に付、悉く追払相進候折、最早夕六字頃と相成候に付、大越村に宿陣す。

三春城の儀、同日に棚倉表の官軍攻掛候処、不及一戦、城主秋田萬之助始、家中一同降伏確證も有之に付、二十七日岩城平表出陣の惣勢も三春城下に繰込み、両道の官軍会同仕候。尤於仁井町、弊藩戦死吉井甚之助一人有之、討取の賊は都合五人に及び申候。

渡邊参謀が広瀬口から大越を経て三春に入る時、著者の実父佐久間寅吉(田村郡牧野村)がこれを案内した。著者の父はまた三春藩勤王軍の一人なので大総督府から賜った大総督府印の肩章が今にあり、明治4年には三春県から左の感状を下付されてい

三春藩：陸奥国田村郡5万石。藩主：秋田家。藩庁：三春城(福島県田村郡三春町)。

渡邊清：1835~1904。大村藩士。東征軍監、奥羽追討総督参謀。三陸両羽警城按察使府判官。明治政府に出仕して福島県令など。貴族院議員。福島県知事。

謀を合わせる：この場合は「連携する」「連動する」というような意味。

小野新町：福島県小野町。(田村郡)

弊藩：自藩のことを、へりくだっている。

渡戸：いわき市三和町渡戸。  
上三坂：いわき市三和町上三坂。

二字：2時。  
仁井町：「小野新町」のことと思われる。

散隊：散兵隊形。  
私領一番隊：薩摩藩内では島津家分家などが小大名なみの所領を持ち、その家臣(私領士)をもっていた。私領士で編成した部隊が私領隊。

切り取る：敵軍の勢力を切り崩す。

乗っ取る：占領した。  
十五、六町先：1.6~1.7km  
広瀬：田村市滝根町広瀬。  
あい円め：集結して隊の人数点呼。

追軍：敵を追撃。  
大越村：福島県田村郡大越町  
棚倉表の官軍：棚倉方面から進出した板垣軍のこと。

確證：降伏・恭順するという誓いの証書。

吉井甚之助：薩摩藩十一番隊兵士。7月26日小野新町で戦死。19歳。

牧野村：田村市大越町牧野。

三春県：1871年廃藩置県により発足。まもなく平県に合併。1872年警前県に改名され、さらに1876年福島県に合併された。

る。

佐久間寅吉

戊辰<sup>ききゆう</sup>危急之際、国事<sup>べんれい</sup>ニ<sup>ほんそうしゅうせんじんりよく</sup>勉勵諸所奔走周旋<sup>さら</sup> 尽力之条、更<sup>せんぎ</sup>ニ<sup>もつ</sup>詮議ヲ<sup>にたいきんじゅう</sup>以テ二<sup>きゆうよ</sup>帯金銃一<sup>こと</sup>挺給与候事。

辛未<sup>しんび</sup>十月

三春県

[p111]

二帯金銃： 2つバンド型のエンフィールド銃と思われる。

辛未： かのとひつじの年。ここでは1871年。

蓬田： 福島県石川郡平田村蓬田。

田母神： 福島県郡山市田母神

下枝： 郡山市中田町下枝。

下枝通り： 下枝・貝山を経て三春へ至る。県道144号線。

河野広中： 1849～1923。三春藩郷士河野家(100石)の三男。三春藩帰順工作。自由民権運動。政治家。

⇒ [\[脚注\] 美正貫一郎](#)

直接に聞えた： [じかに聞いた](#)

「これまで奥羽の地は、日本の東北辺に都から遠く在るため、天皇の威信に服する傾向が薄く、そのため前九年役、後三年役のように中央政権から征伐される対象であった。このたびはまたも征伐を受けるようでは、いよいよ天皇の敵(反逆者)という位置づけが定まってしまう。薩長土藩の軍は錦旗を与えられているのだから、ここは恭順しないわけにはいかない。」

秋田家老： 三春藩執政の秋田主税(ちから)季春(すえはる)。1818～1900。藩主萬之助の叔父であり、後見となった。

豪家： 財産の多い家。その地方で勢力のある家。

室： 夫人

笠間藩： 茨城県笠間市。牧野家。8万石。

神谷陣屋(かべやじんや)： 磐城の神谷は、常陸国笠間藩の飛び領地があり、神谷陣屋が置かれていた。いわき市平中神谷(なかかべや)石脇。

陣屋の長： 戊辰戦争当時の陣屋長(郡奉行)は武藤氏が代々務めた。

戊辰戦争時に陣屋駐留笠間藩士50名の指揮をとったのは武藤甚左衛門。笠間藩は恭順して西軍だったため、陣屋藩士は東軍に包囲され苦難を被る事になった。

武藤甚左衛門忠信： 1814～1890。笠間藩士。神谷生まれ。

貝山村： 田村郡三春町貝山。

板垣参謀は7月24日、棚倉<sup>たなぐら</sup>を出発、同夜石川泊<sup>いしかわ</sup>、25日蓬田<sup>よもぎだ</sup>・田母神<sup>たもがみ</sup>に分宿<sup>したえだどお</sup>、下枝通り<sup>したえだどお</sup>をして三春に入る。

これより先、三春藩士河野広中(当時20歳)が棚倉<sup>きた</sup>に來り、土州断金隊長美正貫一郎<sup>だんきん</sup>に拠<sup>よ</sup>って三春藩主恭順の意を板垣参謀に通じたのであった。

著者は大正11年の夏、河野翁<sup>かしおんせん</sup>が白河甲子温泉滞在中に戦争当時の活躍を直接<sup>きこ</sup>に聞<sup>いわ</sup>えた。曰く、

当時三春藩は主戦論と恭順論との両派に分かれた。恭順論者は、「由来奥羽の地は東北に僻在して皇化に浴することが薄く、ために前九年役、後三年役と征伐を受けてきた。この度またも征伐を受けることは皇道に背く。西軍は錦旗の軍である、宜しく恭順すべし」と主唱し、ついに恭順派の勝利に帰した。かくして三春藩は一人の犠牲者を出すことなく済んだ。のみならず秋田家老を筆頭として100人の勤王軍を出した。

と語られた。

また曰く、

牧野村に猪狩次郎右衛門という豪家<sup>ごうか</sup>があった。これは三春藩5万石東部随一の富豪であり、かつ勤王家で恭順説に共鳴して居<sup>お</sup>った。かつ同氏の室<sup>しつ</sup>は常陸笠間藩磐城神谷陣屋長<sup>かさまはん</sup>氏の女<sup>かべや</sup>であるので、三春藩としては多大の便宜があった。佐久間寅吉のこの戦争に参加したのも猪狩家との関係からである云々。

と話された。

河野広中は板垣参謀の軍を三春郊外<sup>かいやまむら</sup>貝山村に迎えた。板垣の軍は南から三春に入った。平潟口の西軍は北から三春に入った。かくて7月26日、藩主秋田映季(萬之助)城を出でて降り、西軍は翌日城を収めた。ここに三春藩勤王軍百人隊は組織せられ、家老秋田主税こ

れを率いて、二本松城攻略の先導をなし会津に入る。

備前藩の伊丹内記が大総督府への届書によれば

平潟口西軍の三春に入る二手に分る。一手は一小隊薩・佐土原両藩広瀬通をして進撃。一手は柳川・大村両藩浮金通りをして進軍、柳橋に宿陣いたし翌二十七日三春に一泊。

とある。されば白河口の軍は三春の南から、平潟口の西軍は北からとは限らぬのであったか。

6月10日大総督府は参謀正親町中將をもって奥羽追討総督となし、木梨恒準（長藩）、渡邊清を参謀として海路より兵を平潟口に出さしめた。6月10日江戸出発。同16日平潟港着。6月28日に泉城を取り、29日に湯長谷城を抜き、7月朔日に平城を攻めて勝たずして退いた。

7月3日には大総督参謀四條隆諤が仙台追討総督となり、7月4日に正親町中將は総督を罷めている。

7月13日は平城を抜き、平潟口の西軍はこの勢をもって、一方は海岸線を北進し、一方は三春に向かった。海岸線北進の西軍は7月22日久之浜に着、8月朔日浪江に進み、8月4日中村藩を降して仙台追討に進んだ。（渡邊清は明治24年6月15日福島県知事となり、翌25年8月20日退職後勲功によって男爵を授けられた。明治27年12月逝去行年70。）

大山元師伝によると

弥介（当時の名）其砲隊を率ゐる田母神に宿営。二十六日三春に入る。八月二十三日、弥介会津大手門前に於て右股を貫通銃創し病院に入り、8月26日には三春龍穩院の病院に達し、その後三春より再び白河に入る云々。

この記事によっても、西軍の進撃の道筋が知られる。

[p113]

⇒ [脚注] 備前藩

原書「よれば」→訳「よれば」誤植と思われる。

⇒ [脚注] 広瀬

浮金： 田村郡小野町浮金。

柳橋： 郡山市中田町柳橋町。

正親町中將： 正親町公董。

⇒ [脚注] 正親町公董

⇒ [脚注] 奥羽追討総督

木梨恒準： 木梨精一郎。1845年～1910年。長州藩士。東海道鎮撫総督参謀。陸軍歩兵中佐。元老院議員、貴族院議員など。

⇒ [脚注] 渡邊清

原書「平潟口港」→訳「平潟港」誤記と思われる。

四條隆諤： 1828～1898。幕末期の攘夷派公卿。戊辰戦争では中国四国追討総督・大総督参謀・仙台追討総督・奥羽追討平潟口総督などを務める。各所鎮台司令。陸軍中將。貴族院議員。

仙台追討総督： 「奥羽追討総督」は白河口・平潟口を兼ねたが、正親町は江戸を発することなく罷免。鷲尾隆聚が「奥羽追討白河口総督」に任命され、平潟口は四條隆諤が「仙台追討総督」に任命された。

「仙台追討総督」は8月に「奥羽追討平潟口総督」になる。

⇒ 別表「西軍の総督参謀」

久之浜： いわき市久之浜

浪江： 双葉郡浪江町

弥介： 弥助。大山巖。

⇒ [脚注] 大山巖

龍穩院： 田村郡三春町荒町。秋田家の菩提寺。輪王寺宮通過にあたっては宿舎になり、戊辰戦争では傷病兵の病院となった。明治時代には自由民権運動の演説会場にもなった。

### 第16章 若松城ついに陥る

7月29日、西軍が二本松城を攻む。丹羽長國は米沢に去る。老臣丹羽一学等が苦戦するも城陥る。

二本松城を落した西軍はいよいよ大挙して若松城に迫る。8月20日、板垣・伊地知の両参謀は薩・土・大垣・佐土原・大村の各藩の兵二千余人を率い二本松・本宮を発した。この時平潟口・白河口両道の西軍は同一行動に出ている。(白河に守備した薩長土藩の兵が皆集中した。) 22日石筵を破り、猪苗代に殺到し、翌23日若松城を囲む。これより城兵は死守防戦に努む。

#### 復古記に云う

督府、大挙して若松城を攻めんとす。乃ち諸軍を部署し、参謀伊地知正治・板垣退助をして薩・長・土・大垣・大村・佐土原六藩の二本松に在るものをして石筵口より、館林・黒羽二藩の棚倉及白河に在るものをして三斗小屋より並進して若松に入らしめ、尾張・紀伊・肥前・守山四藩の須賀川・白河に在る者を長沼および牧之内に差遣し、機を見て勢至堂口より向はしむ。また備前藩兵の磐城平に在る者を若松・二本松に差遣す。又参謀多久茂族をして勢至堂口に赴き肥前藩の兵を督せしむ。

とある。

8月21日には大総督府は安芸419人・肥前300人・中津415人・今治138人の5藩の兵の日光方面に在る者をして、藤原口より若松城に向かわしめている。また大総督府は薩摩214人・宇都宮2小隊をも藤原口より若松城に向かわしめている。薩藩士中村半次郎(後の桐野利秋。)軍監としてこれを督す。

#### 鎮台日誌に

中村半次郎  
薩州、宇都宮両藩の兵隊藤原口出張につき軍監すべき旨、御沙汰候こと。

越後口方面においても諸所に西軍転戦し、9月10日は津川口より若

丹羽長國： 1834~1904。二本松藩第11代、戊辰戦争時の藩主。  
丹羽一学： 1823~1868。丹羽五郎兵衛富穀(とみたけ)。二本松藩600石、家老。戊辰戦争で徹底抗戦を主張。7月29日二本松の戦いで自刃した。

石筵： 郡山市熱海町石筵。西軍は石筵より進軍、母成峠の東軍を攻略した。

西軍は8月21日に母成峠を攻撃し撃破、22日には戸ノ口十六橋に到達、翌23日には会津若松城の北出丸に迫った。

母成峠突破の行路については、⇒白河口戦争の地名地図に推定を描き込んだ。

督府： 奥羽追討白河口総督府  
三斗小屋： 栃木県黒磯市三斗小屋。那須山中にある会津中街道の宿駅。現在は廃村。

会津若松への進攻は石筵(母成峠)口と三斗小屋口から並進させた。

三斗小屋へは、白河から那須越え、または板室へ迂回して至る。

あわせて中山峠方面の横川・熱海(郡山市熱海町)には、前日8月20日おとり攻撃がかけられた。

後軍として、須賀川・白河に在った軍を長沼・牧之内へ前進させ、機を見て勢至堂峠を突破させる、また磐城平から増援を若松へ送ることとなった。

尾張藩： 愛知県名古屋市。徳川家。御三家の一。61万9500石  
紀伊藩： 和歌山県和歌山市。徳川家。御三家の一。55万5000石。

肥前藩： 佐賀藩佐賀市。鍋島家。35万7000石。

守山藩： 福島県郡山市守山。徳川家。水戸徳川家の分流。2万石。

中津藩： 大分県中津市。松平(奥平)家。3万5000石。

今治藩： 愛媛県今治市。松平(久松)家。3万5000石。

藤原(ふじはら)： 栃木県塩谷郡藤原町。会津西街道の宿駅。(現在は栃木県日光市藤原)

中村半次郎： 1939~1877。城下士の中村与右衛門の第三子。父流罪、兄病死後は小作農で家計を支えた。京都で諸藩志士と交流。東征軍で城下一番小隊長。ついで大総督府軍監として藤原口へ派遣される。会津若松開城にあたっては受け取り役。戦後桐野利秋と改名し、兵部省出仕するが、西郷隆盛の下野に従い、鹿児島で開墾事業に従事する。西南戦争に参加し、薩摩軍を指揮して戦死。

松城に向かい、9月14日若松城を攻む。これより戦争ほとんど虚日なし。16日には米沢にある西軍また若松に至る。

会藩は包囲内に在ること1か月、四面全く交通を絶たる。この苦境に立って老幼も銃剣を執って力戦したが、城中糧食尽き、弾薬乏しくなり、また米沢藩来りて降伏を勧告するに及び、ついに議を決して降ることになる。

9月20日、若松城主松平容保はその臣手代木勝任・秋月胤永らを遣わして米沢藩に依って降を乞い、22日容保父子城を出て西軍に降った。

当時伊地知・板垣の両参謀の軍議は「奥羽は厳寒の地である。今より三、四十日も経たば、必ず降雪の期来るべし、もし仙台・米沢討伐のために徒に時を費さば、年内に賊根を断つことは困難に至らん、会津は根本で仙・米は枝葉である。根本を抜かば枝葉は憂うるに足らず」としてまず会津に向かったものであった。

両参謀のこの軍議を見るも、会津武士の団結とその精神が偲ばれる。

8月13日付の陸路白河口、海路平潟口の諸軍への御沙汰書に云う

奥羽は時季已に寒冷、且諸軍の奮戦にて、最早会賊孤立滅夷の秋至れり。依て海陸の諸軍合併戮力致し速に会津へ攻撃可レ有レ之旨、御沙汰候事。

但、会津平定後は更に策を定め、最前御沙汰之通速に仙台討伐勿論之事。

八月

とある。

白河地方人の談

若松城落城までは曇った日が多く、降雨も多かった。

また白河を上る西軍の士に会津は落ちましたかと聞くと、「まだまだ」と言って通った。云々

白河在住の旧会津藩士上野良尚翁の語るところによれば、『天はその中に降雪を以って会津を助けん、暖国の西軍憂うるに足ら

[p116]

津川：新潟県東蒲原郡津川町。会津（越後）街道の宿駅。阿賀野川の河港。（現在は東蒲原郡阿賀町津川）

虚日：ひまな日。

8月25日、越後戦線の会津藩軍に、会津若松が攻囲された報と退却令が届いた。これにより会津藩軍は、会津若松城籠城に合同すべく撤退を開始した。27日会津藩は只見川の線で防止しようとしたが、9月5日には西軍に打通され、9月10日から西軍越後口軍が会津若松に到達しはじめた。

米沢藩に対しては内々に和平工作が行なわれていたが、8月23日西軍の会津若松突入で事態は加速した。9月3日米沢藩は正式の降伏謝罪状を越後口総督府に差し出した。越後太夫浜（たゆうはま）に上陸した西軍部隊の主力は米沢口軍として、新発田を経て9月11日に米沢に達した。この米沢口軍は、新政府側に転じた米沢藩兵を加えて、9月16日に会津若松攻囲軍に合流した。

手代木勝任：1826～1904。手代木直右衛門。会津藩100石。京都守護職の公用人。のち若年寄。藩命により若松城を脱出、降伏交渉を行なった。

秋月胤永：秋月悌次郎。明治維新後、胤永と名乗った。原書〈たねなが〉→訳〈かずひさ〉。1824～1900。軍事奉行添役。のち第五高等学校教師など。

原書「因つて」→訳「依つて」

原書「出して」→訳「出て」

原書「立たば」→訳「経たば」とした。

戮力（くりくりよく）：力をあわせる。

「奥羽はすでに寒冷の時季に向かっているが、諸藩の奮戦によっていよいよ賊である会津藩を孤立させ、平らげ滅ぼすときに至った。よって海陸の諸軍は一体となって力を合わせ、すみやかに会津への攻撃があるべきである、との御命令があった。

ただし、会津を平定した後はさらに作戦を定めて、もとの命令のとおり、すみやかに仙台をも討伐すべきことはもちろんである。」

原書「但」→訳「但」

戊辰戦争白河口の戦いが行なわれたのは梅雨の時季だった。

上野良尚：白河町。会津藩士。田辺軍次墓碑、二本松藩戦死者碑の書を行なう。



ず、降雪を待つて決戦せん』と覚悟し、城中で<sup>たこ</sup>凧を上げて<sup>ゆうぜん</sup>悠然さを示したものであった」と。

六百余年にわたる武家政治の終わりの戦いとして、会津武士の奮戦はまさに我が国武士的精神の<sup>はな</sup>華であった。ここに至れるは藩祖正之<sup>まさゆき</sup>公以来代々の藩主の訓練の<sup>たまもの</sup>賜である。

『会津家訓十五箇条』

- 一、大君の儀、一心大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず、面々決して従うべからず。
- 一、武備は怠るべからず。士を選ぶを本とすべし。上下の分、乱るべからず。
- 一、兄を敬い、弟を愛すべし。
- 一、婦人女子の言、一切聞くべからず。
- 一、主を重んじ、法を畏るべし。
- 一、家中は風義を励むべし。
- 一、賄を行い、媚を求むべからず。
- 一、面々、依怙鼻息すべからず。
- 一、士を選ぶに便辟便佞の者を取るべからず。
- 一、賞罰は家老の外、これに参加すべからず。若し出位の者あらば、これを厳格にすべし。
- 一、近侍の者をして、人の善悪を告げしむべからず。
- 一、政事は利害を以て道理を枉ぐべからず。僉議は私意を挟みて人言を拒むべからず。思う所を蔵せず、以てこれを争そうべし。甚だ相争うと雖も我意を介すべからず。
- 一、法を犯す者は宥すべからず。
- 一、社倉は民のためにこれを置き、永く利せんとするものなり。歳餓うれば則ち発出してこれを濟うべし。これを他用すべからず。
- 一、若し志を失い、遊樂を好み、馳奢を致し、土民をしてその所を失わしめば、則ち何の面目あつて封印を戴き、土地を領せんや。必ず上表して蟄居すべし。

右十五件の旨 堅くこれを相守り以て往もって同職の者に申し伝うべきものなり

寛文八年戊申四月十一日 会津中将

家老中

藩祖正之公： 会津藩の初代、保科正之。1611～1673。第2代將軍徳川秀忠の四男（庶子）として生まれる。信濃高遠藩主保科正光が預かり、正光の子として養育される。異母兄である第3代將軍・徳川家光と第4代將軍・家綱を輔佐し、幕藩体制の強化に努めた。会津藩松平家の初代となるも、みずからは生涯保科姓を通した。『会津家訓十五箇条』を定め、「会津藩は徳川將軍に忠勤を尽くす存在であり、他藩の動向に惑うことがあってはならない。もし藩主がこの道にそむくならば、我が子孫とはいえない。そのような藩主に家臣一同は従ってはならない」旨を遺訓とした。

幕末の藩主・松平容保はこの遺訓を守って、佐幕派の中心的存在として戊辰戦争を戦ったという。

第 17 章 奥羽諸藩降る

9月4日、米沢藩は家臣毛利上総を遣わし謝罪書を越後口総督に呈した。

9月10日、二本松藩は白河口総督に罪を謝して、11日丹羽長國は寺院に謹慎した。

9月15日、仙台藩は家臣伊達将監を遣わして平瀧口総督四條隆譚の軍門に謝罪状を呈し、9月18日藩主伊達慶邦父子は退城して、城外に謹慎した。

9月18日には棚倉藩主阿部正静が仙台より領地伊達郡保原に帰り、家臣齋田兵太夫をもって罪を謝し降を乞うた。

棚倉藩主の謝罪歎願書

今般、私儀名分順逆を誤、奥羽各藩同盟仕、奉レ抗二官軍一、遂に棚倉城地を離れ、何共可レ奉二申上様無二なく、深くおそれり、たてまつり御座一、深奉二恐入一候。伊達陸奥様は同盟最寄之儀に付、一先仙台表へ罷越候処、右同人並に上杉弾正より厚く叡慮之ほどでんしょう、たてまつり程奉二伝承一、恐懼至極奉レ存候。素心勤王之外毛頭二念ござなく、御座候処、全遠境之僻土に罷在、春來天下之事情も隔絶仕、恐多も厚き叡慮之程も具に不レ奉レ伺、一時之行違より、終に今日之仕儀に立至候段、誠以奉二恐入一、悔二先非一謝罪仕候。随て兵器悉く差上、伊達郡保原村陣屋下寺院へ立戻、恭順謹慎罷在、家来末々迄屹度謹慎申付、奉レ仰二朝裁一候。此上は何分宜敷御処置被レ成候様、偏に奉二歎願一候。誠恐誠惶謹言。

九月十八日

みまさかのかみ  
阿部美作守

奥羽諸藩の謝罪状はこの様の型で大同小異であった。

9月22日、会藩降服の日、公現法親王には使僧仙覚院・松林院を四條総督の軍門に遣わして謝罪状を上った。ここにおいて四條総督は津藩をして親王の居館を守衛せしめ、10月12日に親王を江戸にお送り申し上げた。親王は後に御里の京都伏見邸に幽された。

親王は後の北白川宮能久親王に在します。

毛利上総： 上杉謙信の「越後十七将」に「毛利上総介」あり。代々名乗って仕えてきたものだろう。

原書「白川」→訳「白河」

⇒ [脚注] 丹羽長國

伊達将監： 1830~1874。伊達邦寧(くにやす)/留守邦寧(くるすくにやす)。伊達家一門(水沢伊達氏)。代々「将監」を名乗ったようである。戊辰戦争では、13代藩主慶邦の代理として白河口に陣出陣。戦争が始まると非戦論に傾く。

⇒ [脚注] 四條隆譚

⇒ [脚注] 松平(伊達)慶邦

伊達慶邦父子： 慶邦と養嗣子宗敦(むねあつ)。

⇒ [脚注] 阿部正静

⇒ [脚注] 伊達郡保原村

齋田兵太夫： 棚倉藩。【参考：慶安年中忍藩分限帳に「御者頭・三百石・齋田兵太夫」】

「このたび、私は名分・順逆を誤り、奥羽各藩と同盟して官軍に反抗し、ついには封地棚倉から逃げることでして、何とも言い訳もできない有様で、深く恐れ入っております。伊達氏は同盟の最寄りであることから、ひとまず仙台へ参りましたところ、伊達氏ならびに上杉氏から天皇の深いお考えを懇切に伝えられ、恐懼至極に存じます。もともとの心は勤王の他にあるはずもなく、まったく都から離れた僻地に居たため、年初以来の社会情勢からも隔絶されて、天皇の深いお考えも聞き知ることなく、一時の行き違いから、つい今日までの成り行きとなってしまう、まことにもって恐れ入り、先の過ちを悔いて謝罪するものです。したがって、兵器はすべて差し出し、保原陣屋の側の寺に戻って、恭順謹慎いたします。家来の末端まで厳しく謹慎いたしまして、朝廷の裁きを受けます。この様でありますから、なにぶんよろしく(寛大に)ご処置くださいますよう、ただただ嘆願し、謹んで申し上げます。」

名分： 立場・身分に応じて守らなければならない道義上の分限。

順逆： 従うこととそむくこと。特にそれが、道理にかなっているか否かということ。

伊達陸奥： 仙台藩主伊達慶邦  
上杉弾正： 米沢藩主上杉齊憲

恐懼至極： この上なく恐れ畏まって身が縮みあがること。

誠恐誠惶謹言： ハリくだった文書の結語定型の一つ。

9月23日、庄内藩主酒井忠篤も謝罪降服し、これにおいて奥羽越ごとごとく平定。10月29日、大総督熾仁親王は東北平定の状を奏し、錦旗節刀を奉還した。

12月に至って、奥羽越諸藩主の罪を断じて各々処分を言い渡した。大体からいえば寛典であったので、奥羽の諸藩は洪大の聖恩に感激した。時の詔にも「賞罰は天下の大典、朕一人の私すべきにあらず、宜しく天下の衆議を集め、至正至平毫釐も誤なきに決すべし」と仰せられている。

かくて会津藩主松平容保を鳥取藩主池田家に、容保の子喜徳を筑後久留米藩主有馬家に永預けとなし、仙台藩等各藩の所領をいったん召し上げて、さらに左記の所領を賜わった。藩主の家柄については藩主を江戸に謹慎せしめて血脈の者をして相続せしめた。その減封相続の例を挙げると

藩名	新所領	旧所領
仙台	28万石	63万石
米沢	4万石	15万石
庄内	12万石	14万石
二本松	5万石	10万石
棚倉	6万石	10万石

#### 白河町村社巖翁談

世上阿部藩が慶応3年棚倉に移封の際、6万石に減封されたごとく伝えられているのは誤りで、移封の時は10万石、戊辰戦争の処分によって6万石と減封されたものである。と

泉藩2万石、福島藩3万石、湯長谷藩1万5千石は各2千石の削封となった。

また平藩主安藤信勇を陸中磐井に移し、祖父信正を永蟄居に処し、会藩主松平容大には後に陸奥斗南3万石を賜い、明治2年5月14日に至り、会藩の重臣萱野権兵衛、仙台藩の但木土佐・坂英力、南部藩の檜山佐渡、山形藩の水野三郎右衛門、村上藩の鳥居三十郎、村松藩の堀右衛門三郎・斎藤久七等を斬に処した。

会藩の田中土佐・神保内蔵助、米藩の色部長門、庄内藩の石原倉右衛門、棚倉藩の阿部内膳、二本松藩の丹羽一学・丹羽新十郎、

【p121】

公現法親王： 輪王寺宮。

⇒ [\[脚注\] 公現法親王](#)

使僧： 使者として遣わす僧。

津藩： 三重県津市。藤堂家。32万3900石。

公現法親王は降伏謝罪後、実家伏見宮家での蟄居を申し付けられ、天皇猶子と親王の身分を解かれた。明治2年に赦され、ついで北白川宮家を相続する。陸軍軍人となるも、ドイツ女性との婚約問題で謹慎。謹慎処分解除ののちは天皇猶子・親王位を回復し、陸軍中將として台湾へ出征したが現地地で病死。死後台湾各地の神社に祭神として祀られた。(太平洋戦争後、台湾各地の奉祀社は破却。)

還俗したのは何時だったのか？

酒井忠篤： 1853~1915。出羽庄内藩主。幕末期、江戸市中取締役に任じられた。薩摩藩江戸屋敷焼き討ちは戊辰戦争のきっかけとなった。秋田藩・新莊藩・新政府軍を相手に戦い、ほぼ無敗のまま降伏。明治3年鹿児島を訪問、西郷隆盛に学ぶ。陸軍歩兵中尉。

⇒ [\[脚注\] 錦旗節刀](#)

罪を断ず： 罪に対して判決を下すこと。

寛典： 寛大な法的な処置。

洪大の： ひじょうに大きい。一面の洪水のように広大な。

「(戦争の)賞罰は天下の重要な法律である。天皇一人の思いで決めるべきではない。よく世の中の多くの人々の意見を集め、公正公平を尽くして、少しの誤りもなく決めるようにせよ。」

毫釐(ごうりん)： いささかも

永預け： 大名や親族等に終身預けの禁錮刑。

松平喜徳： 1855~1891。水戸藩主徳川斉昭の十九男。松平容保の養子。

減封(げんぼう)： 大名などに科せられた刑罰で、所領の一部を削減すること。

世上： 世間で。

⇒ [\[脚注\] 転封\(移封\)](#)

安藤信勇： 1849~1908。戊辰当時、藩実権は先代の安藤信正が握り新政府に敵対したが、信勇は上京して恭順した。戦後、平藩は岩井に移されたが、のち献金と引き換えに旧領に復帰した。

磐井： 岩手県一関市。

安藤信正： 1820~1871。幕末、老中として公武合体策を進めるが、坂下門外の変で負傷・失脚した。前藩主として藩を率い、奥羽列藩同盟に参加し西軍と戦う。

永蟄居： 公家・大名および陪臣などに科せられた終身刑。門を閉じ、部屋に引き籠って謹慎。

ながおか かわいつぎのすけ やまもとたてわき ざんざい ぎ  
長岡藩の河井継之助・山本帯刀らは既に死んでいるので斬罪に擬し  
て家名断絶とした。これらの重臣は皆各々その藩の責に任じたもの  
である。会藩は近年に至り鶴ヶ城址に萱野権兵衛の碑を建ててその  
霊を弔った。

明治2年9月28日、仙台・南部・二本松・棚倉等の各前藩主の罪を  
宥し、米沢・福島・泉の各前藩主を従五位に叙した。また公現法親  
王・徳川慶喜の謹慎を解かれた。

明治5年正月6日、松平容保・その子喜徳・松平定敬・旧二本松藩  
士丹羽富敬、会藩士秋月悌次郎等16人の罪を宥された。公現法親王  
は三品に、徳川慶喜は従四位に、仙台・南部・二本松・棚倉の旧藩  
主は各々従五位に叙せられ、東軍の諸藩等しく厚き天恩に浴した。

㊦

河井継之助： 1827～1868。河  
井秋義〈あきよし〉。長岡藩120  
石。郡奉行のち奉行格加判に抜擢  
されて藩政改革を主導。奥羽越列  
藩同盟に加わり、長岡藩兵を率い  
て戦うが負傷、8月16日只見・塩  
沢村で死去。42歳。

山本帯刀： 1845～1868。山本  
義路〈よしみち〉。長岡藩1300  
石。家老、軍事総督。北越戦争の  
殿〈しんがり〉を務め、会津飯寺  
〈にいでら〉の戦いで捕らえられ  
る。9月9日阿賀野川河原で斬首  
された。23歳。太平洋戦争時の連  
合艦隊司令長官・山本五十六は、  
のちの山本家の養子。

丹羽富敬： 二本松藩。不詳。  
秋月悌次郎⇒[\[脚注\] 秋月胤永](#)

三品： 親王の位の第三位。原  
書〈さんびん〉→訳〈さんぼん〉。

天恩： 天の恵みだが、ここで  
は天皇による赦免の恩情のこと。

【p123】

斗南： 青森県むつ市。会津藩  
降伏後、明治元年12月、陸奥上北  
郡・三戸郡・二戸郡のうち3万石  
が与えられ、藩士が移住した。  
会津藩20万石が斗南藩3万石とな  
った。むつ市円通寺に藩庁。

松平容大： 1869～1910。幼少  
時より御家再興の期待をかけられ  
るも、成長して激しく反抗、退学  
処分など。陸軍に志願、日清戦争  
に参加。騎兵大尉。貴族院議員。

萱野権兵衛： 1830～1869。萱  
野長修〈ながはる〉。会津藩1500  
石。家老。戦後飯野藩下屋敷で抗  
戦の責を負って自刃。39歳。

但木土佐： 1817～1869。但木  
成行〈なりゆき〉。仙台藩1500石  
奉行。藩財政再建、殖産興業。降  
伏後、反逆首謀の罪で逮捕斬首。

坂英力： 1833～1869。坂時秀  
〈ときひで〉。仙台藩一族844石。  
奉行。降伏後、抗戦の責を負って  
斬首された。

檜山佐渡： 1831～1869。檜山  
隆吉〈たかよし〉。南部藩（盛岡  
藩）家老。秋田領出兵の責を負っ  
て斬首。

水野三郎右衛門： 1843～  
1869。水野元宣〈もとのぶ〉。山形  
藩1300石家老。戦争責任を負って  
処刑された。

鳥居三十郎： 1841～1869。鳥  
居和祚〈まさよし〉。村上藩700石  
家老。戦争責任を負って切腹。

堀〈ほり〉右衛門三郎〈えもさ  
ぶろう〉： 村松藩家老。

斎藤久七： 村松藩。

田中土佐： 1820～1868。田中  
玄清〈はるきよ〉。会津藩2000  
石。家老。8月23日若松城下、土  
屋一庵邸で自刃。

神保内蔵助： 1816～1868。神  
保利孝〈としかか〉。会津藩1800  
石。家老。8月23日城下、土屋邸  
で自刃。53歳。

色部長門： 1825～1868。色部  
久長〈ひさなが〉。米沢藩1666石  
家老。新潟港管理、洋式武器購  
入。7月29日薩長軍の攻撃で自  
刃。

石原倉右衛門： 1827～1869。  
庄内藩中老。新潟で武器購入契約  
の帰途、新政府軍に包囲され死  
亡。藩降伏後、戦争首謀者とされ  
た。

⇒[\[脚注\] 阿部内膳](#)

⇒[\[脚注\] 丹羽一学](#)

丹羽新十郎： 1826?～1868。  
丹羽茂正〈しげまさ〉。二本松の戦  
いで自刃した。

㊦

## 第18章 西軍帰還の途白河に宿泊

東軍降伏となって、西軍は凱歌を挙げて各藩に帰ることとなる。これは会津落城の9月の頃から10月・11月である。白河では旅舎はもちろん、普通の人家・商家までその宿に当たった。今日の陸軍演習の宿割のようなものが永く続いたのである。宿料は一賄一朱、一泊が二朱くらいであって、料金は直にその藩から受け取ったもののほか、大田原受取とか、二本松願出とかがあった。

白河中町の熊田庄屋所蔵記録に「諸家様御賄調書上帳」、「薩州様御旅籠調帳」、「大田原請取分諸藩様御賄調」等がある。これは中町だけの宿泊調帳である。他はこれによって類推すべきである。今同記録を抄記して見よう。

十月十八日

- 一 備前三番小隊  
六人様 十八賄 金澤屋直左衛門

十月十九日

- 一 備前三番小隊  
四人様 十二賄 丸屋市兵衛

十月二十日

- 一 薩州四番隊  
十三人様 三十九賄 井柵屋吉兵衛

十月二十日

- 一 薩州四番隊  
上下十人様 三十賄 京國屋休兵衛

十月二十二日

- 一 鍋島様二番隊  
夜十九人様 朝十五人様 しめて三十四賄 さつまや佐助

十一月四日

- 一 薩州国分市郎右衛門様  
六人様 十八賄 浅川屋喜助

十一月七日夕、八日朝

- 一 岡本伴七様  
九人様 十八賄 小室屋常蔵

凱歌： 戦いに勝ったときに歌う喜びの歌。かちどき。

陸軍演習の宿割： 原書発行の当時、陸軍の大規模演習があると、旅館だけでは演習参加将兵を収容しきれないので、地元の民家へ割り振って兵士を数人ずつ泊ませた。

一賄： 食事1回分の供給。休憩場所の提供も含む？

一朱： 江戸時代後期に流通した長方形短冊形の銀貨である、一朱銀のこと。

大田原受取： 大田原は北関東における西軍の拠点の一つだったので、東北地方からの西軍引き上げを手配する事務所が置かれ、会計を担当したものか？

二本松願出： 二本松も手配拠点の一つか？

⇒ [\[脚注\] 熊田](#)

旅籠： 宿屋。ハタゴとは馬の飼料を盛る旅用の籠。のち旅の食糧を称し、それを提供する家。

この「～屋」というのは、西軍に宿舎を提供して代金を請求した者たちの屋号。宿屋ばかりでなく、他業種商家を含むかもしれない。

などである。士ばかりでなく馬も荷物も通った。宿泊せずに一<sup>ひとまかない</sup>賄の昼食だけで通過した者もあった。

## 同記録に

しめて金三十二両二分一朱百四十二文  
右之通御旅籠、被<sup>おはたご</sup>ニ下置<sup>くだしおか</sup>奉<sup>され</sup>レ請<sup>うけ</sup>候<sup>たてまつり</sup>。以上。  
辰<sup>たつ</sup>十一月 中町庄屋良助（印）<sup>なかまち</sup>

とあって、請取証<sup>うけとり</sup>にも武士階級に対する敬語がある。（慶応4年9月8日に明治と改元したのだから、辰11月は明治元年11月である。）

【p126】

庄屋がまとめて請求・領収して、宿舍提供者に分配したのだろうか。

ちなみに、太陰太陽暦（旧暦）から太陽暦（新暦）への切り替えは、「明治五年十二月三日を以って、明治六年一月一日とする」という改暦詔書が明治5年11月9日（西暦1872年12月9日）に出された。時刻法も従来の1日12辰刻制から1日24時間の定刻制に替えられた。

## 第19章 東西両軍の墓碑および供養塔

戦死之碑・供養塔は東西いずれの軍に属するものでも、等しく忠節に殉<sup>じゆん</sup>ぜるの忠<sup>ちゆうれい</sup>霊塔である。今の人その昔を偲<sup>しの</sup>んで香華<sup>かうげ</sup>を手向<sup>たむ</sup>くべく、後の人<sup>ご</sup>もまたこの志<sup>こころざし</sup>を継<sup>ついで</sup>いで忠魂<sup>ちゆうこん</sup>を慰<sup>い</sup>すべきである。

まず西軍の碑から記さば

## (1) 薩長大垣十三人之墓

碑石1基、白河町字松並<sup>まつなみ</sup>にある。いわゆる九番町<sup>くばんちやう</sup>口にある。碑名に

慶応四年

薩長大垣戦死十三人之墓

閏四月二十五日

とあった。(大正4年に小峰城<sup>こみねじやう</sup>の東、鎮護神山<sup>ちんごじんやま</sup>に薩藩戦死者7名の合祀後、「長州大垣藩戦死六名之墓」と改刻して現在に至る。)これは慶応4年閏4月25日の白河口戦争の第一戦で、戦死した西軍勇士の霊位<sup>れいゐ</sup>である。

明治9年6月、明治天皇奥羽巡幸<sup>おりの</sup>の折、御車<sup>ごくるま</sup>を駐<sup>とど</sup>めさせられて暫し<sup>しば</sup>弔<sup>しほ</sup>われた。

明治41年9月8日には、東宮嘉仁親王<sup>よしひと</sup>白河<sup>びやうけい</sup>に行啓。松並にその霊を弔<sup>しほ</sup>われた。

## (2) 長寿院西軍の墓

長寿院の塋域<sup>えいいき</sup>に薩・長・土・大垣・館林<sup>おのがき たてばやし さどわら</sup>・佐土原<sup>さどわら</sup>6藩の白河にて戦死した者、会津等にて負傷し白河にて死亡した者および病歿<sup>びやうぼつしゃ</sup>者の墓が116ある。内訳<sup>うちわけ</sup>して記さば薩が29、長が30、土が18、大垣13、館林7、佐土原19である。このうち薩藩のものは鎮護神山<sup>ちんごじんやま</sup>に移された。

墓碑は一人ごとに建てられ、姓名、卒<sup>そつ</sup>せし年月日、行年<sup>ぎやうねん</sup>等が刻されている。この墓に詣<sup>もつ</sup>でる者誰でも、若<sup>わか</sup>きは十六・七歳多くは二十歳前後の青年武士が勤王の志を抱いて、遠く奥羽の地に苦戦した忠誠<sup>ちゆうせい</sup>に感ぜしめられる。明治30年頃までは切り髪<sup>きりがみ</sup>に黒縮緬<sup>ちりめん</sup>の紋付羽織<sup>もんつき</sup>を着た未亡人や遺族等の墓参もあったと伝えられるが、歳月<sup>へ</sup>を経る今は縁者<sup>えんしや</sup>の弔<sup>しほ</sup>うものは更<sup>さら</sup>に見えない。されど地方人<sup>ちほうじん</sup>の志ある者は香華<sup>かうげ</sup>を手向<sup>たむ</sup>けている。

⇒目<sup>め</sup>でみる戊辰白河口戦争の記録【d00 ■供養碑・墓】

忠節： 主君への忠義をかたく守ろうとする気持ち。

忠魂： 忠義を尽くして死んだ人の魂。また、忠義の精神。「忠義」が当時の社会正義の柱であった。現代的には、社会正義に殉じたと解すべきか。

⇒【脚注】松並

九番町： 白河市九番町。南から来た奥州街道は、松並・九番町・七番町・三番町…と白河市街地へ入って行く。

鎮護神山： 白河城内の丘陵の一部。天明4年松平定信が、藩制定綱を祀る鎮国大明神を造営したのが、地名の起り。

合祀： (幾つかの神・霊を) 合わせてまつること。

のちに薩摩藩戦死者を他藩と分離して改めて合祀した経緯は？ 西南戦争に関連あり？

奥羽巡幸： ⇒【脚注】『東巡録』

御車： この巡幸の場合は、馬車のこと。

東宮： 皇太子。後の大正天皇。1879~1926。

行啓： 天皇の行幸に対して、太皇太后・皇太后・皇后・皇太子・皇太子妃等の外出・旅行。

長寿院： 白河市本町北裏。

塋域(えいいき)： 墓地。

⇒【脚注】佐土原藩

卒： おわる。死ぬ。

行年： 「行年」とは、この世に生まれて何歳まで修行したかの表示で、「享年」とは、天から享けた年数の表示とされるが、それぞれ「数え年」か「満年齢」かで計数は違ってくうえに、実際には混同して使用されている場合も多いと思われる。数え年が一般であった当時は、数え年が表示されることが多かったと思われる。

切り髪： 近世から明治にかけての婦人の髪<sup>かみ</sup>の結い方の一つ。髪を頭頂で束ね、鬘<sup>まげ</sup>を結わずに先を切りそろえて下げておくもの。未亡人などが出家の意味で結った。

縮緬： 平織の絹織物で、横糸に撚り戻しを生じさせ、布面に独特のちぢみを生じさせたもの。

紋付羽織： 家紋が付された羽織。江戸時代に武家社会で略礼装だったが、中期より庶民の礼装として用いられるようになった。

地方人： 首都以外の地域に住む人々。ここでは特に白河地方に住む人々のこと。

白河に戦死した行年22歳の土藩辻精馬友猛の墓石に和歌が誌されて

つゆとちるいのちもなとかおしからむかねてきさげし  
都由跡知流、伊笑智母奈膳香、遠羊蹄加良武、蚊弥而佐佐宜之、  
わがみとおもえぼ  
和我美登於毛倍婆。

ある。

長藩野村傳源頼睦の辞世として

今さらにいふことのはもなかりけり  
み国の露と消ゆるうれしき

と尽忠報国の精神を詠じている。116名の心情皆かくの如くであつたらう。

明治9年6月、聖駕東巡の際扈從した岩倉具視・大久保利通・木戸孝允等のこの寺院に立ち寄られて弔霊した事は、墓地入口の石燈籠に依って知られる。石燈籠は2基ある。一基は大久保利通の献燈で

今夏六月 龍駕東幸。利通 奉 陪從先發之命。途 經 白河駅  
一、詣 戊辰之役官兵戦死者之墳墓。茲 奠 燈台一基、  
謹 表 追弔之意。云。  
明治九年五月廿八日 大久保利通

一基は岩倉右大臣・木戸顧問の献燈で

明治九年丙子六月  
龍駕東巡扈從之次、過 于此弔 戊辰戦死諸子之靈  
從一位 岩倉具視  
從三位 木戸孝允

長寿院が西軍の墓所となった因縁は、5月朔日の激戦の日に白河町寺院住職の多くは避難せしが、当寺の住職が豪胆で寺院を守り居たれば、西軍この寺院に戦死者を託して回向を請いたるによると伝えられている。什物として「六藩戦死者の画像」がある。皆総髮姿である。荷翁の筆である。

### (3) 白河役陣亡諸士碑

長寿院西軍墓畔にある巨碑で明治25年の建設である。島津・毛利両公をはじめ、この役に参加せる板垣退助・川村純義・大山巖等の発起によつた建碑である。碑銘は

【p129】

辻精馬： 土佐藩。7月1日白河湯本口で戦死。『殉難者名簿』には「25歳」とある。

墓誌の和歌： 万葉仮名で表記。「露と散る 命もなどが惜しからむ かねて捧げし わが身と思へば」

野村傳： 長州藩。9月10日会津若松で戦死。24歳。

辞世： もとの意味は、この世に別れを告げること。ここでは、死に臨んで、この世に詠み残す和歌、辞世の歌のこと。

「今さらに云ふ言の葉も無かりけり 御国の露と消ゆる嬉しさ」

尽忠報国： 君主への忠節を尽くし、身命をささげて国家の恩に報いること。

聖駕・龍駕： 天子の乗り物。東北地方を巡幸する明治天皇を指す。

扈從・陪從： 天皇に随行する。

⇒【脚注】岩倉具視

大久保利通： 1830～1878。大久保一藏。薩摩藩。精忠組活動。藩参与。京都の政局に関わり、明治政府では参議、のち初代内務卿など。版籍奉還、廃藩置県、地租改正、徴兵令などを実施。

木戸孝允： 1833～1877。桂小五郎。長州藩。藩内の尊王攘夷派の指導者。藩外交の最高責任者として京都で活動。明治政府に総裁局顧問専任として迎えられる。版籍奉還・廃藩置県など実施。西南戦争の半ば、京都出張中に病死。

「今年の夏、天皇の東北地方巡幸にあたっては、大久保利通が随行者としてまず先発を命じられた。途中、白河町を経る際に、戊辰戦争での官軍戦死者の墓に詣でた。ここに燈籠1基を供えて、謹んで追弔の意を表すものである。」

白河駅： 鉄道の駅ではなく、街道の宿駅の意味。

追弔： 死者の生前をしのみ、その霊をとむらうこと。

顧問： 新政府の初期の体制で総裁局顧問。庶政全般の実質的な最終決定責任者。総裁は熾仁親王、副総裁は岩倉具視と三条実美。新政府初期の体制は変遷が大きく、明治9年当時で岩倉右大臣、木戸顧問とするのは不適當？

丙子〈へいし〉： ひのえね。干支の一つ。

「天皇東北巡幸に随行の途次で、戊辰戦争で戦死した諸士の霊を弔いつつ通る。」

豪胆： きもがすわっていること。危険・困難に臨んでも、大胆に物事を処する態度。

⇒【脚注】回向



えきじんぼう  
白河役陣亡諸士碑

えんきゆう だいくんいたるひと てんがく  
捐躬報国 陸軍大将大勲位熾仁親王篆額

ちゅうこう ろくし はじめにえど じょうをおさむ きょうじゆん  
戊辰中興之元年春、六師東征首収江戸城。徳川氏恭順  
しゃがい しこうしてよぞくなおうえい ざんにより くだら ず すなわちこれを げきせん さきにこの  
謝罪。而余賊尚 抛東叡山不降、乃撃殲之。先是

ぶんぐんりょうそう じょうやのかんをてんせんし おおうに しんじゆんす がっしょうめいに  
分軍転戦両総常野之間、進徇奥羽。奥羽諸藩合従方

そむき じつはこれを めいしゆ となす ほざん またいきてこれに どうじ  
命、会津仙台実為之盟主。幕府逋竄之徒又往投之、

ともにおうしに あらがう おうの いんこうにあたり ちせいけんよう  
共抗王師於白河城上。城当奥羽咽喉、地勢險要、賊

きよくりよくきよしゆ すすみたかうも ふり しりぞいてあしのに つぐ さく へいを  
極力拒守。官軍進戦不利、退次芦野。五月朔、縦

したげさんどう より いきこれを せうそう ほうはなはだえい あいづ せんだいにほんまつたなぐらどうの  
兵自三道往襲之。鋒甚鋭、斃会津仙台二本松

へいろつびやくはちじゅうよにんをたおす ぞくささう あたわ ず しろを すてのがれる すなわち  
棚倉等兵六百八十余。賊不能支、棄城遁。官軍乃

はいりこんきよと なし えいを たくわえしんしゆ をぎす ぞくはわが かへいなるをさし  
入為根拠、蓄鋭議進取。賊察我寡兵、大举

かこみ きたり すうせん にんをあつむ しかるに ろつびやく よにん にすぎず しらさか  
来围、衆数千。而官軍不過六百余人。備

えきに へいをそなえ ぞくをして わがぐんのうしろを たつこと なからしむ じらい ちゅうや  
兵白坂、使賊勿断我軍後。爾来砲戦累

だいしょうすうじゅうごうをかさぬ まいせんすなわちり あり すでにして ひましにいたり ぞくせい  
昼夜大小数十合。毎戦輒有利。既而官軍日益至、賊勢

ひにいよいよつまずき しりぞいてその じょうさいをたもつ べつたい かいりく により  
日愈蹙、退保其城。六月官軍別隊、由海路

ひらかた にたっし たいら じょうをせめ これを めき まさにもつてしらかわ ぐんにおうずる なり  
達平潟、攻平城、拔之、将以応白河軍也。二十

をほし  
四日發薩長土大垣佐土原館林黒羽七藩兵千余人、撃賊於

をうち いきおい にじょうじたながら じょうをくだす これに おいて ことごとくにほんまつ  
関山、乘勢下棚倉城。於是海陸諸軍悉会

じょうかにかいし とともにせめてその しろをぬく すなわちわけてにぐん となし いちはてんぐ  
二本松城下、俱攻拔其城。乃分為二軍、一由

すもうとりやまより いちはさるいわ ならびにぼなりほんどうより しこうしてさんべつこのころいちぐんはさんど  
天狗角瓶山、一由猿嶮竝保成本道。而三別遣一軍由

ごやより すすみてともにあいづ をうち ついによく とうへい のこう そうするをえ たり  
三度己屋、進共討会津、竟能得奏蕩平之功焉。

このえきぜんご じんぼうはなはだおおし しこうしてしらかわ ちようじゆいんにえいしする もの およそ  
是役也前後陣亡甚多、而瘞屍白河長寿院者、凡一百

ぼじょうにただそのせいめい をこくするのみ いまだ そのじせきを しるすにおよぼす  
十五人。墓上惟刻其姓名、未及録其事迹。

ここに おいて および その えきにかかわる もの がいぜんざいを かいしもつてその  
於是七藩旧主及当時関其役者、慨然会財以凶

ふきゆうをはからんと よに ぶんを ちようす ああ へん ちらんの  
其不朽、徴文於余。嗚呼戊辰之變、天下治乱之

わかるどころ しこうして そつせんしやくれい また えんきゆうほうこくをもってこうぎょうを  
所判、而勤王諸藩率先踴厲、諸士亦皆捐躬報国以贊襄

さんじょうす これこつかりゅうらんのいたすところと いえども しこうしてそのれつまたたくい ひじょう  
鴻業。此雖国家隆運之所致、而其烈亦可謂

というべきかな いま なり かいだいまたかいあん おうか とうじをついかい  
卓偉非常哉。今二十五年矣。海内又安、庶民謳歌、追懷

すること かくせい のごとく こうなり しこうして のち ものかわりほしうつりて かんなんの  
當時、恍如隔世。而百年之後、物換星移、艱難

いせきあるいはまさきにんめつ にきさ ンか これこのきよ ゆえんしく べから ざるなり めいいわく  
遺跡或將帰乎湮滅、此是举之所以不可已也。銘曰

ゆういけいじょう ほくが はら こうこうれつし ここにそのこんをとどむ いくんいしにめいし  
有蔚佳城白河之原 煌々烈士爰留其魂 遺勲銘石

さんがくともにそんす  
山岳俱存

じんしん  
明治二十五年壬辰十一月

しげのやすつぐせん  
従四位勲四等文学博士重野安繹撰

あきもとおきとも  
弁理公使従四位子爵秋元興朝書

【p131】

什物： たからもの。元の意味は「日常の器具類」のことだが、禅宗寺院の所有する器財のことをいうようになり、転じて寺などに伝わる宝物の意味にもなった。

「六藩戦死者の画像」⇒目で見ると戊辰白河口戦争の記録

総髪： 髪の毛全体をのばし、後頭部でたばねて後ろに垂らす。

荷翁： 白河町の絵師。鶴沼舒嘯(くぬまじよしゅう)。

陣亡： 戦争に従軍して(戦陣にあって)死亡すること。

⇒[脚注] 捐躬

篆額： 石碑の上部に篆字で彫りつけた題字。

中興： 天皇政権が再興されたことを指す。「建武の中興」にも擬している。

六師： 東海道など六道への鎮撫征伐の軍(師)。

両総常野： 上総・下総・常陸・下野(千葉・茨城・栃木県)。

進徇： 進み巡る。侵し広がる

合従： 中国戦国時代の外交である合従策より。強大なものに対抗するための連合。

方命： 命令に方く(そむく)。

逋竄(ぼざん)： 逃げ隠れる。

投じ： 仲間となる。

王師： 天皇の派遣した軍隊。

次ぐ： 宿営する。

朔： 月の初日。ついたち。

縦： 操縦の「縦」。意のままに操るの意味。従える。

鋒： 軍勢の勢い。

支う能わず： 守り切れず。

進取を議す： 方策を検討した

毎戦、利有り： 戦うごとに戦果を得た。

抜く： 陣地や城を撃破する。

応ずる： 呼応・合流する。

下す： 降す。

海陸諸軍： 白河口・平潟口の諸軍。

天狗角瓶山(かくしざん)： 天狗角力取山(すもうとりやま)。石筵より母成峠東方のルートにある。「角瓶」は漢文的命名表現。

角瓶(かくし)： 『和名抄』に「角瓶今之相撲也」とある。

猿嶮(岩)： 勝岩ともいう。保(母)成峠の西南。伊達路(二本松方面へのルート)にある。

三度己屋： 三斗小屋。

蕩平(とうへい)の功： 敵を完全に除くという功績。

瘞屍(えいし)： 屍をうずめる。つまり死亡するという意味。

慨然： 公憤を覚えて憂え嘆くさま。

財を会し： 資金を出し合って

余に文を徴す： 私が文を任された。

この巨碑の竣工して除幕式の行なわれる時、陸軍の軍楽隊も来り、

おおやま  
大山大将ら戊辰の役に関係あるの士参列して 頗る盛大のものであつ  
たと本町の佐久間平三郎氏は語る。

ちようじゆいん  
長寿院に明治33年、三十三回忌の霊祭が催された時、海軍中将伯  
爵川村純義（戦争当時の川村与十郎）、文部大臣樺山資紀らが臨席  
し、二氏また左記の書を長寿院に遺してある。

ながれ  
徳川氏の流の末は乱るる世となりて、其 政 を朝廷に還し 奉  
り御代一統になり、大義名分を正しくせしに、豈凶らんや、再び  
大軍を起し都に入らんとせしが、鳥羽伏見の戦の初、大内山に  
錦旗の御旗 翻し征討の命を下し給ひ、八幡・山崎より難波の城  
も追攘い、東海・東山の両道に王師を向はしめ、終に江戸城をあ  
け渡せしといへども、残党国々に抛り王師に抗し、この白河を要  
し大戦に忠勤を抽で、国の為に斃れし人々を長寿院に葬り、其  
戦功も 尠からず、遂に奥羽鎮定し、朝廷より厚く祭祀を賜はり、  
実に慶応四年五月朔日、此の白川を陥落せし当日にて三十三回忌  
の祭典を催し、同従軍者にして今に生存せる有志とも 交も集り  
て、なき人々の忠魂を慰めんと、旧藩主初夫々よりも祭典料を  
捧げられ、海山の種々を供へ、なき人々の御霊を 慰めまゐらせん  
となむ。

明治三十三年五月二十八日

海軍中将正二位勲一等伯爵河村純義

国のため捨てしその名は白川の清き流に名をとどむらん

かばやま  
樺山文部大臣は「慰忠魂」の三字を大書し、「明治三十三年五月二十  
八日、樺山」と書かれてある。いずれも長寿院に現存。

長寿院には明治の末期まで毛利家より年々供養料 金若干を送られ  
たが、今はその事が絶えている。

#### (4) 薩州藩の碑

こみねじょうし  
小峰城社本丸の東、鎮護神山に薩州藩戊辰戦死者の合葬碑がある。

「戊辰薩藩戦死者墓」と題す。碑の高さ8尺、石質は花崗岩、筆者  
は大勲位侯爵松方正義である。碑の裏に三春・磐城・平・花見坂・  
長寿院合葬とある。すなわち大正4年11月に旧薩藩士等相謀り白  
河口の花見坂（白河松並）、にあった薩長大垣13人中の7人と、三  
春にあった者、磐城平胡麻沢にあった14人、長寿院のものとを合  
して葬った。巨碑の台石に各々戦死の場所、所属隊名、氏名等が  
詳記されてある。いずれも遺族が内務大臣の認可を受けて白河に改  
葬したものであると伝える。薩藩のこの種のことは会津若松融通寺

【p134】

判る所： 分かれ目。

踢鷹： 踢（ける）、鷹（はげ  
む）。決起する。

賛襄： 君主を助けて政治を行  
うこと。

鴻業： 大きな事業。天皇の政

烈： 激しさ。情熱。

卓偉： 抜きん出て優れている

非常： 普通でなく、差し迫っ  
ている。

海内： 四海の内。国内。

乂安： 世の中がよく治まっ  
て、安らかなこと。

恍： かすかに、ぼんやりと。

湮滅： 跡形もなく消えてしま  
うこと。

この建碑をしないわけにいか  
ない理由なのだ。

「城（墓碑）は緑に包まれ、川  
は白く輝く。まばゆくも活躍した  
烈士は、ここにその魂を留めてい  
る。勲功は石に記し残され、山々  
が添い守っている」

壬辰（じんしん）： みずのえたつ

重野安綱： 1827～1910。薩摩  
藩。薩英戦争の戦後処理。維新後  
は学界へ。歴史学研究的泰斗、ま  
た日本最初の文学博士の一人。

撰（せん）： 詩や文章を作る。

弁理公使： 外交使節の第3の  
階級。

秋元興朝： 1857～1917。宇都  
宮藩家老・戸田忠至の次男。明治  
時代から大正時代の華族、外交官  
→【脚注】川村与十郎（純義）

樺山資紀： 1837～1922。覚之  
進。薩摩藩。西南戦争で熊本城守  
備。日清戦争黄海海戦に西京丸で  
参加。海軍大将。内務大臣、文部  
大臣など。

御代一統： 天皇による統一国  
家。

大内山： 皇居。

八幡： 京都府八幡市。

山崎： 京都府乙訓郡大山崎町

難波の城： 大坂（阪）城。

祭祀： 祭祀料。

「国のために身命を捨てた人々  
のその名は、白河の清い流れに  
（この白河の地で）永遠に記され  
ていくのだ」

毛利家： 長州藩主家。

→目でみる戊辰白河口戦争の記  
録【d17「戊辰薩藩戦死者墓」（鎮  
護神山）】

→【脚注】鎮護神山

高さ8尺： 約2.4m。

松方正義： 1835～1924。薩摩  
藩。藩の議政書掛に拔擢。明治政  
府では長崎裁判所参議に任命され  
る。大蔵大臣、内閣総理大臣とし  
て金本位制の確立。元老。

胡麻沢： いわき市平胡麻沢。

融通寺： 会津若松市大町。

にもある。両碑（鎮護神山、融通寺）ともに白河町田中増次郎氏、同仲三氏の請負に係るものである。（旧薩藩では東郷大将の書「丹心昭萬古」の2軸を田中氏父子に寄せてその労を謝した。）

### (5) 大垣藩酒井元之丞戦死の跡

西白河郡白坂村泉岡の南端、路側に木柵を繞らした碑がある。これが大垣藩酒井元之丞戦死之跡である。碑に刻して

戊辰戦役 旧大垣藩士酒井元之丞 戦死之跡

とある。明治39年5月、元之丞の妹の建碑である。戊辰5月26日、白坂宿を大垣藩・黒羽藩が警固している所に、東軍来襲。西軍これに應戦、大垣藩の銃隊長酒井元之丞重寛部下を督して砲撃した。部下の松岡惣兵衛（18歳）、瀬口與作（21歳）ともに戦死せるも挫けず激戦3時間に及んだ。苦戦その功を奏し、東軍利を失って退いたが、偶々飛弾来て元之丞の胸部を貫き戦死を遂げた。年25。墓は白坂村観音寺にある。この戦に黒羽藩藪智次郎光著（17歳）、後藤勇助幸由（53歳）もまた重傷を負うて戦死した。白坂村農夫廣川喜七の死もこの日である。

### (6) 白坂村観音寺の墓

白坂村観音寺に左の5基の墓碑がある。

大垣藩 瀬口與作源光忠  
同 酒井元之丞重寛  
同 松岡惣兵衛源重勝  
五月朔日白河戦死 長藩 岡勝熊正義  
六月十二日戦死 同 浅野外祐正章

### (7) 館林藩梅澤長次郎之墓

(抛る 白河町 永島慶次郎氏調査)

西白河郡金山村正金寺の墓地にある。

表  
館林藩村山直衛家来  
梅澤長次郎直貫墓  
慶応四年秋七月十六日  
出兵先 ■ 卒歳 二十二歳

【p136】

会津町に有限会社田中石材店あり。

丹心： 赤心。まごころ。

昭： あきらか。

萬古： 遠い昔。永遠。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d50 「戊辰戦役旧大垣藩士酒井元之丞戦死之跡」】

泉岡： 白河市白坂泉岡。白河城から南西へ約6.2km。

白坂の中心集落は旧字を「泉岡」という？

酒井元之丞戦死の跡碑： 白河市白坂101

農夫廣川喜七の死は何故か？

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d49 大垣藩酒井元之丞・瀬口與作・松岡惣兵衛の墓（白坂観音寺）】

観音寺： 白河市白坂19。白河城から南西へ約6km。

岡正義： 『殉難者名簿』によると、21歳。

館林藩： 群馬県館林市。秋元家。6万石。

梅澤長次郎： 『殉難者名簿』に名前なし。

正金寺： 白河市表郷金山竹ノ内。白河城から南東へ約10.9km。

正金寺には、上記のほか、仙台藩士の墓有り

仙境既南台良勇居士

仙藩 西田林平佑英之墓

慶応四年六月十二日

享年二十

『殉難者名簿』によると、「三番大隊長佐藤宮内手銃士、6月12日白河で戦死」。

(8) 宇都宮藩増淵勝蔵之墓  
(抛る<sup>こ</sup> 五箇村 石井重五郎氏調査)

表  
官軍兵食方 宇都宮藩増淵勝蔵之墓

裏  
奉<sup>へいしよく</sup> 兵食之事<sup>のこをほうじ</sup>、欲<sup>かまこ</sup> 自<sup>ゆうより</sup> 釜子邑<sup>しらかわじょう</sup> 至<sup>へいたらんとほつす</sup> 于<sup>とにて</sup> 白河城<sup>上</sup> 途<sup>とにて</sup>、  
至<sup>ほそくらむら</sup> 于<sup>にいたる</sup> 細倉村<sup>すなわち</sup>。則<sup>せんぶく</sup> 賊兵潜伏砲撃。頗<sup>すこぶるふんせん</sup> 雖<sup>といえども</sup> 奮戦<sup>かしゅうに</sup> 寡不<sup>レ</sup>  
敵<sup>かなわ</sup> 衆<sup>ずついにせんしす</sup> 終戦死矣<sup>じつに</sup>。実<sup>さいじ</sup> 慶応四歳次戊辰秋七月<sup>きょうねん</sup> 廿<sup>きょうねん</sup> 有六日。享年十  
又七<sup>あゝこんかな</sup> 嗚呼恨哉。

増淵は慶応4年5月20日細倉に戦死し仮埋であったものを、里人<sup>さとびと</sup>これを憐<sup>あわれ</sup>んで同年7月26日五箇村田島の清光寺に移葬して建碑供養した。

(9) 農民深谷政右衛門之墓

政右衛門は西郷村<sup>ながさか</sup>長坂の農民で当主政蔵氏の叔父にあたる。戦争の犠牲者となったものである。官軍墓地の取り扱いを受け、今に毎年金2円の掃除料を内務省から受けている。墓碑は

表に  
速成仏身清居士  
右側に  
慶応四戊辰年五月廿六日<sup>ぼつ</sup>歿  
左側に  
深谷政右衛門墓  
享年<sup>きょうねん</sup>二十九

(10) 芸藩土加藤善三郎墓

加藤善三郎の墓は白河町<sup>まんじじ</sup>萬持寺境内にある。これは不名誉の死であるが、武士の死に際における壮烈さを物語って地方人を感激させている。時は戊辰奥羽追討の任を果たし、各々<sup>ものがた</sup>帰藩の途につく11月、善三郎は白河町の北部某所(矢吹<sup>やぶき</sup>ならんという)において、戊辰戦役の軍夫としての務<sup>くんが</sup>果たして帰家せんとする農夫(今の三神村<sup>つとめ</sup>農夫と伝う)がある茶屋に休憩していた。善三郎これを見て、「小荷物<sup>きか</sup>を白河まで持て」と頼んだ。その言語のあまりに傲慢不遜なるが因と

⇒目で見める戊辰白河口戦争の記録【d46 「官軍兵食方 宇都宮藩増淵勝蔵之墓」(田島清光寺)】

宇都宮藩： 栃木県宇都宮市。戸田家。7万7000石。

五箇村： 双石・借宿・田島・舟田・板橋の村々を併せ、明治22年西白河郡「五箇村」が発足。のち白河市に編入。

釜子邑： 釜子村。  
細倉村： のち借宿村に合併。白河市借宿細倉。

歳次： としまわり。歳星(=木星)の次(=宿り)の意。木星が12年で天を1周すると考えられている。

秋七月： 旧暦7・8・9月が秋

原書「廿」→訳「廿」

享年十又七： 享年17。

恨： 自分の思う通りにならないことをにくんだり、なやんだり、くやしく思う。

清光寺： 白河市田島黒谷。白河城から東南へ約6.9km。

内務省： かつての日本の中央官庁。地方行財政・警察・土木・衛生・国家神道などの国内行政の大半を担当した。

深谷政右衛門の墓： 西郷村長坂字長坂165七仏薬師堂裏手。白河城から北西へ約2.1km。

⇒目で見める戊辰白河口戦争の記録【d34 「芸藩加藤善三郎之墓」(巡り矢萬持寺)】

芸藩： 芸州(安芸)藩。広島県広島市。浅野家。42万6000石  
萬持寺： 白河市巡り矢。白河城から南西へ約1km。

⇒【脚注】矢吹

農夫： 蒜生村(ひりゅうむら) (現石川郡玉川村)の真弓作左衛門。

三神村と蒜生村は隣接。

三神村： のち矢吹町。西白河郡矢吹町三城目など。

傲慢不遜： おごり高ぶって、人を見下す様子。

なり、また軍夫の任も終わって帰宅を急ぐこととて、農夫はその場より逃げ出した。善三郎はこれを追いかけて「武士の命に背くか」と後から斬り殺した。

芸藩にては慰籍料を提供して事を示談せんとしたが、その遺子はあくまで善三郎の罪を問うて止まぬ。芸藩は心ならずも善三郎に切腹を命じた。

善三郎は萬持寺の本堂の中央に端坐し、黒山の如く衆人の見ている前に悠々と

莞爾と笑ひて散りけり桜花

の辞世の句を誦し、三方に載せた短刀を執って勇ましく切腹した。

後藤みよ（当時 24）媼などはこれを見ておったという。見る者、武士の最後の壮烈を嘆賞して止まなかったと。

萬持寺にある墓碑の表

芸藩 加藤善三郎光義墓

右側に

明治改元戊辰年

十一月四日有事屠腹

裏面に

辞世 莞爾と笑ひて散りけり桜花

行年二十五

今に白河の人々は香花を手向けている。

『藝藩志』から

○十一月三日 須賀川を発し白河に宿陣す 此日病兵看護人加藤善三郎（三番小隊兵）は深瀬驛に於て軍夫が病兵の駕籠を捨て逃走するを怒り之を斬らんとす 而して軍夫は逸走して追跡すべからず 偶々長藩軍夫作左衛門の来るを見て誤て逸走せし軍夫と為し遂に之を斬殺す 長兵は善三郎を其本営に拉し帰り放還せず 人あり之を我が本営に報す 依て橋本素助は長兵の本陣（干城軍良城隊と覺ゆ）に至り該隊長等六七名と会見す 渠曰く貴藩加藤善三郎氏は罪無くして我が軍夫某を斬殺せり 況んや戦地人民撫育の朝旨に反するをや 今や渠か親族等悲嘆して之を我が藩に訴ふ 我が藩之を尋問せんと欲するか為め本営に伴い帰るところなりと 素助曰く深く貴藩に煩勞を備ふるを謝す 而して今や事実分明に属せば宜く某に交付せらるべしと 隊長曰く然り然れども貴藩に於て之を処する如何 今其処決を聞かざるに於ては貴官に交付するは難しとする所なりと 素助曰く否今之れか処刑を告ることは為し難し 何となれば則ち貴藩には尋問して已に有罪を認めども弊藩に於ては未だ糺問を経ず 何に依て其罪の有無を知らん況んや之が処刑罪科を定むるをや 然れども若し果たして聞かか如く誤て之を斬殺せしに帰せば其罪固より死を免る能はざるは天下の通法なり 況んや我が隊律に在ても同じく然る所なるをや 渠曰く諾と 直ちに善三郎を交附せしを以て 之を誘い帰堂し其誤殺の事情を問ふ 善三郎曰く 不肖誤て長藩軍夫を殺害せしは固より事実にして今其卒忽なるを悔ゆといへども及ばずと 素助曰く 不肖誤て無実の人を殺す 宜く屠腹して之を謝すべし願くば之を許せと 乃ち之を許す 三十郎傍に在り曰く 汝言わんと欲するあらば之

【p140】

慰藉： 慰謝と同意。

示談： 話し合い。特に、争いごとを表沙汰にせず相互間の話し合いで解決すること。ここでは善三郎に対する減刑を図ること。

この事件の真相については、近年芸州（広島）側から異論が出ている（『藝藩志』の記事参照）。つまり、善三郎は芸州藩徴用の軍夫が逃亡したのを追跡していたのだが、誤って別人である長州藩徴用軍夫を斬殺してしまったもので、「私用のために運搬を強要」したのではないということである。

思うに、事件の内情は一般民には告知されないだろうから、街道上の目撃談から再構成された物語が独り歩きしたのではないか。

ともあれ、逃亡したとはいえ軍夫を斬殺する権限は善三郎には無く、そのうえ別人を誤認殺害したのだから、罪は免れ難かった。翌日切腹という即決となったのは、長州藩との関係もあったと思われる。なお、その経過からすると、遺族に対して示談を講じる時間はなかったはずである。

ただし「切腹」であるから、善三郎の武士としての面目は配慮されたことになる。白河町民にとっては武士の切腹を目の当たりにする衝撃的な機会となった。

軍夫徴用の過酷な実態が垣間見られる事例でもある。

莞爾は、原書は〈かんじ〉と読んでいるが、この俳句のうえでは「にっこり」と読むことにする。

原書「散」→訳「散り」とした  
原書「三宝」→訳「三方」

三方： 食品や盃などを載せる儀式的な台。ヒノキの白木でつくった折敷（おしき）を、三面に刳形（くりがた）のある台の上に取り付けたもの。三宝は仏教における「仏・法・僧」のこと。

⇒ [脚注] 行年

『藝藩志』： 明治30年（1897年）、旧藩主浅野長勲の要請により元藩士川合三十郎ほか編纂を開始した芸州藩の幕末維新史。出版は昭和53年（1978年）に至った。

深瀬驛： 奥州街道の踏瀬宿の誤記と思われる。

干城軍： 干城隊。長州藩の世録藩士で編成した部隊。

良城隊： 長州藩の領内農町民で編成した部隊。

渠（かれ）曰く： 長州藩隊長が言うには。

渠か親族： 斬殺された作左衛門の親族。

誘い（いざない）： うながし連れて。

を聞かんと 善三郎曰く 願わくば金十両を賜へ之を債主に返還せんと欲すと 乃ち之を與え依て該金を各債主に分賦し之を他の兵士に託して返還せしめ 又親族に與ふる遺書を調し 以て談笑自若として明日死期の至るを待てり その屠腹の事決るを以て之を長藩に報し立会を通告せり

○十一月四日 本隊は白河驛を出発す 而して三十郎素助等は善三郎處分の事あるを以て滞りし 白河城下萬持寺本堂を以て屠腹場と為し 三十郎素助丹土薫之丞 土肥幸四郎 金谷宮内外兵士五人列席す 村上作左衛門に命じて介錯せしむ 長人三名来席せり 善三郎の將に刀を操り屠腹せんとするや 大聲を發し 俳句「莞爾(にっこり)と笑ひ散けり櫻花」を口唱し罷て刀を左腹に刺し曳て右腹に至る 鮮血淋漓たり 作左衛門を顧て曰く 介錯可なりと 作左衛門之を刎す 長人覺えす扇を開き 大聲感賞して曰く 天晴れと蓋し 其勇膽を感服するなり 而して我が列席諸氏は窃に感慨痛哭して同寺前庭櫻樹の下に葬る 地方人士は其義膽を憐み今日猶香花を絶せずという

○十一月五日 軍隊は出発して氏家驛に宿陣す 三十郎幸四郎等は軍隊を遂て急行し 素助は留て誤殺軍夫作左衛門の遺族等へ賑恤の處分を為し翌六日出立す

一 誤殺作左衛門遺族へ弔慰金並びに親類之者へ香典金庄屋へ慰勞等を為す 左の如し

- 一 弔金 拾五兩 萩生村百姓作左衛門跡へ
- 一 香奠 金三兩 同人親類之者へ
- 一 貳兩 萩生村庄屋柳平へ
- 一 三兩 深瀬村役人へ
- 一 七兩 寺へ席料等として遣す
- 一 貳兩 回向料
- 一 壹兩 墓田地代
- 一 三兩 永代経料 (以下略ス)

卒忽(そっこつ): 粗忽(そこつ)と同じ。軽率で不注意なこと  
「許せ」「許す」: (善三郎が主語なので) 切腹という処分を受容すること。

報し: (しらし)  
操り: (とり)  
罷て(まかりて): 気色を正して。

曳て: (ひいて)  
顧て: (かえりみて)  
刎す(ふんす): 首を刎ねる。  
覺えす(おぼえず): おもわず。無意識に。

感賞: 感心してほめたたえること。

蓋し(けだし): ここでは「まさしく」の意味。

勇膽(ゆうたん): 膽勇。大胆で勇氣のあること。

窃に(ひそかに): 忍んで。  
義膽(ぎたん): 正義を行う勇氣。

氏家(うじいえ)驛: 栃木県さくら市氏家。奥州街道。

遂て(ついで): 追って。

賑恤(しんじゆつ): 被災者などを援助するために金品を与えること。

萩生村: 萩生(ひりゅう)村の誤記。

弔金(ちようきん): とむらい料。15兩。

香奠(かうでん): 香典。

貳兩: 2兩。  
遣す: (つかわす)

壹兩: 1兩。  
墓田地代: 墓地の土地代。

竹原: 広島県竹原市。

弔金15兩というのが、どれくらい価値なのか? 「小判1兩

は、江戸時代初めには今の10万円ほどの価値があったが、幕末には

3000円~4000円程度まで価値が下がってしまった」という考察もある。すると15兩は5~6万円程度

ということになる。作左衛門遺族には大金であったろうが。

[p142]

⇒ [脚注] 夏梨

大竹繁三郎の墓: 白河市屋敷添1。白河城から南東へ約4.3km

間者: 敵地に潜入して様子を探る者のこと。スパイ。「間」は訓読みで「うかが(う)」と読める。

白根村: のち白根市。現在は新潟市南区の一部。

文政6年: 1823年。  
癸未(きび): みずのとひつじ

妙徳寺: 白河市金屋町。

## (11) 白河夏梨の墓碑

墓碑の表に

光台院夏山道眠清居士

左側に

慶応四戊辰年五月一日 逝去

右側に

官軍大竹繁三郎之墓

とある。

大竹繁三郎は夏梨の農夫で、5月朔日白河口激戦のあった夕方、野に放てる馬を迎えに行かんとする途、西軍に東軍の間者なりと見誤られて殺されたもので、西軍はこれを慰藉せんために官軍待遇をなしたものである。繁三郎は今の大竹儀重郎氏の祖である。

## (12) 軍夫吉五郎の墓

軍夫棚橋吉五郎は、越後国蒲原郡白根村に文政6年癸未年正月元日に生まれ、白河に來たり住せし者、戊辰の戦乱にあたり西軍土州藩軍義隊付き軍夫として案内役を勤めた。これは吉五郎が地方地理に明らかであったからである。二本松城門で戦死した。西軍は生前の功によって官軍の待遇をしたもので、墓は白河町妙徳寺に在る。

墓碑の表に

積浄号信士

右側に

慶応四年七月二十九日

左側に

南町白木屋吉五郎 行年四十六歳

とある。

白木屋： 棚橋吉五郎の屋号であるが、家業は何であったろうか

明治四年に元白河県庁から遺族に金 150 両を<sup>かし</sup>下賜した。その<sup>じれい</sup>辞令に

磐城国白河郡白河本町

百姓 故 吉五郎

右之者<sup>ぎ</sup>儀去<sup>しんねん</sup>ル辰年奥羽追討之<sup>みぎり</sup>砌、諸藩兵隊<sup>へいたいのぐんぶ</sup>為<sup>となり</sup>二軍夫<sup>しゅつえき</sup>一<sup>し</sup>出役進撃  
之際、死亡<sup>いたし</sup>致<sup>だん</sup>候段、憫然<sup>びんぜん</sup>之事<sup>これに</sup>二候。依<sup>より</sup>之<sup>あとかぞく</sup>跡<sup>かし</sup>家族<sup>こと</sup>え金百五十両  
下賜<sup>かし</sup>候事<sup>こと</sup>

辛未十二月

元白河県庁

白河県庁： 白河県は、明治2年8月7日より、4年11月2日まで。旧幕府領354か村。庁舎は旧城郭内。

磐城国： 戊辰戦争終結直後に陸奥国を分割して岩代国、磐城国、陸前国、陸中国、陸奥国の5国が設立された。磐城国の領域は、現在の福島県浜通り、福島県中通り南部、宮城県南部に当たる。律令制の「石城国」とは領域が異なる。

憫然： あわれ。ふびん。

かのとひつじ

辛未は明治4年である。

ついでに官軍墓地の管理について記さんに

官軍の墓地の管理は<sup>ていちょう</sup>丁重を極めたものであつて、福島県庁で出した官軍墓地<sup>かんしゅ</sup>監守の条文は左のとおりである。

第一条 常に清潔に掃除をなし、<sup>しる</sup>香花水等を手向くる事

第二条 墓標又は玉垣、<sup>たまがき</sup>雨覆之類に妨害をなすものあるときは  
之を制し、もし用ひざるに於ては<sup>あまおおいのたぐい</sup>宿所姓名を聞糺し<sup>ききただ</sup>速に届出  
之事

第三条 風災又は腐朽等にて被害あらば、<sup>とりしらべすみやか</sup>詳細取調速に届出之  
事

第四条 総て墓所は第一号<sup>ひながた</sup>雛形の如く地種・地名・坪数・戦死之  
事故・旧藩名・姓名・年齢・墓標創立年月日・建設せる際之  
事・玉垣雨覆等の実景を記載し、此を<sup>これ</sup>手続書に<sup>てつづきしょ</sup>綴置<sup>つづりお</sup>くべし

第五条 諸費一か年<sup>てあて</sup>手当として、金二円五十銭六月・十二月に可<sup>あい</sup>  
相渡<sup>わたすべく</sup>候事

但<sup>ただし</sup>第三条被害の如きは<sup>この</sup>此費用外となすと<sup>いえども</sup>雖、<sup>かんしゅにんふとりしまり</sup>監守人不取締よ  
り<sup>しょう</sup>生ずるものは、本条費用を以て<sup>もつ</sup>差引<sup>さしひ</sup>くべし

第六条 前条費用第二号<sup>ひょうは</sup>雛形の<sup>しょうしょ</sup>證書を以て<sup>もつ</sup>出納係へ<sup>すいとうがかり</sup>受取<sup>かたもうし</sup>方可<sup>し</sup>

監守： 監督・守護すること。取りしめること。墓地に関しては管理・保守の意味も含むのだろう

玉垣： 神社・神域の周囲にめぐらされる垣のこと。石造または木製の列柱。

雨覆： 墓石・祠・石仏などの上に差し掛けた小屋型の建築物。

でるべき こと  
申出<sub>二</sub>事

第七条 監守人代替又は移転等のことあらば、速に可<sub>二</sub>届出<sub>一</sub>事

第八条 一か年一両度官軍又は区吏命<sub>二</sub>臨時出張<sub>一</sub>実地を検査し、若し不取締之廉あらば一切手当を不<sub>レ</sub>給、且つ監守を免じ、更に他之者へ監守を命ずる等の事

第九条 県庁の都合に依り監守を免じ、又は手当を増減し箇条を更正増補することあるべし

第十条 監守人は此手続を遵守し、第三号雛形の受書を差出すべき事

各地の西軍の墓および官軍取り扱いの墓には、今に掃除料が内務省から下付され、その霊は福島県管内のものは福島招魂社に明治十二年に合祀されて居る。

一か年一両度： 1年に2回。

今に掃除料が～： 昭和16年当時は、第5条の監守手当は「掃除料」に縮小されていたようである。霊祀は明治12年に招魂社に統合されたとのことで、するとこの官軍墓地の位置付けは、後の「護国神社」「靖国神社」へとつながるものであったとも考えられる。

福島招魂社： 明治12年(1879年)に戊辰戦争、西南戦争の官軍戦死者を祀る神社として創建される。以後「国難に殉じた者」を合祀してきたという。昭和14年の内務省令により、招魂社は一斉に「護国神社」に改称された。福島護国神社は、太平洋戦争後のGHQ監視下で天照皇大御神も祀り「大霊神社」と称したが、講和条約発効で日本の主権が回復すると「福島護国神社」に名称を戻し現在に至っている。所在地は福島市の信夫山。

次は東軍の墓碑・供養塔について記さん。

西軍は勝ち軍であったので戦死者の遺骸は始末され、前記のごとくその後の管理も官において監督された。これに引きかえ東軍は敗戦なる故に閏4月25日の戦死者12人の外は屍は山野に曝されて山の中・森の間・田圃の畔にあたら遺棄されたのであった。しかるに地方人は却ってこの遺棄された屍に涙を注ぎ、人知れず春の彼岸・秋の彼岸・盂蘭盆の節には香花を手向けて霊を慰めた。死骸の横たわった所には供養塔を建て、合葬の地には戦死の墓を設けて法要が営まれた。素心王師に抗する意無き戦死者であり、その君命を奉ずるの精神に富むの土を遇する、これが当然である。

### (1) 会津藩十二士之墓

これは白河町常宣寺にある。十二士は閏4月25日、東軍勝戦の日の遺骸なれば立派に埋葬も出来たことである。

建碑の表に

会津藩十二士之墓

裏の文に

慶応四年の役、我が兵白河城に拠る。同四月二十五日西軍来襲

田圃： 田と畑。

畔(くろ)： あぜ。田と田の間に土を高く盛って水止めや境としたところ。なお、「くろ」と「あぜ(畦、畔)」を区別する考え方もある。「くろ」は幅10～20cmほど。「あぜ」は人一人通れるほどの幅があり、田を見回る「あぜ道」としても使う。

地方人： ここでは白河地方の地元民の意味。

盂蘭盆： お盆、盂蘭盆会(うらぼんえ)。7月15日を中心に行なわれる祖霊供養の仏教行事。

素心： もととの心情。

王師： 天皇の軍隊。

君命を奉ずる： 主君の命令を忠実に承る(行なう)。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d34「会津藩戊辰戦死十二士之墓」(向新蔵常宣寺)】

常宣寺： 白河市向新蔵。



す。我が兵邀撃して大に之を破る。我れ亦死傷あり。其城南  
常宣寺に葬る者遊撃隊十二人たり。越えて明治二十四年五月、  
其親戚故旧謀つて碑を建てて其忠節を表はす。

## (2) 銷魂碑

これは会津藩の碑である。白河町俗に乘越という所にあつて、薩長  
大垣十三人之墓と南北に相對している。白河町新町で建てた「戦死  
墓」の3字を刻した巨碑があつたが、明治17年に至つてこの碑が建  
てられた。その碑文に云う。

### 銷魂碑

### 正四位松平容保篆額

明治元年正月、我旧藩主松平容保公、從德川内大臣。在  
大阪城。内大臣將入朝、使我藩士先驅。事出齟齬。有  
伏見之戰。公從内大臣。歸江戸。托列藩上謝表  
而待命於會津。奥羽諸藩亦連署為請於朝廷。不  
報。大兵來伐。於是諸藩憤曰、是姦臣壅蔽之所致、  
蓋非出聖旨也。拳兵拒之。白河城當奥羽之咽喉、  
為主客必爭之地。我兵先扼之。閏四月二十五日、薩摩長門  
忍大垣之兵來攻。相戰半日、我兵大勝。四藩之兵退保  
芦野。五月朔、復自白坂原方畑諸道及山林間道來攻、欲  
以下雪前敗上、其鋒甚銳。我將西郷頼母橫山主税各率  
兵數百、与仙台棚倉兵共當之。自卯至午、  
奮戰數十百合、火飛電激、山崩地烈、而我兵彈盡、刀折三百  
余人死之。仙台棚倉兵亦多死傷、城遂陷。棚倉平二本松諸城  
亦相繼失守。自是東兵不振。後數月上杉氏遣使告曰、  
東征兵出聖旨、且聽其所請。於是投戈出降。朝  
廷乃下一視同仁之詔、藩荷再造之恩、臣蒙  
肉骨之賜。而其死鋒鏑者、冤鬼泣雨、遊魂  
迷煙、獨不得浴沛然之余沢。吁嗟何其不幸  
也。雖然一死報主臣節茲尽、名声不朽。比之生  
而無聞者、其幸不幸果如何哉。地旧有碑、止刻戰死墓  
三字、不可知其為何人。頃有志之士胥議釀金更建  
豐碑其後。使綱紀銘之。吁嗟綱紀与此諸士嘗同生而  
不能同死。今又列朝官之後。豈能無愧於心、為者  
何忍銘之。雖然銘則顯、不銘則晦、  
銘之或足以酬死者。乃揮淚銘之、曰、

【p146】

邀撃(ようげき): 迎撃。わが望む所まで敵を来させてから(全軍で)迎え撃つこと。

遊撃隊: 会津藩の徴募兵部隊の一つ。

故旧: ずっと以前からの知り合い。故人の知り合い。

→目でみる戊辰白河口戦争の記録【d02 会津藩「銷魂碑」】

銷魂碑: 鎮魂碑。「戦死墓」の文字は、阿部右近正修(雅号は秋風)の筆。白河城主阿部家八代に仕えた重臣。俳人書家。子息阿部内膳は、白河口の戦いに死す。

銷魂: 驚きや悲しみのあまり、気力を失うこと。

乗越: 白河市白坂乗越。稲荷山の尾根を越えるところ。「のっこし」は尾根の鞍部のこと。

新町(しんちょう): 江戸から奥州街道をたどり、白河城下の入口にあたる町が新町で、一番町・二番町・三番町・七番町・九番町を指す。

徳川内大臣: 徳川慶喜のこと  
「事の執行に齟齬が生じて、鳥羽伏見の戦いが勃発した。」

謝表を上す: 謝罪文を提出。  
報わず: 聞き届けられず  
姦臣壅蔽の致すところ: (天皇を取り巻いている)悪い家来が(我々の嘆願を)遮っているためであつて

聖旨に出でざる: 天皇の意思から出たのではない

主客必争の地たり: 攻めるも守るも必ず確保しなければならぬ地である

前敗を雪がんと: 前の敗戦の不名誉を除き去ろうと

与し: 力を合わせて

卯より午に至る: 夜明けから昼まで

失守: 守りを失う、落城する  
上杉氏遣使: 米沢藩からの使者。

「東征の兵は聖旨に基づくものであり、かつ会津等の願いを聴いた(うえでの)ものであつた」  
投戈出降: 武器を捨て出頭降伏した。

一視同仁の詔: 平等一様に仁愛をほどこす詔

再造之恩: 再建を許された恩  
肉骨の賜: 生命存続を認められたこと

鋒鏑に死す者: 鋒(ほこさき)鏑(やじり)に死す、つまり戦死した者。

沛然: 雨が勢いよく降る  
余沢: あり余るほど広大な恩恵。

きをみてめいをいたし しんせつまつとうす いやしくもしゆにふちゆう いづくんぞてんしにちゅうなるか  
見危致命 臣節全矣 苟不忠主 何忠天子  
ほうこうはことなるといえども れっしというべし せんざいのもと がんふん だ き  
方向 雖 異 可謂烈士 千載之下 頑奮懦起

明治十七年五月

東京大学教授正七位 南摩綱紀 撰  
なるせゆたか 成瀬温 書

碑の裏および左右側に、白河口にて戦死せる横山<sup>ちから</sup>主税・海老名衛門・遠山伊右衛門・日向茂太郎等 304 名の名が刻されてある。

現在、会津出身の白河在住者は「会津会」を組織して、毎年5月の第1日曜日を期して供養を営んでいる。常宣寺住職足立氏がこれにあずか  
与っている。

【p148】

「戦死した者だけは天皇の偉大な恩恵を受けることができない」

比の生： 現在の人々

「現在の（生きる）人々も、（この事蹟を）聞き伝える者がいないことは、その幸不幸ははたしてどうだろうか」

頃： 近年。

胥議贖金： 皆で相談のうえ、資金を持ち寄って。

豊碑： 立派な碑石。

「南摩綱紀に碑の銘文を書かせることになった」

「綱紀はこの戦死諸士に与してかつて同じ状況を生きたが、同じ時に死ぬことはできなかった…」

朝官： 朝廷（新政府）の官吏  
「どうしても心に恥が無いことがあろうか（心は恥の気持ちでいっぱいだ）、たいへんに恥を忍んで銘を記すのである。」

「記せば自分の姿をさらすことになり、記さなければ後悔にくれるだろうが、あるいは銘が死者の功績に酬いるものになるのではと思い…」

「危機に臨んで、君命を執行し、家臣としての忠義を全うした。主君に不忠である者が、どうして天皇に忠になれるだろうか。方向は異なってしまったが、彼らもまた烈士というべきである。千年も長年月のうちには、彼らの頑張りがじわりと実を結ぶことだろう。（あるいは、彼らの事蹟も再評価され、その奮闘に励まされて、気弱になっている東北の民も再起するだろう）」

南摩綱紀： 1823～1909。会津藩士 300 石の次男。藩校日新館、昌平坂学問所に学ぶ。蝦夷地代官、藩校教授など。奥羽列藩の連絡調整に当たる。明治時代の漢学権威者。

成瀬温： 1827～1902。書家。号大域（たいいき）。遠江国佐野郡日坂の出身。安井息軒等に学ぶ。明治に宮中出仕。

会津会： 現在、白河会津戊辰慰霊会。

(3) 田辺軍次の墓碑

田辺軍次の墓碑はもと白坂村観音寺にあったが、後に乗越の会津藩の墓地に移され、銷魂碑の東側に墓を定め、観音寺の小さな墓標も移されて今に存してある。(再記) 明治29年白河における会津会は左の墓碑を建てた。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d03「田辺軍次君之墓」旧会津藩士建立】

田辺軍次君之墓

君は会津藩士田辺熊蔵の長子なり。沈勇にして気節あり。戊辰の役会津の敗るるや、東京に幽錮せられ、後赦されて斗南に移住す。君在京の日、郷人に語て曰く、我軍の敗機は白河の戦にあり。而して白河の一敗は実に大平八郎の叛応に因る。八郎は幕領白坂村の民なり、西軍を導き間道より出で我軍の不備に乗ぜしむ。其恩に背き義を忘る実に禽獣に等し。吾他日必ず渠の首を刎ねて以て報ゆる所あらんと。聞く者之を壯とす。明治三年七月、君斗南を發し、八月十一日黄昏白坂村に向ふ。途に一賈人に逢い前程を問ふ。賈人其旅装の粗野なるを見て答ふるに無礼の言を以てす。君大に嚇怒して之を斬らんと欲す。其恐怖の状を視て翻然覺る所有り、乃ち問うて曰く。汝白坂村大平八郎を知るや。曰く、知れり。八郎は戊辰の役官軍に功あり、擢でられて里正となる。君曰く可なり。八郎をして来り謝せしめば則ち汝の罪を宥さんと。益怒を装い拉して白坂村役場に到り、使丁に告げて曰く。奴輩武士に対し亡状なり。今之を斬らんと欲す。急に村吏を喚び来れと。八郎報を得て従ひ来り、君を見て思へらく。士人年少に氣鋭なり、一旦の怒に過ぎざるのみ。如かず旅舎に就て徐に之を解かんにはと。乃ち説て曰く。既に暮夜なり、請う鶴屋に就て尊慮を聞くことを得ん。鶴屋は貴藩の旅館なりと。君心窃に謀の中れるを悦び、共に鶴屋に到る。八郎等百方賈人の為に陳謝す。君機の既に熟せるを見て密談に託して衆を退け、独り八郎を留む。既にして君厠に上る。少時にして出で来り、声を励まして八郎に謂て曰く。汝猶戊辰叛応の事を記すや。余は会津藩士田辺軍次なりと。言未だ終らず。刀を抜いて之を斬り面上を傷く。八郎徒手格闘す。君遂に伏せらる。是時舎中大に騒擾す。独り村吏重左衛門之を救はんと欲し、八郎の刀を執って闖入す。時に燈光暗く甲乙を弁せず、力を極めて其上なる者を刺す。八郎叫んで曰く。吾なりと。重左錯愕更に君を斬らんとす。八郎既に力衰ふ。君間を得て重左を排す。重左微傷を負ひ刀を棄て逃る。君起きて八郎を斬り遂に之を寸断す。忽にして村民麤到する者数十人。君終に免る可らざるを知り

沈勇： 落ち着いていて勇気のあるさま。  
気節： 気概があつて、節操の固いこと。  
幽錮： 幽閉禁錮。  
⇒[脚注] 斗南  
郷人： ここでは同郷の会津人の意味。  
敗機： 敗戦のきっかけ。  
叛応： 裏切つて敵に通じること。  
禽獣： 鳥や獣の類の総称。比喩的に、人の道・恩義を知らない者。畜生。  
碑文の「禽獣」及び「叛応」等、大平を誹謗する文字は、いつしか削りとられている。  
渠： 「彼」に同じ。  
もつて報ゆる所あらん： ~することで復讐するであろう。  
壯とす： 勇気ある行動だと褒め賞した。  
賈人〈こじん〉： 商人。  
前程： この先の道のり。  
嚇怒： 激しく怒ること。  
翻然： 急に心を改めるさま。  
戊辰の役官軍に功あり： 戊辰戦争で官軍のためになる手柄があり。  
里正： 村の首長。  
もとの意味は古代郷里制における里の長。大平の場合は抜擢されて白坂宿の責任者になった。  
拉して： 捕らえて。  
使丁： 雑用に従事する人。使用人。  
奴輩： 人を卑しめていう。  
亡状： 無礼な言行。  
村吏： 村役人。  
如かず： 優らない。  
「この武士は年が若く気が猛っている。一時の怒りにとらわれているに過ぎない。ここは宿屋で一息つかせて、徐々に怒りを解くに限る」  
乃ち説きて： そこで説得して  
尊慮： あなたの意思。  
百方： いろいろな方法・手段  
密談に託して： 密談を要求するふりをして。  
記すや： 憶えているか。  
面上： 顔面。  
徒手： 手になにも持たない。素手。  
ついに伏せらる： 組み伏せられたのは田辺の方である。

従容として腹を屠て死す。嗚呼何ぞ壮なる哉。時に年二十一。  
村民屍を同村観音寺域内に埋葬す。爾来星霜二十有七、墓碣永く  
荊棘中に隠没し人其事蹟を知る無し。明治二十九年其二十七回忌  
に当り、在白河会津会員は胥謀り、八月遺骨を白河会津藩戦死諸  
士の墓側に改葬し、其事蹟を石に刻して之を建て千祀に伝ふ。  
庶幾くは君以て瞑す可し。

会津 高木盛之輔 撰  
会津 上野良尚 書

【p152】

舎中おおいに騒擾す： 格闘の衝撃で宿の建物全体が揺れ動いたのである。

闖入： あばれこむ。

甲乙を弁ぜず： はっきり見えない。事物の別（甲乙）を言い分けられないほど不明瞭という意味

その上なる者： 組み合せて上になっている者（大平の方）。

錯愕： 驚き乱れる。

間を得て重左を排す： 大平の抑え込みを逃れ、重左衛門を切り払ったものと思われる。

寸断： ずたずたに断ち切ること。

鬨到： むらがり到着。

従容として：（危急の時に）おちついた、ゆとりのある様子。

なんぞ壮なるかな： なんとという壮烈な行ないであろうか。

爾来星霜： それからの年月。

墓碣： 墓石。

荊棘： やぶ。茨。〈けいきょく〉

千祀に伝ふ： 千年（永遠に）祀り伝える。

庶幾くは君以て瞑す可し： こいねがうこと。

もって瞑すべし： この建碑によって慰霊され安らかに眠ってほしい。

高木盛之輔： 1854～1919。会津藩士。戊辰戦争後、山川健次郎らと猪苗代の謹慎所を脱出し、藩主父子の寛大措置を嘆願。西南戦争。検察官として勤務、検事正。会津中学校の設立に尽力。姉の高木時尾は照姫付き祐筆で、元新撰組副長助勤斎藤一（藤田五郎）に嫁ぐ。

上野良尚： 白河町。会津藩士。田辺軍次墓碑、二本松藩戦死者碑の書を行なう。

㊦

㊦

⇒ [【大平八郎の間道案内】](#)

⇒ [目でみる戊辰白河口戦争の記録【d47 大平八郎の墓（白坂観音寺）】](#)

### 大平八郎について

郷土史家石井勝弥氏の『大平八郎と白河戦争』によると、大平は京の桂宮の屋敷で2年半にわたり奉公し勤皇思想を強めたという。白河口戦争においては積極的に西軍に協力したものだろう。

大平とすれば西軍の一員としてあることは本望であり、功をなして褒賞を得たことは誇りであったろう。しかしそれだけに、会津藩に対しては明確に敵対する立場となった。

会津藩士が大平個人を仇と考えるのは逆恨みであるが、“武士に従うべき町人”が戦賞によって栄えている姿は我慢ならなかったのだろうか。

田辺墓碑のとおりであれば、大平は「貴藩の旅館なり」と言って鶴屋へ誘っており、田辺が何者であるか悟っていたのかもしれない。

その後切りつけられながらも大平は、いったんは田辺を押さえつけており、体格的にも優勢だったかと思われる。それでも大平は、田辺と話し合う道を選んだのである。しかしそれは復讐心に燃える若者には通じなかった。

婿養子直之助が田辺をも弔ったのは、八郎の真情に適うものだったのではないか。

(4) 阿部藩戦死碑

棚倉藩戦死者の碑は、白河南湖の鏡山、共楽亭の北隣にある。その碑文に云う

阿部藩戦死碑

鎮英魂 従五位子爵 阿部正功篆額
明治元年三月、棚倉藩主阿部正静、奉奥羽鎮撫総督之命、出師
将討庄内。総督更令下転与仙台等兵討会津
上、即赴戦焉。会津既降。奥羽諸藩会同于白石、
連署上状下請赦会津罪上。朝廷不聽。尚数其罪
一、發兵征討。於是諸藩憤慨。以謂伏見之事出於過誤
一、固不足深罪、況既悔悟。且我諸藩悃誠請哀、
無有不聽之理。而發兵征討。是奸臣壅蔽之所使
然、決非由聖旨。事至于此、豈可座視乎。遂
拳兵拒之。棚倉藩使老臣阿部内膳将一大隊、与
仙台会津等兵、拋白河城。五月朔、官軍圍攻。城兵禦之。
奮激戰鬪、自晨至午。雷轟電擊殺傷相当。而衆寡不
敵、守兵彈尽刀折城遂陷。乃退守金山釜子等地。
轉戰数十合。延至六月、棚倉城亦失守。内膳以下前後
戰没者五十又二人。前藩主阿部養浩、正静之高祖父也。退老
多年不与事。而夙尊崇王室。深憂抗王師
之非義上、百方説諭臣下。於是首与正静哀請
帰順。後数月奥羽悉平。朝廷乃下寛仁之詔、復
藩旌土、人人皆浴更生之恩。至是和氣藹然四海一家無
復遐邇之別。盖藩曩奉総督之命、出師討庄内
及会津、其無異志也昭々。以其僻在辺陬
不通事情、不察朝旨之所在、遂致誤順逆
一、洵可痛惜。然内膳等竭誠於其主、百戰致
命。亦可謂烈士矣。頃者、有志之士胥議建碑于
白河南湖公園。講余銘之。余當時以奥羽追討総督參
謀、在戎旅間、親知其情甚哀其志也。嗚呼、
前日仇敵今則握手歎笑、相共浴王沢、頌王化、
而死者独不与焉。豈不傷乎。雖然今日清明旧藩主
恩遇迴優於昔日、民皆鼓腹樂業。死者而有知亦
応無憾于地下矣。

銘曰。

捐軀報主節義可尊 是非順逆 豈遑細論
白川旧封 夙縁所存 歸然豊碑 長鎮英魂

【p152】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d19「阿部藩戦死碑」(南湖鏡山)】

「阿部藩」という呼び方は、移封によって左右された藩の境遇を映している。戊辰戦争当時の封地は棚倉だから「棚倉藩」なのであるが、白河に戻りたいという願望を持ち続けてついに「白河藩」復帰は果たせず、「棚倉藩」にもなりきれなかった。

家臣の意識も「白河藩」であったかと思う。

戦死碑の建立地に白河の景勝地である南湖が選ばれたのは、そのような理由であろう。

南湖(なんこ): 松平定信によって1801年に築造された。白河南郊の大沼の治水を図った人造湖で、日本最古の「公園」。一般民に開放された「公園」であった。身分の差を越え庶民が憩える「士民共楽」という思想によるという。

鏡山(かがみのやま): 南湖の北畔にある丘。南湖十七景の一つ 共楽亭: 公園に附属して南湖北畔に建てられた茶室。

出師: 出兵すること。

会津すでに降る: (しかし) 会津藩はすでに降伏の意を表していた。

以謂: おもえらく。考えるには。

もとより深罪に足りず: もとより大罪というには当たらない。

悃誠(こんせい):

不聴の理ある無し: (われわれ諸藩の請願を) 聞かないということに正当な理由があるとは思えない。

事ここに至る、あに座視すべきか: 新政府軍が奥羽の地に攻め寄せて来る事態となって、どうして座視していただけるだろうか。

「(棚倉藩は) ついに拳兵して、新政府軍の進攻に抵抗することになった。」

老臣: 家老などの藩の重臣。 圍攻す: 包圍攻撃をした。

晨より午に至る: 夜明けから昼まで。

殺傷相当: かなりな数の死傷者を出した。

衆寡敵せず: …と記すが、敗れた東軍の方が西軍よりも多数であった。東軍が崩壊して各個掃討された状況を述べているか。

「(それらの地を) 転戦して数十回も、百回も合戦し、6月にまで至った」

守を失う: 落城の意味。

養浩: 阿部正備(まさかた) 白河藩第4代藩主。阿部忠秋流の第12代。

明治十七年九月

元老院議官じゅし従四位勲三等 わたなべきよし せん渡邊清撰  
ひらた平田文書

阿部あべ養浩はおほむら大村藩主ぶぜんのかみ豊前守すみよし純昌の次男であった関係上、旧大村藩士渡邊清に撰せん文を請うたものである。

明治17年平田ひらた文右衛門等敬義会を組織して碑を建て、大正3年6月には旧藩士および篤志者が白河鎮英魂保存会を組織して神道をもって英魂を祀ることとした。  
大正5年7月には内務大臣の許可を得て社団法人として会の基礎を固くし、毎年秋の彼岸に例祭を行なっている。旧藩の中村直敬氏、福田春三氏、曾我演雄氏等その理事である。

阿部藩士で6月12日に白河合戦こうせんざか坂で戦死した平賀金右衛門の墓、5月朔日に戦死した牧田三之助重孝の墓は、ともに白河町長寿院にあり、阿部内膳正あべないぜん熈之墓は白河町常宣寺じょうせんじにある。

白河鎮英魂保存会： 現在も組織がある。

平賀金右衛門： 棚倉藩銃士。6月12日合戦坂で戦死。  
牧田三之助： 棚倉藩士。5月1日八竜神で戦死。

⇒ [\[脚注\] 阿部内膳](#)  
⇒ [【棚倉藩阿部内膳討死 商人小崎直助の助力】](#)  
⇒ [目でみる戊辰白河口戦争の記録【d26 棚倉藩士「阿部内膳正熈之墓」\(向新蔵常宣寺\)】](#)

「死者はしかし（そのような人々の幸福を）知るだろう。そして地下で（墓中で）恨むことなく応じて（物事の有様を受容して）くれるに違いない。」  
細論： ここでは、細かい取るに足りない問題の意味。  
違（こう）する： あわてる。あわたたくする。いそがしくする。→かかずらわる。こだわる。  
「白河は旧領地であり、以前から縁のあるところである。（その他に）高く立派な碑を建て、永遠に英霊を鎮魂しよう」  
巋然（きぜん）： 高くそびえ立つさま。  
⇒ [\[脚注\] 渡邊清](#)  
平田文： 平田文右衛門と思われる。  
原書「平田文左衛門」だが→訳「平田文右衛門」とした。  
平田文右衛門： 1836～1900。元棚倉藩家老の平田弾右衛門が名を改めた。阿部家家職。敬義会発起。白河町町長。  
⇒ [\[脚注\] 平田弾右衛門](#)

↩

【p155】

正静（まさきよ）は白河藩第8代藩主。阿部忠秋流の第16代。  
高祖父： 「祖父の祖父」であるが、正備～正静は養子関係。  
⇒ [【阿部氏系譜略図】](#)  
退老： 隠居。  
事に与らず： 藩政から離れて

いたが。  
夙に（つとに）： 以前から。  
王師に抗うの義無きを深く憂う： 朝廷の軍に抵抗することが不義となることを深く憂いて。  
百方臣下を説諭す： あれこれと言葉を尽くして臣下を説諭した首となって： 先頭に出て。首唱となって。  
ことごとく平ぐ： 全域がすっかり平定された。  
胙土（そど）： 祭りを行なう土地。→藩政を行なう領地。  
「藩に領地を返し」  
更生の恩に浴す： 天皇の国家の民としてやり直すことを許された恩。

譎然（あいぜん）： 雲・霞がたなびく。気分などが穏やかでやわらいださま。

四海一家： 世の中の人々が一つの家族のように親愛であること  
遐邇（かじ）の別： 遠近の別。奥羽が天皇の政に疎い辺境であること。

「思うに、棚倉藩が以前総督の命を奉じて、庄内・会津を討とうと出兵したことは、その志が異なるもの（天皇に逆らうもの）でなかったことが明らかである。」

僻在（へきざい）辺陬（へんすう）： 都から遠く離れた所にあること。辺境の地であること。

不通： 交通・情報が疎であること。

朝旨の所在を察せず： 天皇の意思がどうあるかを理解せず。

順逆： 従うこととそむくこと。特に、道理にかなっているか否かということ。

痛惜： 非常に（残念だと）惜しむこと。

戎旅（じゅうりょ）の間にあり： 軍旅。戦場を転戦する中にあった。

王沢に浴し： 天皇（の政治）の恩恵を受けること。

王化を頌う： 天皇の仁徳によって感化され統治を受け入れる。

「しかし死者だけは王沢・王化の恩恵を受けることができない。なんと痛ましいことだろうか。」

「ではあるが、今日清明なる旧藩主の昔にも優る恩遇に、人々はみな鼓腹楽業して（十分に食べ楽しく暮らして）いる。」

↩

ここに庄内藩のことを付記しておく。

庄内藩は当時江戸取締藩の首藩であった関係から、三田の薩邸に潜む浪人等が慶応3年12月末に江戸内外に放火し、掠奪を行なった時、庄内藩は幕命によって三田の薩邸を砲撃し、これを焼き払った関係があるから、戊辰戦争の主力は会津・庄内の両藩に集注された。

### (5) 仙台藩戊辰戦死碑

白河町字女石にある。女石は白河町の北端、会津街道と仙台街道との岐点の地である。碑は街道の西側にあつて剣状をなしている。

表に

仙台藩士戊辰戦歿之碑

裏に

表面十大字大勲位二品能久親王殿下親書也。旧藩有志諸子相議樹此碑、以大王有旧誼請其親書、以慰其魂、死者有知亦将感泣於地下也。

明治二十三年五月一日

旧仙台藩知事 従五位伯爵 伊達宗基

その傍に、戦死供養碑がある。これは明治2年に建てたもので、白河町の田町・向寺・根田・大谷地・金勝寺・飯沢・長坂等に戦歿せる仙台藩士150余人の屍を集めてこの地に葬った供養碑である。

仙台藩は戊辰戦役に各方面において多数の犠牲者を出しているが、5月朔日の激戦には80余名、白河口全体で150余名の戦死者があつたと見るべきか。

碑の裏面の「有旧誼」とは前にも記せるごとく、能久親王は戊辰当時の輪王寺宮公現法親王に在しますによってである。

碑は白河町龍蔵寺にて管理し、供養は春の彼岸に、秋の彼岸に白河町隣の小田川村根田部落の念仏講が年々行なっている。龍蔵寺の記録によると仙台藩の白河口戦争の死者は

5月朔日に参謀坂本大炊外82名。

6月12日本道口61名。

6月24日金山戦争17名。

7月1日白河・米村・大谷地6名。

7月15日白河本道口17名。

[p155]

江戸取締藩の首藩：江戸市中の警備を命じられた藩のうち、主力となる藩という意味か、なんらか指揮権を与えられた藩という意味か。

集注：（兵力等を）1か所に集め注ぐこと。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d38「仙台藩士戊辰戦歿之碑」(女石)】

女石：白河市女石。白河から北へ向かう街道に関門が設けられていた。白河城から北東へ1.5km

十大字：表面に刻された10文字のこと。

大勲位：明治時代に入り1875年(明治8年)に太政官布告に基づく勲等・賞牌(賞牌は翌年勲章に改称)の制度ができ、次いで翌1876年(明治9年)に詔書に基づく大勲位が、最上位の勲等として制定された。勲章の授与にあつては、まず相応の勲等(一〜八等)に叙した(叙勲)うえで勲等に相当する勲章が贈られることとされた(授章)。

2003年11月3日以降の今日では、等級としての勲等は廃止されて、勲章の授与である「授章」のみが行なわれている。

二品(にほん)：一品から四品までである親王の位階のうち第二等⇒【脚注】公現法親王(能久親王)

親書：身分の高い者がみずから文を書くこと。

樹(た)つ：「建てる」に同じ。

大王(おおきみ)：古代日本における天皇、皇子、皇女に対する尊称。ここでは能久親王をさす。

旧誼：古きなじみ。

以つて：そうすることによって。

感泣(かんきゅう)：感激して泣くこと。

地下に：墓の中で。

伊達宗基：1866〜1917。仙台藩第14代藩主。(最後の藩主)原書「輪王宮」→訳「輪王寺宮」

龍蔵寺：白河市年貢町。

⇒【脚注】根田

念仏講：日本の仏教において、在家信者が念仏を唱える講中(集まり)を指す。

⇒【脚注】坂本大炊

である。

### (6) 福島藩戦死碑

白河町字向寺<sup>むかいでられんぼうじ</sup>聯芳寺境内にある。明治21年白河町鈴木忠蔵、  
福島町高橋純蔵等の<sup>ほつき</sup>発起にかかる建設である。

#### 福島藩士十四人碑

正五位子爵<sup>しょうごい</sup> 板倉勝達<sup>いたくらかつと</sup> 篆額<sup>てんがく</sup>

王政維新、廢幕府、撤藩鎮。其嘗擁兵抗命者、亦皆  
寛宥復爵位。況<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>臣隸、射鉤斬袂、竭<sup>レ</sup>力  
所事不<sup>レ</sup>独、其罪可<sup>レ</sup>積其忠可<sup>レ</sup>憫也。討会之役、奥  
羽諸侯連署訴<sup>レ</sup>冤。不<sup>レ</sup>聽。六師來伐。乃各發<sup>レ</sup>兵同  
守<sup>レ</sup>白河城。对壘踰月、遂為<sup>レ</sup>其所陷。転戦于金山于  
根田于大谷地。而<sup>レ</sup>仙台会津米沢棚倉二本松等兵相踵敗衄。  
是時、福島藩隊長池田邦知、以<sup>レ</sup>部兵<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>六反山、奮闘  
不<sup>レ</sup>撓、而孤立無援、刀折槍断、硝彈共尽、番頭<sup>レ</sup>涉川勝兆  
以下十四人死<sup>レ</sup>之。実明治元年戊辰夏六月十二日也。嗚呼士尚<sup>レ</sup>  
氣節、食<sup>レ</sup>其禄者死<sup>レ</sup>其事、則十四人捐身報主、其  
情与<sup>レ</sup>従<sup>レ</sup>王師<sup>レ</sup>致死者無<sup>レ</sup>異。今彼鬼既已列<sup>レ</sup>祀典  
矣。而此独委棄不<sup>レ</sup>問、可<sup>レ</sup>乎。頃者志士相議建碑表<sup>レ</sup>之。  
請<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>于余。余嘗事<sup>レ</sup>松山侯、其国与<sup>レ</sup>福島有<sup>レ</sup>魯衛  
之親、義不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>辞、因援<sup>レ</sup>筆略叙<sup>レ</sup>其事。係<sup>レ</sup>之以  
銘。銘曰

寒疾五日不汗則死彼懦偷生壯士所耻  
猗与英魄伴古壯士含笑黄泉留名青史

明治二十一年四月

從五位勲六等 川田剛 撰

高橋純蔵 書

「福島藩士十四人碑」と上部に書かれたのが篆額である。

『宋史通俗演義』に「一旦遇著寒疾、五日不出汗、便當死去」というくだりがある。  
川田剛： 1830～1896。川田夔江（おうこう）。竹次郎。幕末・明治期の漢学者。山田方谷に招かれ、備中松山藩に仕官したことがある。  
⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d36 「福島藩士十四人碑」（向寺聯芳寺）】

「その義理から辞退すべきではない。（辞退はできない）」  
筆を援（ひ）き： 筆を執って「風邪をひいて5日たっても汗をかかないでいれば死んでしまう（風邪は汗をかいて治すものだ）。かの懦弱をむさぼって生きながらえることは、壮士の恥ずるところである。ああ、英雄の魂よ、永遠の壮士よ。（あなたは）笑って黄泉にはいり、歴史に名を留めるのですね」

【p157】

聯芳寺： 白河市向寺。

高橋純蔵： 福島藩勤王派。遂堂（ずいどう）。『楷書千字文』明治18年8月。

⇒【醍醐参謀の脱出と福島藩士高橋純蔵】

⇒【脚注】板倉勝達

藩鎮： 古代中国の唐から北宋代までの地方組織の名称であるが、ここでは徳川幕藩体制の藩を漢詩的に表現している。

擁兵抗命者： 兵を擁して（天皇の）命令に逆らった者。

寛宥： 寛大な気持ちで罪過を許すこと。

臣隸（しんれい）： けらい。臣下。召使い。

「もちろん、その家来たちにもこれ（赦免）を為すべきだろう」

射鉤斬袂： 鉤はかぎ形の武器。

「射鉤斬袂」は白兵戦のような熾烈な戦闘の漢文の表現と思われる

力を尽くすところ独りのことにあらず 力を尽くして戦ったのは決して個人の考えではない。（藩主の命を受けて行なったのだ。）

冤を訴う： （会津藩の）無実の罪を訴えた。

六師： 西軍6藩。薩摩・大垣・長州・土佐・黒羽・宇都宮を指す？

東海・東山・北陸・山陰・山陽四国・九州への鎮撫使。

各： 奥羽列藩同盟の各藩。

同じく白河城を守る： 力を合わせて白河城を守った。

对壘： 敵と向かい合うようにとりでを築くこと。戦場で敵と対陣すること。

踰月： 月を越えること。翌月になること。

敗衄（はいじく）： 戦いにやぶれること。

部兵： 指揮下の兵。

番頭（ばんがしら）： 「番」とは軍事・警備のこと。藩政の職名

「武士というものは気節を尚び、禄を受けるのもその事業に死ぬためである。」

捐身報主： 身を捨てて、主君に報いる。

与： ～と。並列の意味。

鬼： たましい。

祀典（してん）： 神を祀る儀式

「いま、西軍戦死者の霊は祀られている。しかしこの福島藩死者だけが捨て置かれて顧みられないでよいのだろうか」

松山侯： 松山侯の誤記か？

事す： 仕事にする。仕える。

魯衛の親： 古代中国の魯国と衛国のように文化思想が共通すること。論語に「魯衛の政は兄弟なり」とある。

㊦



(7) 二本松藩戦死者碑

戊辰の役二本松藩戦死者 23 名の英霊を 吊うために、昭和 6 年白河町長重公追遠会が主唱して、白河町円明寺丹羽長重公御廟所の参道側に碑を建てた。長重公追遠会は二本松旧藩および白河町有志者をもって組織され、現在安田忠次郎氏・吉成房次郎氏等が理事である。書は上野良尚氏の精魂を傾けたもので碑陰に英霊の氏名が刻されてある。碑の表に

「二本松藩土慶応戊辰戦死之霊」

とある。

(8) 忠干碑

忠干碑は西白河郡釜子村長伝寺境内にある。釜子村には越後高田藩の陣屋があった。戊辰の役徳川の鴻恩に感じて東軍に与して奮戦し 16 名の死者を出した。その墓も長伝寺にある。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d21 「二本松藩土慶応戊辰役戦死之霊」(円明寺)】

円明寺： 白河市円明寺。字であって寺は無い。昔は寺があったのだろうか。

御廟所： おたまや (御霊屋)。白河城から南へ約 1.2km。

上野良尚： 白河町。会津藩士。田辺軍次墓碑、二本松藩戦死者碑の書を行なう。

忠干碑： 干は肝。忠魂碑。

高田藩： 新潟県上越市。榊原家。15 万石。寛保元年 (1741) 以後、白河・石川・岩瀬・田村 4 郡のうち 8 万 4000 余石が、高田藩分領となる。文化 6 年 (1809) 以後、分領は 3 万 3000 石に縮小し、釜子 (現東村釜子) の陣屋支配となった。

釜子村： かつての村名は「かまのこむら」。現在の地名は「かまこ」。

鴻恩： 大きく深い恩恵。

死者十六人： 長伝寺には明治 2 年 10 月住職が建立した「戦死集霊供養塔」がある。それには士・新兵・軍夫等 17 名の名が刻まれている。なお、高田 (上越市) にも高田藩奥州釜子陣屋在勤藩士 11 名の戦死供養碑がある。大正 6 年建立。

榊原武揚： 1836~1908。釜次郎。昌平坂学問所、長崎海軍伝習所で学ぶ。幕府の開陽丸発注に伴いオランダへ留学。帰国後、幕府海軍の指揮官となり、戊辰戦争では「蝦夷共和国」の総裁となった。降伏・助命・釈放後、明治政府に仕え外務大輔、海軍卿、文部・農商務大臣など。

釜子村： 釜子村の漢文的表現 支邑： 分領。

士卒五十余戸： 「戸」とあることから、釜子領の高田藩士は代々在住であったと思われる。地域との結びつきが強かったのだろう。

四隣： 東西南北の近隣。

本藩の声息： 越後高田にある高田藩本庁との音信。

勢はなはだ急： 西軍の勢力がが強く、または情勢の変化が急？

「義を重んじるならば、(徳川氏と) 運命をともしないわけにはいかない」

死節諸士碑

忠干碑

従二位子爵 榊原武揚 篆額

磐城国西白河郡釜子村、世為越後高田藩主榊原氏之支邑。遣士卒五十余戸、戍焉。明治戊辰之乱、奥羽同盟、四隣騷擾、道路梗塞、絶本藩之声息。既而西軍来討、勢甚急。諸士胥議曰、吾藩浴徳川氏之恩、久矣。義不、可、不、俱。其盛衰也。即相率与東軍奮戦各地。百折不屈、死者十六人、可以見其忠勇義烈上矣。今兹庚寅值二十三回忌辰、故旧胥謀欲建碑其邑長伝寺上、以表其忠節中。来請余文。嗚呼余亦為當時東軍敗将、出万死得一生、以至今、肯無有所為、愧於諸士多矣。乃俯仰今昔、叙其概略。係之銘曰

生報主恩 死裏馬革 厥節何烈 厥心何赤  
千歳不磨 深刻貞石

明治二十三年歲在庚寅十一月上澣

会津 山川浩 撰  
高田 中根聞 書

死干碑と篆額にあるをもって世に忠干碑という。(干は肝である。)

【p161】

東軍に与し： 東軍とともに、東軍にくみして。

百折： 多くの苦戦、苦難。

辰： 時節。とき。

故旧： 縁故の者、旧知の者。

「決死を覚悟して出役し、万に一の生を得て、今に至っている」

「だからといって何を為す（為した）わけでもない」

「命のある限り主恩に報いようと努め、死んで馬皮に包まれて帰還する。その忠節は何と壮烈、その心は何と純真であることか。（その事蹟を）千年経ても磨滅しないよう、固い石に深く刻もう」

死裏馬革： 《「後漢書」馬援伝から》戦死者を馬皮に包んで返送する。転じて、戦場で死ぬこと。

歳在庚寅： 歳（木星）が天球で庚寅の位置にある。

上澣： 上旬。

山川浩： 1845～1898。会津藩士。国家老山川重固（1000石）の子。重栄、大蔵（おおくら）。1860家督相続。1866幕府使者同行でロシア渡航。若年寄として鳥羽伏見・日光口・藤原口を転戦。のち会津若松に入城して籠城。1873陸軍出仕。西南戦争等に従軍。高等師範学校校長。陸軍少将。『京都守護職始末』を起草（完成は健次郎）。姉に山川二葉、弟に山川健次郎、妹に山川常盤、大山捨松ら。

→ [\[脚注\]「知恵山川、鬼佐川」](#)

中根間： 1831～1914。江戸出身。幕府医学館に学ぶ。越後高田藩の藩医、書家。中根半嶺（はんれい）。

原書「**死干碑**」となっているが、「忠干碑」が正しいのではないか？ 「死節諸士碑」が当初の碑名なのだが、篆額が「忠干碑」となっているので、一般に「忠干碑」と呼ばれている、と解説しようとして誤記？

(9) 海老名衛門君碑銘

海老名衛門の碑は白河町龍興寺の門前にある。

その側かたわらに戦死者墓の碑石ひせき1基がある。これは海老名等一隊の戦死者の墓石であると伝う。碑文に云う

海老名衛門君碑銘

明治戊辰之役海老名衛門君殉難。後十七年、其子季昌君建碑。其地、使余銘之。余嘗辱君之知、略知其半生、乃叙之。曰、君諱季久、称郡衛門。其致仕後之称也。世仕会津藩。考諱季長、称郡右衛門。妣大石氏。君幼穎悟、善文武之業。年二十八為目付。經学校奉行添役、公事奉行、郡奉行等数職、転軍事奉行添役、安房上総之営。嘉永六年米利堅使節率軍艦抵浦賀、辺海戒嚴。君与軍事奉行黒河内松斎指揮隊伍、進退兵船、以備不虞。已無事、居五年。徙江戸邸、為軍事奉行、転大目付、帰会津。安政六年再為軍事奉行、兼番頭勤、戊蝦夷。加禄五十石、更賜職禄五十石、併旧三百五十石。嘗役干北蝦、余亦從焉。航白主海、攀雷電嶺、滞鯨鯢出沒、熊狼吼噉之郷。数月、文久三年致仕、還會津。前後賞賜不可勝数。戊辰之乱、復撰軍事奉行、出屯白河、五月朔、敵以大軍来襲。我兵血戰。丸尽刀折、駢頭死之。君知不、可、為、自屠腹死干龍興寺山林中。距文化十四年二月朔生、実五十二年也。君為人謙退沈黙、接人温和未嘗疾言遽色、而毅然卓立。処事方正不憚權貴、不侮卑弱、唯義是從。以人皆敬重之。傍好繪事、胸次瀟灑有韻致。配町野氏生四男二女、長季昌君嗣、累遷藩相、後仕朝、為福島県官、転郡長。次天、次季包、次季満皆善勉学。長女嫁小原内記、次天。嗚呼余叙此、宛然睹君奮戰斫敵、慷慨屠腹之状、不覺暗淚交頤也。

銘曰

鞠躬尽瘁 船南馬北  
為国致身 為君殉職  
其節其忠 万世表式

明治十七年五月

東京大学教授 正七位

南摩綱紀 撰  
大沼讓 並 篆額

[p162]

海老名衛門： 会津藩士 250石。季久。海老名群治季昌の父。軍事奉行勤方。龍興寺山林中において自決。

龍興寺： 白河市向新蔵。俗称を「山の寺」。

君の知をかたじけなくし： 彼と知己の間柄であったことの謙讓表現。

諱(いみな)： 生前の実名。生前には口にすることをはばかった  
穎悟： すぐれて悟りのはやいこと。

文武の業： 学芸・武芸両道の学習・修行。

目付： 藩政など武家政治において、違法を監察する武士の職名  
添役： 補佐の職。

公事奉行： 政務を担当。  
郡奉行： 藩領の在方で農政に当たる。

安房・上総： 千葉県。  
営： 会津藩が江戸湾周辺警備に当たった際の駐屯地。

亜米堅： メリケン。アメリカ  
不虞： 非常事態。

大目付： 藩政においては、目付の上位の職。大監察とも。

番頭(ばんがしら)： 「番」とは軍事・警備のこと。藩政の職名。軍の指揮官の意味であるが、藩主への取り次ぎ役も。

加禄： 禄高を増加すること。  
職禄： それぞれの職には相当する役高があった。役高に満たない者が就任する場合は、職務を果たすための禄不足を補った。

北蝦を干ぐ役に： ロシアの南下政策に対応するための千島警備に、会津藩が当てられたことを指す。

白主海： 「主が白(空白)の海」=主無き海。茫洋とした海。

鯨鯢： 「鯨」は雄クジラ、「鯢」は雌クジラ。

熊狼(ゆうろう)： クマとオオカミ。

吼噉(こうたん)： 吼ほえる。噉くろう。

「この前後に与えられた賞賜は数えきれないほど多い」

出屯： 出兵して駐屯する。  
「敵、大軍をもって」と記すが、じつは西軍は700名。

駢頭： 頭を並べた状態で。「枕を並べて討ち死に」ということ。

「君は(もはや戦況は)どうしようもないことを悟って」

距たること： 生まれてこれまでの年月。

謙退： へりくだって控え目にする。

疾言： 早口でものを言うこと  
遽色： 慌てた顔つき、態度。

篆額は「<sup>しょうはくどくしゅう</sup>松柏独秀」の4字である。

↙

船南馬北： 南船北馬。絶え間なくいろいろな所を旅行してまわること。

国の為に身を致し： 国のために身をささげ尽くす。

万世の表式： 後々の世まで永遠に、讃えられ見本とされるべきもの。

⇒ [脚注] 南摩綱紀

大沼讓： 蓮齋。会津藩。

松柏独秀： 松や柏は長く繁茂する樹木と考えられ、また常緑であることから、墓場に故人を偲んで植えた。故人の徳が松柏のように永く特別に記憶されることを祈った。

⇒ 目でみる戊辰白河口戦争の記録【d29 「戦死塚」「海老名衛門君碑銘」(向新蔵龍興寺)】

【p164】

毅然： 意志が強く、物事に動じないさま。

卓立： めきんで高く立つこと。ひときわ目立ってすぐれていること。

方正： 行いや心の持ち方の正しいこと。

権貴を憚らず： 権門（地位の高さ、勢力の強さ）や富貴（財力の大きさ）に媚びたり、遠慮することなく。

卑弱を侮らず： 身分の低い者、社会的弱者を軽侮したり蔑ろにせず。

唯義これに従う： 服従するのは「義」に対してのみだった。

敬重： 敬って重要な役割を任せた。

胸次〈きょうじ〉： 胸中。気持ち  
瀟灑〈しょうしゃ〉： 瀟洒。さっぱりして気がきいているさま。  
あかぬけているさま。

韻致〈いんち〉： 洗練された風雅なおもむき。雅趣。

町野氏を配し： 町野氏の女子を妻とした。

長季昌君嗣： 君の嗣たる長子の季昌は。

藩相： 藩の相（大臣）。家老などの重役。

累遷： 累進。（地位などが）次々に進みのぼること。

朝に仕え： 新政府に出仕して

海老名季昌： 1843～1914。会津藩 250 石。郡治。軍事奉行の父季久に従い江戸湾警備、蝦夷地警備に出動。パリ万国博覧会に徳川昭武の随員。戊辰戦争中に家老となる。降伏赦免後、1875 警視庁出仕。山形県西村山郡郡長をはじめ、福島県の各郡長を務める。若松町長となり、市制移行に尽力するも、市長は辞退した。

次は天し： 次子は夭折した。

小原内記〈おばらないき〉： 会津藩家老九家のうちのひとつ。1200 石、番頭？。敢死隊組頭小原信之助の兄。

宛然： さながら。

斫敵〈しゃくてき〉： （おの）で たたききる。

慷慨： 世情や自分の運命などについて、怒り嘆くこと。

屠腹： 切腹すること。

暗涙： ひそかに人知れず流す涙。

交頤〈こうい〉： 両眼から流れた涙が顎（頤）で交わる。

鞠躬〈きつきゅう〉： 身をかため慎みかしまること。一生懸命に気を遣う。

尽瘁〈じんすい〉： 自分の労苦を顧みることなく、全力を尽くすこと。

↘

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d20 「戊辰役戦死之碑」(寺小路)】

寺小路： 白河市寺小路。白河城から南東へ約1.2km。

仙台石： 宮城県石巻市稲井町などで産出され、稲井石・井内石とも呼ばれる、青黒～黒灰色の砂質頁岩。大材がとれるので記念碑によく利用される。

⇒【脚注】石切山(白河石)

蛇石： 白河市蛇石。

文珠山： 蛇石・関川窪・雷神山などとともに、白河市街と南湖の間にある丘陵地の字。

須賀川町： 福島県須賀川市。白河城から北東へ約22km。

龍禅子： 須賀川町。禅僧。書家。のち比叡山に入り入木道正統(じゅぼくどうぜいとう)四十六世。

斬首6名： ⇒【5月1日の戦い 渡部泰次郎の談】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d44 「戊辰役戦死之碑」(八竜神)】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d16 「戦死供養塔」(本町永蔵寺)】

白河市白井掛53の住宅側に建っている。白河観光物産協会によれば「どの藩の戦死者か、何名が埋葬されたかは不明である。」

## (10) 各地の供養塔

### ①白河町字寺小路<sup>てらこうじ</sup>24番に1基

表に

「戊辰役戦死之碑」

碑は仙台石で、白河町渡部泰次郎・小黑萬吉・金子祐助・小針寅吉諸氏が発起となり、白河町有志の賛助を得て、大正元年10月戊辰戦争に殉じた東軍の霊を慰めんとして建碑したものである。

東軍の遺骸の蛇石・文珠山あるいは桜町<sup>さくらまち</sup>付近に仮埋葬のままに放棄されてあったものを、ここに合葬<sup>がっそう</sup>して碑を建てたのである。表

の文字は須賀川町龍禅子の書で、合葬者は12名。

(桜町街<sup>さくらまちがいじょう</sup>上に斬首された6名を含む。)

### ②白河町字八竜神<sup>あざはちりゅうじん</sup>91番に1基

碑は寺小路にあるものと同質、同形で、書もまた同筆者である。

藤沢<sup>ふじさわ</sup>・土武塚<sup>どぶづか</sup>・八竜神<sup>はちりゅうじん</sup>等各所に散葬<sup>さんそう</sup>されていたものを合葬した

ものである。その数42名。建碑の発起者前に同じ。

### ③白河町字本町永蔵寺<sup>もとまちえいぞうじ</sup>境内に1基

表に

慶応<sup>げいおう</sup>四戊辰年

戦死供養塔

五月朔日<sup>さくじつ</sup>

### ④白河町字白井掛<sup>しらいがけ</sup>に1基

表に

無縁塚

左側に

慶応戊辰年

五月朔日戦死墓

⑤白河町<sup>かんせんじ</sup>関川寺境内に1基

表に

明治改元<sup>のとし</sup> 歳  
戦死<sup>れいこん</sup> 霊魂供養  
五月朔日

裏に

先君<sup>せんくん</sup>小池理八、戦死之碑<sup>ここ</sup>不<sup>じゅう</sup> 顕<sup>すうねん</sup> 於<sup>あらわれず</sup> 爰<sup>しほう</sup> 十<sup>このごろ</sup> 数<sup>の</sup> 年<sup>の</sup>、四方探求、頃者  
竟<sup>ついに</sup> 発見<sup>さくらまち</sup> 於<sup>において</sup> 桜<sup>はっけん</sup> 町<sup>ゆえに</sup>、故<sup>これを</sup> 再<sup>さいけん</sup> 建<sup>その</sup> 之<sup>せきうん</sup>、表<sup>を</sup> 其<sup>あらわす</sup> 蹟<sup>を</sup> 云<sup>す</sup>。

明治三十四年五月一日

男 小池信好

これは阿部藩<sup>あべはん</sup>の小池理八の供養塔である。小池理八は五月朔日  
桜町<sup>さくらまち</sup>方面の戦闘に足部に重傷を負い、立つべからざるを知って  
割腹<sup>かつぶく</sup>したものである。白河の歌人文豊<sup>かじんふみとよ</sup>は  
武士<sup>もののみ</sup>の心の駒はいさめども、黄泉までとはすゝめざりしを  
と詠<sup>えい</sup>じている。

⑥白河町字<sup>だいくまちこうとくじ</sup>大工町皇徳寺墓地に1基

表に

戦死人供養

裏に

明治二己巳<sup>きし</sup>年二月十一日桑名<sup>ぼくえん</sup> 卜<sup>これを</sup> 圓<sup>たてる</sup> 建<sup>うるう</sup> 之<sup>を</sup>、慶応四年閏四月二  
十五日、五月一日の戦死者十一人。

供養塔の多くは建設者がその部落民であるが、この碑には堂々と  
個人名を書いている。卜圓<sup>ぼくえん</sup>とは白河町字中町の桑名清兵衛の号で  
ある。東軍の死骸の手代町・袋町・大工町等にありしものを合葬  
したのである。

⑦白河町<sup>りゅうこうじ</sup>龍興寺境内に1基

表に

戦死塚

右側に

慶応四戊辰五月一日、同穴<sup>どうけつ</sup>四十四人。

【p166】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d31 「棚倉藩士小池理八「戦死霊魂供養」(八幡小路関川寺)】

関川寺： 白河市愛宕町。  
先君： 死亡した父親や祖先を敬つていう語。ここでは小池理八を指す。

「先祖小池理八の戦死の碑が不明で十数年あちこちを探したが、桜町において発見したので、碑を再建し、その事跡を表わす。明治34年5月1日 子孫・小池信好

蹟云〈せきうん〉： 事蹟。

男： むすこ。子孫の男子。

文豊： 白河の歌人。長瀬文豊。『雁のはしら』

「武士の心は駒のように勇むのでしょうけれども、黄泉(あの世)まで進みなさいとは申しませんものを」

⇒【南無阿弥陀仏の文字 歌人文豊が京都黒谷から写し来る】(谷津田川岸の供養塔の項)

関川寺には、上記のほか、仙台藩士の墓あり。

忠巖良哲居士

仙藩 石川大之進源春幸之墓

明治元戊辰年十月二十七日没

享年三十七

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d32 「仙藩石川大之進源春幸之墓」(八幡小路関川寺)】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d30 「戦死人供養」(大工町皇徳寺)】

己巳〈きし〉： つちのとみ。

桑名卜圓〈ぼくえん〉： 白河町中町。桑名清兵衛。卜圓は号。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d29 「戦死塚」「海老名衛門君碑銘」(向新蔵龍興寺)】

「戦死塚」は「海老名衛門碑銘」の隣に建つ。

同穴： 死んで同じ墓穴に葬られること。合葬。

⑧白河町常宣寺墓地に1基

表に

「明治戊辰戦死之墓」

⑨西白河郡大沼村大字大、字南田に1基

表に

慶応四戊辰年六月十二日

戦死数名埋葬塔

有志大村中

⑩西白河郡西郷村大字米に1基

表に

戦死供養塔

左側に

慶応四戊辰六月十二日

⑪西白河郡大沼村大字大、字搦目に1基

表に

戊辰戦死之碑

側に

大正六年五十回忌供養付、搦目中再建立。

搦目の高橋清之助翁は言う。明治初年に建てた供養塔は明治23年の大洪水に流されて、今のものは大正6年に再建したものであると。(流された塔は川底より掘り出されて、傍らに建てられている。)

⑫西白河郡古関村大字関辺の池畔に1基

表に

戦死墓

裏に

慶応四戊辰六月二十四日

6月24日は、板垣参謀が棚倉城に向かった日である。

【p168】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d27 「明治戊辰戦死之墓」(向新蔵常宣寺)】

大沼村： 明治22年、大・久田野・大和田・本沼が合併して大沼村となった。現白河市。

南田： 白河市大南田。白河城から東へ約3.5km。

大村中： 大村の一同。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d52 「戦死供養塔」(西郷村米)】

戦死供養塔： 西郷村米道場久保の路傍に建っている。

米には、上記のほかにも戦死供養塔1基がある。

これは⑩米山下の戦死供養塚のことか？

「戊辰戦死之碑」と「戦死数名埋葬塔」が隣り合って建っている。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d45 「戦死数名埋葬塚」(搦目)】

搦目中： 搦目部落の一同。

大洪水： 明治23年8月7日、台風により各地で洪水被害あり。

流された塔： 「戦死数名埋葬塔」

古関村関辺： 現白河市。

古関村： 現在の白河市の南部、旧表郷村の西部に位置する。

関辺： 旧古関村。関山の北麓。

戦死墓： 白河市関辺油久保5白河城から南東へ約7.5km。

⑬白河町字女石<sup>おんないし</sup>仙台藩碑の側に1基

表に

「戦死供養塔」

明治2年3月地方民の建てたものである。裏に<sup>しる</sup>記して「人数百五十人余葬之」とある。(前記と重複するも掲ぐ。)

[p169]

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d37\_「戦死供養塔」(女石)】

女石： 白河市女石。白河城から北東へ約1.3km。

前記と重複： 「仙台藩戊辰戦死碑」の項で言及されているので。

⑭西白河郡大沼村<sup>おおぬまむらさくらおか</sup>桜岡に1基

表に

戦死供養

左側に

会津仙台二本松四十九名

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d43\_「戦死供養」(桜岡)】

大沼村桜岡： 白河市大桜岡。白河城から東へ約2.8km。

⑮西白河郡小田川村<sup>こたがわむら</sup>大字小田川<sup>こたがわ</sup>の入口<sup>こたがわ</sup>観音堂境内に1基

表に

「戊辰戦死供養塔」

小田川村： 現白河市。

「目でみる戊辰白河口戦争の記録」に【d40\_「戊辰戦死供養塔」(小田川薬師堂)】が載っているが、この観音堂の供養碑とは別のものなのか？ それとも同じもので、原書の「観音堂」は誤記か？ 小田川の小野薬師堂は実際に存在するが、観音堂は不明。あるいは小野薬師堂を「観音堂」とも呼ぶ？

⑯西白河郡五箇村<sup>ごかむら</sup>大字双石<sup>くらべいし</sup>字坊ノ入<sup>あざぼうのいり</sup>に1基

表に

戦死靈魂供養

慶応四<sup>ぼしん</sup>戊辰年六月

五箇村： 明治22年、双石・借宿・田島・舟田・板橋の村々を併せ、西白河郡「五箇村(ごかむら)」が発足。現白河市。

坊ノ入： 白河市双石坊ノ入。白河城から東南へ約3.9km。

この供養塔は白河から石川に通ずる県道の側にあるが、この県道は明治18年の改修に係るものであって、それ以前の道路は今よりも北方にあったものである。

⑰白河町妙関寺<sup>みょうかんじ</sup>の西側に1基

表に

戦死供養塔

明治二<sup>み</sup>巳年五月朔日<sup>さくじつ</sup>建<sup>これを</sup>之<sup>たてる</sup>

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d33\_「戦死供養塔」(関川寺)】

妙関寺： 白河市金屋町。

戦死供養塔： 妙関寺の北西角に近い関川寺地内(空堀端)に建っている。小さく、野辺の石仏のような趣きである。

高さ2尺5寸： 約76cm。  
幅1尺4寸： 約42cm。

これは供養塔としては最も小さいものである。高さ2尺5寸幅1尺4寸。

⑱白河町米山越<sup>よねやまごえ</sup>に1基

表に

米山越(よねやまごえ)： 白河市米山越。稻荷山の北東側の字。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d05\_「仙台斎藤善次右衛門戦死供養」(米山越)】



慶応<sup>ぼしん</sup>四戊辰年

仙台斎藤善治右衛門戦死供養

五月三日

高さ5尺、幅2尺。表の下部に「山口七三郎・櫻井伊勢松・木田三十郎」と記してある。

## ⑱白河町<sup>うままち</sup>字馬町の橋<sup>そで</sup>の袖に1基

表に

「南無阿弥陀仏」

これと同種の供養塔は、新蔵<sup>しんくら</sup>より向新蔵<sup>むかいしんくら</sup>に通ずる橋<sup>そで</sup>の袖にもある。この2つの橋は元は土橋<sup>どばし</sup>である。五月朔日<sup>さくじつ</sup>の大戦争の翌日、この2つの土橋で、東軍の士<sup>し</sup>は幾<sup>いく</sup>十<sup>じゅう</sup>人<sup>にん</sup>となく首<sup>くび</sup>刎<sup>は</sup>ねられて屍<sup>かばね</sup>は川に流されたものだと伝えられている。

南無阿弥陀仏の文字は、白河の歌人<sup>ながせふみとよ</sup>長瀬文豊<sup>くろだに</sup>がかつて京都黒谷<sup>くろだに</sup>の敦盛<sup>あつもり</sup>の墓<sup>も</sup>に詣<sup>か</sup>でた時、その墓<sup>か</sup>の景清<sup>かげきよ</sup>の書<sup>きた</sup>を写し来れるものである。

【p171】

斎藤善治右衛門：「白河口の戦い殉難者名簿」には「銃士」とある。

高さ5尺、幅2尺：約152cmと約61cm。

山口・櫻井・木田は供養塔の建設者か？（仙台藩士か？）

⇒目<sup>め</sup>でみる戊辰白河口戦争の記録【d22 谷津田川に架かる円明寺橋・新橋】

⇒【5月1日の戦い 小針利七の談】

馬町：白河市馬町。

馬町の橋：谷津田川（やんたがわ）に架かる円明寺橋。

新蔵より向新蔵に通ずる橋：谷津田川に架かる新橋（新蔵通り）。

向新蔵の供養塔は、常宣寺の「会津藩戊辰戦死十二士之墓」の側に移し祀られている。

⇒目<sup>め</sup>でみる戊辰白河口戦争の記録【d24 常宣寺（向新蔵）】

土橋：一般には木の橋の一種で、橋面に土をかけてならした橋である。

捕虜を処刑することについて

「捕虜はとらない、降兵は処刑する」という事例は、白河口戦争を通じて東西両軍に見られるようである。

戦国時代においては、降兵を先鋒として使うことも常套的に行なわれ、ために自らの意志により降伏することは、利敵行為と同様であると考えられ、味方を裏切る行為とまで見なされたようである。ただし戦国時代では功利的に敵味方逆転することは相互にままあることであり、降伏すること自体が反道徳という意識はなかったと思われる。

しかし江戸時代になって、名目論としての武士道が発展すると、武士として主君に忠誠を尽くす立場からは、そのような裏切り行為をはたらくことは恥ずべきことであり、降伏すること自体が武士道にもとるという意識が生じる。

また、そのような意識の裏返しとして、生き残った敵には「名誉の死」を与えるべきだと考え、助命を請う敵兵を軽侮することになり、ひいては捕虜処刑に走る結果になるようである。

このような傾向は、のちの帝国日本軍にも（一時期を除いて）引きずられていくことになる。

⇒【脚注】文豊

⇒【白河の歌人文豊の供養歌】  
（小池理八供養塔の項）

黒谷：京都市左京区黒谷町。金戒光明寺。法然廟。熊谷一族墓所。平敦盛供養塔。京都守護職会津藩の本陣。会津藩殉難者墓所（鳥羽伏見戦死者）。

熊谷直実は一ノ谷の戦いで討ち取った平敦盛の供養を行なったと伝わるので、熊谷一族ゆかりの黒谷に平敦盛供養塔がある。

景清：藤原（伊藤）景清のことなのか？平氏方の武者。悪七兵衛。各地に様々な伝説が残されている。豊国の俳優似顔東錦絵に「踊形容外題尽 初雪見妙蔵景清黒谷越の場」というのがあるので、歌舞伎の演目上、景清と黒谷が関連付けられているのかもしれない。

実際に景清と敦盛がどれほどの関係があるのか、敦盛の供養塔の字が本当に景清の書なのかは、さだかでない。

にしごうむら はぶとだいらりゅうじ  
②西郷村大字羽太太龍寺の戦死墓

表に

慶応四年  
戦死墓  
七月一日

これは飯野藩士森要蔵その子虎尾と花澤金八郎・林寅之助・多湖宗三郎外会藩 15 名の墓である。

かねやまむらしもはばらかしまじんじや  
②西白河郡金山村下羽原鹿島神社境内 1 基

(抛る 白河町 永島慶次郎氏 調査)

表  
内儀茂助明鄰之墓

裏  
慶応四辰年六月二十四日奥州白川郡郊外戦死于時四十有八  
孝子 内儀明盈 建之

にしごうむらたかすけはんそうじ  
②西白河郡西郷村高助班宗寺 2 基

(抛る 白河町 安田良三氏 調査)

その 1

表  
大圓道忍信士

右側  
明治元年辰六月十二日

左側  
丹羽左京大夫藩大河原弥太郎

その 2

表  
実参道忍信士

右側  
明治元辰年六月十二日

左側  
丹羽左京大夫藩斎藤孫吉

[p172]

【清子書込】

和知家墓地 (千葉真田)  
真田真量、中興の寺 (キヨ)  
月心院隠居

(宮城県白石市の月心院は、真田信繁の三女阿梅(おうめ)が父の菩提を弔うため建立した。現在は廃寺。「月心院」は信繁の法号。)

白河の金屋町月心院は、結城義親が母の法号に因んで寺名とした。(なので、直接真田とは関係ないのだが、)月心院は千葉出身の真田真量が中興した? 真田と和知の関係は? 大龍寺に和知家墓地?

大龍寺: 西郷村羽太狸屋敷。白河城から北東へ約 5.1km。戊辰戦争による寺院の焼失から、明治 24 年に本堂を再建。土蔵造りの本堂は、火災で二度と消失しないようにという当時の人たちの想いが込められているという。

⇒【脚注】森要蔵

⇒【7月1日の戦い 飯野藩森要蔵等の討死のこと】

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d53 森要蔵父子ほか「戦死墓」(西郷村羽太太龍寺)】

金山村下羽原鹿島神社: 白河市表郷金山下羽原。白河城から東南へ約 14.5km。

内儀茂助: 棚倉藩弾薬方。6月 24 日三森で戦死。48 歳。

棚倉藩士内儀茂助の墓は、下羽原鹿島神社に隣接する緑川ミネ氏屋敷内に移され祀られている。

「殉難者名簿」によると、加えて(妙閑寺)と注書があるので、さらに移転した?

墓碑の表記は「白川郡」であるが、これは東白川郡を指すものではない。

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【d54 二本松藩士大河原弥太郎および斎藤孫吉の墓(西郷村高助班宗寺)】

班宗寺: 西郷村鶴生高助。白河城から西北へ約 7.8km。

丹羽左京大夫藩: 二本松藩のこと。

「殉難者名簿」によると、

大河原弥太郎: 二本松藩。原太左衛門組足軽。6月 12 日米の椋山で戦死。

斎藤孫吉: 二本松藩。青山伊右衛門組足軽。6月 12 日米の椋山で戦死。

【p174】

②西白河郡西郷村<sup>よねやました</sup>米山下

表

戦死供養塚

左側

明治元年<sup>ぼしん</sup>戊辰年五月

台石

四十三人

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【[d51\\_「戦死供養塚」\(西郷村米\)](#)】

米山下： 西郷村の大字「米」字「山下〈やました〉」。白河城から西へ約 2.5km。

戦死供養塚： 米の字山下と字杉山前の境あたりにある。

④西白河郡<sup>こたがわむらほうしゃくいん</sup>小田川村宝積院内

表

仙藩佐々木廣之助之墓

右側

慶応四辰年六月十二日

<sup>とうしょにおいて</sup>  
於 当 所 戦 死

⇒目でみる戊辰白河口戦争の記録【[d42\\_「仙藩佐々木広之助の墓」\(小田川宝積院\)](#)】

宝積院： 白河市小田川行屋久保〈ぎょうやくぼ〉。白河城から東北へ約 5.1km。

佐々木廣之助： 仙台藩。「白河口の戦い殉難者名簿」によると、浜田郡治指揮卒とある。

(拋る 宝積院 根本信識氏 調査)

供養塔は藩籍不明であるが、主として東軍のものである。

供養塔のうちいくつかについては、⇒[白河口戦争の地名地図](#) に所在地を示した。

第 20 章 戊辰戦争と地方民

(1) 地方民は戦争に苦しんだ。しかし能く奉公した。  
 「三年の凶作に遭うよりも一年の戦争地になるものでない」と言っ  
 たそうだが、実際町人も農民も苦しんだ。しかし能く奉公した。

とちもと 梶本大庄屋記録に卵買上の事がある。

其村々有之候玉子、是より出来候分御買上に相成候間、相貯置  
 可申旨、被仰出候間、村々小前一統心得違無之極嚴重  
 申付置、他所売一切不相成候云々  
 辰五月十四日  
 大庄屋所

同大庄屋の記録中、慶応 4 年 6 月 3 日の条には

先達相達置候、御買上玉子之儀、官軍方に鶏被取、玉子無之  
 村々方も有之哉に相聞候。右等の次第の村は其形合早速申出  
 可相成候。猶又少々にても玉子出来候村方は五日置に  
 取集、相集次第御差出可被成候。御差支に付、此段申達  
 候。以上。  
 辰六月三日  
 大庄屋所

(2) 農民は落ち着いて仕事が出来ぬ

5 月朔日の戦いには、白河町の人達は前に述べたとおり、たいてい地  
 方に避難した。しかしそれはもちろん全部ではなかったが、老いた  
 る者・小供・婦人達はたいてい避難した。

店は開いていた。鞋などを西軍が買いに来る。「有りません」など  
 と言ったものなら、奥勢味方と睨まれたものであるという。

西軍は白河に滞在している。戦争は何時あるか判らぬので、町人は  
 浮き腰であった。戦争は武士と武士の間でやるので、町人や農民相  
 手では無論ないのであるが、農民などは田植えの盛りであり、麦刈  
 りの真っ最中であったので野良にあって流丸の来るのを恐れた。

梶本村： 東村梶本。  
 梶本村は、明治 22 年釜子村。  
 1955 年東村。2005 年白河市。現在  
 は、白河市東梶本。白河城から東  
 南へ約 10.5km。

⇒ [脚注] 大庄屋  
 ⇒ [脚注] 本書に登場する大庄  
 屋

「各村々に現在ある鶏卵、また  
 今後出来る分も、(東軍が) お買  
 上げになるので、貯め置くよう  
 にとの命令であるから、村々の百姓  
 は全て命令違反の無いように、他  
 へ売るようなことは絶対にいけな  
 いと、しっかりと嚴重に申し付け  
 しておくこと。」

小前： 本来の意味は、田畑や  
 家屋敷は所有するが役付きでない  
 一般の百姓を指したが、のち小作  
 などの下層農民をも指すようにな  
 った。「小前一統」で村に住する百  
 姓全て。

「先立って通達した鶏卵買い上  
 げの件であるが、官軍方に鶏を奪  
 われて卵が無いという村々もある  
 と聞いている。そのような事情の  
 村は、その経緯を早々に申し出る  
 べきである。なおまた、少量でも  
 卵が出来た村は、5 日おきにでも取  
 り集め、集まり次第差し出すよう  
 にせよ。(東軍方の) 支障となっ  
 ているので、この事を通達するもの  
 である。」

この時期、梶本はまだ東軍の勢  
 力下にあったが、その所属村々  
 には西軍の活動も及びはじめ、食  
 料物資調達の対象地になっていた。  
 鶏・鶏卵についても両軍の取り合  
 いがあったのである。

鞋： 草鞋(わらじ)。稲藁で作  
 られる日本の伝統的な履物。草履  
 (ぞうり) は鼻緒だけで履くが、  
 草鞋はつま先からの緒(お)を底  
 部側面の輪に通しながら足首に巻  
 き縛る。

奥勢味方： 「奥州の軍勢の味  
 方」、つまり東軍に通じ支援する  
 住民。

浮き腰： 腰が不安定な姿勢。  
 あわてて落ち着きがないこと。

野良： 野原や田畑など屋外の  
 こと。

流丸： 流れ弾(ながれだま)。  
 目標を外れて飛ぶ弾丸のこと。狙  
 ったのではなく飛来する弾丸。

西白河郡小田川村泉田の吉田トヨ媼の談

媼は時に年十八歳、泉田の戦争は田植え時であった。

仙台藩は鬼窪山に本陣を置き、泉田の屋敷内に部落中の畳や戸板を出して壘を築いた。味噌桶や材木や臼をも運んで壘を築いた。東軍でも西軍でも食物があれば手あたり次第に持って行った。

麦刈りで野良に出ていると、銃声が聞えてくる。「それ、今日も戦争だ」と芳賀須知の方に逃げる。芳賀須知に逃げた人も男は人夫に出された。

### (3) 民家が焼かれた

東軍に焼かれている。また西軍が焼いた所もある。

東軍は西軍の陣地となることを恐れて焼き、西軍は東軍の根拠地を奪うために焼いた。

白河城は守兵が焼き、棚倉城は自ら焼き、二本松城もまた自ら焼いたのである。白河地方で焼かれたのは根田の部落と、山の根（今の西郷村）の各村が最も多く焼かれた。根田の部落はただの一軒だけを残してみな焼かれたという。根田は東軍に組していると見られたからである。根田と言えば猫でも犬でも憎まれたものだという。それで根田の部落には今日古文書などは一通も残っていない。

明治天皇が明治9年奥羽御巡幸で根田ご通過の際は、みな仮小屋であったと伝えられている。

西郷村真船の和知菊之助氏が、『西郷復興記』という小冊子を出版されている。その文中に

明治元戊辰の年、偶々戦争に会遇し、時恰も農家は田植最中の事なれば、各々一生懸命に挿苗の折柄、突然銃声起り、外れ丸は早乙女の早苗持つ手先に落ちたりしに、孰れも驚き周章て、苗を捨て、我先にと安全の地に逃げたるなどして碌な仕事も出来ず、僅かに機を見ては植付けなどして居る内、時期を失し、猶且つ住み居る家は兵燹にて灰燼となり、何一つ残りたる物とはなく、住むに家なく、着のみ着のまゝの有様にて、夜は樹下の芝生の上か或は竹藪などの中に寝起きを仕乍ら、何とか住むべき家を作るに、互に一軒に対し何日かの手伝あひをして、岐棒か何かを用ゐて掘建小屋を拵ひ、漸くは過ごして、其の秋に至りて収穫を見るに一家糊口の二・三ヶ月より、多くて四・五ヶ月位を支ふるに、如かず。辛くも其の年は万死一生の有様なりき。

【p178】

農民は命がけで農作業をこなさざるをえなかった。稲を育て、麦を収穫しなければ、いずれ飢えることになるのである。

小田川村泉田： 白河市泉田。

鬼窪山： 白河市泉田鬼窪の東北の山。

屋敷内： 単に泉田集落の民家という意味か、それとも小字名か？

原書は「芳賀須知」であるが、現代地図の表記は「芳賀須内」。読みは〈はがすち〉または〈はがすうち〉。「芳賀須内」という字は無く、「芳賀須内集会所」という名称のみ残る。白河市小田川を流れる泉川の支流の芳賀須内川沿いの字「愛宕下・欠下・登木・加茂工門」の総称。

根田： 白河市萱根根田。白河から須賀川・福島へ向かう奥州街道沿い。

山の根： 白河城西部の村々は、山根組・西郷組とも総称された。そのうち湯本・羽鳥・田良尾の3か村は山中三カ村、他は山根十三カ村（十四カ村）とも呼ばれた。

【清子書込】（十四カ村を直して）山根十五カ村

清子伯母が何をもって「十五」としたのは不明。

【清子書込】

作右衛門一作之助一三作一和知菊之助一道之助

（内山忠之右衛門一〜一キク）

和知菊之助一キク一清子・喜一郎・正道一悦哉

「作右衛門〜道之助」が和知家の経脈。内山忠之右衛門の孫サダと和知菊之助が結婚。その子がキク。孫が清子・喜一郎・正道。喜一郎の子が富田悦哉（記者）である

『西郷復興記』： 『西郷村復興誌』とも。

和知家： 建武のころは白川結城家に仕え、結城氏滅亡の後には西郷村柏野に土着して農民となった。元和のころより柏野村の庄屋を務めたという。

兵燹： 兵火。

糊口： 暮らしを立てる。生計

戦争年は冷気が<sup>きびしく</sup>酷く<sup>でんぼ</sup>て田圃に火を<sup>た</sup>焚きながら田植えをなし、そのう  
えに手入も肥料も充分でなく、秋の収穫は凶作同様であったと伝え  
ている。それに翌年は<sup>み</sup>巳年の凶作であったから農民は苦しんだ。

#### (4) 男は軍夫に出された

##### 小田川村泉田の吉田トヨ媪の談

軍夫は東軍にも西軍にも使われた。男が不足すると女まで軍夫  
に出た。女は遠くには行かなかったが、小田川まで行った。私  
などは何度か小田川の庄屋まで行って奥勢の握り飯を結んだり  
、飯を炊いたりした。

夫の忠蔵は薩摩藩の六番隊に附いて会津まで行った。墨付を頂  
いて帰った。また働きがよかったので太刀をも賜わった。その  
太刀を家宝として置いたが、先年不幸続きの時、<sup>うらな</sup>占ったらその  
太刀が祟るといので他に出してしまっ今はない。

##### 白河町天神町の藤田定之助翁の談

白河に居ても人夫を勤めたが、鍋島藩付で勢至堂に一泊して会  
津には入った。鍋島藩は天寧寺の山からお城を<sup>め</sup>目掛けて大砲を  
撃ったが、他の藩よりも上手のようであった。兵糧運搬、大砲  
丸運びをやらせられ1か月後に帰った。分捕り物としては何も  
持って来なかった。

白河町に<sup>のこ</sup>遺る話として、「男は居らんか、男は居らんか」と、西軍は  
家々を捜し回った。男は<sup>しらかわあたり</sup>見つかり次第軍夫とされた。白河辺の軍夫  
は二本松で帰されたものと、会津まで行った者とがある。軍夫  
は弾薬・食糧を運ぶ事や銃の手入れなどを勤めたという。

##### 白河町の棚瀬利助翁談

戦争の年は14歳であったが、15歳として忍藩の軍夫となり、  
会津に連れ行かれた。白河を出発して、大谷地・飯土用・  
滑川・牧之内を経て勢至堂の険を越えて行った。白河を立つと  
き一斗炊きの釜を持たせられて行き、帰りにもそれを持って帰  
った。滑川で昇いた棒を外して釜の鏝を損した。その釜で会津  
で飯を炊いた。それが14歳の私の役目。会津滞在は1か月。帰  
るとき赤津村にも勢至堂にも官軍様が見張りをしていて、武士  
の持つような道具を持つと皆お取り上げとなった。  
軍夫の中には気の利いた者があって、薩藩何番隊などという木

【p180】

原書「酷く」に〈きびしく〉と  
ふりがながあるため、そのままと  
した。

巳年の凶作： 明治2年は異常  
気象で、飢餓にさらされた。

小田川まで： 泉田から小田川  
まで1.6kmほど。

薩摩藩六番隊： 薩摩藩小銃隊  
六番隊。隊長野津道貫。宇都宮城  
の争奪戦に参加ののち、5月1日後  
に白河口戦争に参加。

白河に居ても： 白河近郊でも  
人夫を務めていたのだが、ついに  
会津まで行くことにもなった、と  
いう意味か。

鍋島藩： 佐賀藩。肥前藩と  
も。佐賀県佐賀市。鍋島家。35万  
7000余石。

勢至堂： 会津領境の一つ勢至  
堂峠の南東側の村。会津軍が拠点  
とした。福島県須賀川市勢至堂。  
白河城から北へ約22km。

天寧寺の山： 会津若松市東山  
町石山天寧。会津若松城から東へ  
約2km。

ただし『戊辰役戦史』などによ  
ると、西軍が佐賀藩アームストロ  
ング砲などを運び上げて会津若松  
城を砲撃したのは、城から東南約  
1.3kmの小田山〈おだやま〉であ  
る。小田山の北麓の天寧寺町にも  
佐賀藩部隊の配置があったため、  
「天寧寺の山」は小田山のことも  
もしれない。

⇒ [脚注] 忍藩

大谷地～勢至堂： 白河から勢  
至堂峠を越えて三代・原を経て会  
津に至る、会津街道の経路。

一斗： 10升。約18リットル  
滑川〈なめりかわ〉： 白河市大  
信戸滑里川。

赤津村： 郡山市湖南町赤津。

札を付して白河まで持って来た者も少なくなかったが、それが知れるとみな焼却された。私は白河を出るとき、勢至堂までということであったが会津まで進んだ。そのとき白河から忍藩おしはんに付いた軍夫は20余人と記憶している。

(このとき翁おうの使った釜が、翁の家に残されてある。著者が翁を訪ねたとき、この釜を前に置いて物語をされた。)

白河金屋町の齋藤千代吉翁かなやまち おう だんの談

白河から会津に軍夫に行った者は、分捕り品ぶんどりひんとして何か持って来たものだ。それが戦争が済むと官軍の知るところとなり、「みな差し出せ」との厳命げんめいがあって、今の大工町皇徳寺付近で焼却した。器物や衣類や刀剣まで山のように積んで煙にしまった。

金屋町： 白河市金屋町。白河市街のうち。

大工町： 白河市大工町。白河市街のうち。

→【[芳賀本陣・皇徳寺が病院に](#)】

→【[町人ト圓が建てた供養碑 大工町皇徳寺](#)】

→目でみる戊辰白河口戦争の記録【[d30 「戦死人供養」\(大工町皇徳寺\)](#)】

栃本村大庄屋とちもとむらの記録に

鎮撫使御用 並 諸家中御通行に付寄人馬左之通ちんぶし ならびに かしゅう つきよせじんばさのとおり

四月十七日朝詰つめ

一 十四人、八疋

栃本

右之通

辰四月十六日

常盤彦四郎

家中： 藩士。

寄人馬： 合宿〈あいしゆく〉制をとり、いくつかの宿が一体となって継ぎ立てを行なう。

朝詰： 朝、所定の発出場所に待機すること。

これらの記録は4月付けなので、会津藩が白河城を占領する前の、奥羽鎮撫九条総督の命による手配である。白河町問屋常盤彦四郎が栃本宿あてに命令を伝えている。

常盤彦四郎： のち5月6日に、白河町問屋常盤彦之助が西軍兵によって暗殺されたのだが、彦四郎と彦之助の関係はどうなっていたのだろうか？ 名前が似ているので、同族であることは間違いないだろう。

現在の白河市で、常盤姓はごく少数のようである。彦之助暗殺のあと、常盤家の運命は過酷であったか。

この引用箇所「十八」が重複する。4月17日付けの通知なので、おそらくは18日・19日にわたる用立て内容であるが、誤植だろうか。

臨時早打： 臨時でしかも急ぎ便というところだろうか。

割： 割り当て。

未明詰： 朝詰よりも早い発出時刻となる。より遠方への運搬だったのだろう。

また

鎮撫使御用其外諸家方臨時早打大通行に付寄人馬割左之通そのほか がた はやうちおおうこう つき わり

四月十八日未明詰

四月十八日未明詰

一 四人、八疋

栃本

右之通

辰四月十七日

常盤彦四郎

また

鎮撫使御用 並 諸家中御通行に付寄人馬割

四月二十八日未明詰

四月二十九日未明詰

一 八人、八疋

栃本

右之通

辰四月二十七日

常盤彦四郎

以上は白河城が奥羽鎮撫使の支配下にあった慶応4年辰4月のことである。白河町問屋常盤彦四郎から下命されたものである。

また同庄屋の記録に

此節 御親征に付白河城致 集会、賊兵追払、官軍入込、追々大勢 致 出張候に付、差当人馬集兼候間、早々致 手当、村々役頭より曳口罷出、官軍御用向 無 滞相 弁候様可 被 取計 候。尤も白河駅え副越候上者、無 間違 薩州小荷駄方え届 可 被 申出 候。以上。但村々次渡 無 滞早々留之場所より返納可 被 致候

白河駅出張

官軍薩州

辰五月五日

小荷駄方

- 深仁井田村
とちもとむら
栃本村
かたみむら
形見村
せんだむら
千田村

これは5月朔日、西軍白河に大勝後、地方民に出した命令である。これに対して村方においては、いかにこれを処理すべきかについて集会相談となったものである。地方民の去就に迷うも当然とするところであろう。

同大庄屋記録に

触状 別紙の通御触状達状到来 仕 候に付、御順達申上候。右者御

次は5月5日付けで、白河城奪還後の西軍（東山道軍）による命令である。

御親征： 親征とは天皇が自ら軍を率いて戦争に出ることである。戊辰戦争は、天皇が大坂まで「出陣」したとされ、任命された東征大総督が江戸に達し、東山道軍はその「先鋒」なのである。

集会： 白河を3方向から攻撃し、友軍が白河において合流したことを指す。

入り込み： 西軍が白河城下に進駐したこと。

「いきなり人馬を集めることはできないだろうから、早めに手配して、村々の人馬担当者が伝馬の発出場所に仕待機して、官軍の用事を支障なく処理するべきである。」

「もちろんのことであるが、白河駅（宿）まで付き添ったうえで、薩摩藩軍の小荷駄方へ（到着したことを）報告するように。」

「ただし、（この通達書は）村々への回覧を滞りなく早々に行ない、最後の村から（回覧終了の旨として）返納すること」

「官軍薩州」の文字は下げて書かれているが、内容は尊大である。

白河駅： 白河宿。

小荷駄方： 馬で輸送する貨物の担当官。

去就に迷う： 前出の鶏卵の件と同様であるが、この時期、西軍が確保したのは白河町近傍のみで、栃本をはじめとする近郊農村はなお東軍の勢力も及んでいたのである。

触状： 通達状。連名の宛名で順番に回覧させる文書。

達状： 通達文。命令書。



「この件は御役所にもお伺いしなくては処理しかねるので、村々（の代表）が明朝釜子村に集まって相談いたしたいと考えます。取り急ぎですが、そのようにしてください。」

深仁井田村： 白河市東深仁井田。白河城から東へ約 11.8km。

御同勤衆中： 同じ役職の皆様。深谷弥左衛門と同じ各村の代表者の皆様（庄屋など）あて。

さらに厳しく通達された。

「このたびの、官軍方の御用については、左記の村々の一軒に人足一人ずつ、明 10 日未明当所（白河町）本町花屋由兵衛方へ庄屋・組頭が付き添いのもと、右記刻限に遅れることなく、必ず出仕待機すること。もちろん、役務履行を引き延ばしたり拒否する村に対しては、嚴重な処罰が下されることになるから、このことをよく心に留めて、村々は、期限もあつての順達なので、最後の村から早々に（発信者へ）戻すこと」

翌日未明の白河町への出仕待機を、前日中の回覧で命じるのだから酷い。

組頭： 村方三役の一つ。庄屋をたすけて村政をとり扱う者。

会所： 白河町の庄屋・町年寄が出勤する町会所。

栃本村は大庄屋の在所。

深仁井田村は回覧の当番のようである。

復刻版には「谷津村」とあるが、かつて石川郡にあった「**谷津村**」の誤植ではないか？

深仁井田村より谷津村までこれ有り： この部分に回覧する村々名が列記。

胞衣（えな）： 胎児を包んでい膜および胎盤・臍帯等の総称。つまり出産時に後産として排出されるもの。出生した子の健やかな成長や立身出世を祈り、胞衣の処理については様々な習俗儀礼があつた。

胞衣神社： 白河市向寺。正しくは「嬰姫（えなひめ）神社」。平泉へ逃げた源義経を慕って、鬼一法眼の娘皆鶴姫がここまで追つて来たが、病に倒れ亡くなったのを祀つたという伝説がある。皆鶴姫がなぜ嬰姫なのか、姫は難産で死亡したのか？

鬼一法眼（きいちほうげん）： 京の一条堀川に住んだという伝説の陰陽師・兵法家。『義経記』『お伽草子』に出る。

嬰姫神社は向寺集落の北端ほどにあつて、このような間近で東軍が示威行動したとは、驚きである

役所にも御伺不<sub>レ</sub>申候ては取計兼候間、村々明朝釜子村へ集会の上御相談仕度奉<sub>レ</sub>存候。早々如<sub>レ</sub>此御座候。以上。

深仁井田村

深谷弥左衛門

とちもとむらはじめ  
栃本村 始

どうきんしゅうちゅう  
御同勤衆 中

5月9日に至りて、西軍御用人足の勤めが左のごとく厳達された。同庄屋記録に人足についての厳達が載せてある。

こんばん  
今般

官軍方御用に付、左之村々軒別人足一人つゝ、明十日未明当所本町花屋由兵衛方へ庄屋・組頭差添、右刻限無<sub>二</sub>遅滞<sub>一</sub>急度相詰可<sub>レ</sub>申候。尤延引不<sub>レ</sub>勤之村者嚴重之御沙汰有<sub>レ</sub>之候間、此段相心得村々刻付を以て順達に付、留り村より早々可<sub>二</sub>相戻<sub>一</sub>候。

以上。

慶応四辰年五月九日

白川町

会所印

深仁井田村

栃本村

ふかにいだむら  
深仁井田村より **谷津村** まで有<sub>レ</sub>之。

栃本庄屋記録に篝火人足割の事が出ている。東西軍いずれも篝火を野に山に焚いて互いに勢を張っていたと伝えられている。先年、白河向寺の胞衣神社の裏山から東軍の焚いたという篝火の炭が層をなして出た事がある。

同庄屋記録に

官軍様御用篝火木切人足割

明十三日未明詰、斧鋸持参。

右之通仰付候。日限之通、間違無候様申付差出可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。以上。

七月十二日

かまこやくもと  
釜子役元

村々の人足が篝火を盛んに焚く。

五月七日より<sup>かがりび</sup>篝火の場所、<sup>はがやました</sup>鳥居橋上前一箇所、<sup>はがやました</sup>芳賀山下一箇所、<sup>さくらおかまえ</sup>桜岡前一箇所、<sup>からめむら</sup>搦目村一箇所、<sup>にんそく</sup>各村人足にて焚き、薩・長・大垣・忍様七、八百人にて<sup>かた</sup>固め居り候

とある。  
同記録5月25日の条に

夜、<sup>かがりびさんのうざか</sup>篝火山王坂の山の上一箇所、<sup>さんぼんまつ</sup>三本松一箇所、<sup>ろくじぞう</sup>六地藏一箇所、<sup>くぼ</sup>久保岩下の山二箇所、<sup>うえのだい</sup>上ノ台二箇所、<sup>からめやま</sup>搦目山一箇所、<sup>やんたがわばた</sup>谷津田川端一箇所、<sup>さくらおか</sup>桜岡二箇所都合十一箇所の篝火各村人足にて焚き候。

とあり、また26日の記には

<sup>くらべいし</sup>双石の<sup>ひか</sup>篝火<sup>ごと</sup>光り昼の如し。村々の人足にて篝火一箇所に五人づゝの割合にて、昼は木を切り、夜は篝火を焚き云々

白河地方各村の人足・人馬は5月から会津落城後西軍<sup>きはん</sup>帰藩に至るまで、毎日割り当てられたものである。栃本大庄屋の記録の<sup>ところどころ</sup>所々を<sup>てきしゆつ</sup>抽出して見るに、

<sup>ならびにつぎたて</sup>軍夫並<sup>さしだし</sup>継立<sup>のこり</sup>人馬<sup>ぶん</sup>差出候<sup>のきべつ</sup>残之分<sup>さっそく</sup>男軒<sup>まかりいで</sup>別一人<sup>まかりいで</sup>早速当役所え罷出候  
<sup>もうし</sup>様可<sup>つけべく</sup>二申付<sup>もし</sup>一候。若<sup>これ</sup>遅滞<sup>あるに</sup>於<sup>おいては</sup>有<sup>うえ</sup>之<sup>の</sup>者<sup>とが</sup>取調の上<sup>もうし</sup>嚴重<sup>つけべく</sup>之<sup>もの</sup>咎<sup>なり</sup>可<sup>ただしにんべつしよ</sup>二申付<sup>これ</sup>一候。但<sup>ある</sup>人<sup>べく</sup>別書持参<sup>ならびに</sup>可<sup>りょうどぶん</sup>有<sup>こと</sup>之<sup>こと</sup>候。並<sup>たつ</sup>弁当<sup>たつ</sup>両度分持参の事。  
辰八月十日  
軍夫役所

同8月13日の条に

<sup>じん</sup>人馬<sup>にんべつにあるだけ</sup>継立は村々十五歳より六十歳まで人別有丈云々として  
八月十四日 二人二疋 <sup>とちもと</sup>栃本村  
八月十六日 四人二疋 栃本村  
八月十七日 四人二疋 栃本村  
八月十八日 薩州様通行につき四人二疋 栃本村  
八月十九日 三人二疋 栃本村  
八月二十日 三人二疋 栃本村  
八月二十二日 三人二疋 栃本村  
八月二十三日 三人二疋 栃本村  
八月二十四日 三人二疋 栃本村

【p188】  
釜子役元：ここで事例として紹介されている栃本などの村々は越後高田藩領に属し、高田藩の陣屋は釜子に設けられていた。藩領に属する村々農政の事務所も釜子にあったと思われるので、大庄屋や当番村の庄屋は事務所に出勤して通知文書作成や回覧発信を行なったものだろう。「役元」は、釜子にある文書発信元の役所という意味と思う。

鹿島：白河市大(だい)鹿島。白河地方の総鎮守である鹿嶋神社がある。白河城から東南へ約2.4km。  
鳥居橋上：白河市大に「鳥居橋上」という字がある。「上」は誤植？

芳賀山下：現在の白河市大の「荻ヶ山下(はがやました)」と思われる。

各村人足にて：各村から人員を出して従事させ。

固め居り：警戒警備にあたる山王坂：白河市久田野山王寺山。「山王坂の山の上」はつまり山王寺山？

山王寺：白河市馬町。はじめ久田野に建てられ、今の「山王窪」という地が山王寺の跡だったと言われる。

三本松：久田野に三本松山という字がある。

六地藏：どこか？大村の古い字と思われる。

久保岩下：どこか？白河市大「久保」か？「岩下の山」とは？

上ノ台：どこか？大村の古い字と思われる。

搦目山：白河市大搦目山。1つのピークではなく、一定の地域を指すようなので、篝火場所は不詳。

「弁当は自分で2回分用意し、人別書まで持参しろ」という。

人別書：人別帳、人別書上帳。人口調査(ことに農民の移動防止)の目的で町村役人にて作成させた。あるいは「人別書」は村役人が人別帳を基に個別作成した身分証明書か。

両度分：2回分。

軍夫役所：ついに軍夫徴用のための担当事務所まで開設されたようである。

八月二十五日	三人二疋	栃本村
八月二十六日	三人二疋	栃本村
八月二十九日	三人二疋	栃本村

かくのごとくに、人馬割付が、ひとり<sup>わりつけ</sup>栃本村に限らず各村に割り当てられ、これが9月・10月・11月と続いたのである。

9月9日、白河軍<sup>かた たつ</sup>夫方の達を見ると、

女にても割当、当分の<sup>うち</sup>中軍夫方まで相詰<sup>あいつめ</sup>候様、急度<sup>きつと</sup>小前者<sup>こまえもの</sup>まで申付<sup>もうしつけ</sup>べく候。若し<sup>も</sup>怠<sup>おこた</sup>り候名主は召捕<sup>めしとり</sup>之上入<sup>うえにゆうろう</sup>牢<sup>おおせ</sup>可<sup>つけら</sup>レ被<sup>る</sup>仰付<sup>べく</sup>候条、相<sup>じょう</sup>可<sup>あい</sup>心得<sup>こころえ</sup>者<sup>べく</sup>也云々<sup>ものなり</sup>

とある。これによって見れば男が不足して、女までも割り当てられたことが判る。

また同大庄屋記録に

追々<sup>おいおい</sup>御継立<sup>つぎたて</sup>人馬<sup>さしつかえ</sup>指支<sup>じょう</sup>候条、当九月十九日夕詰<sup>ゆうづめ</sup>より改<sup>あらため</sup>て人足<sup>たか</sup>高百石につき二人二疋<sup>ずつ</sup>づ、白川<sup>おやくしよ</sup>軍夫御役所<sup>ひ</sup>え日々定詰<sup>じょうづめ</sup>申付<sup>もうしつけ</sup>候間、可<sup>あい</sup>相<sup>こころえ</sup>心得<sup>べく</sup>候。勿論<sup>もちろん</sup>不参<sup>ふさん</sup>者、雇<sup>は</sup>銭<sup>やと</sup>急度<sup>いせん</sup>可<sup>きつと</sup>相<sup>あ</sup>納<sup>おさめ</sup>候。猶又<sup>な</sup>村々<sup>おまた</sup>庄屋<sup>な</sup>共御用<sup>ども</sup>向有<sup>ごよう</sup>之<sup>むき</sup>候間、人馬<sup>あり</sup>召連<sup>あ</sup>可<sup>い</sup>罷出<sup>めしつれ</sup>候。以上。

九月十九日

軍夫局

これによれば不参者には雇<sup>だいのう</sup>銭代納の制も取ったのである。

白河郡<sup>しもはぶとむら</sup>下羽太村石井庄屋の記録に

一 人夫 二十九人  
但十六歳より五十九歳までの男子

一 馬 二十八疋  
老馬弱馬除

内人夫一人 会津若松詰<sup>づめ</sup>  
人夫二十八人

馬二十八疋 白坂宿助郷詰<sup>すけごうづめ</sup>  
右之通取調奉<sup>とおりとりしらべ</sup>書上<sup>かきあげ</sup>候<sup>たてまつり</sup>処相違無<sup>ところそういごさ</sup>御座<sup>なく</sup>候、以上。

辰九月二十八日 次郎兵衛印<sup>たつ</sup>  
黒羽<sup>くろばね</sup>  
御役所<sup>おやくしよ</sup>

この人夫調<sup>にんがしらべ</sup>は若松城落城後、西軍帰還<sup>きかん</sup>の人夫である。この記録によ

小前者： 小百姓。  
村役人を勤めるような百姓を大前百姓、そのような役職に就かないその他の百姓を小前百姓と呼ぶが、幕末のころは小作をも小前に含む場合があり、この文脈では「小前者まで」はむしろ「小作だろうと」の意味になるようだ。

「しだいに継立人馬の調達が差し支えてきたので、(人馬割り当ては)改めて100石につき2人、馬2匹とし、白河の軍夫役所に毎日人員を待機させること。」

「人が来れない場合は、代わりの“雇い銭”を必ず納めること。」

「各村の庄屋は、いろいろ言い付けたい用事もあるから、人馬を連れて参るように。」

ついに必要のたびに必要人数を申し付けるのではなく、毎日一定数を動員待機させることになった。しかも不参の場合は代金を出せというのだから、もはや雇用ではなく労役賦課である。庄屋はその人馬に付き添って毎日出頭しなければならなかった。これでは仕事にならない。

原書「白川郡」→訳「白河郡」とした。

白河郡： 西白河郡の旧称。

助郷： 街道の宿駅の人馬が不足した場合、その補充のため村々に課された人馬の輸送労役。またその村々。

会津からの西軍帰還のための人夫ということである。人夫1人は会津若松に先入りして、そこに(空の)人馬を送り込む？

この文書は某村から黒羽藩役所あての人馬徴用の請書らしい。

次郎兵衛： 当番庄屋と思われるが、不詳。

黒羽御役所： 原方および白坂方面の人馬徴用担当は黒羽藩だった？

って人夫の年齢が知られる。  
西白河郡中畑村小針弥太郎氏の記録

中畑村人足  
 林次郎  
 熊吉  
 彌八  
 長七  
 政五郎  
 三之助  
 豊之助  
 鶴吉  
 喜七  
 しめて九人  
 右者共交代仕度候付、御詮議之上右代人急御越可遣下  
 候  
 九月朔日  
 土州四番胡蝶隊  
 輜重  
 中畑村戸主  
 小針七左衛門殿

(5) 西軍兵糧米を買い上げ  
 栃本庄屋の記録に、西軍が兵糧米を買い上げた記録がある。文に云う

官軍兵糧に差支候も難計、依之出穀の義堅禁侯様申付  
 候事。猶隠売等致し候者有之候節は嚴重に咎可申付候事。  
 但白川表相応之以直段御用米に買上候間、銘々不洩様云々  
 辰九月  
 白川口会計官  
 別紙之通被仰出候条速に御願御承知之旨、令請印留り  
 より村継を以て、拙者共え御戻可被成候。以上。  
 辰九月十六日  
 白川町取締役  
 住山甚八郎  
 大塚左太郎

【p192】

中畑村： 西白河郡矢吹町中畑  
 旧中畑村は越後高田藩浅川陣屋  
 の支配下。

小針弥太郎： 『小針弥太郎家  
 文書』は旧中畑村の庄屋文書。

中畑村から徴用されている9人  
 の名を列記し、これらを村に帰ら  
 せるので、代わりの人員を送れと  
 いう通達である。

原書「胡蝶隊」だが「胡蝶隊」  
 と表記した。

胡蝶隊： 土佐藩の上士のう  
 ち、御馬廻役以上の約400名で馬  
 廻銃隊として編成された武力討幕  
 の為の部隊。土佐藩家老の深尾丹  
 波が指揮を執った。

発信者は土佐藩四番胡蝶隊輜  
 重。土佐藩の四番隊の名称が胡蝶  
 隊なのか？胡蝶隊の四番隊なの  
 か？

輜重： 胡蝶隊の輜重奉行。糧  
 食や武器等戦争に必要な軍需物資  
 を運ぶ小荷駄方を指揮する役職。

戸主： 一家の首長であるが、  
 この場合は村の戸長の意味。

「義」は引用中なのでそのまま  
 としたが、「儀」と書くべきところ  
 では？

「官軍は兵糧に難決して調達の  
 見通しも立たない。そのため、(個  
 人的に) 穀物を出荷することは固  
 く禁じると申し付けること。」

隠売： 密売。  
 咎申し付く： 罪科として追及  
 して罰する。

直段： 直段(ねだん)。  
 「ただし白河地方の相応の直段  
 で(官軍の) 御用米として買い上  
 げるのだから、よくよく心に刻み  
 つけて遺漏の無いようにするこ  
 と。」

請印： この通達を受諾した証  
 の印(いん)。

留りより村継をもって： 回覧  
 最後の村から、回覧の村々経由で

白川郡

岩瀬郡

石川郡

右宿村御役中

白河町の町年寄住山・大塚の両家が、当時取締となって、白河郡外2郡よりの兵糧調達に当たったのである。

(6) いよいよ西軍引き揚げ

栃本大庄屋文書に

今般諸隊急速引揚に付、其支配所千石に付十人づゝの御割合、白川軍夫局え品々人夫差出候様申達候事。

十月六日

太政官

白川会計官

会津落城が9月22日であったから、10月となると西軍帰還となる。

白河郡踏瀬の箭内庄屋に、明治元年辰10月の「官軍御用御継立日締帳、踏瀬宿会所」という表簿がある。参考のため抄記する。

十月二十三日

- 一 軽尻 一疋 紀州 田中長兵衛様
一 軽尻 一疋 尾州 軍資方様
一 軽尻 二疋 紀州 栗又次郎様
同 中村儀七様
一 人足 八人 忍藩 佐藤市蔵様

十月二十四日

人足 二百人

馬 二百疋

右二本松藩へ可被相渡候事 会計局

十月二十五日

人足二人 小倉藩 三津谷賀平太様

人足七人

本馬二疋 芸州藩 松田兼之助様

【p194】

白川郡： 栃本村（西白河郡の範囲）が対象になっていることから、ここでは西白河郡（旧称は「白河郡」）を指すと思われる。（引用中のため「白川郡」のままとした）

岩瀬郡： 西白河郡の北隣の地域（現天栄村など）。

石川郡： 西白河郡の東隣の地域（現石川町など）。

ちなみに東白川郡（旧称は「白川郡」）は棚倉町から南東方の地域。

右宿村御役中： 右記の郡に属する宿・村の村役人あて。

原書「白川町」→訳「白河町」

原書「白川郡」→訳「白河郡」

この部分は地の文のため、「白河郡」と訂正した。

その支配所： 大庄屋が管轄する地域。その地域の村々から石高1000石あたり10人の人夫を供出せよという命令である。「品々」というのは物品？または人夫の代わりの金納か？

原書「白川郡」だが、西白河郡のことなので「白河郡」とした。

踏瀬： 西白河郡泉崎村踏瀬。

から尻： 軽尻。旅人の乗る荷のない馬。または、40貫を1駄とする「本馬」の半分まで載せる馬。

二本松藩： この時点では二本松藩丹羽家は降伏しているわけだから、供出先は占領地二本松を差配している新政府事務所または委任された某藩ということになる。人馬各200の大量徴用である。

小倉藩： 福岡県北九州市。小笠原家。15万石。慶応2年長州藩に小倉を占拠されて移動し、藩名も変わっている。

長州藩による占拠は長期にわたり、藩庁も移動したため、香春藩のち豊津藩と称した。

からうま 軽馬一疋 筑前藩 野外敬吾様  
賃済  
人足八人 総督府 徳永仁左衛門様

十月二十七日

早かご賃済

人足四人 軽馬二疋 大垣藩 藤田徳七様

(十月の終わりに)

しめて人足三百三十七人

此賃 百三十九貫七百十四文

内

二十八貫三百八文 勿銭

しめて本馬 四疋

此賃 三貫三百四十四文

内

六百九十六文 勿銭

しめて軽尻 十一疋

此賃 六百九十五文

内

一貫二十一文 勿銭

しめて人足 十三人 無賃

惣賃しめて百四十九貫百五十三文

勿銭しめて三十貫百二十五文

西軍は毎日、宿々から人夫や馬を出させて通行し、その賃銭は支払ったのである。宿場の庄屋はたいてい問屋を兼ねていた。

前記芸州藩の加藤善三郎が白河町萬持寺にて屠腹したのも西軍帰還の途中の事で11月4日であった。

栃本大庄屋の記録に

澤主水正様、羽州秋田表より御凱陣につき、今般当所御泊りに相成、大人馬継立に付、是迄の割合にては差支候条、依之家別人馬其下役相添へ差出可申候。且不参等有之候村方は急度とりしらべさたにおよぶべく、あいだそのむねあいこころえちたいなく、こんゆうあいつめもうすべき取調可及沙汰候間、其旨相心得無遅滞今夕相詰可申ものなり者也。

十一月十三日

【p196】

軽馬： から尻と同じか？

筑前藩： 福岡藩。福岡県福岡市。黒田家。52万石。

早駕籠（はやかご）： ある人物（使者など）を長途に至急送り届けるためには早駕籠が使用された。平均時速6km程度といわれている。

賃済み： 下記計上の人馬代金とは別会計。

勿銭： 宿駅問屋場助成のために人馬賃銭の一部をはねたもの。

無賃： 代金を請求しない分があったようだが、どのようなわけか？

⇒ [\[脚注\] 問屋](#)

⇒ [【加藤善三郎と農夫】](#)

⇒ [【芸州藩士加藤善三郎墓 巡り 矢萬持寺】](#)

「澤主水正さまが出羽国秋田から凱旋帰還されるにあたり、このたび当所（白河）にお泊りになる。大規模な人馬継ぎ立てになるので、これまでの人馬割り当てでは足りなくなる。であるから、家ごとに人馬を出し、大庄屋の下役（使用人）を付き添わせて差し出すこと。この命令にもかかわらず不参などということがあった場合は厳しく取り調べ処分を下すから、そのことを忘れず、遅れることなく今夕に出頭待機すること。」

澤主水正： 澤宣嘉（1836～1873）公卿。奥羽鎮撫副総督澤為量の婿養子。「七卿落ち」の一人。九州鎮撫総督。長崎府知事。外務卿など。九州鎮撫総督のときキリシタン弾圧「浦上四番崩れ」に関与。

ただし澤主水正宣嘉は慶応4年2月14日に長崎に着任しており、奥羽方面での活動は無いのでは？したがってこの記事は澤為量の記事？ 澤為量も主水正を称した？

白川民政取締所

でわ 出羽方面出陣の西軍も白河を通過した。11月になると白河軍夫局の命令が、白河民政所の命令になっている。

(7) 軍夫高の取調

栃本大庄屋記録に

白川口<sup>たなぐら</sup>棚倉<sup>みはる</sup>・三春<sup>にほんまつ</sup>・二本松<sup>わかまつ</sup>・若松迄相詰候村々人夫勤高取調東京え差出候様仰出につき、其取調村々別紙雛形之通急速取調候様差函有<sup>ようおせい</sup>之<sup>そのとりしらべ</sup>、不日其地え<sup>べっしひながた</sup>致<sup>とおきゆうそく</sup>出張<sup>いだし</sup>候間、其節差出候様御取計可<sup>おとりはらいな</sup>被<sup>さる</sup>成候。以上。  
大総督軍夫局

この記事は11月13日と18日との間に見えている。明治元年11月には江戸をもはや東京と呼びたるものか。白河地方の軍夫は白河口なる三春・二本松・若松方面に勤めたものなることこの記録によって判然する。またこの記録によって西軍凱陣の人馬継立の終わったのも戊辰の11月中旬頃であることが判る。いずれ戦争中の白河町は軍夫や藩兵の往来で雑踏を極めたものであろう。

明治2年12月、天朝<sup>てんちよう</sup>から芳賀源左衛門へ御沙汰書が下っている。

白河県支配所  
磐城国白河郡白川駅  
芳賀源左衛門  
右者<sup>みぎのもの</sup>昨年<sup>のとし</sup>戊辰<sup>ごしん</sup>之<sup>の</sup>歳<sup>とし</sup>賊徒<sup>ぞくとう</sup>掃攘<sup>そうじやう</sup>之<sup>の</sup>砌<sup>せき</sup>尽力<sup>じんりよく</sup>不<sup>すくな</sup>少<sup>からぬ</sup>段<sup>だん</sup>相聞<sup>あいきこ</sup>へ奇特<sup>きとく</sup>之<sup>の</sup>至<sup>き</sup>  
に付<sup>つき</sup>、其身<sup>そのみ</sup>一代<sup>いちだい</sup>苗字<sup>みやうじ</sup>帯刀<sup>たいとう</sup>允許<sup>いんきよ</sup>五人<sup>ごにん</sup>扶持<sup>ふち</sup>被<sup>され</sup>下<sup>こと</sup>候事。  
民部省

芳賀は住山・大塚とともに当時白河町における町年寄の家である。今芳賀の記録だけを知るを得たが、無論住山や大塚にもこれらの御沙汰書はあったと思われる。なお芳賀が明治5年福島県出納係に出した五人扶持の請取書が見えているが、それには「七月分(大)米七斗五升」とある。(芳賀への御沙汰書のこと、白河町本町遠藤英男氏の調査に拠る。)

栃本庄屋の記録中、辰<sup>たつ</sup>12月14日の条に、

【p199】  
白河民政取締所：白河藩領は、慶応3年に藩主阿部氏の棚倉国替え以後、幕府領小名浜代官支配。慶応4年4月より新政府統治。白河民政取締所となり、佐久山藩ついで守山藩が管理。明治2年2月白河民政局となる。

白川口：大総督から見て、越後口とならば白河口。  
「白河口の棚倉～会津若松において従事した村々からの人夫について、勤務数料を調べて東京へ提出するようにとのことである。その取調は村ごとに別紙見本の項目を急いで調べるようにとの指示である。近いうちにそちらへ出張するから、その際に提出するよう手配するべきである。」

慶応4年7月17日(1868年9月3日)に江戸が東京と改称された。  
明治改元は明治元年9月8日(1868年10月23日)  
天皇の江戸城到着は明治元年10月13日(1868年11月26日)。

天朝：朝廷、または、天子を敬っていう語。  
芳賀源左衛門：白河の本陣。白河町年寄。  
⇒【脚注】町年寄  
「白河県の管轄地である磐城国白河郡白川駅」  
白河郡：1878年(明治12年)に西白河郡。  
白川駅：「白川」引用中なのでママ。「駅」は宿駅としての機能を意識した呼称。鉄道駅はまだ無い。  
みぎり：時節。ころ。  
段：～の件。ある局面に至ったこと。  
奇特の至り：たいへん感心である。よくやった。  
その身一代：源左衛門本人の一代限りで。  
允許：認め許すこと。許可。  
五人扶持：一人扶持とは、1人につき男には、1日5合の扶持米を給与。明治5年7月は大の月で30日。5×5×30=750  
民部省：明治2年7月8日(1869年8月15日)設置された国内行政を管轄する省庁。その後改編を経て、明治4年7月27日(1871年9月11日)に民部省は大蔵省に合併されて廃止された。

まつまえおもてざんぞくども これ ありとかく たたん これに よりみょう  
松前表 残賊共出兵有之 兎角騒しく候。通行多端、依之明十五  
日七ツ時詰、高百石に付馬二疋つゝ刻限 聊 違なく相詰候様  
もうしつけ こと  
申付候事

との命令が白河取締所から出ている。いわゆる榎本武揚等の五稜郭  
事件の騒擾が白河地方に関係している。

### (8) 地方租税減免の達

#### 白河郡上羽太和知庄屋の免定に

#### 辰年免定之事

#### 白川郡上羽太村

- 一 高四百二十七石九斗五升六合 本田
  - 一 高十九石九斗一升一合 古新田
  - 一 高二百五十三石二斗二升七合 改出
- 高しめて七百一石九升四合

内

二百八十七石五斗六升 諸引

四百十三石五斗六升四合

当四月以来戦争場罷成兵火烧失者持高宥免

しめて皆引

- 一 高十一石二斗九升六合 新田  
前同断に付不残宥免
- 一 高一石七斗四升三合 新田  
前同断に付不残宥免
- 一 高六斗二合 新田  
前同断に付不残宥免
- 一 高一石三斗五升三合 新田  
前同断に付不残宥免
- 一 高十二石五斗一升五合 新田  
前同断に付不残宥免

しめて皆引

右者当辰成箇可相極一処、当夏以来戦地に相成難渋之次第、  
依願先般相渡候免定と引替当一ヶ年限り令宥免者也。

明治元戊辰年十一月

民政所 印

右村

庄屋

[p201]

松前表： 北海道（蝦夷地）松前・箱館方面。慶応4年10月榎本武揚の率いる旧幕脱走軍が、松前（福山）城・箱館五稜郭を占拠して新政府に抗戦。明治2年5月降伏。

とかく： あれやこれや。何かと。「兎の角」とは現実には存在しないものたとえ。

七ツ時： 午前4時ころ。

詰め： 出頭して待機。

免定〈めんじょう〉： 検見による免定めの結果を通達した文書。

白川郡： 羽太は西白河郡なので、旧称でも「白河郡」が正しい。

免定〈めんさだめ〉： 検見により、その年の租率（免）を定めること。豊凶にかかわらず一定期間租額を固定して課することを定免という。

本田： 文禄3年（1594）蒲生氏検地の石高。

古新田： 榊原忠次（慶安2年白河より姫路へ転封）までの新田。

改出： 本多忠義の慶安4年（1651）の検地による増石。

こうして見ると、検地というのは大事業であって、再検地などということは滅多に行なわれなかったことがわかる。幕末に至るも、蒲生時代（関ヶ原の戦い以前）の検地が有効であったのである。

時代を経るにしたがって栽培技術も進歩したことを考えると、昔の検地のままに租率が固定されていることは農村の利益であったと思われる。

領主側としても、再検地によって領民の大反発を買うよりは、順調な徴租を優先したものでしょう。

宥免： 免除。

皆引： しめた全額を差し引くということ。

右者： 文書の前方（右方）に書かれた、免を示された村々を指す。

当辰〈とうしん〉： 今期。今年。（あるいは本年辰年という意味で使っている？）

成箇〈なりか〉： 取箇。年貢など。租税。物成〈ものなり〉。

極むべきところ： 納租を遂行すべきところ。

「先般交付された免定（文書）を引き替えて、今期1年限りの宥免を令するものである。」



今の西白河郡西郷村は、戊辰戦争には会藩の出入口で、ことに柏野・羽太の農民は難儀した。上羽太・下羽太・虫笠は一軒も残らず焼かれた。もちろん西軍に焼かれた。それは7月朔日であった。森要蔵父子の下羽太で戦死をした日だ。上羽太の和知庄屋に慶応4年の曆が今に残されてあるが、その表紙に「当村戦場になり七月朔日兵火にて焼亡す」と記されている。当時中羽太は5軒だけの農家で焼失を免れたという。焼かれると皆小屋をかけて暮らした。明治5・6年頃から家を建て始めたが、明治十何年頃まで小屋住まいをしたものだという。虫笠の白岩源治氏の蔵は屋根だけ焼かれたので、蔵の中に住むことができたと話していた。この宥免の免定は下羽太の石井庄屋にも同様にある。(民政所印には佐久山取締所印とある。)

栃本庄屋の記録に

去辰御収納之儀黒羽藩取締中半納に申渡候。猶悪作村々用捨引、戦死・手負・焼失等租税皆免等も申渡候。昨年来助郷人馬繰出し或は官軍人数等入込村々諸失費等も多分有之可及難渋と存候間、去辰御収納之儀都て半納之内、先づ半数皆済相可申、残半数之儀は追て沙汰可及候。尤皆済日限之儀は御代官より可相達候。右之趣面々令承知組下村々小百姓共へも不洩可申聞候。以上。  
巳正月十三日  
柴一郎兵

「柴一郎兵」は高田領釜子陣屋藩士柴田一郎兵衛の略称、柴田は当時民政幹事であった。

白河城付6万石の民政は佐久山藩で行なった。

福原内匠  
其方儀当分之所、白川城付六万石租税取締可致旨、御沙汰候事。  
九月  
大総督参謀

9月は慶応4年9月24日である。(福原内匠は旗本にして野州佐久山を治す。)

出入口： 軍勢の進出経路、拠点。

原書「難義」→訳「難儀」とした。誤植か？

難儀： 苦勞。苦しむこと。

7月朔日： 7月1日。

→【脚注】森要蔵

→【7月1日の戦い 飯野藩森要蔵等の討死のこと】

和知庄屋： 【清子書込】真船和知本家

小屋をかけて： 掘って立て柱に筵などをかけた急造、貧弱な小屋

佐久山： 栃木県大田原市佐久山。

羽太のあたりは佐久山取締所が管轄したものでしょうか。(白河民政を佐久山藩が担当した時期か?)

栃本庄屋： 本書の引用で「栃本大庄屋」と「栃本庄屋」がそれぞれ数か所ある。「大庄屋」と「庄屋」が別家を指すのかは不明。

原書「義」→訳「儀」とした  
御収納： 租税を収納すること  
黒羽藩取締： 栃本方面の民政を黒羽藩が担当したものか？

半納： 年貢半減。

悪作： 農作物の不作。

用捨引： 勘案して一定割合を減免？

皆免： 年貢を全部免除。

官軍人数等入り込む： 官軍の人員を宿泊させた

「さる辰年の租税はすべて半減となったが、そのうちまず半分を皆済するように。残り半分の収納については追って通達する。」

右の趣き： 右記(前記)の内容について

面々： 村役人の者たち(組頭など)

巳： 巳年=明治2年。

高田領： 越後国高田藩本藩は官軍として戦後の釜子に入り、民政に当たった。

柴田一郎兵衛： 新潟上越市資料に、安政年間、柴田一郎兵衛から馬塚新田庄屋あて文書「卯年面相之事」があり。してみると、代々「一郎兵衛」を名乗り藩政に携わった家柄かもしれない。

城付6万石： 城の管理も含めた領地6万石。

佐久山藩： 下野国佐久山。佐久山等3500石。旧佐久山城に陣屋。旗本福原家。栃木県大田原市佐久山。

福原内匠： 旗本。那須衆。

富山氏記録に左の記がある。

御年貢の儀は半納に相成<sup>あいなりそうろう</sup>候。兵火に相成<sup>あいなるものは</sup>者無年貢に相成候。半納の者も大豆<sup>だいず</sup>其他<sup>そのた</sup>の納物<sup>のうもつごめん</sup>御免<sup>こめはきんのう</sup>にて、米<sup>と</sup>金納<sup>しょうそうば</sup>にて金一兩に三斗五升<sup>あいおさめ</sup>相場<sup>きん</sup>に相納<sup>しょう</sup>候。町相場<sup>きん</sup>金一分につき五升<sup>しょう</sup>の相場に候。

### (9) 軍夫勤務の手当

西軍の軍夫として出役<sup>しゅつえき</sup>せるものには、村々に手当<sup>てあて</sup>を下附<sup>かふ</sup>したものである。

栃本大庄屋の記録に

釜子付村々 <sup>かまこつき</sup>	
一 金三兩一分二朱也	中寺村 <sup>なかでら</sup>
一 金五兩三分也	川原田村 <sup>かわはらだ</sup>
一 金一兩三分二朱也	小貫村 <sup>おぬき</sup>
一 金三兩二分也	形見村 <sup>かたみ</sup>
一 金三兩一分二朱也	栃本村 <sup>とちもと</sup>
一 金二兩三分也	細倉村 <sup>ほそくら</sup>
一 金一兩三朱也	上野出島村 <sup>かみのでじま</sup>
一 金二分二朱也	大竹村 <sup>おおたけ</sup>
一 金一兩三分二朱也	中野村 <sup>なかの</sup>
一 金五兩三分二朱也	内松村 <sup>ないまつ</sup>
一 金三兩二分二朱也	梁森村 <sup>やなもり</sup>
一 金一兩一分二朱也	堀之内村 <sup>ほりのうち</sup>
一 金一兩也	深渡戸村 <sup>ふかあど</sup>
一 金一兩二分也	釜子村 <sup>かまのこ</sup>
一 金三兩二分二朱也	千田村 <sup>せんだ</sup>
一 金一兩二分一朱也	深仁井田村 <sup>ふかにいだ</sup>
一 金四兩三分一朱也	吉岡村 <sup>よしおか</sup>
一 金十一兩三分三朱也	下野出島村 <sup>しものでじま</sup>
一 金二兩三分三朱也	宮村
一 金三兩三分也	小松村 <sup>こまつ</sup>
一 金二十六兩一朱也	番沢村 <sup>ばんざわ</sup>
一 金四兩一朱也	三森村 <sup>みもり</sup>
一 金二兩一朱也	下羽原村 <sup>しもはばら</sup>
一 金十九兩二分三朱也	和田村 <sup>わだ</sup>
一 金十二兩二分二朱也	下宿村

納物御免：大豆などの作物による代納が許されて？米が収穫できずやっとなされた大豆なども半納の対象とされた？

米については金納（換金して金で納税）したが、3斗5升=35升で金1兩とされた。町相場は5升で金1分（5×4=20升で金1兩）なのに。

新政府による地租改正は1873年（明治6年）。収穫力に応じて決められた地価を課税標準とし、物納であったものを金納とした。

出役：戦争に参加することだが、軍夫の場合は多くは徴用されて戦地にいた。

手当というと、日数などで積算されたものだったのかどうか？

下附：官庁から民間に金や物をさげわたすこと。

兩・分・朱：4進法で、4朱が1分、4分が1兩。

中寺村：白河市表郷中寺。

川原田村：西白河郡中島村川原田。

小貫村：石川郡浅川町小貫。

形見村：白河市東形見。

栃本村：白河市東栃本。

細倉村：白河市借宿細倉か？

上野出島村：白河市東上野出島。

大竹村：白河市東上野出島大竹。

中野村：白河市表郷中野。

内松村：白河市表郷内松。

梁森村：白河市表郷梁森。

堀之内村：白河市表郷堀之内。

深渡戸村：白河市表郷深渡戸。

釜子村：白河市東釜子。

千田村：白河市東千田。

深仁井田村：白河市東深仁井田。

吉岡村：西白河郡中島村吉岡。

下野出島村：白河市東下野出島。

宮村：どこか？白河市東釜子に宮替という字はあるが？

小松村：白河市表郷小松。

番沢村：白河市表郷番沢。

三森村：白河市表郷三森。

下羽原村：白河市表郷下羽原。

和田村：須賀川市和田。

下宿村：どこか？西白河郡泉崎村関和久中宿の近く？

一 金二十一兩三分二朱也	かみおやまだ 上小山田村
一 金四十三兩一分一朱也	おぐら 小倉村
一 金十六兩一介二朱也	いちのせき 市野関村
一 金二十六兩一分也	たなか 田中村
一 金二十二兩二分也	おおぐり 大栗村
一 金一兩三分也	よつつじしんでん 四辻新田
一 金十四兩二分一朱也	まえだがわ 前田川村
一 金十三兩一介一朱也	中宿村
一 金十五兩三分一朱也	しもおやまだ 下小山田村
一 金三十九兩二分一朱也	■田村
一 金二十一兩一分也	はまお 浜尾村
一 金四兩三分一朱也	■■田村
一 金三十四兩二分二朱也	あめだ 雨田村
一 金五十二兩二分也	むじなもり 狸森村

しめて金四百八十四兩一分一朱也  
みぎのものはさる 右者ぐんぶあいつとめ 去六月より十一月まで軍夫相勤候につき、おてあて 村々え為二  
な し くだ され 御手当被下候事。  
み 巳二月

白川口  
軍夫局

【p208】  
 上小山田村：須賀川市上小山田。  
 小倉村：須賀川市小倉。  
 市野関村：須賀川市市野関。  
 田中村：須賀川市田中。  
 大栗村：須賀川市大栗。  
 四辻新田：石川郡玉川村四辻新田。  
 前田川村：須賀川市前田川。  
 中宿村：どこか？西白河郡泉崎村関和久中宿？  
 下小山田村：須賀川市下小山田。  
 ■田村：明治22年石川郡小塩江村となった塩田村？または明治22年古関村となった社田村？  
 浜尾村：須賀川市浜尾。  
 ■■田村：明治22年石川郡川東村となった小作田村か日照田村？または明治22年石川郡須釜村となった山新田村？  
 雨田村：須賀川市雨田。  
 狸森村：須賀川市狸森。

列記された村々は、西白河郡東村・表郷村のほか、石川・岩瀬郡を含む。

巳二月：巳年（明治2年）2月。

正金：ここでは「従来の通用金銀貨」の意味。  
 札金：金札とも。太政官札。明治政府によって慶応4年5月から明治2年5月まで発行された政府紙幣（不換紙幣）。日本初の全国通用紙幣である。通貨単位は江戸時代に引き続いて両、分、朱のままであった。1879年（明治12年）11月までに新紙幣や公債証券と交換、回収されるまで流通した。

白河戦争にかかわる地名については、できるだけ⇒[白河戦争の地名地図](#) に採録したので、参照されたい。

軍夫勤務の手当として、前記のように484兩1分1朱。この大金の渡し方は、正金しやうきんとして184兩1分1朱、金300兩は札金さつきんとして渡したものである。これは釜子付村々の合計である。戊辰戦争の全軍夫の勤務支払いというものは巨額のものであったことだろう。

白河地方の軍夫は従順にその勞役ろうえきに服した。東軍にも、西軍にもいささかの反抗の態度がないばかりか、よく奉公ほうこうしたという。（終わり）

# 戊辰戦争年表

慶応4年（明治元年）

1. 3 鳥羽伏見の戦い始まる。
1. 6 幕兵敗れて大阪に退く。
1. 8 慶喜、大阪を発し江戸に向かう。松平容保・松平定敬等従う。
1. 9 岩倉具定を東山道鎮撫総督に、岩倉具経を副総督となす。
- 1.10 朝廷、徳川慶喜・松平容保・松平定敬等27名の官位を奪う。
- 1.12 慶喜、江戸城に入る。
2. 6 東海・東山・北陸3道の鎮撫使を改めて先鋒兼鎮撫使となす。
2. 9 総裁熾仁親王、東征大総督とならせらる。
2. 9 土藩総督乾正形（板垣退助）、東山督府参謀となる。
- 2.11 慶喜、江戸城を出で東叡山大慈院に謹慎。
- 2.16 朝廷、二本松藩管理の白河城を仙台藩に交付す。
- 2.16 松平容保、江戸を発し会津に帰る。  
22日若松城着。
- 2.26 九条道孝を奥羽鎮撫総督に、澤為量を副総督、醍醐忠敬を参謀となす。
- 3.23 九条鎮撫総督、仙台に入る。
4. 4 東海道先鋒総督、江戸城を収む。
- 閏4. 3 仙台兵、会兵と中山口・石筵口に戦う。
- 閏4. 4 仙米両藩、会津救解を目的として奥羽列藩の重臣会合を促す。
- 閏4. 6 奥羽鎮撫総督参謀世良修蔵、白河城に入る。
- 閏4.12 仙米両藩主、岩沼に至り九条総督に謁して会津救解の嘆願書を提出す。
- 閏4.15 九条総督、会津救解の嘆願書を却く。
- 閏4.20 世良参謀、福島に殺さる。
- 閏4.20 会兵、白河城を奪う。
- 閏4.21 西軍、大田原を発し、途中東軍を破り24日芦野に宿す。
- 閏4.23 奥羽列藩救解同盟、一変して攻守同盟となる。
- 閏4.25 東山道先鋒の軍、白河城に迫る。
5. 1 白河城、西軍に陥れらる。
- 5.15 彰義隊破らる。
- 5.18 越の諸藩、奥羽同盟に加わる。

【p211】

大阪： 明治政府になってから「大阪」という表記を正式とした。それまでは「大坂・大阪」併用。原書では「大坂・大阪」混用

慶喜と江戸城： 慶喜は将軍在職中に江戸城に入ったことがない。

先鋒兼鎮撫使： 軍の前衛としての「先鋒」を称して、軍事行動であることを明らかに？

乾正形： この時点では「乾退助」。板垣正形を名乗ったのは、東山道進軍途中の甲州にさしかかったところで。

二本松藩管理の白河城を仙台藩に： 幕政期から空き城の白河城は二本松藩が管理していたが、奥羽鎮撫総督下で主要藩と見られた仙台藩に管理が移された。

奥羽鎮撫総督： 3月11日大阪を出帆、3月18日に松島湾入り口の寒風沢に到着。3月23日に仙台城下、藩校養賢堂を本陣とする。

3月15日に江戸総攻撃の予定のところ、江戸開城を条件に攻撃中止。4月4日先鋒総督が江戸城に入る。

閏4月8日、仙台藩士の『日新録』に不審な記事あり。投機隊が30人ばかりも白河まで「脱走」したという。世良修蔵に対する「手配」情報も。

嘆願書を却く： 退ける。嘆願書を却下した。

閏4月15日『日新録』記事、仙台藩国境通行を厳戒する旨。薩長兵士にたいしても強硬方針。

閏4月16日『日新録』記事、薩長筑藩兵士を殺害せよとの指示あり。

閏4月19日奥羽諸藩は対会津庄内「解兵」宣言。とともに…同日『日新録』記事、進行してくる新政府軍を敵とみなし迎撃準備。

閏4月21日『日新録』記事、世良等討取結果および、その他の薩藩兵に「刺客」差し向けの旨。

閏4月23日、白石盟約書。

閏4月25日の戦いでは、西軍の攻撃を東軍が撃退した。

5月1日西軍が大勝して白河を占拠。

彰義隊破らる： 江戸で上野戦争。輪王寺宮が東叡山を脱出。

越の諸藩： 北越から6藩が加盟して、奥羽「越」列藩同盟となる。加盟は5月6日とも。

- 5.20 大総督府、岩倉具定を奥羽白河口総督に、岩倉具経を副総督になす。
- 5.28 輪王寺宮公現法親王、常陸平潟ひたちひらかたに御上陸。
- 5.26 東軍、白河城を回収せんとして迫る。
- 5.29 白河口総督参謀板垣退助、白河に入る。
6. 3 岩倉具定総督を辞め、鷲尾隆聚わしのおたかつむ奥羽追討総督となる。
- 6.12 白河城の大逆襲あり。
- 6.16 渡邊参謀、平潟に上陸。
- 6.23 大総督参謀鷲尾隆聚、白河に着。常宣寺を本営とす。  
(鷲尾総督は総督を辞めて大総督府参謀たり。)
- 6.24 板垣参謀、棚倉に向かう。同日棚倉城陥る。
- 6.25 釜子陣屋かまのこじんや破らる。
- 6.28 磐城泉城いわき陥る。
- 6.29 磐城湯長谷城ゆながや陥る。
7. 2 公現法親王、仙台に御着。
7. 9 鷲尾隆聚、再び白河口総督となる。
- 7.13 磐城平城陥る。
- 7.24 板垣参謀、棚倉を発して三春に向かう。
- 7.26 三春藩降る。
- 7.29 二本松城陥る。
8. 4 中村城陥る。
8. 9 大総督府、白河口総督鷲尾隆聚を辞め、参謀正親町公董おおぎまちきんだこれに代わる。
- 8.20 諸道の西軍、会津に追撃す。21日石筵の戦いあり。
- 8.26 正親町奥羽追討白河口総督、三春に着し、鷲尾隆聚と交代す。
9. 4 米藩主、謝罪書を越後口総督嘉彰親王よしあきに上る。
9. 5 日光口の西軍、会津に入る。
9. 8 明治と改元。
- 9.10 正親町総督、三春を発して二本松に着。
- 9.10 二本松藩主降る。
- 9.10 津川口つがわの西軍、会津に入る。
- 9.18 棚倉藩主阿部正静まさきよ、謝罪して降る。
- 9.22 公現法親王、平潟口総督に罪を謝す。
- 9.22 会津藩主降る。
- 9.23 庄内藩主降る。
- 9.24 泉・湯長谷・平藩、降る。  
(ここに奥羽越ことごとく平定。)

【p213】

東山道先鋒総督→奥羽征討白河口総督

5月26日：東軍(第1次)白河攻撃するも敗退。

5月29日：本文脚注に述べたように、この日に東軍の攻撃・戦闘は無かったと考えられる。

原書「5.29」→訳「5.26」とした。

6月12日：東軍(第4次)白河攻撃するも敗退。

6月16日：渡辺清・木梨精一郎が指揮の薩摩・大村・佐土原部隊が平潟に上陸。

6月25日：東軍(第5次)白河攻撃するも敗退。

7月2日、輪王寺宮が会津若松から米沢を経て仙台に到着。

7月15日：東軍(第7次)白河攻撃するも敗退。

7月28日：羽太において白河近郊さいごの戦闘。

7月29日：西軍の攻撃により二本松城落城。

8月21日：西軍が母成峠を突破、23日には会津若松城に迫る。それを受けて、23日までには白河方面の会津軍は撤退したと考えられる。

9月4日：米沢藩降伏。

9月15日：仙台藩降伏。

9月18日：棚倉藩降伏。

輪王寺宮9月18日に降伏文を提出。22日出頭？

9月22日：会津藩降伏。

#### 白河での戦い

慶応4年閏4月6日(1968年5月27日)世良参謀白河入城 から  
慶応4年7月28日(1968年9月14日)白河地域最後の戦闘 まで  
とすると111日間(約110日)

- 10.18 正親町白河口総督、東京に凱旋。  
11. 2 熾仁親王、東征大総督の任を解かる。  
          終わり

#### 仙台藩の開戦意思

仙台藩士の『日新録』などの閏4月8日～閏4月21日の記述を見るに、閏4月はじめ時点ですでに、世良修蔵をはじめとする薩長兵に敵対しようとする動きがみられ、閏4月16日の記事では、薩長兵「殺害」指令になっている。

世良修蔵殺害については、現場の仙台藩士はまず逮捕するつもりだったかもしれないが、重傷により結局斬首しており、仙台藩首脳にとって世良殺害は意図内のことだったろう。

会津救済嘆願書が鎮撫総督から却下されたことや、世良の「皆敵」密書が発覚したことを仙台藩の開戦理由のように論ずる向きもあるが、それより前から薩摩・長州に武力で対抗する意思を固めていたと考えるべきだろう。

それは自論が通らなければ最終的には武力で決着という、戦国武装集団を起源とする、大藩としてのプライドを重んじる思考ではないか。

【p215】

東京： 慶応4年7月17日（1868年9月3日）に改称された（江戸ヲ称シテ東京ト為スノ詔書）。

明治改元： 慶応4年9月8日（1868年10月23日）皇太子睦仁親王（後の明治天皇）の即位により。

明治元年9月8日（1868年10月23日）

旧暦（天保歴）から新暦（グレゴリオ暦・太陽暦）への切り替え  
明治5年12月2日（旧暦）の翌日  
が、明治6年1月1日（新暦）となった。

明治5年12月2日（1872年12月31日）

明治6年1月1日（1872年1月1日）

出版賛助芳名

(五十音順・敬称略 小峰八幡神社外 163 名 後掲)

おくづけ  
奥付

昭和 16 年 9 月 5 日印刷 昭和 16 年 9 月 10 日発行 定価 2 円

著作兼発行者 白河町番士小路 (律堂こと) 佐久間男留

発行所 白河町本町 堀川古楓堂

\*\*\*\*\*

復刻版 付録

幕末・維新人物100人

藩一覧表

奥羽越列藩同盟図

目でみる戊辰白河口戦争の記録

復刻版 あとがき

戊辰白河口戦争記復刻刊行会副会長

白河商工会議所会頭 片野仁

(文は後掲)

戊辰白河口戦争記復刻会副会長

社団法人白河青年会議所第三十代理事長 永山広中

(文は後掲)

著者略歴

佐久間 男留 号(律堂または順)

明治15年福島県田村郡七郷村に生まれる。福島師範学校卒業。

文部省教育科検定試験に合格し師範学校女子部高等女学校教育科  
教員免許を取得。

小学校長、白河高等女学校教諭、白河高等家政女学校教頭、白河  
女子商業、白河第一中学校、白河中央中学校に勤務し、昭和26  
年3月に退職、同年8月病歿、享年68才。

昭和8年泉崎横穴の発見により調査研究を委嘱され国指定の資料  
を作成。

昭和16年8月、福島県より福島県史編纂事務を嘱託され県南5  
郡の調査を担当。

主な著書

訳注白河往昔記(昭11)、白河楽翁公伝(昭12)、戊辰白河口戦  
争記(昭16)、白河藩庄屋文書、訳文等がある。



復刻版 奥付

昭和 63 年 7 月 10 日発行 定価 2400 円

著者 佐久間律堂

訳注 井上幸雄・金子誠三

編集 鈴木完一

発行 戊辰白河口戦争記復刻刊行会

会長 小野亀八郎

制作 歴史春秋出版株式会社

戊辰白河口戦争記 出版賛助芳名

著作よりも出版は六ヶしい。地方出版に於て殊に然りとす。

前後二十余年、蒐集した地方資料も出版しなければ、徒に筐底に死蔵され、果ては虫の食ふ儘となる虞がある。出版して置けば、多くの人々に読んで戴かれるに止まらず、後の郷土研究者をして同じ苦勞を重ねずに、更に研鑽を積んで貰はれる便宜がある。

本書は此の度古楓堂主人堀川一義翁の御熱心と、地方有志諸賢の賛助後援のもとに出版するに至つたものである。ここに巻末ながら御芳名を列記して深く感謝の意を表する次第である。

(五十音順・敬称略)

小峰八幡神社	白河町役場	白坂村役場	白河商業学校	白河図書館	白河第一国民学校
白河第二国民学校	白河第三国民学校	白河会津会	白河鉄道倶楽部	長寿院	
福島県立白河中学校	福島県立白河高等女学校	福島県白河高等家政女学校			
足立俊雄	青村鐵太郎	荒井忠實	阿部由兵衛	阿部浄平	岩越二郎
市川勲	石岡龜太郎	泉政之助	石倉忠蔵	石野信行	池島三代吉
今井又市	今井伊八	今井清吉	飯田吉兵衛	五十嵐瀧蔵	五十嵐庫三
石井重五郎	石井宗順	内山定之助	遠山英男	大内照彌	大槻佐兵衛
大槻久之助	大槻恒次郎	大谷五平	大谷忠吉	大谷喜三郎	大谷倉治
大谷恒次	大高新輔	大木代吉	大木重雄	大竹儀重郎	遲澤信三郎
河東田教美	金子鐵太郎	金子祐助	金澤春友	金澤良一	川瀬作兵衛
川瀬織之助	川崎大四郎	川口久	加藤源次郎	片岡芳美	菊地武雄
菊地勝美	桑名七郎	熊田猛夫	熊谷純爾	熊谷源太郎	久保木利助
小島智善	近藤正雄	小出常吉	小針彌太郎	近藤力	斎藤保吉
佐久間平三郎	相楽清作	佐藤直	堺八十二	酒井寅三郎	佐藤眞太郎
篠崎健三	鈴木利吉	鈴木源之助	鈴木啓夫	鈴木貞次郎	鈴木市太郎
鈴木勝重	須永祐弘	須釜嘉平太	須釜金兵衛	須釜政吉	須釜善勝
関格之介	瀬谷磯吉	瀬谷彌三	瀬谷伊蔵	関根勝治	曾我演雄
田中仲三	田中國太郎	田村洋治	高田庸次郎	竹貫静哉	圓谷光衛
角田庄吉	東郷酉七	富山忠一	富山幸吉	中村市太郎	中村益平
永島慶次郎	永島直次郎	中目瑞男	仲西保蔵	南條辰男	新妻熊男
根本英治	根本貢	野口長吉	芳賀憲輔	橋本守正	橋本貞雄
橋本龍空	人見平三郎	福田春三	藤田彌五兵衛	藤田勝治	邊見子之吉
星野林八	堀田謙次郎	穂積誠	益田儀一	松井幸太郎	宮田金次郎
宗像龜之	室野井民蔵	八田部万平	安田平助	安田佐兵衛	安田篤次
安田良三	屋形貞	柳下啓三	矢吹眞次	八子幸治	吉田周作
吉田豊吉	吉田恒次郎	吉田倉吉	吉田勇司	吉成房次郎	鷲尾多四郎
渡部泰次郎	渡邊彌蔵	渡邊隆治	渡邊栄一	和知菊之助	和知環
小黒萬吉	小川易三	小野貢	小野龜次郎	小崎武左衛門	岡部勘蔵

(以上)

復刻版 発刊に寄せて

白河市長 小野亀八郎

司馬先生はその著書「竜馬がゆく」の中で竜馬が生きておれば鳥羽伏見の戦いは起らなかったであろうと記されておる。さすれば当然引き続く戊辰もとなるがなぜだろう、それは同文中竜馬と西郷さんの対話に語られて居る、「自分は役人になる為（中央政府の高官）に幕府を倒したのではない」との言葉に自ら了察出来ます。同様に松下村塾の吉田松陰先生は維新の結果立身出世の夢を見て居る若者たちに「君は功業を為せ我は忠義（義を立て筋道を通す）を尽さん」と教えられたそうである。さすれば戊辰は天下国家の為、日本の行末を案ずるが為の戦いではなく、一部指導者の立身出世功名手柄、或は藩と言う小さなものの面目と怨念、そんなものの累積の中での戦争であった様であり、それでは純粋な気持で参戦して殉じた殉難された諸霊に対し申訳がなく、諸霊も浮かばれまい、或は戦場となり廃墟と化した白河の方々にも申し開きが出来ないのではあるまいか。勿論こんな事は後世百二十年後の戊辰に生きる私達だから論ぜられる事であり、それだからこそこれを契機に日本の将来に目を向け、誤った文明の追求にピリオドを打ち文化の元年とする、それが私達の勤めであり散華した霊を慰める唯一の途と信じます。

それには歴史を知り温故知新の中から未来と理想が生れる、それが百二十年の間白河に倒れた英霊の鎮魂に尽した先人の徳を顕彰する方途と存じます。復刊発行にお骨折りを賜りました福島県社会教育委員会議の議長鈴木完一氏を始め御支援の皆様方に御礼を申し上げます。明治の当初同じ逆賊と呼ばれた西郷南州の語録は今世間で見直されて居ります。なぜであろう、おかしくはないのか、「人を相手にせず天を相手にせよ、天を相手にして己れを尽し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」正に立派な道理である。

昭和六十三年七月一日

復刻版 あとがき

戊辰白河口戦争記復刻刊行会副会長  
白河商工会議所会頭

片野仁

本書は戊辰の役百二十年を期した事業の一環として、その刊行が企画されたものである。記述のとおり、戊辰白河口の戦いは日本が世界に勇躍する文明開化の明治維新の尊い新建設に伴って起った免れ難い戦乱であり武家時代最後の戦いだけに東西両軍何れも武士道精神を発揮して戦った得難い苦闘の史実であり、明治・大正・昭和の三代に亘り人々の胸中を去来し今日に至っている。

本書は戊辰の役と白河地方の住民の苦悩の姿をその時々の史実や史話等により詳しく記載されており、当時の状況をうかがうことが出来る。

本書の刊行が戊辰の役を知る上で一助となれば幸いである。

本書の編集にあたっては、市民各位のご協力をはじめ、白河市教育委員会、白河商工会議所、白河観光協会、(社)白河青年会議所および白河市史編纂委員の井上幸雄、金子誠三両

氏、刊行会に携わった方々には多忙な本務のかたわら、編集、校正等を担当していただき感謝を申し上げます。また、小野智恵子氏、堀川古楓堂さんの好意に対し厚く感謝申し上げます。

昭和六十三年七月一日

復刻版 あとがき

戊辰白河口戦争記復刻会副会長  
社団法人白河青年会議所第三十代理事長  
永山広中

今年、(社)白河青年会議所創立三十周年の記念事業の一環として、さらには戊辰百二十年を記念して、正義の旗のもとに今日の日本を築く礎となられた方々を偲ぶとともに、二度とこの様な悲惨な争いが起きないことを祈り佐久間男留(律堂)著『戊辰白河口戦争記』を復刊刊行する運びとなりました。

この刊行事業は、斎藤報恩会様(仙台)、仙台市立博物館様、田丸すすみ様、岡部文三様等の資料提供を受け、また写真提供を県内外の多くの方々をお願いし、訳注等には白河市史編纂室の金子誠三様、井上幸雄様にご尽力を賜り、編集に際してはJCOBの鈴木完一様および白河市教育委員会関係の多くの方々のご協力を頂戴してはじめて実現するものです。私共の望外の幸せと感謝に堪えません。

この一冊が我が白河の歴史の一ページ、いや、日本の激動期の歴史の一ページを知る上で皆様方の一助となり、さらには奥州口最大の戦場の中で、塗炭の苦しみを味わいながら東西両軍の御霊を御守りし続けてきている白河人の心意気を感じていただければ幸いに存じます。

昭和六十三年七月一日